

# Polyphonic Museum

ポリフォニックミュージアム記録集

# Polyphonic Museum

ポリフォニックミュージアム

## 事業概要

- ◎実施期間：2021年4月1日～2022年3月31日
- ◎プロジェクト活動期間：2021年5月13日～2022年3月31日
- ◎活動内容：アートワークショップ(リサーチ、ワークショップ)  
ラウンドテーブル
- ◎主催：ライフミュージアムネットワーク実行委員会
- ◎構成団体：只見町ブナセンター  
はじまりの美術館  
一般社団法人未来の準備室  
東北芸術工科大学美術館大学センター  
NPO法人アーツセンターあきた
- ◎事務局：福島県立博物館

令和3年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業

コロナ禍が収まらない中、また戦争が始まった。  
人々がまた引き裂かれていく。

抗いようのない大きな動きに博物館ができることは小さく弱い。  
それでも、だからこそ、その小ささ、弱さに向き合いたい。

これまで博物館に行ったことのない(行けなかった)

何人かの子どもたちをお招きするために、  
大人たちが多くの時間を使い知恵を絞った。

費用対効果の観点からはまったくひきあうはずもない。  
小ささ、弱さに向き合うためには強い覚悟が必要だった。

その土地で生きたい、暮らしたい。

ライフミュージアムネットワークが掲げるテーマ  
「いのち」と「くらし」の根源には「食べる」がある。

その日常の行為は、日常であるが故に小さな弱い思いとされてしまう。  
「食べる」をめぐるリサーチは小さな声の強い思いに耳を傾け続けた。  
その先には「食」をめぐる広い沃野の広がりが見えてきた。

生まれたふるさとを知らずに

ふるさとを離れる若者たちが地方ではごくあたりまえになってしまった。  
だが、それは地域社会にとって見過ごせない喪失をもたらしてはいないか。

通い慣れたと思っているまちの隅々にある小さな不思議。  
それをそっと拾い上げるようなまち歩きをおこなった。

足下の不思議に気づくことから始まる大きな好奇心が  
ふるさとを離れる若者への豊かなギフトになりますように。

今年度の事業でも、博物館の促しによって、  
世代、地域、職業が異なるさまざまな人たちの対話が生まれ、  
あらたなネットワークが結ばれた。

絶たれるつながりの多さに打ちのめされる日々。  
だが、博物館は結びつけることをやめない。



## 実践と対話

- 068 **アートワークショップ**  
つくること・つかうこと
- 070 **県外事例調査**  
油谷コレクション、五城目町、秋田市文化創造館
- 074 **ラウンドテーブル**  
つくる・つかう・展示する
- 096 **寄稿 アートワークショップ**  
「つくること・つかうこと」に携わって 中野陽介
- 098 **アートワークショップ**  
博物館部
- 100 **ラウンドテーブル**  
放課後博物館を考える
- 118 **県外事例調査** 生活介護事業所「ぬか つくるところ」
- 134 **県外事例調査** 柴川夫妻
- 148 **県外事例調査** 大原美術館
- 162 **寄稿** 岡山の賢者の魔法の言葉 江畑芳
- 164 **県外事例調査** 三重県総合博物館
- 174 **県外事例調査** 三重県立美術館
- 184 **寄稿** 二つのミュージアムの実践に触れて 西澤真樹子
- 185 **寄稿** 三重県での実践調査より得たこと 北村美香
- 186 **寄稿** 博物館の中にある福祉 竹村望
- 188 **県外事例調査** 国立民族学博物館
- 190 **ラウンドテーブル**  
子どもも大人もいたい場所
- 208 **ラウンドテーブル**  
ヤベアベ学級との12月

## 総括と対話

- 222 **ラウンドテーブル**  
開く、ミュージアム



## 実践と対話

- 008 **アートワークショップ**  
白河まち歩きフォトスゴロクを作ろう!
- 010 **ラウンドテーブル**  
白河まち歩きスゴロクを振り返る、考える
- 030 **振り返り** なぜ博物館がまちにでるのか 筑波匡介
- 031 **寄稿** 「市民共楽」と「ウォークブル」なまちづくりを目指して 青戸悠之介
- 032 **寄稿** フォトスゴロクが地域にもたらす価値 勝田陸
- 033 **寄稿** 地域探求学習とまち歩きスゴロクの価値 青砥和希
- 034 **アートワークショップ**  
海幸山幸の道
- 038 **ワークショップ**  
海幸山幸の道から
- 042 **寄稿** 博物館はなぜ、「海幸山幸の道」の課題に  
取り組むのか 平野雅彦

## 総括と対話

- 046 **ラウンドテーブル**  
土地を知るには食から

# 実践と対話

## ■ リサーチ

◎日程：2021年9月21日(火)～23日(木・祝)  
2021年11月3日(水・祝)～4日(木)  
2021年12月4日(土)

◎リサーチ先：コミュニティ・カフェEMANON  
藤田記念博物館  
福島県文化財センター白河館「まほろん」  
白河市歴史民俗資料館  
小峰城歴史館  
中山義秀記念文学館  
白河市内各所

◎お話を聞きした人：佐川庄司さん(藤田記念博物館学芸員)  
内野豊大さん(白河市歴史民俗資料館学芸員)  
植村美洋さん(中山義秀記念文学館長)  
青砥和希(一般社団法人未来の準備室理事長/LMN 実行委員会委員)

◎調査者：陸奥賢さん(観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者)  
筑波匡介(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)  
山本俊(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

## ■ ワークショップ「白河まち歩きスゴロクを作ろう！」

参加者がチームをつくり、白河のまちを散策して出会った気になるものをスマホで撮影。  
厳選した写真をプリントアウトしてチームで共有し、まち歩きスゴロクを作りました。

◎日時：2021年12月5日(日) 10:00～13:00  
◎会場：コミュニティ・カフェEMANON、白河市内各所  
◎講師：陸奥賢さん(観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者)

## アートワークショップ

# 白河まち歩きフォトスゴロクを 作ろう！

SDGs4：質の高い教育をみんなに  
SDGs11：住み続けられるまちづくりを

あなたの暮らすまちはどんなまちですか？

高校生の多くが、高校を卒業すると進学や就職のためまちを離れてしまう。  
彼らに自分の生まれたまち、暮らしたまちが、どんなまちだったのか知ってほしい。  
通り一遍の白河ではなく、「自分の白河」をもってほしい。  
そんな思いから、このアートワークショップはスタートしました。

普段の生活では出会わない大人と出会い、  
普段は歩かない路地裏を散策し、  
「これなんだろう?」「気になる」「面白い」を探して、参加者同士で共有しました。

地域を知ること、面白がること、地域を共につくることについて、  
多世代間の対話が生まれたアートワークショップになりました。

# ROUNDTABLE SHIRAKAWA



陸奥賢さん

**事務局・塚本麻衣子**  
今回のラウンドテーブルは、12月5日に開催した「白河まち歩きフォトスゴロク」に参加されたみなさま、ワークショップの講師を務めていただいた陸奥さん、ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員の大澤寅雄さんとワークショップの様子を振り返って、これからどんなことができるか話せたらと思っております。ポリフォニックミュージアムは今年度から始まった事業です。「ポリフォニック」という言葉はなじみがない言葉ですが、訳すと色々な音がする、多層的、重層的といった意味があります。比較するとわかりやすいと思います。「シンフォニー（交響曲）」は色々な音を奏でる楽器が集まって、一つのメロディー、音楽をつくり上げることを目的とします。それに対して「ポリフォニック」は、色々な音があるままざわざわしているというか、一つのものをつくり上げるというより、色々な音があるままざわざわしていて、それが排除し合うのではなく、一緒にそのままだ。それをよしとする考え方がポリフォニックです。2019年に行われた「I COM 京都」という博物館の世界大会でミュージアムを様々な声

に耳を傾ける空間、ポリフォニックスペースにしていくのではないかとこの提言がなされました。ライブミュージアムネットワークではそれを実践していこうということで、こうした名前で事業を行っています。その実践の一つとして、白河市で行ったのが「まち歩きフォトスゴロク」でした。こちらのコミュニティ・カフェ EMANON の青砥さんに「白河のまちには大学がない。高校生は卒業したら外に出ていってしまおう。戻ってくる、こないかかわらず、生まれ育った、経験したまちの記憶は残っていくのだろうか」というお話をお聞きし、白河を体験するワークショップをやってみようということになりました。12月5日のワークショップの様子を映像にまとめておりますので、そちらで一度振り返り、そこからみなさんの感想、講師の陸奥さんのお話から自由に語らっていただければと思っております。よろしくお願いたします。では、映像で振り返ります。

**（映像上映）**  
**事務局・筑波匡介**  
本日、司会、対話のテーブルのお手伝いをさせていただきます。福島県立博物館の筑波です。よろしくお願いたします。Zoomの方たちには、はじめましての方もいらっしやと思います。あらためて自己紹介を兼ねて一言いただければと思います。陸奥さんから時計回りでお願いします。

**陸奥賢**  
よろしくお願いたします。陸奥と申します。普段は大阪で「観光家、コモンズ・デザイナー」、社会

## ラウンドテーブル

# 白河まち歩きフォトスゴロクを振り返る・考える

2021年12月5日(日)に行った「白河まち歩きフォトスゴロクを作ろう!」の参加者、企画者、白河市のミュージアム関係者が集い、ワークショップを振り返りながら、そこから導き出された視点で様々な議論を行いました。「フォトスゴロク」によってもたらされる地域への主体的なまなざし、選び、共有し、並べることで立ち上がる物語、高校生、大学生、市役所職員という多世代が参加したことによって生まれたポリフォニックな視点と対話。そこに住む人自身が、まちに気づき、まちを面白がることから始まる創造性について対話がなされました。

- ◎日時：2022年1月7日(金) 16:00～18:00
- ◎会場：コミュニティ・カフェ EMANON
- ◎講師：陸奥賢さん(観光家/コモンズ・デザイナー/社会実務者)  
大澤寅雄さん(ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員)
- ◎参加者：青戸悠之介さん(白河市建設部まちづくり推進課主事)  
勝田陸さん(コミュニティ・カフェ EMANON スタッフ)  
唐橋薫さん(白河市建設部長)  
佐川庄司さん(藤田記念博物館学芸員)  
中川智隆さん(帝京安積高等学校2年生)  
新国真理恵さん(白河市建設部文化財課主事)  
藤城光さん(アーティスト)  
本間宏さん(福島県文化財センター白河館まほろん副館長)  
青砥和希(一般社団法人未来の準備室理事長/LMN実行委員会委員)  
※このほか、オンラインでもご参加いただきました。

**陸奥賢**  
放送作家やライター、エディターを経て現在に至る。2008～2013年まで大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会のまち歩き事業「大阪あそび」に携わる。2011年からは「まわしよみ新聞」「直観読みブックメーカー」「当事者研究スゴロク」など、一連のコモンズ・デザイン・プロジェクトを企画、立案、主宰している。

**大澤寅雄**  
慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員を経て現職。文化政策、文化芸術と地域社会との関わり等を研究分野とする。



参加者・唐橋薫

実験者」と名乗って、色々な活動をしてい  
ますが、基本的には観光屋さんです。大阪のまちを  
案内している人間ですが、観光を入り口、切り口  
にして、まちづくり、コミュニケーション、  
教育、福祉のプロジェクトができるのではな  
いか？と思って色々活動しています。

その活動の二つのツールとして考案したのが  
「フォトスゴロク」です。これについては後で説  
明させていただきます。よろしくお願いします。

参加者・藤城光

いわき市から参加しております藤城光と申  
します。デザイン、アート分野で制作活動をし  
ております。制作の中で自分もまちを歩くこ  
とが多いのですが、陸奥さんの考案するものは  
非常に面白いと常日頃思っております。陸  
奥さんが考案した「フォトスゴロク」でのま  
ち歩きということもあって、12月5日はすこ  
く楽しみに参加しました。よろしくお願  
いいたします。

参加者・勝田陸

勝田陸と申します。明治大学の3年生ですが、  
今年1年は休学して、白河に来て勉強させてい  
ただいています。普段はコミュニティ・カフェ  
EMANONのスタッフと近くのゲストハウス  
ブランの管理人をやっています。

今回はEMANONで関わっている高校生も参  
加することと、一緒に大学生の視点から、  
自分も東京出身なので、よき者の視点から何か  
見つけられたらなということに参加しました。すこ  
く色々な発見があって、とても楽しませていた  
できました。今日はよろしくお願います。

今日は陸奥さんから声をかけていただいて、  
この「フォトスゴロク」について語り合うお  
相手をさせていただきたく楽しみにしてい  
ました。よろしくお願います。

筑波

今、到着した、当日参加した中川君です。自  
己紹介していただいてもいいですか。

参加者・中川智隆

帝京安積高等学校2年生の中川智隆です。

筑波

参加して見てどうでした。

中川

白河に住んでいても、白河の中心市街をあま



大澤寅雄さん

参加者・唐橋薫

市役所の唐橋でございます。建設部におりますの  
で、道路河川の管理から都市計画、まちづくり、  
建築関係、そして文化財関係の仕事のみさん  
と一緒にやっています。今回はまちづくりの一環  
として、何かヒントが得られないかと参加し  
ております。どうぞよろしくお願います。

参加者・本間宏

福島県文化財センター白河館に勤務している本  
間と申します。仕事は文化財保護、その情報発信、  
普及業務をやっています。この10年来、震災を契  
機に地元にとって大切なものを守って伝えるや  
り方、色々なやり方があると思いますが、その担  
い手に若い人が入っていかないと続かないなと  
ずっと感じています。12月の回は昼休みだけちょ  
うと願ったのですが、すごく楽しげにやって  
いるなど感じて、あ、こういうかたちで再発  
見というのができるのだなと非常に感銘を  
受けました。今日もお誘いを受けたので、  
ぜひお話を聞いてみたいと思参加しました。  
どうぞよろしくお願いたします。

参加者・佐川庄司

こんにちは。佐川と申します。初めて参加しま  
した。二番町にある藤田記念博物館で学芸員を  
やっています。前は市役所におりまして、歴史  
民俗資料館、小峰城歴史館で学芸員をやってい  
ました。その後、都市計画課に移りまして、都市  
計画、景観、歴史まちづくり、まちなかに「歴史  
的風致形成建造物」ってプレートが付いていま  
すが、そういう仕事もやっていました。

参加者・新国真理恵

白河市役所文化財課の新国真理恵と申します。  
「新しい国」と書いて「に」に「く」と読みます。  
あだ名の「ニック」でもどちらでもお呼びい  
ただければと思います。私は白河ではなく会  
津の出身です。白河に来て6年経ちますが、  
文化財課に来る前はまちづくり推進課で中心  
市街地を歩き回っていました。結構歩いてい  
た感覚はあったのですが、6年たつてもなお、  
歩いてみて新しい発見があって、まだまだ白

大澤

「あそぼ」の「ほ」が「歩」  
そうですね。「あそ」はひらがなで、「ほ」は「歩」  
と漢字で書いて、ホームページなんかもあり  
ますので、検索してみてください。このプロ  
ジェクトでは大阪市内で150コースほどま  
ち歩きコースがあります。

大澤

150コース！  
はい。150コースです。僕がまちの人と一  
緒にまち歩きコースを考えて、マップをつくっ  
て、その地域の方にガイド役をお願いして。  
大阪のまち歩きインフラ整備みたいなこと  
を2008年から2013年まで5年間やっ  
ていました。僕はそのプロデューサーで、「大  
阪市内を歩いて楽しませよう！」というこ  
とを日々、仕掛けていったわけです。

大澤

それそれ、1コースずつ案内人がいるのですか。  
はい。1コースずつ一人の案内人がいます  
が、中にはチームでやっていたりもします。  
僕の頃には、ガイドさんとサポーターさんを  
合わせて最盛期は500人ぐらいいました。

大澤

うわ！500人！  
ふくしま、地域づくり・交流促進事業」とい  
う事業で、3年くらい、あらゆる関係各課の  
人たちがまち歩きをやってつくったマップで  
す。著作権フリーで、ずっと上書きされて使  
われています。非常に懐かしく見えています。  
この本町や色々なところでまちづくりのワー  
クショップをやったのですが、こういう切り口、  
スゴロクでまちを見直すというのは非常に面  
白い。期待しております。どうぞよろしくお  
願いたします。

参加者・青戸悠之介

白河市役所に勤めています青戸と申します。  
EMANONの青砥さんとは漢字が違うので、  
「市役所の青戸」と覚えていただけたらうれ  
しいです。普段はまちづくり推進課で中心市街  
地、まちなかの活性化に関わっています。  
前回、フォトスゴロクに参加して、まちなか  
を歩いていて、なかなか普段気づかないこ  
ろがたくさんあると思いました。これから仕  
事をしていく上で、今回、陸奥さんの考案し  
た「フォトスゴロク」を事業に活かしていけ  
ればと思っています。なにとぞよろしくお願  
いたします。

委員・青砥和希

今回のラウンドテーブルの会場コミュニ  
ティ・カフェEMANONを運営しており  
ます青砥和希と申します。市役所の青戸君も  
いるので、「EMANONの青砥」でよろしく  
お願いたします。  
ここは、白河市に大学がなく、大学進学と同  
時にこのまちを離れる前の時間、家と学校以  
外の空間に高校生が少しでも楽しく滞在して  
もらいたいとつくったカフェです。2016年  
3月にオープンして、それからずっとこの本  
町で運営しています。  
基本的にここは、教室、自分の部屋から連れ  
込む、連れ出す、そういう役割をやっている  
と思っています。学校と家以外の場所に来て  
ほしいので、ここは居心地をよくしよう  
と思って、普段から運営しています。ここから  
さらにまちに連れ出すのは、また一つ、きつ  
かけをつくるのが難しい。一緒にいろいろと  
言えばいいのですが、一緒に行ってばかりい  
ると、僕の仕事が回らなくなってしまうので、  
どうしようかなと悩んでいるところでしたの  
で、今回、このようなスゴロクというかたちで、  
一緒にみんなでもまちを歩く時間が生まれたの  
が、すごく印象的だと思っています。みん  
なとまちについて語れたら楽しいと思ってい  
ます。よろしくお願いたします。

大澤寅雄

こんにちは。大澤寅雄と申します。東京のニッ  
今、到着した、当日参加した中川君です。自  
己紹介していただいてもいいですか。  
今日は陸奥さんから声をかけていただいて、  
この「フォトスゴロク」について語り合うお  
相手をさせていただきたく楽しみにしてい  
ました。よろしくお願います。

生えてきたんです。来てくれて、参加者を案内しているけど、俺、しゃべりすぎやなと(笑)。

大澤 自分、しゃべりすぎやな。

陸奥 こうみえて普段は寡黙な人間なんで(笑)。

大澤 よう言うわ。

コミュニティ・ツーリズム

陸奥 といいますか、やっぱり一方的に僕がしゃべり続けるというのは、変な関係性やとちよっと思っんですわ。そもそも僕がやっているのはコミュニティ・ツーリズムという分野で、これは外からお客さんに来てもらうという観光ではないんです。そうやなくて、大阪のまちの人たちに、大阪のまちを楽しんでもらうというもので、「大阪あそび」というプロジェクトはそういうプロジェクトだったんですよ。だから市外の人はべつに来てもらわんでよろしいという。

大澤 外から来る人じゃなくて、中の人楽しい。

陸奥 そう。中の人を楽しませる、中の人に楽しんでほしい、そういうプロジェクトだったんです。それがコミュニティ・ツーリズムです。今は観光というと、インバウンドとか外から入

が来てほしいとかそういうのに熱心ですけど、ちよっど待つてくれといいますが、中にいる人間がわがまちのことを知らんというのが一番まずかろうと思っんですよ。まず身内が、まちの人が、わがまちを歩いて、楽しんで、自分のまちがどんなまちか？というのを知っていくことが大事なはずで。そうやって愛郷心を育てる。「地産地消の観光」という考えなんです。

それぞれのまちの見え方、まちの語り

だから今回も、白河の人たちに、白河のまちを歩いてほしいと考えたんですわ。わざわざ大阪の人に白河のまちを歩いてもらわなくていいという考え方で、逆に言うとな(笑)。もちろん外の人が来てくれて、面白がってくれたらそれはそれでいいですけど。でもまず、同じまちに住んでいる隣の人、隣の隣の人、知人や友人、そういった人たちに楽しんでもらいたい。そういう趣旨なんです、コミュニティ・ツーリズムというのは。そのプロデューサーとして僕は活動して、「大阪あそび」をやった。ですから参加者も大阪のまちの人なわけですよ。で、その人たちにに対して、僕は大阪のまちを案内して同じ大阪人の参加者に「へー」「ほー」と言われて「そんなあるんですね！」という反応が返ってくる。それはそれで参加者にとって新しい発見になっていいんですが、でも、僕も参加者も同じ大阪のまちの人でしょ？一緒に大阪のまちで暮らしている人ですから、コミュニティ・ツーリズムのガイドと参加者というのは。だから、僕だけではなくて、あなたの、あなたのりの大阪のまちの見方、捉え方があるはず

なんですわね。そういうのを僕に教えてほしい。ガイドの僕だけが一方的に話すんやなくて、参加者と、双方向に話し合う。そういうまち歩きみたいなのがやれたら面白いのではないかと。僕自身の学びにもなりますし。参加者が主体性、当事者性を出して、わがまちを語る・・・みたいなことをやってみたいと。参加者が5人やったら、5人それぞれのまちの見え方、まちの語り、私のまちみたいなことを語ることで、ポリフォニックなまち歩きが可能なんじゃないだろうか？と。

大澤 ポリフォニックな。ここで「ポリフォニック」が出てきました。

陸奥 そうなんです。そういうポリフォニックなまち歩きをやってみたいと思っようになったんです。でも、やっぱり僕はまち歩きのプロとして、まちの物語とか背景とか歴史とか、知識量とか情報量が違うわけですから、僕が入るとパワーバランスが難しい。どないしたかてチャチャ入れてまっわけですよ。

大澤 ついついね。

陸奥 ついついね。大阪のまちで参加者が「こんなありましてね」というとつたら、僕がより、いろんなことを知っているから「あれはこうでこうで、こうなんですよ」って、結局、俺、全部ひとりしゃべってるやん？みたいな(笑)。

大澤 ありがちですな。

「しゃべらないガイド」

陸奥 そうそう。ありがちで。ついついやつてしまっんです。で、これはいかなんという反省があるんです。だから、最近では、まち歩きをしてもガイドじゃなくて参加者の当事者性を引き出す、ファシリテーターのような立場でまち歩きをしたいと思っます。つまり、僕は「しゃべらないガイド」を目指したい(笑)。

大澤 しゃべらないガイド。

陸奥 はい。まち歩きで参加者は集まってくるんですけど、ガイドであるはずの僕が、一言もしゃべらん。

大澤 寡黙なガイドですな。

陸奥 寡黙なガイドです。もう、みんなが「あれ？」ってなつて。「陸奥さん、なんもしゃべれへん...」とざわついて、もう耐えきれなくなつて、ついつい自分がしゃべりだすみたいな(笑)。そうしないといけない。それくらい寡黙なガイドになりたいと思っっている。僕の願望としてあるんです。

ROUNDTABLE SHIRAKAWA

大澤 なるほど(笑)。

陸奥 まち歩きの楽しみって、案内することもあるんですけど、参加者同士の対話、交流、話し合いなんです。そこそそが一番、まちを活性化させる。知る喜びっていうのもあるんですけど、参加者同士が語る喜び、シェアする喜びっていうのかな、それがあるなと思っまして。そういうかたちのツアーをつくられへんかなと。それに僕が参加したらできへんから、僕は抜けて、参加者同士に何かまちを歩く仕掛けつくりとか、仕組みつくりとか、ちよっどとした遊び心で、こんなことしてみませんか？というのが、この「フォトスゴロク」のまち歩きに結実するんです。いろんなところを歩いてもらって、気になりましたっていうポイントをスマホで撮って、わざわざプリントアウトして。デジタルのデータで撮っているものをアナログに落とし込む。

大澤 わざわざ。

陸奥 わざわざ。このスマホ時代に、あえてし判写真を印刷する(笑)。

大澤 糊つけて貼って。

デジタル・メディア、アナログ・メディア

陸奥 そう。糊つけて貼っていきます。スマホ、デジタルを使うのに、し判のアナログを使う。フォトスゴロクは、デジタル・メディア、アナログ・メディアの双方を駆使した遊びのスタイルです。でもそうすることで、参加者が何を見たか？どういうものに興味があるか？そういうのがわかるんです。前回のスゴロクづくりのときに、じつは何の前情報も与えずに「白河は初めてです」という女の子かもいたんですけど、無理やり参加させていただきますか、スマホを持つてらなら参加してというて、一度も僕は白河を案内していません。出発地点のEMANONで参加者を2グループにわけて「片方は東行ってください」「もう片方は西行ってください」と指示だけ出して(笑)。「グループの参加者も途中でバラバラになってください」というて。そうやって一人で歩きながら「なんかようわからんけど、これ、気になるなあ」みたいなのがあれば撮ってきてもらっ。

そういうフラットな、ニュートラルな目線で、白河のまちを見て、写真を撮って、3枚選んでもらう。この3枚を選ぶというのが、これもまた面白いところなんです。

大澤 そうだね。

何を選ぶかで、その人の町の見方、センスみたいなものが出るんです

陸奥 要するに、何を選ぶかで、その人のまちの見方、センスみたいなものが出るんです。写真を撮



るのは結構、撮れる。前回の時も33枚も画像を撮った子もいましたが、しかし、それを絞り込んで3枚にするところで、取捨選択が出てくる。悩みや葛藤がでてくる。そうしてプリントアウトしたものを出しあつて語り合います。一人3枚の写真を出すんですが、これは要するに発言権カードみたいな感じですよ。

大澤 ああ、なるほどね。

陸奥 みんな写真3枚持っていて「私はここに行ってきました」「こんなありました」「これなんですか?」みたいな話になるんです。「撮ってみたいけど、ようわかりません。でもこれがおもしろいと思いませんか」とか「なるほどね」とかいいながら話をする。一人が話をしたら、次の方も写真を出しながらしゃべって、また次の方も写真を出してしゃべって……。同じ回数だけ写真を出しながらしゃべることで、参加者の主体性が出てくるんです。参加者同士で、同じ回数分しゃべる。これ、まち歩きで外へ行って僕がガイドをすると、僕が一方的にしゃべり続けるわけですけど。

大澤 話の長い人はしっかりしゃべるとかならんようにね。

陸奥 そうです。そうならんように3枚の写真が発言権カードとなる。あと、何を撮ってきたか?を隠しておくのも大事で。この写真は手札みたいなもんなんで、種明かししたら面白くない。

になつてくる。そうじゃなくて、アクティブ・ラーニング的、主体的に参加者が自分たちで発見していく構造のまち歩きがもつとない、いつまでたっても、まちが自分たちのものにならない。専門家による話に「へー」「はー」「ほー」と言っているのも大事ですけど、でも「あなたはこういうふうにあなたのまちを捉えているんですか? 考えているんですか? 見えているんですか?」みたいなことを、「こんなかたちです」と提示して、面白がってもらうことが大事で。「いいね」「面白いね」「そういうのもあるんや」と、みんなが楽しみつつ、認め合えることで自分のまちの語り口といふのかな、語っていいんだと思えてくる。そういうのを、もつとやっていかなあかん。そういう反省でつくったのがこの「フォトスコロク」です。

大澤 なるほど。よくわかりました。面白いですね。陸奥さんがずっとやってきた活動の反省から生まれているところも面白い。

陸奥 そうですね。僕がしゃべりすぎているというか。

大澤 しゃべりすぎやから。

陸奥 はい。もう俺はあかんと(笑)。聞くことが大事やということ。大体、僕は年から年中、語る仕事をしているがゆえに、その反省があつて。参加者の話を聞かないといけない。だから僕が聞くプロジェクトというか。それは僕の個人的な反省だし、個人的な興味

大澤 ああ、それ出しよったかと。

陸奥 そうそう。そうして相手を驚かせる楽しさもあります。

大澤 かぶらんように出そう、とか。

陸奥 前回、かぶった人もいました。

大澤 あえてかぶったところに出すとかね。

陸奥 「それを出すなら、ぼくはこつちを先に出そう」というように駆け引きみたいなものも成立する。カードゲームっぽさといいますが、そういうのが遊びの要素につながるんです。そして、そういうかたちで写真を出してもらって、語り合い、それが終わるとみんなで写真を並べてスコロクにするために編集していく。このときに、どこを歩いてきたか?と知りたくなるので、前回のワークシヨップのときには、佐川さんの白河まち歩きマップを使わせていただきました。これは素晴らしいですよ。僕、これ見た時にああ俺、白河でやることないわと思つたぐらいです(笑)。僕はこれを見ながら、しらみつぶしに白河を歩かせていただきました。

大澤 すごい情報量ですね、これね。

関心ですけど、参加者がどういうことを語るのかを聞きたい。

写真編集の面白さ

そのための「フォトスコロク」をつつくたんですが、いざ、やってみると、またえらく参加者同士で話はずむんです。とくに若者たちにウケがいい。どこが面白いのかな?と観察していたんですが、これは、要するに写真編集の面白さですね。写真のアルバムづくりとか、我々世代はやったことがあるじゃないですか、印刷写真とかで。

大澤 分厚いあの。

陸奥 そうそう。分厚いやつ。

大澤 フィルムをはがしてべたべたと。

陸奥 そうです。べたべた貼っていく。それがいいんですよ。今の若い子たちはスマホ世代で。スマホ時代になっちゃうと、画像というのはデジタルのデータとして処理されますから。SNSとかInstagramに上げて、それで「いいね」の数で競い合ったりする。

大澤 知っているか、いけていないか。

陸奥

陸奥 すごい情報量ですよ。めちゃくちゃようできていますし、これがあれば白河のまち歩きの歴史、史跡、名所みたいなものが網羅できる。これ1枚で白河のまちがわかる構造になっています。でも今回は高校生とか若い子たち、白河初心者に参加者ですから。

大澤 ビギナー。白河ビギナー。

遊びながらまちを知れるねん

陸奥 そう。白河ビギナー。そういうビギナーの人たちだけで、歩いて楽しく語り合うワークシヨップにしたかった。そのためには、裾野を広げやすい、入り口が柔らかい「フォトスコロク」を用いたまち歩きがいいだろうと。やっぱり専門家、プロフェッショナルの方の語りが入ると、学ぶ構造になってしまう。学んでいくのはすごく大事なことで、それがあかんわけじゃないんですが、でも、まちを歩くことは学びの範疇だけじゃなく、遊ぶという範疇もある。まち歩きしながら遊べるねん、遊びながらまちを知れるねん、というのが必要だろうと。

大澤 面白がるということね。

陸奥 そうです。だから、面白がるためにはどうすればいいか?という、自分なりの面白がり

いけているか、いけていないか、みたいな。そういうのが「いいね」とかの数で、数値化されて、すぐにわかっちゃいます。「いいね」の数を稼ぎたいというので、すごい写真加工アプリなんでも出てますから。もういくらでも盛り盛りにできます。そういう数値化、数字で判断される世界に入っちゃって、不毛というあれですが、なんか違うといいですか。写真で、そんな「いいね」の数で競い合う。みたいなもんじゃないでしよう。気になったものがあつたら撮ったらええし、盛るもんでもない。インスタ映えを気にするもんでもない。「いいね」の数ではなくて、みんなと顔

方、当事者の面白がり方を、参加者同士がそれぞれ認め合える構造にすればいい。そして、そういうのが自然発生するようにつくりになっているんです。「フォトスコロク」というのは。実際、「フォトスコロク」でつくるまち歩きスコロクは、この白河まち歩きマップに載っているようなスポットが、あんまり出てこないんです。

大澤 ああ、きつとそうやね。

何気ない、柔らかい、素朴な興味関心

陸奥 もっと生活者目線で、もつと日常的で、トマソンのものもあつたりします。本当に、何気ない、柔らかい、素朴な興味関心。そういうところからでもまち歩きは楽しめる。ちょっとした「なんやこれ?」というのを集めて、それをみんなでシェアして話し合っていくだけでも、おぼろげながら白河というまちの輪郭、概要みたいなものが伝わってくる。

時には、やっぱり歴史的な名所も入るんですよ。お城が入ったり、お寺とか、そういうものも出てくるんですけど、「戊辰戦争の時に何とか藩の武士が……」といったような入り方ではなくて、「このお寺の瓦は変わった形してて……」みたいなかたちで、柔らかい興味関心でまちにアクセスすることができんです。こうした柔らかいまち歩きがもつと必要ではないかと思うんです。もちろんスベシャリティな専門家による歴史、旧跡、名所ガイドも大事ですけど、それは学びのスタイル

を合わせながら、「これが好きやねん」「なんとなん、これが気になって……」と何気ない写真を出して語り合うことで、認め合えるというか、楽しみ合える。写真って、ほんまはそういう素材やないかな。語り合うツール。だからあえてデジタルじゃなくてアナログでプリントアウトするようにしています。そういう風にして、顔が見える人たちと、一緒にあって写真編集する場をつくってみたいかな。

大澤 なんかね、私も最初に陸奥さんからこの企画



ROUNDTABLE SHIRAKAWA

の話聞いて、Instagramでできることをアナログで出力して編集し直すと聞いた時、白河市に来る前にInstagramで白河を検索したんですよ。

陸奥  
そうですか。

大澤  
どんな画像が出てくるかと思って。

陸奥  
なるほど、なるほど。

地味ですよ

大澤

多かったのはラーメンと狛犬とだるまかな。そうやって出てくるのと、ここで見るのは全然違いますね(笑)。これ見て、「一言で言つとね、地味ですよ。」

陸奥  
地味ですね。

大澤

この写真群、ぱっと見たときに、なんかこう、キラキラしてない。

陸奥  
はい。

大澤

ちょっと渋い色の写真が多いでしょう。で、よく見ないとわからないし、よく見てもわか

れていってしまっ、俺の住んでいる糸島は違う、俺の暮らしている白河は、そればかりじゃよと言いたい人がこういう発見をしてくれると、「あっ、そういうところもあんなやね」となる。

等身大の、わがまちのビジュアル

陸奥

そういう当事者性、主体性というか、等身大の、わがまちのビジュアルというのがちゃんと持つべきだと思うんです。僕は結構、あっちこっちのまちにいくと、現地の人たちに「ふるさとって聞いて、なにか思い浮かぶビジュアルがありますか?」とよく聞くんですよ。僕にはあるんです。僕は堺で育ったんですけど、僕のふるさとの光景は大和川なんです。知っていますか大和川。日本で2番目に汚い川(笑)。

大澤  
汚いことで有名。

陸奥

そうですね。僕のふるさとの光景というのは、その汚い大和川に、プタが流れてくる光景なんです(笑)。上流に養豚場があったんです。

大澤  
プタの死体が流れてくる。

陸奥

そう。プタの死体が流れてくる。ちょっと雨が降ると大水が出るんです。そうすると養豚場が決壊するみたいで(笑)、プタがプワプワいいながら流れてくる。

らない(笑)。そういう写真が多いじゃないですか。Instagramにアップされているのって、あ、一言私のことも言っておくと、福岡県の糸島市という私の住んでいる町はInstagramの聖地、インスタ映えの聖地と言われているところなんです。「糸島」ってInstagram、Googleで画像検索すると、出てくる画像が一緒なんです。たいたいあそことあそことあそこってわかる。それはね、確かにキラキラしているというか、ぱっと見て、ああ、行ってみたいと見て思う写真なんだけど、そればかりなんです。糸島っていったらそこしかないんかと。そういうのに比べたら、これは地味で(笑)、え、何これっていうのばかり、何これなんやけど、ここに色々書いてあるコメントとかさっきの語りを聞くと、「はあ、なるほどね」と。

その人、撮った人の自分の思い出、経験、素朴な発見、陸奥さんがさっき言った柔らかい関心。Instagramってどうしても、どうや!って感じになるんですよ。行ってきた、どうや!白河行ってきた、どうや!みんな行ったことないやろ、ラーメンどうや!みたいな。そういうのよりも、ほんとにその人がその人の目線で気になった、それを素朴な自分の等身大のところからシェアしたくなるというか。

みんながInstagramで撮ろうとしているのって、風光明媚な場所を、ドローンで押さえるのを目指したり、グルメ番組やグルメ雑誌に載っている料理を自分も同じように撮ってみたいっていう、大量に流れている情報を、自分も撮って発信する側になってみたいということ。発信する側になってみたい気持ちもわからないけれど、それはほんとにその人の関心なのか、結局みんな同じ方向、同じことに関心を向けることに流されているんじゃない

大澤  
プワプワいいですか。

陸奥

プワプワいいです。これ、結構、悲しい光景ですけど。でも、これが僕のふるさとのビジュアルなんです。これはインスタ映えしないと思うんですけど(笑)。

大澤  
インスタ映えはしない。でもリアルはリアル。

陸奥

へんな炎上をするかもしれないけど(笑)。ですけど、ふるさとというのは、愛郷心みたいなものは、やっぱり個人、自分の心象なんです。誰にもわからない。個人的なもの。そういう大切なものが何か違う力学、大きな声、大きなメディアみたいなものに侵されてしまっているのは、とても悲しい話やと思います。大阪ってどんなんですか?って聞かれて、ビジュアルとして太陽の塔が出てくるのはつらいですよ(笑)。たこ焼きとか出てくるのもつらい。

大澤  
通天閣とかね。

陸奥

通天閣とか。そういうアイコンがでてくると、僕は「ほんまに?」と思います。観光ビジュアル産業界っていうのは、やっぱりそういうところを推したりしますがね。大きい記号に持っていかせようとする。記号化すると大衆に伝えやすいですから。

のか。マンホールの写真を撮った人がいますが、他にマンホールの写真を撮った人はたぶんおらんやろ。

陸奥  
お一人だけでしたからね(笑)。

大澤  
この古い標識、こんな標識見たことないっていうくらい古い標識を押さえる子がいた。たぶん他の人は見えていないやろけど、これはすごい。写真を撮る人の自身の表現っていうんか、発見が面白いと思って私は見ていた。

陸奥  
なるほど。「ラーメン」「だるま」「狛犬」といっ



大澤  
そう、伝えやすいからね。それが悪いわけでもないと思うけど。

陸奥  
とは思っけど。

大澤

ただ、その多様さ、地域の文化資源とか歴史資源の多様さを、わかりやすい地域の記号がどんどん陰に隠ってしまう部分がある。何かアイコン的なもので。

陸奥  
そうですね。そういうことのまずさ、拙さ、それはやっぱりポリフォニックな文化を、ないがしろにしていくことにつながりかねない。

大澤

結局、どこでも一緒になってしまっ。最終的には、それはどこのまちの歴史ですか?どこのまちの記憶ですか?って、結局一緒になってしまっ。たぶん、高校生の彼がこうやって白河のこのあたりを歩いて撮ったのが、まちを知るきっかけになったと思うんやけど、若い人たちがみんなが郊外でつかいシヨッピングセンターにしょっちゅう行ってたりするかもしれない。ですけど、別にそういうのって白河じゃなくてもある風景です。

陸奥  
まあ、そうですね。

ここにしかないものばかりある

た記号としてまちを捉えがちというか、何か大きなメディア、情報みたいなものに、我々はどうしても左右されてしまってますから。それにいつのまにか洗脳されてしまっていて、まちの見方、捉え方が固定化してしまっんです。

大澤

そうですね。だから。ほとんどポリフォニーじゃなくてモノフォニーになっていく。

陸奥

ユニゾンになっていく(笑)。

大澤

ユニゾン。白河っていうのはこういうもんなや、糸島っていうのはこういうもんなやと全員が流

大澤  
そういうどこにもある風景が、その人の記憶、そのまちの歴史になると、それはどこでもええやん別に、どこで生まれようが、どこで育とうが問題じゃなくなる。

でも、「白河まち歩きフォトスゴク」にはここにしかないものばかりある。気になったものがある。ここにしかないと思うから、こうしてみんな気になったんでしょね。

陸奥

そうですね。代替可能なものは情報とかデータなんです。代替不可能なもの、個人だけの思い出、暮らし、そういうものこそが大事で。それこそが物語となる。ナラティブとなる。そういうものをもっと認め合える、出し合える場、時間をつくりたい。それが、この「フォトスゴク」では発生するんじゃないかと思う。「フォトスゴク」で撮影した写真は、どこのか、よくわからんのですよ。でも「ここにしかない」ものがあると思います。そういう面白さがありますね。一期一会的といいますか、ほんとに、その瞬間に発見して、気になって、思わず撮りましたみたいなもの。

大澤

そういえば「白河」という地名を、俺、なんで知っていたんやと思つたら「奥の細道」ね。

陸奥

ああ、「白河の関」。

俳句、短歌のように撮っているんじゃないか

ROUNDTABLE SHIRAKAWA

**大澤** 「白河の関」には行ったことがないのに、そういえば白河のことなんか印象にあるなと思った。旅行先で写真を撮る感覚は、昔の俳句もそうやったんやろうな。その土地に行って、自分の目の前にしている風景と自分の心象を捉えようとして五七五に収めようとする。

写真ってカメラで景色をどう切り取るかじゃないですか。自分の目、生理的な目、肉体の目と違って、このフレームのどこで切るのかなというふうを考える。俳句も五七五という定型があった、そのフレームに収めようとする。そこで、五七五にどれだけ自分の見ているもの、自分の想いが込められるかが、俳句では詠われているんやろうな。「フォトスゴロク」は、そういう感じの写真がする。

撮っている時、ここを届けたい、ここをシェアしたいと、撮っている高校生、大学生たちは真剣に選んだと思う。目の前にあるお城、ここ行きました、はい、次はラーメン行きます、はいって感じではなく、ここをシェアしたいというところを、俳句、短歌のように撮っているんじゃないかという気がしたんです。

**物語みたいなものがつくられる**

**陸奥** そうですね、あらためて写真はまちに入る入り口としては、すごく入りやすいんですよ。ビジュアルです。写真をモチーフにすることが、柔らかい入り方になると思います。そして、その後、スゴロクというかたちで写真をつなげていく。写真は1枚だと1枚の瞬間なんですけど、2枚置くと違う見え方をする。同じ人を撮って

も、2枚並べると人間って差異を感じるんです。今、僕の写真を撮って、また1週間後に僕の写真を撮って、同じように並べても同じ僕ですけど、やっぱり雰囲気が違う。「何があつたんや?」と探ってしまっし、背景が生まれるし、ストーリーを感じ取ってしまっし。物語みたいなものがつくられる。あと「フォトスゴロク」の写真をつなげていくことで、まち歩きのリートが提示できます。ここを歩いて、ここを歩いて、ここに来ますというプロセスが示せる。また、写真と写真のあいだに遊びのコマがあり、そこも遊べます。2枚の写真の間に新しいストーリーなんかもつくれちゃっつ。

**大澤** ああ、面白いね。

**陸奥** 写真と写真のあいだに余白みたいなものがあるわけですね。

**大澤**

僕はもう一つ気がついたんですけど、こうやって別々の人が撮った、もしかしたら同じ人が撮っているかもしれない複数の写真に、例えば三角屋根みたいなものが共通して出てきたりする。これも面白いと思うんです。意図してその人が三角屋根を撮りためようとか、三角屋根に着目して写真を撮り続けたわけじゃない、たまたま偶然、相似形の絵が見えたり、赤という共通の色が見えたりする。それもアルバム効果かもしれないですけど、編集すること、白河のまちの特徴みたいなもの、無自覚に見ていたものが浮かび上がるのが面白い。意図して三角屋根特集をしたわけじゃない

いの、編集によって出てきてしまうところが面白いですね。

**大澤** そこにね、僕が最近関心のある言葉キーワードがある。集合的創造性という言葉。英語で「コレクティブクリエイティビティ」(collective creativity)です。クリエイティブ(Creativity)、創造性って、個人の類まれな才能によって発揮される力みたいなイメージがあつて、アートにもそういうニュアンスがある。でも、これだけ多様な文化が、地球上に色々あるのは、誰か特定の人が生み出したものじゃなく、その地域の人々の、絶え間ないコミュニケーションの中で自然に生まれてきた。

**陸奥** 僕が考案してきた「まわしよみ新聞」や「直観読みブックメーカー」といったコミュニケーションツールは、だいたい、ものづくり、共同体験をすごく意識してつくってるんですよ。ものづくりというのは、一種のノンバーバル・コミュニケーションみたいなところもあつて。こうやって写真を並べたり、切ったり、貼ったりというのは、言葉じゃないコミュニケーションなんです。

**大澤** うんうん。

**陸奥** 僕が考案してきた「まわしよみ新聞」や「直観読みブックメーカー」といったコミュニケーションツールは、だいたい、ものづくり、共同体験をすごく意識してつくってるんですよ。ものづくりというのは、一種のノンバーバル・コミュニケーションみたいなところもあつて。こうやって写真を並べたり、切ったり、貼ったりというのは、言葉じゃないコミュニケーションなんです。

**大澤**

うんうん。うんうん。

**大澤** お互いに創造的な関係、関わりの中で生まれる文化みたいなものがコレクティブクリエイティビティ、集合的創造性。最近の私の関心事です。

**陸奥** みんなで写真を並べたり、のりを交換したり、ハサミをシェアしたりと、そういうことをするんですけど、そうやって、みんなで協働して、ものをつくっていくことで仲良くなっていく。みんな、集団でつくること、より関係性が近くなる。

**集合的創造性**

**大澤** カレンダーづくり。それも面白いね。

**陸奥** カレンダーづくりみたいな、そういうこともできますし。すごく汎用性が高いツール。一人でもできるけど、色々な人と一緒に編集しながらできる。

**大澤** カレンダーづくり。それも面白いね。

**多世代でやると、もっと面白い**

**大澤** これ、多世代でやると、もっと面白いと思うな。

**陸奥** 多世代。そうですね。

**大澤** 同じ仲間、同じ世代でやるのが面白い部分もあるけど、全然違う小学生とおじいちゃんおばあちゃんやるとかね。そういう「フォトスゴロク」も、ぜひやってほしいですね。

**陸奥** できると思います。僕のプロジェクトはすべて「モンズ・デザイン」なので、これもフリー、無料です。いつでも、どこでも、だれでも勝手に、自由に使ってよろしいというもので、「フォトスゴロク」の用紙も、サイトからPDFをダウンロードして、プリントアウトできる

はい、料理のプロセスみたいな。ここでじゃ

**陸奥** 私財ではなくて社会財、公共財を作るのが「モンズ・デザイン」の狙い。糸島でもできるでしょね。

ROUNDTABLE SHIRAKAWA

**大澤** うん、うん。

ら関係性やら、色々なことをバックボーンにして、芸術、文化、作品が生まれてくるわけで。集団でものづくりをすることは大事だと思うし、これは日本の教育の話にも重なってくると思います。今日も高校生がいっぱいいますけど。なんとなく、日本の教育現場は個を競い合わせるんですよ。個でテストをさせて、成績を判断するというやり方をする。これは、個人個人の能力を見るのはいいと思いますけど、実社会に出ていくと、そういう構造では動いてないんです。

**陸奥**

どんだけすごい天才、スーパープレーヤーがいても、その人だけで会社って動かないじゃないですか。やっぱり、チームをつくってチームの中でプロジェクトをやっていきます。できる人がいても、そういう人が突出してやり過ぎると、全体としては破綻してしまうこともある。チームで助け合つていいますか、個人個人のできることを、できるところ、得意なところ、ダメなところをシェアし合つて、まかない合つて、動かしていかないと、結局は先に進めないんですよ。だから、大事なことは、個人の能力を伸ばすというより、集団創作、世の中には色々な人たちがいて、そういう人たちと、どう折り合いを付けて、ものづくりして、先に進めていくか?という協調性。コレクティブクリエイティビティがすごく重要なキーワードです。「フォトスゴロク」は、そういう訓練の場になりうる。みんなで写真持ち合つて、編集して、ものづくりをやるっていう場ですから。

も、2枚並べると人間って差異を感じるんです。今、僕の写真を撮って、また1週間後に僕の写真を撮って、同じように並べても同じ僕ですけど、やっぱり雰囲気が違う。「何があつたんや?」と探ってしまっし、背景が生まれるし、ストーリーを感じ取ってしまっし。物語みたいなものがつくられる。あと「フォトスゴロク」の写真をつなげていくことで、まち歩きのリートが提示できます。ここを歩いて、ここを歩いて、ここに来ますというプロセスが示せる。また、写真と写真のあいだに遊びのコマがあり、そこも遊べます。2枚の写真の間に新しいストーリーなんかもつくれちゃっつ。

**大澤**

**陸奥** 写真と写真のあいだに余白みたいなものがあるわけですね。

**大澤**

僕はもう一つ気がついたんですけど、こうやって別々の人が撮った、もしかしたら同じ人が撮っているかもしれない複数の写真に、例えば三角屋根みたいなものが共通して出てきたりする。これも面白いと思うんです。意図してその人が三角屋根を撮りためようとか、三角屋根に着目して写真を撮り続けたわけじゃない、たまたま偶然、相似形の絵が見えたり、赤という共通の色が見えたりする。それもアルバム効果かもしれないですけど、編集すること、白河のまちの特徴みたいなもの、無自覚に見ていたものが浮かび上がるのが面白い。意図して三角屋根特集をしたわけじゃない

**大澤** ああ、面白いね。

**陸奥**

僕はもう一つ気がついたんですけど、こうやって別々の人が撮った、もしかしたら同じ人が撮っているかもしれない複数の写真に、例えば三角屋根みたいなものが共通して出てきたりする。これも面白いと思うんです。意図してその人が三角屋根を撮りためようとか、三角屋根に着目して写真を撮り続けたわけじゃない、たまたま偶然、相似形の絵が見えたり、赤という共通の色が見えたりする。それもアルバム効果かもしれないですけど、編集すること、白河のまちの特徴みたいなもの、無自覚に見ていたものが浮かび上がるのが面白い。意図して三角屋根特集をしたわけじゃない

大澤  
やってみてですね。

陸奥  
ぜひ、やっていただきたいと思っています。色々なところで、色々な使い方ができるという意味でもポリフォニックなツールといえるし、強みじゃないかと思ったりしています。

大澤  
いい感じの時間です。

陸奥  
ですね。次は今の話を受けてみなさんから感想を聞く、みたいな感じですか。

まちづくりと文化財が一緒になっている

筑波  
今回、このスゴロクを取り上げたのは、まちづくりと博物館は何か開わりを持てるのかというところがあるんです。白河さんは建設部の下に文化財課があって、まちづくりと文化財が一緒になっている。他にありますが、こういうまち。

大澤  
いや、僕はそれを聞いて驚きました。まちづくりの中に文化財のセクションがしっかり開わりつつあるというのはよっぽどだから。まちのなかに観光資源、観光資源化されがちな文化財がドーンとあるなら、まだ考えられるんですけど、あまり聞いたことがない。文化財課っていただいた教育委員会に入っていて、

そもそも、白河の都市計画は400年前、だいたい信長、秀吉、家康の時代に全国にお城と城下町をつくって、その時にもう都市計画されていた。大正時代には「都市計画法」をヨーロッパに学んで、更地に碁盤の目状に都市計画するっていう発想になった。戦災後の名古屋、札幌、関東大震災後の東京は一部そういうのを適用したけど、白河の大正時代の都市計画図を見ると旧城下町に碁盤の目状に道路を通してある。

大澤  
そうですね。

佐川  
400年前にあったまちに勝手に線を引いて都市計画で新しい道路をつくっていくようなことを進めていいのか。中世後期ぐらいからのまちの変遷を並べて、それで今後どういうまちづくりしていくかっていう発想が必要じゃないかと思いました。その時は、何とかが、欧米に倣ったまちづくりをやるうとした時期で、それが今、見直され始めたのかなという気はしています。

筑波  
かつて、「学芸員はガンである」と言われたことがあります。

大澤  
言われました。

筑波  
まちづくりに対しても観光に対しても、そう

首長部局の都市計画系と離れていることが多いので、これは珍しいなと思いました。

佐川  
実は先進的なところはあっているんですけど、建設部、都市政策とか企画政策に文化財が入っているというのは「景観法」が文化庁と国土交通省の「共管法」なんです。

大澤  
はい、はい。

佐川  
「歴史まちづくり法」は文化庁、国交省、農水省3省の「共管法」で、共同してやっている。またがるので、文化財に立脚したまちづくり、歴史に立脚したまちづくりをやるうとする。どうしても教育委員会と首長部局が分かれているのは政策的に不都合。金沢は先進的にやっている。最近法律の改正があって、首長部局にもってける。

大澤  
そうですね。「文化財保護法」の改正がありました。

佐川  
白河市長が推進して、そういう動きになっているようです。

大澤  
そうとう先進的なことだと思います。

佐川  
考えてみれば、もともと分けること自体がおかしい。本来のかたちに戻ってきたような感

ういうことを習って学芸員になる人間はなかなかいなくて、参画する機会がなかった。今回、佐川さんにお話を聞かせていただき、ちゃんと学芸員が参加する方法があるんじゃないかと教えていただいた。ちょっと頑張らなければいけないなと思っただけです。この後、若い人たちからもぜひ発言していただきたいと思えます。どうですか参加してみてもいいですか。何か聞いておきたいところとかあればぜひ。

新たな発見ができた

新国

私は、まだ文化財4年目で、佐川さんからしたらベテランなので、今日は勉強する思いで聞かせていただきました。市外から来た人間としての感想ですけど、まち歩きマップはすごい。白河を自慢したくなるようなすごいものだと思います。写真を3枚撮るって、意外と3枚に絞るのは難しいですね。周りの人に、白河にこんなところがあると伝えたい、白河のこういうところを自慢したいという気持ちがあるの、3枚にまとめるのがすごく難しかったです。けど、そういうところで、新たな発見ができたと思いました。

グループでこういうのを1枚つくってくださいって言われることが多いと思うのですが、今回は一人でそれぞれ散らばれと言われ、散れ、散らばって撮りに行って、自分で3枚に絞ってそれをカードとして見せ合った。

じじゃないかな。

大澤  
僕は「文化財保護法」改正の時には、文化財を活用するというところに重点が置かれ、今までの文化財保護という考え方を安易に観光資源化することで、文化財の価値が変質してしまうんじゃないかという懸念を持っていました。それは、いかがですか。

佐川

私が歴史まちづくりで計画をつくるのに、国交省、文化庁と毎月1回協議した。国でも、やっぱり綱引きがあって、国交省が言うには文化財を保護するばかりでは凍結保存的で活用できないじゃないかと。一部の人のちのものになっていくと。それを、もうちょっと地域づくりに活かさないかと。というのが一方ではあって。文化庁では、おっしゃったように活用することで文化財が破壊される、消耗品的に使われる恐れがある、それを警戒している。そういう綱引きが国でもあったような雰囲気は私も肌で感じていました。縦割り行政の弊害。もうちょっと、その辺は地域のやりたいことに合せた政策がチョイスできるようにしないと良いですね。白河はそういう意味では非常に先進的ですね。

大澤  
いや、そうだと思います。

唐橋  
私は、もともと建設畑の人間で、文化財をどう生かしていくかは、正直、得意ではないの

グループでやると、たいてい誰か一人が3枚撮っちゃうみたいになって、偏りも出るので、自分で白河の魅力というか周りに話したいと思うところを撮りに行くということ、白河への愛着心というか、誇れる部分を見つけられたかなと思うので、そういったところがすごくいいなって。

写真の他に、コマがあって、コメントを書く時にも「いや、あそこに白菜を売っていたおばあちゃんがいた」とか、そういったコミュニケーションにもなる。単に写真だけではなくてコメント欄をみんなであいわいしながら白河ってこんなところがあるというのを発見しながらできる。いいまち歩きスゴロクだなと思って参加させていただきました。

青戸

まちづくりと文化財のお話、すごく面白かったです。勉強になったと思います。大澤さんが多世代でやったら面白いよ、小学生と高齢者と一緒にやったら面白いよねとお話されていた。僕も参加して実際にやってみて、まだ白河に住



佐川庄司さん

です。ちょっと振り返ってみますと、そもそもそういった法律がない時代には、地域の集落のお地蔵さん、お寺、神社、そういったものが地域の一つの精神的な支えになっていた。それが集落を構成する一つの特色といえますか。それをまちづくりと言うかは別ですけど、生活に根ざしていた姿が使われ方として本来の姿だったのですね。

ですから、その原点に帰った時、まちづくりの根っこにあるそういった部分を我々がもう一回しっかり認識するといえますか、記憶を呼び戻す意味で、文化財と広い意味でのまちづくりは、やはり融合してあるべきなのかなと感じています。

そもそも、白河の都市計画は400年前

佐川

すみません。ちょっと、しゃべりすぎですけど、私はずっと文化財をやってきて、一時は開発と保護で対立していた。その後、都市計画課で都市計画マスタープランの見直しをやった。

始めて1年もたっていない人間であまりまちなかのことがわからない。例えば、この鳥居とか謎が謎のまま終わってしまったところがたくさんあった。何だったのだろうと、疑問のまま終わることがたくさんありました。高齢者の方、ずっと住んでいる方、学芸員の方と一緒にこれをする中で、さらに発展していく深みが出てくると思いました。学芸員の方、お年寄りの方の意見を付け足していけば、さらに面白い「フォトスゴロク」になっていくと思えました。

実際に9月に、筑波さんと、山本さん、陸奥さんと一緒にまちあるきをした時に、このお寺は福岡でしか見たことないとか、疑問を持ったところにフォロワーが来るので、すごく面白かったです。多世代の色々な業種の人とやることでさらに面白くなると思いました。

筑波

ありがとうございます。では一番若い。



新国真理恵さん



青戸悠之介さん

ROUNDTABLE SHIRAKAWA

お互いにシェアすると色々再発見できる

**中川**  
今回、このスゴロクに参加して、一人で写真撮ってSNS上げるのもいいですけど、やっぱりみんなでお互いにシェアすると色々再発見できる。お互いの意見も出るし、みんながシェアしたほうがいいのかと思いました。

**筑波**  
ありがとうございます。

**勝田**  
自分のチームでは、印象に残った写真は疑問から来る写真が多いなと感じた。これはなぜこういうかたちなのだろう。なぜ、ここにこれが置いてあるのだろう。いつからこうなっているのだろう。そういう疑問から来る写真が多い。多世代でできたらいいというのは、本当にそう思う。知っている人は教えたいというのもそうだし、色々な視点から考察できると、すごくそれが醍醐味になってくると思



中川智隆さん

う。やり方次第で色々な楽しみ方があるとすごく感じました。

**藤城**  
私も12月5日に参加させていただきました。まず、それぞれが散らばって始まるので、個々の自発性の部分で面白いところが入り口になっているのが、とてもいいなと感じています。色々な歴史的事実が白河には本当にたくさんあると思いますが、にもかかわらず、やはり個人が面白いところを入り口にする、ここまで視点が広がるというのは見えて感動した部分でした。

主体性がちゃんと生きながら、集合的なものとなっていく

先ほど、集団創作という話がありましたが、まず自分が集団創作で出来上がっているのだなとすごく感じたまち歩きでもありました。人間だけでなく草花から水、全ての色々なものも含めての創作なのだと歩きながらすごく感じていました。色々な歩きがあると、いく



勝田隆さん



藤城光さん

らでも掘れるという面白さもあると思います。大きな変化がある中で、個人が主体を持ち続けることが非常に難しいと感じているので、今回、このスゴロクというかたちで、主体性がちゃんと生きながら、集合的なものとなっていくのを見させていただき非常に勉強になりました。ありがとうございます。

**筑波**  
今、まちづくりに寄っちゃっていますけど、私たちは博物館あってこそその学芸員なので、そういった視点で本間さんから、当日、見学させていただいて思いついたこと、何か博物館活動において使えるんじゃないか、こんなことしたらいいというひらめき、アイデアがあれば、我々も共有させていただきたいと思っています。

**本間**  
実はひらめいたことがあったのですが、今日の陸奥さんと大澤さんのお話をお聞きして、あの時のひらめきは安易だったなと感じちゃった(笑)。というのは、これが生まれるまでの背景を今

化財保護法」で言う文化財は、このスゴロク内におそらく1個ぐらいしかないですね。指定文化財じゃないけど地元にとって大事なものはいっぱいあると思うのです。それが意外に、地元では当たり前だから気付かない。よその人の目が入ると、「え、これ何」って、逆に珍しいものだったりするものがある。

地元の人が地元を歩く、地産地消観光というお話がありました。それが非常に大事だけど、そこに違う所の人の目も入ることで、今回も初めて白河を歩く人がいたということですね、それで、また新しい見方ができる。可能性を秘めた取り組みで、すごくいいなと思いました。

「文化財保護法」で指定されている文化財は、本当に指定文化財、あるいは登録文化財に限られていると言っている過ぎですけど、今度の改訂で色々な省庁の折り合いを付ける中で、未指定の文化財も含めて地元の自治体が計画をつくった。おそらく白河市が福島県で最初に「文化財保存活用地域計画」が出来上がると思っています。

あ、なりましたか。そうですか。さすがです



本間宏さん

**筑波**  
主体性がキーワードですね。いい時間になってきていますが、話したい人は。部長さんはどうですか。

まず住んでいる人が楽しむまちを

**唐橋**

我々の業務に中心市街地の活性化がございまして、当然、今までやってきたのですが、誰のため、何のためにやるのかということを持ち下げて考えると、まちなかを元気にするということは、そのまちなかに住んでいる人が楽しむ、そして外から来る人も楽しむまちなのだと理解したところです。

楽しむためにはどうしたらいいのか、白河のまちは小峰城下400年の歴史があり、ほぼ町割りが変わっていない奇跡のまちです。スケール感、生活インフラが全て整っている。そうすると、まず住んでいる人が楽しむまちをはじめに考えてはどうか。楽しむためには、スケール感から考えると歩いて楽しむこと。私自身も歩いてみて、小さな路地裏がたくさんあって、路地裏の空間も興行きがあって、すごくいいなと思った。

そのまち歩きをするため、住んでいる人が楽

しむためのネタを集めなきゃいけない。日常的に楽しむためのネタ。それをつくるためにEMANONの青砥さんに高校生の視点でまち歩きを一緒にやってみませんかかと相談した。そうしたら、青砥さんから県立博物館で面白いことをやるよと。では、乗っかりますということに乗りました。

一方で、まちなかの人はどう考えているのかということ、まちなかの旧奥州街道沿いの通り五町という5町内会、裏三町という裏通りにある3町内会。プラス新蔵というところにある町内会、この九つの町内会でまちづくり懇談会をやりました。何かテーマを持っているわけではなく、色々話を聞いてみました。ところが、歩いている。隣のことを知らない。学区のためかもしれないですが、小さい時から隣町に遊びに行ったりしない。例えば、ちょっとその新蔵に2階建ての建物の一面にバラがすごく咲き誇る。すごくきれいですけど知っていますかと投げ掛けても、誰も知らない。新蔵に住んでいる方はわかりますけど。その懇談会で、住んでいる人のためのマップをつくりませんか、観光客のためのマップではなく、自分たちが日常を楽しむためのマップをつくってませんかと話しました。初めは、みなさん何を言っているかわかってもらえなかったんですけど、説明していくとようやく理解してくれた。じゃあ、やってみるかというところで、今は9町内会とも、やってみようという雰囲気になっています。

来年度、1年かけてマップをつくっていくのですけど、そのマップも1枚つくって終わりで、その情報がどんどん陳腐化しちゃう。マップは紙ベースでアナログですけど、データをインスタ風にしてどんどん集めて、季節

日はお聞きしました。しゃべり過ぎたことへの反省という話がありましたよね。私もいつも反省しています(笑)。しゃべり過ぎる。学芸員は、いかにものに語らせるか、そこが大事じゃないですか。ものから何を感じ取ってもらうか、見た人たちがどう感じるか。よけいな情報をこちらで入れ過ぎているのではないかと反省がある。そういう反省から、これが来たのかとわかったら、安易にまねしちゃいけないなと思っちゃったのです。でも、その時ひらめいたのは、これは、色々なバージョンができるということ。先ほど料理教室にも使えると言われたように。私がぱっとひらめいたのは、私がいるまほろん、文化財センター白河館は5万平米の敷地があるので、来た人が気が付いたもの、こんなふう歩いてみるとまた別の歩き方ができるとか、まほろんマップをつくれると思ったのです。もう一つは近隣に見どころがあるので、1日かけて歩くならばこういうポイントがあるというものもつくれるなと思ったのです。でも、ちょっとそれは安易だったと、今は感じています。

みんなが学芸員的な発想でやれるものにもなる

これが素晴らしいと、今日、あらためて思ったことは、まさに参加者目線でつくられるものだから同じものがなかなかできない。メンバーが変われば違うものになる。ちょっとひねると、みんなが学芸員的な発想でやれるものにもなる。山形の朝日町だったか町民丸ごとと学芸員という取り組みをやっていると思いますが、でっかい立派なミュージアムがなくても地元再発見のことが出来る。さっき「文化財保護法」の改訂の話がありましたけど、「文

ごとに重層化していく。QRコードから、例えば中町界隈の風景写真でも、小ネタでもいいですが、それを、どんどん重ねていって季節ごとに変わる風景を楽しんでもらえる。そんな、ざっくりとしたイメージですけど、そんなことをやろうとしています。

先ほど、陸奥さんの話にあった大阪人の大阪人による大阪人のためのマップ、コミュニティ・ツーリズムに共感しました。やはりそこに住んでいる人が楽しむことがまちづくりの原点。それを日常的に、いかに楽しむか。日常生活でどれだけ小さな感動が重ねられるか。それが、このまちなかに住む一つの理由、生きがいにもなる。

今回、こうした高校生の視点で集めてもらった写真、風景を見ていくと、その方向性としては、大きなネタばかりじゃなくても小さなネタを集めていくのが非常に面白い。先ほど、多世代で語り合うことの大切さ、非常に大変勉強になりました。また来年度からやろうとしていることの裏付け、勇気ももらった。非常にありがたいと感じたところです。



唐橋隆さん

# ROUNDTABLE SHIRAKAWA

筑波  
ありがとうございます。

地元を離れてしまう若い世代に

事務局・川延安直

ありがとうございます。部長から、次年度へのエールもいただいたようで大変心強く思っています。この事業がうまくいかちで落ち着きどころに近づいていて、とてもうれしく思っています。市役所から3名来てくださっているように、まちづくりの視点とあわせて、当初のもくろみは、地元を離れてしまう若い世代に、自分たちの若いころの記憶をいかに持ち続けてもらえるかです。

高校生までに、普通学校で味わえない、こういう面白い大人たちの話をみなさんにどれだけお渡しできるかをぜひ進めたいと思っています。白河が先進的に取り組んでいるまちづくりを通して、ちょっと変な大人がいたなと君たちにずっと思い続けてもらえるとうれしいと思っています。

大澤さんのおっしゃっている、一人一人の記憶の集合体がまちづくりになるのであれば、この若い人たちに、それを持ってもらい、そこがまちづくりのハードにはならないけれども、大きなモチベーションにつながってほしいなと思っています。次年度は、もしかしたらまちづくりじゃないテーマかもしれないです。でも、やはり一人一人の記憶の集積が地域づくりだとすれば、こういう活動は、ぜひ続けていきたいと思っています。その大きな拠点として、このEMANONがある。青砥さんにお渡ししたいと思っています。

青砥

トリだけでもらうって不思議な感じですけど、ありがとうございます。色々な言葉が残っています。記号化に抗うという言葉を二人からいただきました。この本町でEMANONをやっている思いは一緒です。機能だけこのまちを捉えたら、もうちょっと便利な土地もあるかと思うんですけど、高校生が最後にこのまちに住む3年間で、まちの景色を見てから離れてほしいという気持ちでやっています。今日はキーワードがたくさん出ていたのがすごくうれしいです。

定型の語りではなくて、不定型の語りを

定型の語りではなくて、不定型の語りを一人一人が持つてほしい。それを、みんな共有してほしいと思っています。ここをつくりたいと思った2011年から2014年頃は、福島ってこうだよみたいな、まさに記号的に



青砥和希さん

遊びに来させてください。僕もやりに来たいですから、呼んでください。よろしく願います。ありがとうございます。

陸奥

ありがとうございます。色々なところで「フォトスゴロク」をやっているのですが、すごくぶる評判はいいです。汎用性も高いから使い勝手もいい。

大澤さん、青砥さんの話にもつながるかもしれません、社会課題みたいなことを入り口にすると、その段階で、すでに入りたがらない人がでてくるし、難しいなと思っています。そうではなくて、面白がる、楽しむ、遊ぶ。遊べるし、面白いし、楽しいですよ、白河のまちは、十分に。「きみの社会課題は何？」って高校生に聞いて、高校生が「人口減少」って言っちゃうのは、じつは社会課題を感じていないか、ないんですよ。高校生たちは人口増加の時代を知らないですから。ずっと人口減少の時代に生きていくわけ。そういう問いかけをして、そういう答えがでてくる段階で、もう話が概念的で、記号的で、進まなくなってしまう。

「白河のどこがおもしろいと思う？どこが好き？」と、そういうところを入口にする。それも、好きとか強い感情じゃなく「なんとなく気に入った」「なんやこれ？」というちょっとした疑問でいいんです。そういうところを入口に白河のまちと触れていく。それをみんな面白がっていく。スゴロクをつくるというのは面白がるということです。入口は、とてもちっちゃいところなんです。なんかよくわからんみたいな写真が、いっぱい並ぶ。

地域を捉える言葉が、たくさん世の中に溢れていた。僕は大学で写真部だったので、地元のまちの写真を撮って、写真集にしたことがあったのですが、福島のことら辺のまちはそんなに歩行者がいらない。白河はある程度いるけど、いないエリアが多くて、人がいない写真になる。普通に撮っていてもなかなか人の影がない。その前後に人がいるとは、なかなか推測できない写真が多い。それを、東京で並べた時に、「原発事故で人がいないんですね」みたいに言われた。語りが記号化していくというの、こういうことなのかと、その時はそう思わなかったけど、今思い出せばそういう瞬間もあった。

このまちに住んだことがない人が、そう捉えるのは致し方ない部分もある。大阪を受け取る時に、やっぱり太陽の塔から入っちゃうのはしょうがないと思う。その時に、私にとっては、これが白河ですと、このまちで生まれ育った人、今学んでいる人には思っしてほしい、そんな思いでここをつくりました。

一方で、時代も進んでいて、今は学校の授業で総合的な探求の時間とって地域課題を解決しようという授業があります。来年度からは総合的な探求の時間をやります。そこで本場に、地域に出てほしいと思う一方、そこで語られる地域の課題、姿を、誰かが教えるというかたちになっていくと、それは導入されている意味とずれていってしまう。

白河市の課題は何かと、今、白河高校の生徒全員が考えていますけど、みんな「人口減少が課題だと思います」、あるいは「観光客が足りないの、もっと増やしたほうがいいと思います」という語りから入る。地域を語

本当の意味で、白河の高校生、若い人たちと白河のまちが会おう

それが面白いか？と言われると、一つ一つのコンテンツ、写真はすごく弱い。ですけど、それが集合体になって、ものづくりをしていくと面白くなっていく、面白がる。それをどんどん仕掛けていくことで、たぶん、本当の意味で、白河の高校生、若い人たちと白河のまちが会おう。出会う入口になる。そういう入口をいっぱいつくりましょうよ、と。そうでないと、いつまでたっても、大人たちは大きい声で、大きい記号をしゃべっちゃう。高校生や若い人たちがそれにひっぱられて、等身大のまち、自分たちのまち、わがまちを語れなくなってしまう。「きみの主体性を尊重しよう。大人の我々は、一歩引きましょう。という態度を持つておかないと、本当に面白くないまちなりかねないですよ。そういう危険性を大人は重々、感じとっていかないとダメやと思います。その反省は僕自身の反省でもあります。

「フォトスゴロク」を、色々なところでやってほしいです。面白いものになると思っています。それを遠くから見るとかいうか、大人たちは一歩引いて、若い人たち、高校生が「フォトスゴロク」で楽しむところをそっから見ると、そういう当事者性、主体性を尊重する態度が、後になって、私たちを育ててくれたんだ、見守ってくれたんだという気持ちにもなると思う。参加者の子どもたち、若者にとっては、とても面白い、楽しいツールになっていると思いますから、ぜひ、仕掛けていってください。というわけで、ありがとうございます。

ろうという授業、考えるタイミングがある、それはすごくいいことと僕は思っているんですけど、その時の語りが総務省、県庁、県知事とか市長が言っているような語りで地域を捉える必要はないと私は思っています。

そう本人が思った感情を引き出してあげて

そこで重要だなと思ったのは、今日のファシリテーターというキーワード。どうしても先生も含めて、教えなきゃという意識が大人側は強い。僕も「白河、ここ面白いよ」とか、つい言ってしまう。「地域の課題ってこれだよ」とかって言ってしまうのです。

大人から見れば、すごくゆっくりな歩みかもしれないけど、これが面白いんじゃないか、これはなぜこうなっているのだろう、そう本人が思った感情を引き出してあげて、それをもとにみんなで語り合う時間が大事だと大人側で握っておかないと、地域課題を解決しようという時に、このまちにいるのに国が言っているような課題になる。全体の公約的に地域を語ればそうなるのかもしれないですけど、一人一人が思う地域の語り方を持つことが大事だよと、高校生に関わる人たちが共有できるといい。来年度から必修になるタイミングで、今こういうことが起こっているのは、すごくいいことだと思う。参加したみんなが俺はこう思うんだと周りにも主張してくれたらうれしいなと思った今日のラウンドテーブルでした。

筑波

特に、結論を求める場ではないので、私からは特にはないですけども、「フォトスゴロク」

塚本

2時間にわたったラウンドテーブル、ありがとうございました。ポリフォニックな白河が立ち上がるのを見せてもらえたと思いました。オンラインで参加していただいた方からも色々な感想、気付いたことを寄せていただいております。ご紹介しきれず申し訳ありませんが、これにて終了したいと思います。どうも、ありがとうございます。

楽しかったですね。まだまだ、語りたいたいことがあります。やっぱり、面白がるのは大事です。まちを面白がる、愛でることが、そのまちの文化資源、地域資源を磨きます。面白ければ面白がるほど、愛でれば愛でるほど、まちが磨かれていく感じがする。ぜひ、この「フォトスゴロク」をきっかけに磨いていってほしい。僕のアイデアですけど、スゴロクやっていると、もって盛り上がりやすいなと思う。景品を用意するのはどうですか。ゴールに景品がある。と、ここどこの景品を商店街の人から提供してもらおう。飲み屋のビール一杯券とかね(笑)。

陸奥

高校生。高校生です(笑)。

大澤

高校生。ああ、そうか(笑)。楽しく競うというのもあっていい。ゲームが楽しくなるように、仕掛けがあったらいいと思います。そうやって、とにかく面白がるのが、まちが面白くなるきっかけになるはずですよ。また、

ラウンドテーブル

オンライン参加者の声

参加されてる皆さんの視点が面白いです。  
行ったことがないまちですが、まち並みなどが目に浮かぶようです。

こういう場に行政の方々も混じられているのがいいなあという印象です。  
まちづくりと特に高校生以下の若者とのつながりが、  
なかなかつなげられていないとは言えない現状をいわきでは感じています。

まちは人がつくるんですよ。そこに住む人々の多層な価値観で成り立っていると思います。

「なんにもない」と思ってしまう我が故郷も、  
マンションの7階からみた夕焼けとか川のことをふと思い出すことで、  
掘り出すことができるような気がしますね。

ワークショップで参加者が体験していることは、  
自分の視点、感覚、心象の気づきと、それらの他者との共有ですね。

博物館内を市民と歩いて、それぞれの視点と感覚で写真をとって、  
マップ化、スゴロク化すると博物館の再発見と市民との関係がつけられるかもしれませんね。

実際に歩くことで、身の丈に合った発見ができる。

住んでいる人が楽しむためのマップがつけられるというコメント、とても共感できました。  
「主体性」という言葉がキーワードだと感じました。大変共感いたしました。

大人側も高校生ってこうだよねと記号化してみているんじゃないかな？

## なぜ博物館がまちにでるのか

筑波 匡介 (福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

博物館は、たくさんの歴史資料を収蔵している大きな宝箱ですが、博物館に求められる社会的役割はどんどん多様化し、ただの収蔵庫ではいられなくなっています。これからは、博物館もまちづくりに参加するために、開いていく必要があると考えています。ちょうど博物館法の改正も進められており、こうした動きに拍車がかかることでしょう。

このアートワークショップのリリースの過程で、白河では、まちづくりの基本である都市計画マスタープランに学芸員が参加していたと知りました。博物館が大事にしている歴史・文化をまちづくりの基本に据えたのです。白河には、私たちにとって参考にするべきことがたくさんあるのではないかと感じました。

また福島県立博物館は高校生へのアプローチも苦手としていました。そのため、白河で高校生のサードプレイスとして様々な活動を行っているコミュニティ・カフェEMANONに場を提供いただき、一緒に楽しめる何かを探すことにしました。

私たちはまずまち歩きから始めました。小銭で楽しめるおいしいもの。歴史を感じるまち並み。まちの歴史を紡いできた資料館。まちなかには戊辰戦争の傷跡も残り、西軍東軍関わらず各所に吊いのための石碑が残されています。会津で感じる戊辰戦争とは何か温度差があり、歴史の捉え方も場所によって違うことを知ります。何を感じるか人それぞれですが、忘れてはいけないことがまちにはたくさんあることをあらためて知ります。

まちづくりのキーワードは自分事化・主体性です。まちの魅力を自分たちで見つけたい人と同じように、町にもアイデンティティがあるとしたら、白河のアイデンティティは何でしょうか。一つに絞ることはできませんが、私は白河藩主松平定信の「士民共楽(武士や庶民といった身分に関係なく誰もが楽しめる)」という理念がその一つではないかと思っています。この理念は「市民共楽」と漢字を変えて、現在の白河のまちづくりにも受け継がれています。

今回実施したフォトスロクでは、これまでのまちづくりの中では取り上げられなかった、何気ない堀の穴や寂れた看板など、意識しなければ見逃してしまふ、より生活者目線の「小ネタ」に注目が集まりました。フォトスロクには白河に長く住んでいる人でも、初めて白河を訪れた人でも盛り上がることで魅惑力がありました。まさに、白河の目指す姿である「市民共楽」だと感じました。観光客だけでなく、地域の人も楽しめるコンテンツであり、陸奥さんはラウンドテーブルの中で「地産地消の観光」と表現されていました。

これまでの白河市では「歴史・伝統・文化が息づく市民共楽の城下町」というコンセプトのもと、誰もが白河の歴史・伝統・文化を感じながら楽しく回遊し、憩うことができるまちづくりを推進してきました。また、歴史的風致維持向上計画が県内初・東北でも弘前市に次いで2番目となる国認定を受け、歴史的・文化的資源を活用したまちづくりが進められました。その結果、コロナ禍前の白河には年間130万人前後の観光客が訪れ、「小峰城」「南湖公園」「白河ラーメン」「白河関」などの知名度が年々向上していたと感じています。大澤さんがラウンドテーブルの中でお話しし

愛着を持ってまちづくりに参加はできないはず。いきなり主体性をもってまちづくりに参加するのは結構大変ですが、その第一歩として、「まちあるきフォトスロク」は参加者が主体性を持ちながらまちを観察する、とても有効な手段であると気が付きました。ポリフォニックな視点を取り入れられるとても優れた仕組みだと実感しています。

私が福島県立博物館に勤め始めた4年前には、博物館の中にSDGsに関心がある人はほぼいませんでした。それが数年たつて、博物館がSDGsに取り組むことも当たり前になってきました。気候変動や世界の動向も信じられない速度で変化しています。今までの常識が通用しなくなっています。今の世代が身につけるべき「生きる力」も変わってきています。まちづくりもきっとそうです。ソーシャルインクルージョンだつて今や当たり前。今回教えていただいた集合的創造(コレクティブクリエイティビティ)だつて、常識になっていくのかもしれない。私たちはたくさんの人たちとつながって、その時々で教えてもらいながら、学び続けなければいけません。今回も若い方々から、色々気づきを分けてもらいました。一緒にまちを歩き、いっしょに作業することで、博物館活動がまちづくりに参加していくヒントをいただきました。こういった機会を通じて、博物館をアップグレードし続けたいと考えています。たくさん過去の歴史資料や経験・学芸員の知識を、未来をつくる大切な資源としてまちづくりに参加したいと思っています。

ていた「白河と言えば」が定着してきたのだと思います。

今後のまちづくりのキーワードは「市民共楽」と「ウォーカーブル」だと思います。白河にはEMANONをはじめとした「人々が集まる拠点」があり、これまでのまちづくりで磨かれた「多様な歴史・文化・伝統」「フォトスロクで見つけたような「小ネタ」があります。コロナ禍で人々の移動範囲が狭まっている中、地域に住む人が灯台下暗しとなっている地域資源に目を向け、歩きたくなる「ウォーカーブル」なコンテンツづくりが必要だと感じています。マイクロツーリズムよりもさらに範囲を狭めた観光、「ナノツーリズム」と言うのでしょうか。白河市民も観光客として楽しむことができる「市民共楽」「ウォーカーブル」な白河らしいまちづくりを進めていきたいと思っています。

## 「市民共楽」と「ウォーカーブル」なまちづくりを目指して

青戸 悠之介 (白河市建設部まちづくり推進課まちづくり推進係主事)

## フォトスゴロクが地域にもたらす価値

勝田 陸 (コミュニティ・カフェEMANONスタッフ)

今回のワークショップに参加して、様々な発見がありました。私は約1年間白河に住んでいるのですが、まちの景色をじっくり見たり、所々にあるお寺や小さなお店へ行ったりすることもほとんどないため、今回新たな白河の一面に触れられる貴重な機会をいただきました。参加者が自由に色々な写真を撮っていたのですが、私が印象に残っているのは空き家です。白河駅周辺は空き家が多く、それらは日頃何気なく目に入ってもすべて同じような空き家ではありません。しかし、一つ一つの建物をじっくりと見ることで、空き家に対して「なんでこんなかたちなのだろう?」「どうやって使われていたんだろう?」といったような興味が生れました。それは参加していた高校生たちも同様で、それぞれが感じた「なぜ?いつから?」などの疑問から、建物やまち並み、お店の看板や標識などの細かいところまで興味を持っている様子でした。そして、それを参加者同士で話して考察しながら楽しんでいました。市内外に関係なく高校生から大人まで様々な立場の人が参加していたので、普段とは違ったコミュニケーションもたくさん生まれていました。完成したフォトスゴロクはどちらのグループも個性的なものになっていて、遊ぶのもおおいに盛り上がりました。さらに、知らなかったスポットへ行ってみたりという声も多くあり、今後も白河を楽しみきっかけとしてとてもいい機会になっていると感じました。

このまち歩きフォトスゴロクは、若者が地域の良さに触れるという意味でも大きな可能性があると感じています。私は普段高校生と関わっているのですが、高校生は部活や勉強の時間を考えることは、高校教育関係者にとって注目の話題です。令和4年度施行の新学習指導要領を象徴する科目「総合的な探究の時間」。この科目では、地方の公立高校の多くで地域課題の解決と、生徒自身の課題解決を同時に目指す、という目標が掲げられています。新学習指導要領解説の「目標の趣旨」の説明文には、地域と関わる高校生の学びのあり方が示されています。生徒の姿を四つのステップで示している当該箇所を、下記に引用してみようと思います。

「生徒は①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかにになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。」

「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心」は、自分の血縁者に囲まれる家庭でもなく、自分の同世代とだけ関わる学校でもない、地域の中での経験から生まれる可能性が高いものです。自分と同質性の高い人間関係の中で、それを批判的に捉え、変化を与えようとするのは難しい。2000年代生まれの高校生にとって、異質な時代や世代に触れる機会があることで、新しい疑問や関心が浮かび上がってくるはずですが、しかしステップ③の「問題の解決」や、ステップ④であげられる「新たな課題を見付け」ることが、授業の目的として一足飛びに掲げられると、疑問や関心を持つ契機が失われるこ

強で忙しいのに加えて、休みの日は大型チェーン店や市外の都市へ遊びに行くことがほとんどで、白河ならではのものに触れる機会はありません。その点、まち歩きフォトスゴロクではたれでも遊びながら気軽に地域の面白さを知ることができます。スゴロクをつくら満足なのではなく、より違う視点でまちを見てみたいという発展的・継続的な興味にもつながります。また、高校のカリキュラムでは「総合的な探究の時間」という地域課題を取り入れた授業も行われています。若者が地元で真剣に向き合って考えることが必要とされている今、まち歩きスゴロクはその入口としておおいに役立つはずです。今後もこの活動を通して、より多くの人が新たな魅力を発見する機会をつくり続けてほしいと思います。

とがままあります。問題・課題ありきで地域を語り始める時、その語り方は一辺倒になりがちです。少子高齢人口減少、宿泊客数の少なさ、中心市街地の空洞化など。それは、地域を語る目的を「課題を発見し解決すること」と矮小化してしまうがゆえに生まれる画一性です。矮小化された目的が設定された語りの時間は、回答のための口頭試問の時間に変わってしまう恐れがあるのです。

問題や課題は人の数だけあり、正解はありません。ある世代では課題ではないことも、他の世代にとっては課題になります。生まれ持つ価値観やルーツによっても、問題であると感じられる場面は異なるでしょう。地域の課題とは何かという問いは、何を言っても正解になりえるし、何を言っても否定されうる。時に評価される立場である高校生は、失点しない合理的な答え方を選びます。結果的に、既に多くの人が課題として挙げていた事象を説明することが、「わたしにとっての地域とは」という語りとして選択されてしまうのです。

そうして語られる地域らしさと地域の課題は、それがもし地域固有のランドマーク(白河であれば小峰城や南湖公園、白河の関に白河だるま)を取り上げていたとしても、郊外のロードサイドの景色のように画一的です。本来一人ひとり自由な語りをしてよいはずの地域というテーマで、無個性な回答が連続されるとき、地域はもはや若者にとってアイデンティティになり得ないのかもしれない、地域を若者に語るべきは早すぎたかもしれないという結論を導きたくもなりません。

わたしは、地域は一人ひとりの若者にとってアイデンティティの源泉足り得ること、また多様な個人を受け止めてくれる可能性がある

り、それは早すぎることも遅すぎることもない、と考えています。事実、「まち歩きスゴロク」で展開された参加者の地域の語りは、多様な些細な経験の語りの連続でした。どの看板が魅力的か、その裏側にどんなストーリーがあるのか想像した上で、その面白さを伝えたい。白菜をお裾分けしている夫妻が町にいて、それを目の当たりにしたことを伝えたい。これらのエピソードはあまりに些細だと思われるかもしれませんが、ここに私は、地域がもう一度若者のよすがとなる可能性を見出したのです。

スゴロクに選ばれた写真は、有名でもなく保全されているわけでもない地域の記憶と、町を自分の足で歩いた高校生が出会った瞬間の記録です。そこから湧き上がる率直な態度と語り、写真の共有を通じてテーブルの上で、自分だけが立ち会ったかもしれないという瞬間を持つこと。そして、どんな語りでもスゴロクの貴重な一コマとして、地域にまつわるわたしたちの物語になっていくこと。個人の体験が、全員が共有する物語に変化していく過程が、この「まち歩きスゴロク」最大の特徴だと思っています。今回のワークショップから発信されている、どんな些細な経験であってもそれをふりだしにして、自分と自分たちにとっての地域の意味を考え始めてよいのだ、というメッセージ。これが、地域との関係に悩むどこかのまちの高校生のヒントになることを期待しています。

## 地域探究学習とまち歩きスゴロクの価値

青砥 和希 (一般社団法人未来の準備室代表/LMN 実行委員会委員)

# ART WORKSHOP UMISACHI & YAMASACHI

## ■ リサーチ

### 《飯館・いわき》

◎日程：2021年7月29日(木)～31日(土)

◎リサーチ先：

【飯館】

東北大学惑星圏飯館観測所、長泥地区、コメリプロジェクト、認定NPO法人ふくしま再生の会、風と土の家、斎藤次男さんの畑、山田牧場

【いわき】

認定NPO法人いわき放射能市民測定室たちね、農家レストランぶろばんす亭

◎お話を聞きした人：

田尾陽一さん(認定NPO法人ふくしま再生の会理事長)

矢野淳さん(合同会社MARBLING)

松本奈々さん(合同会社MARBLING)

斎藤次男さん(農家)

山田猛史さん(山田牧場主人)

鈴木薫さん(認定NPO法人いわき放射能市民測定室たちね理事)

久保木幸子さん(福島県漁協女性部連絡協議会会長)

永山千代子さん(農家レストランぶろばんす亭代表)

農家レストランぶろばんす亭のみなさん

菊田清貴さん(いわき市三和地区地域おこし協力隊OB)

大越章子(日々の新聞記者)

◎調査者：

平野雅彦(静岡大学人文社会科学部客員教授/LMN 実行委員会委員)

結城正美(青山学院大学文学部教授/LMN 実行委員会委員)

川延安直(福島県立博物館副館長/LMN 実行委員会事務局)

小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

江川トヨ子(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

◎調査・撮影：飯田将茂さん(映像作家)

### 《飯館・南相馬・浪江》

◎日程：2021年8月22日(日)～23日(月)

◎リサーチ先：

【飯館】

長泥地区、コメリプロジェクト、斎藤次男さんの畑、山田牧場

【南相馬・浪江】

ミズアオイ群生地

◎お話を聞きした人：

田尾陽一さん、矢野淳さん、山田猛史さん・山田豊さん

◎調査者：川延安直、小林めぐみ、塚本麻衣子

◎調査・撮影：飯田将茂さん

### 《いわき》

◎日程：2021年10月27日(水)～28日(木)

◎リサーチ先：

小名浜漁港、沼ノ内漁港、農家レストランぶろばんす亭、NPO法人中之作プロジェクト

◎お話を聞きした人：

久保木幸子さん、永山千代子さん、

農家レストランぶろばんす亭のみなさん

坂本政男さん(折戸区長/NPO法人中之作プロジェクト代表)

豊田善幸さん(NPO法人中之作プロジェクト理事)

永瀬マリ子さん(いわき市中之作折戸地区)

◎調査者：平野雅彦、塚本麻衣子

◎調査・撮影：飯田将茂さん

### 《飯館・いわき》

◎日程：2021年12月5日(日)～6日(月)

◎リサーチ先：

【いわき】

さんけい魚店

【飯館】

コメリプロジェクト、斎藤次男さんの畑

◎お話を聞きした人：

松田幸子さん(さんけい魚点三代目)

矢野淳さん、斎藤次男さん

◎調査者：

結城正美、塚本麻衣子

山口拓(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

山本俊(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

◎調査・撮影：飯田将茂さん

### 《いわき》

◎日程：2022年1月16日(日)

◎リサーチ先：廿三夜尊堂(いわき市平)

◎お話を聞きした人：

豊田善幸さん

箱崎義典さん・箱崎テルさん(酒縁てる)

◎調査者：塚本麻衣子

◎調査・撮影：飯田将茂さん

## アートワークショップ

# 海幸・山幸の道

SDGs11:住み続けられるまちづくりを

SDGs12:つくる責任・つかう責任

SDGs14・15:海の豊かさを守ろう・陸の豊かさを守ろう

阿武隈山系からいわき沿岸部。

2011年以降、土地と食の恵みに関する課題に直面した飯館村・いわき市で、

農業・畜産業・漁業、土の再生、レストランや魚店など

「食」に携わる人々を訪ね、リサーチを重ねました。

そこから見えてきたのは、自然環境から人々の営みまで含む

生態系とも言えるものでした。

海や山が育む恵。

それをいただくことで私たちの体はつくり、

考え方がつくり、文化や共同体がつけられていく。

「食」が私たちの「生」に持つ意味、それが2011年、

根底から揺さぶられたことについて、あらためて考える旅でした。

本アートワークショップではこの旅を映像作品という形で記録しました。

# ART WORKSHOP UMISACHI & YAM



## アートワークショップ 海幸・山幸の道

# ワークショップ 海幸・山幸の道から

アートワークショップ「海幸山幸の道」の  
リサーチに携わったメンバーがオンラインで集い、  
映像で振り返りながら、  
リサーチを通して見えてきた土地と食と人の関係、  
食をリサーチすることの意義について、  
言語化し共有するワークショップを行いました。

※p39、41はワークショップで語られたことの抜粋です。

### 映像で記録を残していくこと

委員・平野雅彦

映像表現というのは年齢や言語を超えて、  
理解、共有しやすいという特性がある。それ  
から二つ目には、より現場の様子、空気が伝  
わりやすい。それから三つ目はですね、紙媒  
体の記録に比べて、記述しづらい風景とか、  
場の空気感とか、それから人間関係、あるい  
は着ているもの、持っているもの、映っている車  
いゝんなもので時代性みたいなものが見えて  
きやすい。それから登場人物の語り。文字に  
なると意外とわかりにくいのが語りにくさ  
て言うんですかね、語り辛さみたいなものがそ  
の人から出ている場合があります。そういう  
たものも、映像表現だと残しやすい。何か一拍  
沈黙を置くとかね。

それからもう一つ、これは一番重要だと私は  
思ってるんですけど、方言がそのまま残せる。  
経験的に言えば方言が多く残っている地域と  
いうのは食文化であるとか、あるいは祭り、  
風習であるとか、そういうたものが地域に残  
っていると感ずることが多いです。方言には暮  
らしがそのまま反映されている。例えば、石  
牟礼道子さんの小説『苦海浄土』は方言で語  
られている。そういうものが、実に力がある。  
時代を超えて語りかけてくるものがある。ま  
さにこういうのが方言の力かな。食を取り巻  
く世界観、そういったものを映像に残したら  
どうかという思いがあったって、映像で記録を  
残していくことを試みました。

### 食と土地とのシンプルな つながり、生態系

飯田将茂

今回のリサーチは、本当にどうなるかわか  
らない、まったく最終形が見えないなかで  
進めていったのが一つの特徴です。僕も撮  
りはしてるんだけど、これどうなるんだっ  
て最後までわからないから不安しかなくて。  
ただ結果として、その流れってというのが、  
この映像作品としての流れに直結したとい  
うか。最終的に並べてみると奇跡がかつて  
るような関連性があったり、いくつかはっ  
とするようなところもあって、なるべくし  
てなった。そんなリサーチの姿勢が編集し  
てみてとても印象的でした。

海辺に住んでいけばその海のものを食べると  
か、その生活とか、その地域にいるって  
こと自体が食べるっていう行為と非常に直結  
してる。普段僕が都会で生活をして食べる食  
事とはやっぱり違った食との関係性って  
のが見えてきた気がする。特に操作をするこ  
となく、直に向き合う形でつくるっていう行  
為がそのまま映像になった時に、もしかした  
ら食と土地とのシンプルなつながり、生態系  
って言ってもいいと思うんですけど、そうい  
た空気感みたいなところにつなげられると思  
って、映像をつくりました。

### 手の存在

#### 人間以外のものへの情愛、 ケアの態度

委員・結城正美

大きく二つのことを考えていました。一つは  
手の存在です。いわきの永瀬さん、かつての  
漁は手作業だった、しんどかったと言いな  
がらも誇らしげだったのがすごく印象的でした。  
さんけい魚店三代目の松田幸子さん、店の前

の通りで魚の切り身を、網に並べて、丁寧に  
愛おしそうに返していました。その取材で松  
田さんが話してくれたこと、それを魚を扱う  
彼女の手が雄弁に語ってたなっていうことを  
思い出しました。飯館村の山田牧場の猛史さ  
ん、豊さんの親子。牛に触れる手に牛へのい  
たわりがにじみ出ているように感じました。

農家の斎藤次男さん、除染後に山砂を入れず  
に、牛の糞を堆肥にして深く耕して、土づく  
りをなさってきた。そういう手のかかる土づ  
くりを何代にもわたってしてこられた、そう  
いうブレない姿勢を垣間見たように思います。  
そうした手の存在っていうのは、魚や海や牛  
や土といったその人間以外のものへの情愛、  
ケアの態度を物語っていると思います。

人間のことだけ考えているのではない。これ  
が考えていた二つ目のことです。人間中心じゃ  
ない考え方。これがあの方たちに体現されて  
んだなと思えました。農家とか漁師のみなさん  
は無意識に脱人間中心主義で生きている。一方  
でマーリンズの矢野さんと松本さんはそうい  
う脱人間中心主義的な生き方っていうものに  
意識を向けて、思考と実験を重ねておられる、  
そういうふうに思いました。

### 食べる、いただくっていうことに 参加する

事務局・塚本麻衣子

このリサーチでは、必ずその夜、宿で自分た  
ちで料理をしました。飯館で買ったお野菜と  
か、会津から持ってきた漬物とか、いわき  
で買ったお魚とか、自分たちで料理して食  
べるといふことを繰り返してきたのもこのリ  
サーチの特徴だったと思います。そのこと  
によって私たちも一緒に食べる、いただく

だくっていうことに参加することができて、  
客観的じゃないリサーチにつながったと思  
います。

### ケアと信頼っていうものを 育んできたのが海であり、 土であった

結城

つくり手の現場は持続可能性の先を見て  
なって思ったんです。持続可能性というの  
は人間にとって持続可能な環境を見ている。  
一方、つくり手たちは魚も、土も、牛も人間  
と同じように生きていける居住可能性とい  
うものを見据えているのではないか。つくり  
手たちは獲る魚のことを、それを食べる人の  
ことを常に考えている。自分さえよければ  
いいというんじゃなくて、相手の身になって  
考えている。これは他者をケアする態度に他  
ならないと思うんですけど。ケアするのは自分  
がそういう存在にケアされていると認識して  
いるからで、双方向的なわけです。魚も牛も  
子どもも何もかも命を営む存在と捉えてるか  
ら、ケアし、ケアされるっていう関係が生ま  
れている。そこには信頼関係っていうものも  
築かれている。こういうケアと信頼という  
ものを育んできたのが海であり、土であった。  
だから、土が汚染されたとき人も土も命の基  
盤が崩れてしまった。その土の再生に人と牛  
が一緒になって取り組む、そのことを山田さ  
ん親子は見せてくれているわけです。農家の斎  
藤さんも同じです。いわきと飯館でお話を聞  
いた方々は人間のことだけを考えているので  
ない。牛のことも、魚のことも、土のことも全  
て我がごとなんですよね。だから私と切り離  
せない存在。だから、場所がアイデンティ

◎日時：2022年2月6日(日) 18:00~20:00

◎会場：福島県立博物館ティールーム、オンライン

◎参加者：飯田将茂さん(映像作家)

大越章子さん(日々の新聞記者)

志賀風夏さん(天山文庫管理人)

田尾陽一さん(認定NPO法人ふくしま再生の会理事長)

豊田善幸さん(NPO法人中之作プロジェクト理事)

松本奈々さん(合同会社 MARBLING)

矢野淳さん(合同会社 MARBLING)

平野雅彦(静岡大学教授/LMN 実行委員会委員)

結城正美(青山学院大学教授/LMN 実行委員会委員)

川延安直(福島県立博物館副館長/LMN 実行委員会事務局)

小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

WORKSHOP  
UMISACHI & YAMASACHI

と深く関わっていることを痛感しました。

### それでも人は 食べていかねばならない

平野

水俣、沖縄、バルカン半島と、そして海幸山幸の道からの事例、共通しているのはそれでも人は食べていかねばならないという根底に流れるテーマです。

### 3・11を経験して

大越章子

平野さんがおっしゃった「それでも人は食べていかねばならない」という言葉はすごく響きました。3・11を経験して、震災で水も止まり、それから原発事故もあったので、最初は食べもののストックがないお年寄りの家庭などでは、とてもお食事に困ってしまっただけで、それで区長さんに電話して何か食べものはありませんかと相談されたりしたそうです。また原発事故という部分では、スーパーに行ってもこれを買って食べても大丈夫なのかしらということを見聞きするようになったり、専門家の講演会の時もこれを食べても大丈夫ですか、これは大丈夫ですか、どこで見極めればいいですかという質問が結構ありました。

### 自然と人間

田尾陽一

人間中心主義か自然と人間の共生かという軸で、人間は今明らかに価値観が分かれてきていると思います。それが私が、ふくしま再生の会の会合で、自然と人間の共生について言葉を書いたら、ある人がそれに違和感があ

るって言うんですよ。なぜだかって言ったら、自然と人間の共生についての自然と人間が対立していることが前提になっている。人間の外に自然があると考えている。自然と人間の共生って田尾さんはよく言うけど、それは自然と人間を分けてるんじゃないのかと。俺たちは自然の中にいるんだ。むしろ正確な言葉で言うと自然に内包されている人間、その概念の中でどうするっていうことを考えるんだ。

日本のほとんどの人は人間中心主義に教育されていると僕は思いますね。その軸をずっと底辺まで突き詰めていくってことは大事なことだなと思いますね。

### その場の、その時代においての 理由とか必然性みたいなものがある

矢野淳

マーケティングがやろうとしていることについて、結城さんから新しい言葉を使いただいた気がしています。郷土愛みたいな局所的な話を解放するっていうのは本当にそうだなと思っていきます。伝統を学ぶ、継承するっていうことは何となくわかるんだけど、その視点ってどこか他人事みたいに感じてしまふ瞬間があったり、絶対にそこにはそういうふうにしてきた、その場の、その時代においての理由とか必然性みたいなものがあるのは、飯館村のお爺ちゃんたち、お婆ちゃんたちの話を聞いていてすごく思います。生活の知恵って全部に理由があるんだなって思っています。それって本当にその場で必要だからつくっているものであって、伝統がどうかかっていうのはどこかでこちら側が強調するような感覚みたいなものがあるという

か。だから、今必要とされるものをただつくるとか、理にかなってしているものをつくるっていうことが、そのまま伝統の継承になるんじゃないかなと何となく思っています。そういうことを知れる場所とか感じて学べる場所みたいなものがここにはあるのかなっていうふうに思っています。

### 格好良さ面白さ

松本奈々

コメリプロジェクトで春頃にスタート予定のカフェは、最初は地域の方の交流スペースみたいな感じでオープンしつつ、いずれは村のつくり手の方々が、今はそれが安全かどうかちゃんと実験しながら生産されていると思うんですけど、それを一般の方に普通に商品として消費してもらえものにしていくその過程を担っていくのかなって、お話を聞いて考えてました。農業とか畜産業とかって、近くで見ると本当に面白かったり格好良かったりっていうのがわかるんですけど、そういうところをどう見せたらその格好良さ面白さが外の人たちにも伝わるのか考える空間として、コメリも役割を果たしていけたらいいのかなって思いました。

### 大切につくったものっていうのは やっぱり食べる人 みんなわかります

豊田善幸

小名浜のさんけい魚屋さん、私も親しくさせていたでいる魚屋さんなんですけども、あそこは本当に手間を惜しまずに干物をつくっ

もらえる場所をつくりたいと思ったんです。

「食」っていうのは一番みんなにとって当たり前の行動で、みんなにとっての入口になり得ると思っっているんですね。例えば文化芸術についてとか地方創生とか言われても、それはアンテナを張っている人じゃないと難しいことだと思っんですけど、「食」っていうのは文化でもあって芸術でもあるし、地方創生にもなり得る一番簡単な入口だと思うので、村の魅力とか文化を継承するための場所として食べものを提供する場所が一番だと思っています。川内村の若いお母さんたちは、子どもたちに川内村やこの辺りの地域でとれた農作物ではなくてスーパーで買った農作物を食べさせるんです。それは危険性がない安心なものの子どもに食べさせたいっていうお母さんたち思いからなんですけど、それではやっぱり地域の文化が途絶えてしまうので、川内村の安全なものも絶対的にありますので、そういうものを、食べるきっかけになるような場所をつくっていききたいと思っています。

### ロマンチック街道、国道399号

田尾

ロマンチック街道、国道399号はいわきに通じてるんですね。今は浪江のところだけバリエーションの中になってる。あそこをなんとか開通させると阿武隈山系の山並みのハイウェイ、いわきまで行くというルート。最終的に私が考えているのは帰還困難区域で今全然どうにもならない状態の「こまぎ」、これからどういうふうにしていくのかということ。あと何十年かかるかわからないんですが、少なくとも周辺部分、山並みのほうから何とかして

ています。メヒカリはフライで食べることが多いんですね。あれはやっぱり手間をかけて開いて干すと味がまったく違う。濃い味になって、さらにジュシーになる。そうしたらほうが美味しいから手をかけてるっていう側面は必ずあると思うんですね。鯖のみりん干しも、鯖の腹のところって脂がのってて美味しいんですけども骨が多くて食べにくい。なのでその骨を1本1本ピンセットで取って製品にしているんです。だから、がぶつとかぶりついても骨が一切口の中に入っていない。普通に食べるよりもはるかに美味しくいただくことができる。大切につくったものっていうのはやっぱり食べる人みんなわかります。大切に食べます。粗末にしないし、美味しいタイミングでもうガツガツと一番美味しい時に食べようってみんなわかりますね。骨をとるのは、もともとはさんけいさんのお爺ちゃんか孫に魚嫌いになって欲しくなくてやっただけっていうのがスタートらしいんです。子どもが美味しく食べる。これってもう間違いない文化の未来につながる行為だと思っますので、そういう取り組みを海の人たちはずっとしてきたんだなって。

### みんなにとっての入り口になり得る

志賀風夏

今年の秋からですね、秋風舎という名前が古民家カフェを立ち上げることになりました。地元のを外から来た人に食べてもらおうという側面と、避難地区にもなった川内村や、浜通り地区、福島県で農作物をつくっている方に向けてというふうにあなたがつくったものが消費されているのかっていうのを見て

いく流れをつくっていく必要がある。そのためにはみなさんを惹きつけられる文化。だから今言う食と、そこから星空が綺麗だっていうのが共通していますので、ここを頑張りたいです。

### 複雑なものは複雑なまま

事務局・川延安直

平野さんが「食」はすごく複雑なテーマだっておっしゃっていて、本当に複雑だと思っます。複雑なものは複雑なまま解決できないって、そういう人間の知恵が僕は伝統だと思っます。その複雑さを複雑なままに受け継いでいくってこともたぶん大事なかな。きつとそれって映像でしか今の僕は表現できないんじゃないかなと思っますね。

### ポリフォニックである場所

事務局・小林めぐみ

まさにポリフォニックだねっていう話がかき出してきましたけども、複雑な食のことを、特に福島で話すとても複雑になってしまっ食のことを考えるために、博物館っていうポリフォニックである場所をつくるっていうのが私たちの役割なんだろうと思っっています。いろんな方に関わっていただいて、その場に一緒にいていただいて、それぞれのお考えをお聞きする場をつくり続けるというのが私たちの役割の一つだとこの10年思っっています。



はじめに

アートワークショップ「海幸山幸の道」(以下、海幸山幸)の活動に取り組むにあたり、その目的を以下に定めました。

「地域の自然環境・歴史の集合体である食文化を、アーティスト、研究者、地域の方とともに捉え直し、海の恵み、山の恵みを守る広域的な地域基盤をつくる」。

その上で本論では、博物館がなぜこの課題と向き合うのかを論じます。また、活動の視点、及び評価軸の一つにSDGs(持続可能な開発目標)を据えたことについても検証を試みます。加えて、本取組がワークショップの形式を採用する理由についても、ポリフォニックミュージアムとの関連のなかで明らかにしておきます。

### モノ中心主義から利用者中心主義へ

まず、博物館がなぜこの活動に向き合うのか、更にいえば、向き合わねばならないのでしょうか。その背景には、東日本大震災から11年が経とうとしている現在も未解決のままの諸問題が山積している状況にあって(※)、そこに覆い被さるよう発生した新型コロナウィルスによる食文化存続の危機が立ちだしたことがあります。憲法25条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。(生存権)」ですら危ぶまれるこの危機的状況を坐視することは博物館の存在意義を根底から揺るがす問題に発展しかねません。そう考えると、必然的に博物館には、地域の食文化を調査し、守り、保存し、次代に伝えていかねばならない責務があることが分かって

てきます。少し詳しく検証してみましよう。一つ目は、博物館法の「定義」第二条第一項(育成を含む。以下同じ)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関・・・とあるように、博物館はそれが立地する地域課題と積極的に関わることで法によっても求められていること。二つ目は、博物館が、長きにわたる活動によって地域との信頼関係を築きあげてきた組織であること。三つ目は、同じミュージアムを名乗る美術館(Art Museum)と比べて、地域課題に対して多くのチャネルを有し関わりが深いこと。四つ目は、博物館学(Museum studies)が、ここ数十年で、モノ中心主義から利用者中心主義へとシフトし、対利用者における地域との関係に視点が注がれるようになってきたこと。五つ目は、利用者中心主義へシフトしたことで、地域との対話が生まれ、様々なステークホルダーと関係をつくるなかで、多様な意見と向き合うことが求められるようになったこと。これらを総合すると、文化芸術を基軸しながら、「暮らし」と「産」を支える食をメインテーマに、中長期的に課題と向き合っている組織が博物館以外に存在しえないことが容易に想像されます。無論、大学もその一つとして挙げられますが、総合力でいえば学芸員が中心となって組織されるタスクフォースがフィールドワークを中心とした本取組においてもっとも力を発揮すると見なしていいでしょう。博物館は、人と情報が交わり、そこで新に生み出された価値を循環させていくハブ(結節点)の役割を担っているのです。

### SDGsと文化芸術

次に、海幸山幸において、その取組のひとつの柱、及び成果指標にSDGsの視点が入っていることにも触れておきます。SDGsについては、第25回ICOM国際博物館会議(京都大会2019)(以下、京都大会)で提示され、その決議として、「我々の世界を革新する・持続可能な開発のための2030アジェンダ」が履行されました。それを受けて、京都大会1周年記念シンポジウム「SDGsと博物館」が多様な議論の場となった経緯があります。

ところで近年、SDGsは一部の哲学者や経済思想家からは、単に聞こえの良い施策だと批判的になっていきます。理由の一つには、全体構成が総花的で、あまりにも平易な文脈による記述であるために解釈に幅が出てしまうという批判です(これについては、MDGsミレニアム開発目標等、いくつかの議論の場を経て、SDGsで示された平易な言葉にまで落とし込めたのだとする反論もあります)。しかも一部の企業や団体が、過去の活動にまで、ゴールの○番△番を達成とばかりにSDGsのアイコンを貼り付けるといったお粗末な行為へと走ったことも不信感を煽る要因となりました。他にもあります。Sustainable Development GoalsにおけるDevelopmentは日本語に翻訳する際に、「開発」と訳されたことによるアレルギー反応です。これについては「発展」と訳して、「持続可能な発展目標」としたかどうかという提案も上がっています。あるいは「成長」と訳してみたら思考の地平は果たして変化するのか、という「宿題」もまだわたしたちはやり終えていません。

ここでは、これら批判に加えて筆者の考えるを含めた分母に文化芸術を位置づける。筆者は自らが発した批判を含めても尚、2030年を射程に入れた世界共通のアジェンダとしてSDGsはある程度有効な策ではないかと見ています。上記で挙げた視点1〜3は作業が複雑になる恐れがありますが、4点目は、直ぐにでも実行可能ですが、視野が狭くなるさらいがある。筆者は、5点目に挙げた「文化芸術をSDGsの分母に据える」方法がもっとも有効ではないかと考えます。特定の地域活動において土地固有のテーマを設定しつつ、SDGsと二項対立に仕立て、「超える」対象や「その先へ」として扱う見方もある。しかし結局その先には持続可能な課題は必ず付いて回ります。どの地域においてもジェンダーや不平等、質の高い教育、住み続けられるまち等の問題が厳然としてあることは自明です。それらを生活の基盤である食と切り離して考えることは果たして有効な判断なのかは疑問の残るところです。それよりもSDGsを地域固有の特色や課題と相関関係や入れ子にあると位置づけるのはどうか。これについては、この先の議論につなげて欲しいと考えています。

### ワークショップとポリフォニックミュージアム

最後に、海幸山幸にも「アートワークショップ」の名称がついていることに触れておかなばなりません。

そもそもワークショップの最大の肝は、「答えはひとつではない」というところにあります。参加者全員に同じ教材が配布され、完成品はほぼ同じモノ、という取組に対してワークショップの冠が付いているケースも散見され

SDGsにみる不足を併せて指摘しておきます。ただし、紙幅の関係があり、この場では極入口のみ示すにとどめることとします。さて、改めてSDGsを通読すると、17のゴール、169のターゲット、ターゲットの進捗管理方法(インディケータ)を示したグローバル指標において、「文化芸術」の視点が極めて少ないことがわかります。ゴール11「住みつけられるまちづくり」の11.4「世界文化遺産・自然遺産を保護・保全する」に「文化」の文言があるのみです(11.4のグローバル指標に遺産のタイプ別(文化、自然)の記述あり)。

しかも「芸術」の文言は一つもありません。文化芸術は果たして、持続可能な社会において必要なものなのでしょうか。否。わたしたちは日々多様な文化芸術を嗜み、その恩恵によって生かされ続けてきた存在です。これに不足しては、文化芸術に関わる記述があまりにも不足しているというのが筆者の捉え方です。では、どのような解決方法が考えられるのか。特にここでは博物館の存在に大きく関わる文化芸術を現行のSDGsにどのように位置づけるのか、そのいくつかの方向性を示しておくことにします。

1点目は、SDGsの現行17のゴールに、文化芸術の役割を担う新たなゴールを設定する。2点目は、ゴール1〜16までの総括として位置づけられている17「パートナーシップで目標を達成しよう」に新たなターゲットとして文化芸術の視点を追記する。3点目は、SDGsを批判的に見て新たな未来指標を策定する。4点目は、博物館が地域にあって、各地域特有の課題に対して現行のSDGsに独自の課題を書き加える。5点目には、17のゴール、169のターゲット、グローバル指標すべてです。ただし、参加者が同じテーマに向かいながらも、それでも同じモノ、同じ意見は一つとしてないところこそ、本来の学びがあり、「学び直し(Lifelong Learning)」があるのではないのでしょうか。本取組では、そこに加えてアートの手法を取り入れ「アートワークショップ」とすることで、博物館によって膨大に蓄積されてきた方法や創意工夫、先人の知恵によって新に生み出された価値をもって課題解決の糸口を模索する、これら一連の活動と思想の総体をもって「ポリフォニックミュージアム」と呼ぶのだと筆者は理解しています。これらを踏まえて、本報告がたんに読み物としてではなく、「使える記録集」となることを切に願っています。

しりえに、情緒的になることを承知の上で、作家・石牟礼道子の句を添えておきます。闇の中草の小径は花あかり(石牟礼道子全句集「石風社、2020」)。

それでも尚、未来を信じて前を向いていきたい。皆で

※朝日新聞が2021年末に行った調査。岩手、宮城、福島3県のうち、津波被害を受けた沿岸部や原発事故で避難指示が出された自治体の計42市町村にアンケートを実施。国、県、市町村が指定する無形民俗文化財276件のうち17件が震災の影響で休止していたと報告。内訳は岩手県が3件、宮城県が6件、福島県が8件だった。存続が危機とする無形民俗文化財として福島県の飯沼の田植踊(14地区のうち1地区を除いて休止)、いわき市の井上神楽等が挙げられる(朝日新聞「朝刊」2022.2.24)。



# 総括と対話

**事務局・小林めぐみ**  
今日はご参加いただきありがとうございます。ライフミュージアムネットワーク実行委員会主催のラウンドテーブル「土地を知るには食から」を始めます。本日司会をさせていただきます。まずは福島県立博物館学芸員の小林と申します。本日は会津の中でも雪深い昭和村にお邪魔して、発表者のお一人松尾さんがお勤めのからむし工芸博物館と道の駅からむし織の里しゅうわから、昭和村の温かい雰囲気の中でお送りしたいと思っておりましたが、残念ながらコロナの影響で完全オンラインになってしまいました。お申し込みをいただいていたみなさまには申し訳ありませんし、私たちも残念ですが、今日はこの形でお送りします。

今日ご登壇いただくみなさんをご紹介します。お一人目、森枝卓士先生です。どうぞよろしくお願います。続きまして、森枝先生と対談いただきます赤坂憲雄先生です。よろしくお願いたします。そのお二人の対談の前に二つ報告がございます。一つ目が本ラウンドテーブルの主催、ライフミュージアムネットワーク実行委員会が今年度行った食をテーマにしたリサーチの報告をさせていただきます。福島県立博物館学芸員の塚本さんの報告です。塚本さんの次に報告いただきますのが、昭和村からむし工芸博物館学芸員松尾さんからの報告です。

この事業の主催、ライフミュージアムネットワーク実行委員会は、4年目を迎える実行委員会です。県立博物館が事務局で様々な方に参加していただいています。2011年以降、私たちがあらためて大事にしたいのは、いかに気がついた「いのち」と「くらし」をどのように大事にしていけるか、ミュージアムのネットワークの中でみなさんと考えていき

## ラウンドテーブル

# 土地を知るには食から

その土地の気候風土に育まれて得られる食材は、その土地そのものです。そしてそれら土地の恵みの良さを引き出しながらつくられた料理は、その土地とそこで暮らす人の個性を生み出すものです。私たちの身体と心は、その土地から生まれる食べ物でできています。その土地を知ろうと思ったら、食を調べること。

世界各地で食のリサーチを行っている写真家でジャーナリストの森枝卓士さん、奥会津でのリサーチを重ねて土地の姿を丁寧にとらえようとしている民俗学者の赤坂憲雄さんをお招きし、食のリサーチの意義と醍醐味をお聞きしました。また、当実行委員会が行ったアートワークショップ「海幸山幸の道」と、昭和村が実施した明治時代と昭和時代の婚礼料理の再現についての報告もあわせて行い、それぞれから見えてきた、浜通り、中通り、会津の食の歴史と現在について共有しました。

- ◎日時：2022年2月5日(土) 13:30~16:00
  - ◎会場：福島県立博物館ティールーム、オンライン
  - ◎講師：森枝卓士さん(写真家/ジャーナリスト/大正大学客員教授)  
赤坂憲雄さん(民俗学者/学習院大学教授/元福島県立博物館長)
  - ◎報告：塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)  
松尾悠亮さん(昭和村からむし工芸博物館学芸員)
- ※参加者は、オンラインでご参加いただきました。

**森枝卓士**  
高校のころ、アメリカ人写真家ユージン・スミスと出会い、写真家を志す。国際基督教大学で文化人類学を学び、以後、アジアをはじめ、世界各地を歩き、写真・文章を新聞・雑誌に発表。おもな著書に「食の冒険地図」「世界の食事おもしろ図鑑―食べて、歩いて、見た食文化」「考える胃袋―食文化探検紀行」などがある。

**赤坂憲雄**  
東北芸術工科大学、東北文化研究センター長、福島県立博物館長などを歴任。1999年「東北学」を創刊。2007年「岡本太郎が見た日本」でドゥマゴ文学賞受賞。2011年以降、東北の被災地を歩き、民俗、文化、アートなどの文脈で震災の記憶の記録の重要性を発信している。著書に「性食考」など多数。

たいと思ひ、始めた事業です。4年目に事業名を新たにポリフォニックミュージアムとして活動しています。シンフォニーでもハーモニーでもなくポリフォニック。様々な音がそのままの状態で共存できる、そんな空間、ポリフォニックスペースにミュージアムはなるべきではないかと、数年前に京都で開催されたICOM京都というミュージアムの世界大会で語られました。私たちはその言葉に共感し、互いの考えを共有しあうことが大事であると考えます。そんな場にミュージアムがなり、そしてミュージアムだけではなく色々な場所がポリフォニックスペースの機能を持てたら、議論、共有が深まり、広がって社会がもうちょっと前に進めたいのです。とはいかぬ。前置きが長くなりましたが、ポリフォニックミュージアム事業、その中の一つが今日ご紹介する福島県中通りの飯館村、浜通りのいわき市で行なってきた活動です。それについて塚本さんからご報告します。その次に会津地方の昭和村での食をテーマにした活動を松尾さんからご報告いただきます。浜、中、会津、福島県の食の活動に関するお二人の報告の後、世界各地で食をテーマにしたリサーチされてきた森枝先生から「食を訪ねて、食文化リサーチの醍醐味」というテーマでお話しいただきます。最後に報告と森枝先生のお話を受けて、森枝先生と赤坂先生で「土地を知るには食から」というテーマでお話しいただきます。

**海幸山幸の道から見えてきたこと**  
事務局・塚本麻衣子  
では「アートワークショップ『海幸・山幸の道』から見えてきたこと」についてご報告させて

いただきます。こちらは今年度行った四つのアートワークショップのうちのひとつで、海の幸や山の幸、食べ物をテーマにしたリサーチを半年ぐらいいってきました。

阿武隈山系の飯館村、川内村、葛尾村からいわき市に至る国道399号線のことを、震災以前からあぶくまロマンチック街道と称しておりまして、高地で星空がきれい、食べ物が美味しい、そういう土地をつないで、市町村で連携して、いこうという動きがありました。東日本大震災を受けて、阿武隈山地は食べ物をつくる土そのものに大きな打撃を受けました。また海の方、いわき市も放射能汚染水の問題がありました。海の幸を生む海にとっても大きな影響を受けました。そうした土地を訪ね、今まで何を食べてこられたか、何をつくってどんな料理をして、どういう時にそれを食べたのかというお話を聞いて歩くりサーチをしました。もちろん震災以前、以降の変化についてお聞きすることがありますが、それ以前に言いますか、そこで培われてきた食文化の豊かなありようが見えてきたリサーチだったと思っております。それが失われた、失われかけてしまったこと、そこから再生していこうとしていることも見えてきたリサーチだったと思っております。

**土は人間だけのものではない**  
まず、飯館村です。震災後、一時期全村避難になった土地でもあります。今は人々が戻って来られていますが、一部はまだ帰還困難区域に指定されています。先ほどのあぶくまロマンチック街道、国道399号線はまだ通行止めになっています。画面に写っているのはNPO法人ふくしま再生の会の代表田尾さんです。飯館村で土地の再生、産業の再生に取り組んでいらっしゃいます。飯館村では除染で土の表面を剥き取り、そこに山砂を入れて放射線を下げるというところを行ってました。そうしたことで、ずっと耕してきた土の豊かさが失われてしまった。さらに、除染して剥いた土を中間貯蔵施設に埋めて、蓋をして、それで人間が暮らしている環境を担保している状況です。田尾さんは、土は人間だけのものではない、そこに住んでいる細菌、ミミズ、微生物も含めて考えなければならぬ、そういうものが耕すことで土ができて、そこで食べ物が生まれてくる。そこまで含めて考えるのが本場の再生だとおっしゃり、自然と人間が共生していける社会を創ることに活動されておられます。

飯館村では今言ったように除染作業を行ったことで、作物を作る豊かな土が失われてしまった。かつて田んぼだったところに、今は代替としてソーラーパネルが全面に広がっています。斎藤さんという畑を営んでおられる方がいらっしゃる。除染はするけれど、山砂を入れることは何ともしたくない。除染した後に堆肥を入れ、土を鋤き、空気を入れて耕すことで豊かな土を再生するように作り続けた方で、その畑がこちらです。とても豊かな実りと言いますか、青々と茂って食べ物も本当に大きく育っている畑でした。震災前から深く耕していたので、今はほぼ震災前の状態に戻ったと言います。黒々とした栄養のある土が今飯館でできています。そんな畑です。斎藤さんは土づくりに取り組んでいらしゃるのですが、今、若手のアーティストさんに畑を開放するというところもされています。かぼちゃのなりかけの頃に動物の形の型にはめて、かぼちゃが大きくなるとその動物型のかぼ

# ROUNDTABLE LAND and FOOD

ちやができるというものをつくっている方がいらつしやる。ですが、かぼちやが成長しすぎて、この型を破って壊してしまうぐらいこの畑は豊かな土を取り戻しています。

## 暮らしがこの体をつくっている

飯館は寒い土地柄で、お米はなかなか取れにくいので、牛を育てる。飯館牛がブランド牛として知られていました。山田牧場の山田さん親子は、避難解除後いち早く飯館に戻り牧場を再開されました。工場のような建物の中で牛を育てる牧場と、水田跡地への放牧、こうした外で放し飼いにしながら牛を育てる牧場と三つ宮んでおられます。やはりこういう放し飼いで、足腰を強くして、土から取り入れるミネラル分を与えた牛たちのほうがはるかに健康でのびのび



しているとおっしゃっていました。この海幸、山幸のアートワークショップで撮影に入ってくださいている映像作家の飯田さんが衝撃を受けていたのが、牛を育てている山田さんのお父さんの頑健な身体つきです。カ土さんみたいにガツツリした体をしている。牛を育てるという生業にずっと携わってこられた方の暮らしがこの体をつくっている。食べる、つくることに携わることが身体をつくり上げているということが、ダイレクトに感じられました。

## 最先端の課題を抱えている場所

その飯館村で、今、若い方が、色々な実験をする場所をつくらうということで、ホームセンターコマリの跡地、今はガランとしているところですけれど、そこに色々な活動する方々



をお招きしています。大学の研究者、企業の方、アーティスト、色々な立場、考え方の人がここで一緒に土の再生、農業の再生を考える場所をつくらうとしています。

飯館村で起こったことは、ここだけの問題ではなくて、どこにでも起こり得る問題で、日本の最先端の課題を抱えている場所なので、ここで再生に取り組む実験をすることが日本の新しい田舎、未来の田舎の姿をつくることになるのではないかと、このように若い方が積極的に頑張っている。それも飯館という場所の今あり様の一つです。

このリサーチはずっと珍道中で、ホテルではなくゲストハウスのような場所によく泊まらせていただきました。そこでその土地のものを買ってきて、そこで料理して食べるということをずっと繰り返してきました。それもこ



のリサーチの象徴的なことだったと思います。飯館で取材した畑の方からいただいたトマトと飯館の道の駅で買った野菜でつくった煮物。いわきの魚屋さんで買ったお魚。その土地の食材で、自分たちでつくって食べる。そこでまた食べるということについて考えるというリサーチでした。

## みんなで集まって お話ししながらつくることが

いわきと言うと海のイメージが強いのですが、いわき市は合併したとても大きな市で、山沿いは本当に山深い土地です。いわきの上三坂という山の奥で農家レストランを営んでいらつしやるみなさんにお話を聞きました。みなさん自分の畑で作物を育てておられ、それをお客様に提供する。それが何より楽しい、みんなで集まってお話ししながらつくることが何より楽しいとおっしゃっておられました。今は残念ながらコロナで休業しておられます。みなさん震災の時よりもコロナの方が大きな問題だとおっしゃっておられました。コロナでレストランはお休みですけど、みなさんが育てているかぼちやで餡をつくって皮で包んだかぼちや饅頭を商品として売り出しています。大人気で、かぼちやがなくなると去年は売り切れで終わってしまったとお話しされていました。ラグビーボールのようなかぼちやと丸いかぼちや、両方使うことで水分がちょうどいい餡ができるそうです。そして、かぼちやの苗、種を毎年買ってきて育てるのは費用がかかって仕方ない。そこで、前の年のかぼちやから種を採って、それを植えて次の



# ROUNDTABLE LAND and FOOD

年のかぼちゃにする。そうすると、かぼちゃは自然交配だから何の品種かわからないとお母さんたちは笑っていました。それが上三坂という土地のかぼちゃになっていくのだろうと思います。そして、これも美味しそうだったのが小豆です。「むすめきたか」という名で上三坂の伝統野菜です。とても変わった名前前で、嫁に行った娘さんが急に実家に帰ってきた時にすぐに出せるように早く炊ける小豆の種類だそうです。その「むすめきたか」という不思議な名前の小豆でお菓子をつくって道の駅で販売していらっしゃいます。お母さんたちは、集まって話して、みんなで育てたもので食べ物をつくって、それを食べてもらえることが本当にうれしいとおっしゃっています。これは飯館村の田尾さんからもお聞きしましたが、生きがい農業、つくることそのものが生きる糧になる、そういうお母さんたちの暮らし方を拝見しました。柏餅とかかぼちゃの餡、本当に美味しかったです。ホクホクしていました。

## ずっと海と付き合ってきた方々は

海のお話もしていきたいと思います。いわきでは、福島県漁協の女性部会長をしていらっしゃる久保木さんに密着して、久保木家の船を取材させていただきました。昭政丸という船で震災時のエピソードもたくさんお聞かせいただきました。久保木さんのお家はお父さん、息子さん、お孫さんの3世代が船に乗っていらっしゃって、港には久保木さんと娘さん、息子さんのお嫁さんが待っていて、水揚げされたらトラックに積んで港に持って行ってセリにかける。船が家族を乗せる家みたいな感じ、船が家族を運んでいる、そんな共同体が感じられるのだらうと思いました。



られていました。この時の調査は2日間にわたりましたが、最初の日は波が高く船が出ないと言われて、それでも港に行くと船の写真を撮らせていただきました。次の日はどうかと相談している我々の目には同じように波が高く、うねっていて、風も強くて明日も船は出ないかと諦めかけていました。けれども海を見ていたお父さんたちや漁協の方が明日は大丈夫とすごい確信をもっておっしゃる。我々の目には同じ荒れた海に見えないですが、そこで暮らしている、ずっと海と付き合ってきた方々は肌感覚で明日は大丈夫と言える確信があるがすごいと思いました。ずっとそこで暮らしてきたからこそその見る、

り身を食べちゃいけない、美味しいお魚を食べて欲しいと、近くの幼稚園にお魚を提供されていらっしゃるということもお聞きしました。地域との関係を築いているお魚屋さんです。

## 食べることで何なのか

最後に、食べることはどういうことなのだろうと考えさせられた日があったので、それについて話して終わりたいと思います。1月16日に、いわきの中之作という海が目の前というところで、アンコウの吊るし切りをして鍋にして食べるというイベントが開かれると聞きまして、こちらに取材に行くことになっていました。ところがその日未明にトンガで火山の爆発があった影響で津波警報が出され、いわきの沿岸部に避難指示が発令されるといっても大変なことが起こった。そういった状況の中で、このイベントも中止かという話もあったのですけれど、食べ物のイベントのために用意した食材を無駄にすることはしたくないということで、場所を内陸の平に移して開催されました。参加を予定されていた方々の中には、そういった事情で参加できなくなった方もいらっしゃったので、SNSで広く呼びかけて、無償でお鍋を提供するという会が開かれました。大変美味しかったです。調理している間に、みんながなんとはなしに鍋の周りに集まって鍋ができるのを待っています。津波で避難指示が出されたというのはいわきにとつてやはり特別な意味を持っていて、何とも言えないちょっとザワザワした雰囲気を感じられました。そんな中、お鍋を囲んで待っている間、ぼつぼつと誰ともなく、あのお堂のお隣に昔映画館があったよね、あの映画見

たよね、私も高校生の時に行ったわ、なんて語りが生まれてきました。炊き出しのような雰囲気があつて、食べているうちにみんなでそういうことを語り合う場が自然と広がっていくのがとても印象深かったです。食べることで何なのかを考ました。食べることで、その場を共有すること、経験を共有すること、記憶を共有すること、そういう儀式のような神聖な雰囲気をこのイベントでは感じることがあった。特別な日だったと思います。

## 一つの生態系のようなもの

こういうリサーチを振り返って、その土地の食べ物とその人の体をつくって、その人の考え方をつくって、さらに共同体をつくっていくという一つの生態系のようなものが見えてきたかなと思いました。今日のイベントのタイトルでもあります。「土地を知るには食から」というのは本当にその通りだと実感したりサーチでした。私からの報告はここで終えさせていただきます。ありがとうございました。

## 小林

はい、塚本さんありがとうございます。震災直後に飯館村の方たちの仮設住宅に行った時、そこのおばあさまと集会所で話していて、自分で野菜をつくってお孫さんに食べさせるのが楽しかったということをお聞きしました。さつきの生きがいですよ、それが出来なくて辛くて自殺しようかと、そのぐらい辛かったとお聞きした。何かを生み出して、誰かに渡して食べてもらう、そのことがどんなに大事なことか。塚本さんの話を聞いていてあらためて思い出しました。それではお二人目の報告です。昭和村から松尾さんにご報告いただきます。昭和村の婚礼料理の再現についてです。松尾さんよろしくお願います。

## 昭和村の明治・昭和時代の 婚礼料理再現について

### 松尾悠亮

私からは昭和村で行った明治、昭和時代の婚礼料理の再現についてお話をいたします。少

地域との関係を築いている  
お魚屋さん  
いわきでは魚屋さんにもうかがいました。お店の前で干物をつくっていらっしゃいます。丁寧に骨を抜いて一尾一尾美しくヒカビカの干物につくっていらっしゃいました。美味しそうですね。で、このさんけい魚店さんは近くに産婦人科さんがあって、女性たちが出産という大きな仕事をなされた時の夕ご飯としてお魚を提供されている。いわきの子どもたちがどこで獲れたかわからないような冷凍のす

い



# ROUNDTABLE LAND and FOOD

し昭和村のことについても説明させていただきました。昭和2年に二つの村が合併して出来ました。だいたいの現在の人口は1200人くらいで会津若松市の南部の山間に位置している村で、現在はカヌミソウやカラムシ、これは越後上布や小千谷縮といった織物の原料になる植物、そういったもので有名な場所になっています。そこを確認して、今日は主に三つの内容で発表させていただきます。最初に昭和村で行った婚礼料理の再現事業についてです。二つ目は再現した明治時代と昭和時代の料理を実際に見ていただきます。そして、三番目に今回の事業を通して見えてきたこと、この3点のことでお話ししようかなと思っています。

今回の婚礼料理の再現は昭和村民俗文化交流事業の一環として行いました。福島県地域創生総合支援事業、サポート事業で、令和2年度から行なっているものです。昨年度令和2年度に関しては、江戸時代の巡見使という將軍の代わりごとに全国各地を視察した江戸幕府の役人が、江戸時代の天明年間に全国を巡回した際、その巡検使に提供された料理の再現を行っています。これにつきましては報告書を作成しまして、からむし工芸博物館のホームページからダウンロードできるようなっていますので(※)、ご興味のある方がいらっしゃいましたらご覧ください。

## 昭和村の文化の掘り起こし

令和3年度の事業として婚礼料理の再現を行いました。目的は昭和村の文化の掘り起こしとして昔の料理の再現を行うというもので、料理の再現を通して昭和村民に、昭和村の昔の文化



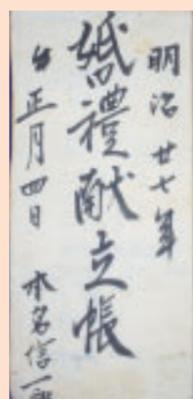
再現から見えてきたことについて説明させていただきます。昭和村では昭和40年代頃まで普通の結婚式は各自の自宅で行われるのが一般的だったと言われています。それが、昭和44年に生活改善センターができたことで、次第にこの生活改善センターで行われるようになっていったと言われています。こうした変化していく結婚式の慣習が今回の聞き取りを通してよくわかってきました。聞き取りで教えていただいたことで特に印象的だったことは、昔、個人の自宅で行われていた結婚式の時は、親類同士の助け合いで行われていた。現在では結婚式が村外の式場で行われるのが一般的。その分、昔のような準備、協力的な負担は減った代わりに金銭面の負担が現在ではかかる。そういうことはよく聞き取りの時に色々な方がおっしゃっていました。

## 再現から見えてきたこと



## 128年前の結婚式で出された料理

では、ここから実際に再現した料理を見ていただきます。献立帳の写真です。婚礼献立帳、明治27年1月4日に行われた結婚式の献立帳です。この昭和村ですが、会津地域は冬の間、雪深いところで、今日も昭和村は雪が降っていますが、農閑期、冬の間は農作業がなかなか



もう一つ、今回再現できたことで良かったなと思っていることですが、お吸い物が昔は独特だった。昭和村が独特なのかちょっとわからないので、奥会津の方がいらっしゃいましたら教えていただきたいです。昔、昭和村で行われていた結婚式で出されたお吸い物は、汁だけ飲んで具は残す習慣があったそうです。具は先ほどの写真でお見せしましたが、会場主が用意したワラツトに入れて持ち帰る。持ち帰ったお吸い物の具は結婚式の翌日に隣近所や自分の親類に披露する習慣があった。これはツトピラキと言っているそうです。そういったことが行われていたそう、ワラツトの再現なども今回できました。

続きまして二つ目ですが、この大豆揚げ、献立帳によって「豆揚」「八寸」と書かれているものが、こちらの写真のもので、これを再現できたのも大きかった。蕎麦粉、米粉を水に溶いて丸く型取ったものに豆を埋め込んで、寿とか祝といった字を書いて、油で揚げるものだったそうです。村の色々な方にお話をうかがったのですが、実際の具体的な献立の内容は覚えていないけど、これだけは覚えているという方が沢山いらっしゃいました。そうした料理の再現が出来たのも良かったと思っています。

再現から見えてきたことの三番目になります。昔の結婚式では小笠原流礼法を学んだ料理人たちが活躍していた。今回、小笠原流礼法に関係する資料をたくさん調査の過程で見つけることができて、昭和村では昭和初期まで小笠原流礼法の伝授が行われていたことなどもわかった。少し料



理とは離れてしまっていますが、それも今回の事業の成果の一つと言えます。

まとめになりますが、今回の事業を通して昭和村の婚礼にまつわる料理や環境について再発見することができました。そして、先ほど取り上げた大豆揚げのような昭和村のみならずの記憶に残っていた料理を再現できたことは一つの成果ではないかと思っています。私からの発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

### 小林

松尾さんありがとうございます。婚礼のお料理はその土地でつくったものだけではなく他の土地との交流も見せてくれる。時々一番良いものがこの時とはかりに用意される。婚礼料理を調べることで色々なことが見えてくると思いました。

ご意見、ご質問ある方はチャットでいただければ、みなさんと共有します。よろしかったらご記入ください。

では、後半を始めます。ここからは森枝先生にご講演いただきます。森枝卓土さんの「食を訪ねて、食文化リサーチの醍醐味」、私も楽しみにしております。それでは森枝先生よろしくお願いたします。

## 食を訪ねて、食文化リサーチの醍醐味

### 森枝卓土

本当はお邪魔するのを楽しみにしていました。残念ですけどまたあらためてということ。塚本さんの調査にも一緒に行きたかったな。

# ROUNDTABLE LAND and FOOD

## ユージン・スミスという 偉い写真家

ともあれ私の自己紹介から。役者のジョニー・デップ、ハリウッドのスターがユージン・スミスという写真家を演じた「MINAMATA」という映画。この映画の原作となった「MINAMATA」は、このことが私に大きな影響を与えた。ユージン・スミスは「楽園への歩み」というタイトルの写真がすごく有名だけれど、水俣病の胎児性患者の子を風呂に入れていた写真でも有名な人です。この写真の左側がご本人、右が20歳ぐらいの私です。ユージンの「MINAMATA」という本の中で、水俣に住んで間もない頃、ある日、私たちの家を訪ねてきた高校生と知り合いになったことがある云々、ジャーナリスト志望の高校生が云々というのが高校生の頃の私の話。私は水俣に生まれ育ちました。誰か写真家を書いていましたけれど、だいたいカメラマンになるやつは星が好んで天体写真を撮っている、鉄道オタクで鉄道写真を撮っている、あと一つはアイドルが



好きで望遠レンズを買ったみたいなのやつだ。思えばそういうのをやってきた。そういう高校生のところにユージン・スミスという偉い写真家が来ちゃったもんで、付いて回ってその手伝いみたいなことをしているうちにズルズルと写真の方に行っちゃった。

早速もう脱線ですが、私が関わっている大正大学で出している雑誌「地域人」の特集で水俣の話を取り上げました。後で赤坂先生とこういう話もしたいと思っています。食の話以前に、水俣から少し山の中に入ったところに曾木の滝という滝があって、ここに発電所がつくられた。要するにそこに発電所をつくって、電気を使う産業を何か起こそうということで水俣に工場ができた。窒素の肥料をつくる工場。そこから水俣に人が集まって、石牟礼道子さんみたいに、うちの親もそうでしたけれど、天草から仕事があるってことで水俣にやってきた。工場が仕事が増えたので人が集まってきた。その末に水俣病が起こったという話なのです。同じ雑誌でエネルギー問題をやった時に、「復興論」を書いた小松理彦



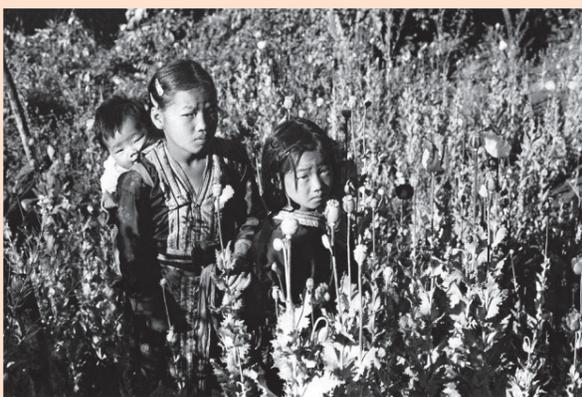
んに福島のエネルギー街道みたいなところを案内してもらったことがある。本当に福島の問題と水俣の話は相似形、つながることが多い。ちよつと脱線ですが、そういう話もできればいいな。

何を食べているか  
というところから勉強しないと、  
その人たちの暮らしなんて  
わからない

私は写真家になろうと思って、大学生の頃、アルバイトしてお金を貯めてはあちこちに行きました。インドとか、韓国とか旅をしては写真を撮る、そんなことをずっとやってきた。マイナーな雑誌に写真がちょこちょこ売れたりしたものですから、これで食べていけるという甘い考えを抱いて、就職もせずカンボジアの内戦の最中、タイに住み着きました。写真は1980年ぐらい、この写真の細いのが私、左側にいるのは10何歳かのボルボト派の少年兵です。こんな写真を撮って回っていました。これが何かわかりますか。ケシ、アヘンのもとで、これからヘロインにする。ヘロイン中毒、カンボジア難民のレポートとかをやっていた。そういうことをやっている中で先輩のジャー



ナリストたちと、だいたい戦争をやっているようなところでは、国境近くの安宿に泊まって、屋台でその土地の料理を食べるしかない。そういうことをやっているうちにその人たちが何を食べているか、そういう基本的なこと知らないで偉そうに国際政治がどうこうみたいなことはかり言っていたって、こういうことを思うようになった。特にそれを感じるようになったのがこの写真を撮った時だったので、これはタイ国境から小一時間ぐらい歩いた先だったと思いますけれど、道を外したら地雷があるようなところ。死体がゴロゴロ転がっているようなところを抜けて行って、そこで何をしているかと思ったら、ボルボト派のゲリラが麵をつくっているのです。ゲリラが戦いに行くのに、行った先でお米を炊いたりしたら弾が飛んできます。基地で麵をつくって、



それを持って行って習りながら戦っている。そういうのを見ながら、戦争していても飯は食うということ、何を食べているかということ、暮らしてわかんないと思われた。それからいわゆるニュース的な取材じゃなく、今は東京のデパートの地下に生春巻きみたいなやつが普通にありますし、ガバオはタイじゃガイカバオと言うけど、そういう料理が普通にデパートで売られるようになっていけれど、当時はそういうものは全く知られていなかったから、彼らが何を食べているかから勉強しようと思ったのがきっかけ。さっきのは、押し出し式の麺で韓国のお冷と同じ作り方ですね。

例えばカレー、とにかくひたすらカレーを食べて回るのが最初でした。インドならインドで、どうにかしてその土地の人と知り合いになって家を訪ねて料理を見せてもらう。その前と一緒に市場に行ってスパイスを買うところから始めて、ずつついて回って、そのスパイスをブレンドするというところからカレーづくりをずっと見て回る。もちろん食べさせてもらう。ミャンマーでカレーをつくっているところを見せてもらうと、スパイスは色々なものをブレンドしていく。例えば、チキンのカレーだったら、これとこれを合わせて、野菜のなんとかがカレーだったらこういうのを合わせて、順列組み合わせみたいに変わっていく。それを一回一回擦り潰していく。色々なところを訪ねてキッチンを見せてもらうと、そのような文化圏の広がりみたいなものが見えてくる。後になって思えばそういうことが



# ROUNDTABLE LAND and FOOD

見えてくるようになったという感じですが、これは東南アジアがインドと中国の間だということを実感させる写真です。要するに右手の人がスパイスをブレンドしてすり鉢で潰している。左手の人の丸いまな板と包丁は中華風です。スリランカではカレーに鯨節を使う。モルジブフィッシュと言いますが、これを買って帰って日本で鯨節をつくっているところも持って行って試してもらいました。これは鯨節だと言っていました。保証してくれました。



こういうのをずっと羊を殺すところから見て、そのやり方を学ぶ。同じ遊牧民でも、イラン、モロッコとか色々なところに行きましたけれど、イスラムの羊の殺し方とモンゴルの羊の殺し方は違う。モンゴルは血の一滴も外に出さない。小さいナイフでお腹を割いて、手を突っ込んで中の大動脈を指で切ってお腹の中に血が溜まった状態で処理する。イランだったら血は食べないので、頸動脈を切って血を流す。そういう処理の仕方から全部、場所により民族により違いがある。遊牧民のところは薪なんかない。木も生えないところだから牧畜をやっているの、当然燃やす燃料なんて、薪があるわけない。牛とか羊の糞を子どもが集めてきて、それを乾燥させて薪のようにして使う。これで石を焼いたやつをさっきの搾乳缶に入れて焼くっていう感じですね。これが美味かったのを見るたびに思い出して、三ツ星レストランで食べた羊よりも絶対こっちのほうが美味かった。今度行く時はいいワインを持っていくことが馬鹿なことと思って、行けなくなってムズムズしています。内臓も美味かったです。



これを彼らはすり潰して野菜のカレーとかに使う。肉のカレーだったら肉からうまみが出るけど、これはダシみたいなことですね。東南アジアだったらアミの塩辛やナンプラーが有名。ベトナムは元々カレー圏ではないですが、ベトナムでもカレー粉をつくっていて、フランスパンと一緒に食べる。ベトナムはフランスの植民地だった歴史がありますから、ベトナムでパンといったらフランスパンです。それと白い米粉の麺、カンボジアのゲリラがつくっていたのはこれと同じようなもので、それと一緒に食べる。

## 日本の近代化を

そのカレーはいかにして日本に入ってきたかというの、インドからイギリスに伝わり、イギリスでカレー粉ができて日本に入ってきたという経緯です。大英博物館の図書館にこもって、資料を見つけて、辿っていた。日本にいかにしてカレーが入ってきたのかは、日本の近代化を司馬遼太郎みたいに偉そうには言わないで、カレーならカレーという個別の食べ物が入ってきた経緯みたいなところから見られたらと、やっていることです。明治天皇の晩餐会メニューを秋山徳蔵さん、天皇の料理番で有名な秋山さんが明治時代のものからコレクションしていたのです。それを秋山さんのお孫さんがずっと持っていたけれど、このまま離散したら困るということで相談を受けて、今は味の素の財団がやっている食文化センターが全部預かっています。その経緯で中身を全部調べて本にしたことがあるのですが、その時に見つけた、天皇が明治17年にカレーを食べているという話です。う

## 人間が食べるというのは、 どういうことか、 料理するってどういうことか

とにかくこんな感じであちらこちら色々なものを食べて回って、それを色々な形で本にしていうことを仕事にしています。ときにはゲテモノも。虫を食べる話は色々なところにあるので、あちこちで食べて回っているながら何が共通か見て回る。これもちょっと珍しい。蜂の巣の、何て言うのでしょうか、そのまま取り出した部分です。これをバナナの葉っぱに包んで焼いて食べる。蜜の中に幼虫が入っているのをそのまま食べる感じ。こんなことをやりながら人間が食べるというのはどういうことか、料理するってどういうことかを考えている。



ずらのカレーを食べている。一緒に食べている人のことも書いてありまして、伊藤博文と一緒に食べていました。そんなことをずっと調べて回って、食べて回っています。

## 地域で一番高級なところと 一番庶民的なところ

これは志摩観光ホテルというリゾートホテルの走りのようなところの一番高級なカレーです。特注1人分で1万何千円だったと思います。これは芋食のカレー、400円です。何を言いたいかというと、これは石毛先生との対談でもあった話でしたが、何かを調べにどこかに行くとなったら、とりあえずその地域で一番高級なところと一番庶民的なところには必ず行くという話。片方だけ見てもわからないけれど、ずっとそういうことを繰り返していくと、見えてくるものがあると。芋食、立ち食いみ



例えば反芻動物が体を適応させていったのに対して、人間は料理をする。例えば、すり潰す、加熱する。人間の歯や胃腸ではそのままでは食べられないものを食べられるようにして、食域を広げていった。料理ってそういうことかな、それも一緒に食べるからそういう技術が広がっていく。食域が広がっていくこと共食が文化として伝わって共有もする。負の側面まで言えば、排除の論理もそこから出てくるので、すけれど、こういうことで文化としての食というのがあるのかなと色々なところを食べて回っているが思っています。この写真いいでしょう。アフリカでこれを撮影するには、自分も一緒に飲まないといけない。なかなかチャレンジングな感じでしたけど、美味しい酒でした。今回の企画、打ち合わせで色々話をうかがいながら思ったこと、私自身が今までずっとやってきたことはとりあえず食べて回りながら、例えばカレーがどうやって日本のカレーになっ



たいな庶民的な屋台みたいなところで食べ、その町の一番の料亭みたいなところに行つて食べというのを両方やってその幅の中でどのようなものがあるかを知ること。とにかくせっせと色々なものを食べるという話です。日比谷公園にある松本楼のが典型的なカレー。ジャガイモ、玉ねぎ、人参とお肉だけ入っているカレーが料理屋さんのカレーと家庭のカレーの区分けみたいになってきたと思いますけれど、今ではさらに色々なことをやっていますよね。東京だったら神保町という古本屋の町はカレーの町としても有名ですけど、そこで中華料理屋もカレーをやるようになってちやいまして、トンボローでカレーにするとか、そんなことをやっています。

## 料理の仕方 ずっと見せてもらって、 その食を見て回る

色々なテーマで食を撮って回って、それに書いていこうようなことを生業にして、最初は国際政治がどうこうというのでも食のことまでちゃんと勉強したらわかるだろうと思っていたんですけど、結局そこから一生抜けられない感じになってしまった。これはモンゴルで、後ろに見えているゲル、テントの家に泊めてもらった。彼らと一緒にどこかに行くといったらまず馬の乗り方から勉強しないといけない。馬に乗って隣の家に行くとか、そういうところから始まって、料理の仕方を見させてもらって、その食を見て回る。これは羊をたまご馳走として一頭潰して、石を焼いて、そのお肉と一緒に搾乳缶の中に入れて蒸し焼きにしています。

## 食の記録が どれだけ簡単になったか

食の写真を撮るといいうのは結構大変なことでした。料理カメラマンがちゃんとした料理の写真を撮るといったら、ものすごく大きい機材が必要で、さっきのモンゴルとかニューギニアみたいなところに、そんな機材で行けない。そもそも電気がないと撮れない。それがデジタルの時代になってどれだけ簡単になったか。今だと、スマホで写真を撮るのは当たり前だと思われるかもしれませんが、最近のやつで撮ると、今まで何十万円ってする機材でものすごいセッティングをして撮っていたようなものがスマホで撮れるようになって、



なおかつこれが印刷で使えるようになった。今だとかかなり上位機種に限ったと思いますけど、今のiPhoneとかの一番いいやつ、私はこれの一番いいやつを手に入れまして、それで試しているところです。学生にスマホなんかじゃなくて、ちゃんとカメラで写真を撮れとか言っていたのですが、どうも最近はずう。とりあえず試してみなくちゃというので今やっているところです。雑誌の1ページにブ口用機材で撮ったように載せられるようになった。デジカメでこういうのが撮れるようになった。それなりにライティング、セッティングしているのですが、それが2、3日前に試しに撮ったやつです。遜色ないぐらいにデジカメで撮れる。

何を言いたいかというと、食の記録がどれだけ簡単にいったかという話。別に印刷を前提とするということじゃなければ、こんな機材、高いスマホじゃなくても、普通のスマホでいいですけど、とりあえずあらうと思ったものは撮ってストックしておく。それをどこかで共有する場があれば、例えばその地域の、さうき見せていただいたような昭和の婚礼の時の料理みたいな、そういうものが日常的にストックされていく。当時は料理の写真なんて大変だったから写真は撮ってないと思いますけれども、そういうことが簡単にいった時代だからこそ、それをうまく使って何かできることがあるのではないかと先ほどからの報告をうかがいながら考えていた。で、今度私は実際にいながら考えていた。で、今度私は実際にいながら撮らせていただきました。思っています。時間的にこんなもんでしょか。

**小林**  
 ありがとうございます。ポリフォニック

います。明治、昭和のものが並んでいました。あれを森枝先生は写真でしか眺めていないわけて、僕も知らないんですけど、あれを見て、この料理は東南アジアにつながっているのかたぶんそういうことを感じられていたと思うので、そういうお話も聞かせていただければいいなと思いました。

松尾さんの話で大切だと思ったのは、料理を再現したそれを記録に残すだけではなくて、レシピをきちんと公開して、みんなにもつくってもらおうということ。現実的にも高度経済成長期以後、地方でも村の食文化の中でもほとんど切れてしまっていますから、あらためてレシピを公開することによって、しかも村内のお店で提供するようなことをやりながら、単なる再現ではなく、もう一度地域の食文化として取り戻す。それが観光にもつながればいいなということを松尾さんが言われていたことに、とても関心を持ちました。

僕も奥会津ミュージアムという形で色々なことをやりたいと思っていますが、その中でこの食文化の再建、復活、提供、そして食をめぐる文化と観光をつなぐことが大切なテーマになっていくだろうと思います。ぜひ松尾さん一緒にやりましょう、とここからお願ひしておきます。

**食文化というのは**

それから、もう一つ考えていたというか報告をお聞きしながら思っていたのは、食文化というのはまず食材の問題があります。強烈でしたね、血を食べる、食べないという話から始まって、それから、調理のまな板と包丁の話も出てきました。それも、すごく気になる。

ミュージアムでも福島の食を調べてきましたし、学芸員として福島県内の食を調べますが、なかなか台所に入らせていただくのが難しいことです。そこで初めてその土地のことがわかるということもあると思いますし、さっきの婚礼のようにその時のハイグレードなお料理もその土地とその他のエリアの交流を見せてくれるものだと思います。色々教えていただきました。

**土地を知るには食から**

**赤坂 雄雄**

お疲れ様でした。とても楽しい報告と講演をいただきました。まず塚本さんのお話から触れてみたいんですけど、僕は以前に山野河海を返してほしいと「日曜論壇」に書いた。その時に僕はあえて名前を出さなかった。中山さんでしたっけ。

**小林**  
 フードアーティストの中山晴奈さんです。

**山野河海を返してほしい**

**赤坂**

色々な土地の食べ物を掘り起こして、実際に作り一緒に食べることをアートのしている方。僕は山野河海を返してほしいというエッセイを書いた時、途中まで彼女の名前を入れていたけどやめたのです。どういうリアクションがあるかわからない。つまり山野河海を返してほしいというのには言わば食べるという問い

あるいは調理されたものを盛る器、器の問題も博物館、県博時代にずいぶん気にしましたよね。どこでも婚礼のために数十人分の漆の器を一式用意しておいて、それを100年メンテナンスしながら使ってきたという話があり、お喰ひ初めの小さなお椀なんかも、ああいうのはとてもいいテーマになると思うので、器もぜひテーマに入れられないかなと思います。それから、食べ方も気になる。どこからどうやって食べるのかなとか、作法があるのかなとか思いました。いずれにしても、二人の報告を聞かせていただき、とても美味しそうだなと楽しませていただきました。森枝先生のお話についてまたあらためてということ、ぜひ森枝先生から塚本さんと松尾さんの報告について何かお話しただければ。

**やつぱり1回じゃだめです**

**森枝**

いや、塚本さんのあれは一緒に来たかったなというのが一番。まず、あれは現場でワークショップしながら、そこで、こういう話ができたら、こんなにいいことはないです。アソコウ鍋がまさに津波警報が出ている時という話も、よりよって皮膚な状況でしたけれど。土の話は私も色々なことを感じました。かぼちゃが、その土地のかぼちゃができていくって、それはそれですごく面白いことだと思っただけ。あれがどう広がっていくのかな。できれば一度や二度は交せていただきたい。これ1回じゃなく、これを何年かごとにずっとこういう感じで見ていく。その変遷、文化の変容を見るのはやつぱり1回じゃだめです。ずっと時間をおいたプロジェクトみたいな感

話をさせていたかと思っっています。

**食べるということ、**

**ともに食べるというその基本原則**

塚本さんの話の中で、常にみんなで作って、みんなでもともに食べるというのがあった。つまり食べることは基本はたぶん共食だったの。で、孤食なんてものは食べることから見たら、ものすごく外れた行為。でも、その外れたこと、孤食とか周りに柵をつくって食べるみたいな状況が確かにコロナ禍によって当たり前になりました。森枝先生は食べるとは、みんなで食べる共食だとおっしゃいました。食べるということ、ともに食べるというその基本原則をもう一度再確認しておきたいと思っ

て、色々なことを森枝先生に質問したくてムズムズしていました。後でその辺りも教えてください。塚本さんの報告の中でアソコウの鍋が出てきた。鍋って典型的ですよ。我々はそこから取り替えて取っていますけど、世界中の民族、さっきの強烈でしたね、酒の飲み方。韓国だと鍋に自分の箸を突っ込んで食べますよね。そんなことも思い出しながら聞かせていただきました。森枝先生からも塚本さんの話、松尾さんの報告に後で絡んでいただけると楽しいなと思いました。

**単なる再現ではなく、もう一度地域の食文化として**

松尾さんの報告、とても面白かったです。昭和村が天明の頃の巡検使に提供したその料理の再現、明治、昭和の再現とか色々なことをやっている。とても面白い取り組みだなと思

じて見ていけば、特に今の福島のああいうこととはどう変わっていくかをちゃんと記録しておくのがどれだけ大事か。そういうことで塚本さんたちがやっていくということ、私のスマホでもこれだけ簡単に撮れるので、現場の現地の人に日々ちよっとしたことを撮っておいてもらって、それをコレクションしていくと、その経緯を見られるデータになるのではないかな。そういう意味で、これは松尾さんの再現の話もそうですけど、再現したことによって根付いていった、また新たに創意工夫をやってみて、それを全部ストックしていったら面白いデータが集まる話ばかりだなと思っました。とりあえずこれで。他の話ができなくなっちゃっ。

**食べる、歩く、見る**

**赤坂**

森枝さんが戦場の取材の中でこの人たちは戦争しながら何を食べているのかという、その発想がすごく面白いというか、生々しいなという気がしました。必ず人間って食べているのですよ。どんな状況でも食べる。食べなきゃ生きていけないし、で、食べるという時に人間だけが火を使って加熱したり、すり潰すという話もありましたけど、加熱するというのと、焼いたり煮たりするというのを取材の現場で色々見てこられたと思います。宮本常一さんは、歩く、見る、聞くと言ったけど、森枝さんは食べる、歩く、見ると言われた。石毛先生と少しだけ短い対話をさせていたのだんですけど、いや、面白かったですね。今日の話でも台所という言葉が出てきて、そこに出てきた写真は動物の糞を乾燥させたも

のの上に食材を乗せている風景があった。そっか、台所といっても我々の知っている台所が自明ではないのだということをごんごんに面白く見せていただいた。あそこ台所というタイトルを付けられたらもう衝撃です。でも、結局そういうことなのだろうなと思ひながら聞いておりました。

**福島と水俣はつながりながら似ていない**

それで、森枝さんが水俣に生まれ育ったとお聞きして、ぜひ、食というテーマから見えてくる福島と水俣の似ているところ、まったく違うところをどのように考えられているのかお聞きしたいと思います。

僕は川延さん、小林さんと何年前だったか、水俣に行きました。水俣では有機水銀がチツソの工場からたれ流され、河口から海が汚れている。水銀は何年経っても消えないものです。それから、河口から川の上流まで連れていってもらった。上流は本場にきれいでまったく汚染を免れている。それが衝撃でした。福島の実験の広がり、何万年かかければきれいになるということでは水銀とは違う。でも、まさに山野河海がまあね汚染されています。で、除染と言っていますけど、山の中とか海は基本的に、とりわけ山はもう除染できないと投げられちゃったわけです。汚染という意味で考えても、福島と水俣はつながりながら似ていないと感じながらお聞きしていました。森枝さんが水俣の生まれであることも含めて、どのようにこのテーマをお考えになっているか、聞かせていただければ。

ROUNDTABLE  
 LAND and FOOD

**森枝** さつきお見せした「地域人」という雑誌、私が教えている大正大学で地域創生学部をつくったものですから、その絡みで雑誌を出さうとなって、今もずっと出しています。それで、時々好きなことを特集でやらせてもらって、エネルギー問題、水俣の話などをやらせてもらっています。それで福島県を小松理度さんに案内してもらって回って見て歩いて、やっぱり背景として共通しているのは、大都市の後背地として、そのエネルギー源になっていること。さつきお見せしましたが、野口達というチツソの創業者が最初につくったのはダムだった。そのダムのエネルギー、電気を何に使うかというので肥料工場をつくった。つくる時に隣町に出水、出る水と書いてイズミと読む鶴の飛来地で有名なところがありませんけれど、そこが競ったのです。どっちが工場を誘致するかで、出水は鶴が来るぐらいですから、平野が広がっていて工場立地としては良かったはずですが、水俣の当時の行政が一生懸命頑張った。それが結果的に、ということとがまずある。で、石牟礼さんとかうちの親とかの天草は天領で、元が貧しいところで生まれただけで、水俣に行けば仕事があるということとで子どもの時、赤ん坊の時に連れてこられた。うちの親父と石牟礼さんは10日しか誕生日が違わなかった。両方とも天草からそうやって渡って来た。福島が石炭から始まって原発に至るまでずっと東京、首都圏へのエネルギー供給地であったことは似ている。そういう相似形のようなことをものすごく感じる。

**一言付け足すことで  
わかってもらえる部分もある**

らうと誰と誰が恋仲だったのかとか、頭の中がグシャグシャになる。でも、食べるのは1日に何食食べてもこれとこれがどう違うかクリア。四方田犬彦という映画評論をやっている友達がいまさんが、彼に映画を1日4本見て、グシャグシャになるって聞いた。そんなことがあるわけないと言われた。佐藤忠男さんという映画評論家の人にもそういうことを聞いたことがありましたが、そんなわけないって、やっぱり好きだというのは何かある。食べるのだったらそんなことはないけれどもというアホなことを思い出しました。

**赤坂** 僕は最近ネットフリックスで映画を見ているんですけど、見るたびに全部ごっちゃになっていますね。すでに見た映画を何度も見たりして、途中で、あれ、見たことあるとか。

**森枝** やっぱ食べるほうですか。

**赤坂** 食べるほうですね。僕は民俗学者ですから日本列島の中だけです。だから、どこでも平気で食べられる。食べられないものはまずないですけど、海外に出ると結構きついことあります。食べられないものとか。

**同じ人間が食べているもので  
食べられないものは  
基本的にはないだろう**

**森枝** そうですね。同じ人間が食べているもので食べられないものは基本的にはないだろうと。

さつき赤坂先生のお話をうかがいながら、ふと水俣のことについて思い出したことがあった。サラ玉事件というのがありました。それは、料理のテレビ番組で、どこそこの食材を使ったカレーライスとどこそこの食材を使ったハヤシライスとどっちが食べたみたいなのを競う番組で、関口宏の司会でやっていたものです。その番組で水俣のサラ玉ねぎ、サラ玉ねぎというのが名産になっていたのですけど、そのまま置いても食べれるぐらいの香玉ねぎ、そのままサラダにできるような玉ねぎで、それを何かの料理に使うという話だった。水俣市袋という大字の辺りでとったやつを使うって話だったのですが、テレビでは熊本県産として水俣という地名を入れることを排除した。それで騒ぎになった。なぜそんなことをしたのだとクレームが来た。要するにテレビ局の論理では、イメージが悪い。水俣のものであるということだけで。「水俣は公害問題が起こったので食に対して非常に真摯に取り組んでいて、無農薬にも熱心で、それでこういうものをやっているのです」と一言言ってくれたら、通じる話なのに、そこをカットして、水俣という名前を排除した。他のテレビが水俣のサラ玉ねぎを紹介した時にはその一言を付け加えてやりました。要するに、さつき赤坂さんがおっしゃった山は汚れてないけれどもイメージとしての水俣になっちゃっている。今でも水俣の多くの市民は水俣病という病名になぜ地名をつけたのだという思いが多かれ少なかれある。それをなしにしようなんてことを保守派というか、歴史修正主義者が言いだすようになった。でも、もうそれはしょうがないと思うのですけれど、一言付け足すことでわかってもらえる

細かく言うと、お腹の腸内細菌や腸の長さとか色々なことがありますが、微妙な差はあるんですけど、腹は壊しても大丈夫ぐらいのつもりでやらないと。

**赤坂** 家を訪ねて食べ物の写真とか撮っていて、食べられなかったらそれでどう終わりますか。これは食べられませんかと言ったらもうそれです。さようならですよ。

**森枝** さつきのお酒、あれはウガンダですけど、それは絶対見てみたい、写真を撮りたいと思っただ。でも、自分が飲まずには絶対撮れない。それで、とにかく腹壊してもしょうがないぐらいの感じでした。思い出しましたが、今まで食べられなかったのは一つだけ。ゴキブリ。あれはカンボジアがラオス、ゴキブリを湯がいたやつを売っている。それはそれ用のやつで、家の中を這いずり回っているやつじゃないからということでしたけど、でもやっぱり抵抗があった。さつきネスミがありました。あれもドブネズミではなくてバンブーラット、竹やぶの中にいるちよつと大きなネズミです。そういうのは理学的に何とか大丈夫ですけど、ゴキブリはちよつと。修行が足りない。

**赤坂** 会津ではスズメバチを焼酎に漬けたのが結構ありますね。森枝先生はそういうのは平気ですよ。

**森枝** ラオスでやっぱ同じようなことをやっ

部分もある。福島の場合はもつとしんどいなというのが、一番の違いとして感じることにすね。

**福島と水俣を  
どういふふう  
に食文化の切り口  
で考えていくのか**

**赤坂** 福島はまた別の意味合いで、そのイメージとどういう問題になります。例えばさつき僕が言ったような山野河海を返してほしいみたいなのも実は批判を浴びる。確かに水銀ではない放射性物質は半減期があつて、時が経つにつれてかなりの部分は自然に消えていくという違いがある。でも一つのでき上がったイメージはなくならない。福島の食材は徹底して線量検査を受けて安全なものだけを出すということ。苦労して苦労してやっけてきている。逆に安全なですよ。やらずに、風評被害を受けないようにということとで検査もせず逃れてきたものがあつたかもしれない。

全部ひつくるめて、やっぱり食とイメージは非常に強く結びつきます。水俣の玉ねぎもみかんも、水銀中毒なんかまつたく関係のない、でも水俣ということと風評被害のネタにされてきた。でも、森枝さんが言われたように一言きちんと付け加えてもらえれば逆にそのイメージの悪さを払拭できるの。それは福島もそうだと思います。

だからちゃんと検査をして、こういう数値で大丈夫だったものと示せばいい。それさえも通じない部分があるという感じ。とりわけ近隣諸国からは厳しい目で見られている。やっぱり福島と水俣をどういふふう

**赤坂** ました。虎の骨髄を漬けたピンクの酒とか。

そういう話をお聞きしていると楽しくて、そっちに行つてしまふので強引に引き戻します。塚本さんの報告の中とかぼちゃ饅頭の話が出てきて、違う品種のかぼちゃが交配されるという話を聞きました。それが僕は気になるのです。つまり、いわゆる伝統野菜、温海カブなんかもそうですけど、他のものと交配させないためにものすごく苦労して種を守っています。会津にも伝統野菜はたくさんあつて、それを掘り起こして、食べながら保全して、食文化の中にきちんと位置付けていくことがどうしても必要だと思います。実は山形のカブはほとんど漬物だけなんです。ところが奥会津のカブ、焼畑でつくっていたカブは僕がおかがいしたのは銘岩だったと思いますけど、カブづくしで5、6種類の食べ方があつた。それを教えてもらったことを思い出しました。伝統野菜の問題は僕にとつても大切ですよ。

**生活全般につながるテーマ**

で、戻ってきますが、松尾さんの報告にあつた婚礼行事の献立、あれを具体的に見て、森枝さんの目にはどういふふうに見えるのか、ぜひお聞きしたいと思いました。香辛料の問題なんかも東南アジアを色々見ていらつしやるから、とても面白いと思う。そこからどんなことが見えるのか教えてください。明治と昭和がありましたね。こういう婚礼料理の食材は、実際につくつていて、どこかの山に行くかあるとか、そういうことを大事にしているはずなので、

食文化の切り口で考えていくのかは、とても大切だとあらためて思いました。

**なんだか美味しそうなですよ**

それで、質問がもういっぱい出てくる。僕は以前に東北芸術工科大学で先生をしていた時、セミプロ級の映像機材を手に入れて、学生たちにこれで映画をつくらうと言って尾花沢の牛房野というところのカノカブ、焼畑でつくったカブの映画を学生たちと撮ったことがあります。市民映画祭で優秀賞をもらったんですよ。その映画が、なんだか美味しそうなんです。見ていただけで、あのカブ食べたいなと。耳で聞いていただけじゃわからないんですけど、写真とか映像に映っている食べ物美味しそうに見えるのはとても大事ですよ。変な質問をしています。

**森枝** いやいや。いい球を投げていただいた。私が報道写真から食のことをちゃんとやろうと思ったことの二つがさつきお見せしたようなことがきつかけました。当時、東南アジアの食なんてほとんど知られていなかった。それから、ちよつと70年代から80年代ぐらいは、高度経済成長でバブルに至るまでの日本が一番盛っていた時期です。豊かな日本と貧しいアジアみたいな感覚があつた。見下すみたいな感じが色々なことであつたと思うのです。売春観光やそんなのばかりありました。その中でどうやってポジティブなアジアのいいところを紹介し、それに親しみを持ってもらえるか。それが二つモチーフにもなっている。その当時、私アジア中の映画を見て回つて役者監督に会うということを一時期やつたことがありました。1日に3本も4本も試写室で見せても

単なる食、食べることだけではなくて生活全般につながるテーマだと思います。

**森枝** これを見て、日本から朝鮮半島までは非常に馳走の感覚が共有されているところがあると感じます。さつき八寸って言われましたか。韓国だったから、あれでいい、山から採ってきた色々なもので10種類20種類のナムルをつくつて、それが盛られてあるような感じが思い浮かべられる。今、ある企業がホームページで、各

国のお正月の食の話を書いてくれというので、今、ちよつと集めていました。韓国のお正月料理がまさにこんな感じ。ワツという。東南アジアの稲作でご飯を食へるところでの食への話で、タイ米などのいわゆるインディカ系統のご飯はお皿に盛って、カレーじゃなくとも、それに何かをかけて食べる。そういう食べ方になるので、盛り付けから何から発想が全部違ってくる。タイのチエンマイではちよつとどんな感じのお膳があるし、朝鮮半島にももともとああいう塗りのお膳みたいなものはあります。唐辛子とニンニクで全然異質なものの感覚がどうしてもあるかと思うのですが、それを除いたらなますみたいなの、ナムルもごま油が目立つけど、その辺りの要素さえ除けば、韓国の宮廷料理はもともとあまり刺激性のものが入っていないので、もっと近似的さを感じる。この料理を見ながら絵柄的にそんな感じがしましたね。

**赤坂** 松尾さん、教えてください。これをつくつていらつしやるのは女性でしょうか。

**松尾**  
はい。そうです。

**赤坂**  
食材はどういうふうに関連しましたか。

**松尾**  
食材は会津圏内を中心に集めました。

**赤坂**  
大変だったでしょう。

**松尾**  
そうですね。だいたい10月、11月にやったんですけど、やっぱり時期によってはどうしても食材が手に入らないということで代用した物もあります。

**赤坂**  
でも、冬にやりましたよね、結婚式。ということは冬に手に入る食材なのですか。

**松尾**  
そのお話をさせていただきたいのですが、村の方からお話を聞いたところでは、結婚式の準備はその前の年の秋から始まるそうです。そこから山菜、キノコを集め始めて塩漬けにしておくそうです。それを冬に行う結婚式で出していくというふうに関連しています。

**森枝**  
庄内、山形大学の江頭さんという友達がいるのですが、在来種のカブとかを彼に色々教えてもらって、食べて回ったことがあります。

りして、気軽に買って帰れるような仕組みも面白いこと回すシステムが結果的にできた。会津も似たような可能性をすごく感じるのですけれど、それをうまくやってくれたら。水俣でもそうですけど。

**赤坂**  
できるかどうかかわからないけど、やっぱり一流の料理人を招いて食材で遊んでもらう、そういうことも必要だと思えますね。

**森枝**  
育ってもらうのが一番ですけどね。

**赤坂**  
そうですね。育てて、種を蒔いてもらってということとは考えたいと思います。

**森枝**  
民宿みたいなところでも、私が昔親しくしていた能登のさんなみという宿があります。日本一の民宿と言われていた。本人たちはもうリタイアして、今は別の形になっていますけど、わざわざそこに食べに行く。レストランでも民宿でもいいですけど、会津ではああいうのが何かに似たりそっぴりな感じですね。

**赤坂**  
ですね。会津には食材がまだ豊かだといっぱい残っている。お爺ちゃんお婆ちゃんは元気だし、調理法を聞き書きできる。そういうことを文化観光の中で正当な形で位置づけて、食べながらみんなで文化を守っていくようなことができる土地だと僕は思っています。松尾さん頑張ってください。みんなで頑張ってください。

まさに、今松尾さんがおっしゃったような塩漬けにした山菜とかを、羽黒山だったかな、今でも食べさせてくれるところがあります。倉庫を見せてもらったら色々なものが漬け込んであった。

**食文化を手がかりに**

**赤坂**  
僕は最上川沿いで聞き書きをして歩いてきたことがあります。その時にムカサリ、結婚式は稲の収穫の後にやっていた。鮭振る舞いと言いました。鮭が上つてくれるので、鮭がメイン素材の色々な料理、なますから何からを出すかと聞きました。庄内は食文化でユネスコにも登録されましたけど、ものすごくレベルが高いです。農家レストランの食事だつてすごく洗練されたものをつくっています。ぜひ、見学に行つて教えてもらいましょうよ。江頭さんは僕もよく知っていますし、あの辺りは食文化を手がかりに地域の文化振興をガンガンやっています。会津の伝統野菜のことも本当は調べてもらいたいですね。なんてことを思い出しました。

**森枝**  
今おっしゃった庄内の話は本当にいいヒント。僕はあそこが面白いと思うのは、江頭さんが地元食材のことをやって、そしてアルケツチャーノがある。シェフの奥田さんが食材をうまく使つて、要するにオーソライズするというか、他所から来た人間が、東京やら関西からわざわざ食べに行くようなところになった。その食材をオーソライズすることまで含め、それをまた同じ食材で漬け物にした

**森枝**  
本当にそう思います。

**「いのち」と「くら」の核**

**赤坂**  
今度、森枝先生に来ていただいて、案内をしながら色々なものを食べて歩こう。お爺ちゃんお婆ちゃんたちみんな、村や字でなく家ごとに漬物の味が違うし、色々な料理にその家の歴史がある。どこまでできるかわからないけど、食文化の掘り起こしはまさに「いのち」と「くら」の核です。今度、森枝先生に会津に来てもらって、もっと具体的にいついついらいらっしゃるお母さんたち、女性たちに話をうかがうとか、そういうことをぜひやりたいと思いました。

**森枝**  
私も関わっていて、もともと石毛先生がおつくりになった食の文化フォーラムというのがあります。赤坂先生もずいぶんその面子はご存知ですが、佐藤洋一郎さんとか江頭さんもそうです。時々、地方でやつたりもしていたのです。その会自体はクローズドな集まりだったので、それがシンポジウムを引っかけて、例えば江頭さんにその野菜を食べてもらって話をしてもらうとか、三ツ星のシェフもそのメンバーです。うまいことできたら面白いな。

**赤坂**  
小林さんぜひやってください。ボールを返す時間です。

**小林**  
そうですね。ありがとうございます。確にお時間を過ぎてしまいました。福島と水俣の類似と相違。松尾さんのお話の中では奥会津の隣の町、村ではどう違うのかということが出てきましたし、また一方で朝鮮半島ともつながる可能性まで教えていただきました。食を通して土地のことがわかるのだとあらためて思った今日のラウンドテーブルでした。

もう一つ森枝先生のお話をお聞きして思ったのが、近年スマホを使ってみんなが食レポのようなことやれるようになって、リサーチは芸員や研究者だけのものではなくなっていくのではないかと感じました。色々な方のデータのストックがこれからの地域を知る大きなデータベースになっていくのかもしれない。

みなさんからチャットでメッセージをいただいているので、少しご紹介させていただきます。婚礼料理についていくつかご質問もいただいています。後で松尾さんにお渡ししたいと思います。食べてみたいというのがありますし、当時、昭和村で入手が大変で贅沢だったもの、時間がかかるもの、今に引き継がれている料理などがあります。確かにそこからイメージが膨らみます。打ち合わせの段階で昭和村の根本さんがおっしゃっていました、中山間地なので、海のものはないだろうと思つていたら婚礼料理では新潟から食材が来ていて、流通も見るとおっしゃっていました。

続いて、昭和2年に生まれた昭和村、明治時代はどんなコミュニティだったのだろう。何人ぐらいが婚礼に呼ばれていたのでしょうか。昭和村から報告が出るはずなので、お楽しみ



にお待ちください。  
オンラインで参加してください。みなさまもありがとうございます。ポリフォニックミュージアム、今年度最後のオープンでのイベントでした。ミュージアムの機能を広げていく活動の一環としてこれからもみなさんとリサーチしていければと始めたトークでした。今日をきっかけに会津に先生がたをお招きし、松尾さんに案内していただいて、みんなでリサーチするという楽しいテーマも生まれました。来年度に企画していきたいと思えます。あらためて先生がた、報告してください。松尾さん、森枝先生、赤坂先生ありがとうございます。ご参加のみなさんも一緒に頑張ってください。

※からむし工芸博物館刊行図書  
<https://www.willshowa.tokushima.jp/procedure/369/>

ROUNDTABLE  
LAND and FOOD

ラウンドテーブル

参加者の声

この地球上で、色々な恵からできているごはんをいただけるという喜び、それを共に食べ、次の世代へつないでいくこと、どんな状況の中でも私たちの体は食べものでできていることに感謝。

山野河海を大切に、命の源に感謝していただいきたいと思います。

会津は訪れるたびに気がつくことがあるように思います。  
たぶん足もとの私が住む土地にも同じように。  
遠いところ、身近なところを行ったり来たりしながら、気づくことが増えてくるといいと思います。

私たちが暮らしている“今”というこの瞬間は、どんな文脈を受け継ぎ、何をもたらされ、ここで暮らしているのかを知りたいと思っていました。  
その答えを見つける糸口として、「食文化」というのは、先人からのメッセージなのだあと感じました。  
このメッセージを拾い、食べて、見つけて、伝えるというような翻訳をしていくことで、その土地への依存性や精神性のような目に見えないことを、少しでも顕在化できたら嬉しいなあと今からわくわくしています。

その土地で暮らして、食料を育てること探ること、調理してごはんをつくること、たべることについて、あらためて考えさせられました。  
私たちは、「文化」の中に生きていくということに改めて気づきました。  
ゆるやかに変化していく「文化」が、震災の影響で急激に変わってしまったということを、塚本さんのリサーチのお話をおうかがいして感じました。

昭和2年に生まれた昭和村。では明治はどんなコミュニティだったのだろうか？  
これだけの素晴らしい婚礼料理をつくる裏付けになった地域のあり方にとっても興味を持ちました。

# 実践と対話

## ■ リサーチ

□ 秋田 油谷コレクション、五城目町、秋田市文化創造館 (p70-73)

□ 只見

◎ 日程：2021年11月30日(火)～12月1日(水)

◎ リサーチ先：

三島町生活工芸館

金山町自然教育村会館(旧玉梨小学校)

からむし工芸博物館

ただみ・ブナと川のミュージアム

ただみ・モノとくらしのミュージアム

森林の分校ふざわ

◎ お話をお聞きした人：

吉岡義雄さん(只見町ブナセンター専門指導員)

藤沼航平さん(森林の分校ふざわ代表)

渡部賢史さん(只見町教育委員会生涯学習係)

◎ 調査者：

中野陽介(只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係主査/

只見町ブナセンター主任指導員/LMN実行委員会委員)

橋本誠(NPO法人アーツセンターあきたディレクター/

LMN実行委員会委員)

塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

山口拓(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

## ■ 「只見民具キット」構想

《コンセプト》

厳しく奥深い自然は、多くの恵ももたらします。その一つが山菜。春には山で山菜を採り、春の味覚を楽しみます。また、じっくり揉んで乾燥させ、あるいは漬けて、冬の保存食に。中でもゼンマイは、雪で削られた谷の斜面に生育し、雪解けに合わせて採集を行います。只見の乾燥ゼンマイは良質で、かつては全国のゼンマイ価格を左右するほどだったそうです。ゼンマイ採りの道具を中心に、山の恵をいただいて培われてきた只見の文化を伝える民具キットを考えました。

《内容案》

- ・クモッケツ：ゼンマイ採りの専用着。  
お尻の部分にゼンマイ収納用の袋が付いている。
- ・カナカンジキ：滑り止めの爪がついた鉄製のカンジキ。  
凍った斜面を歩く時に使用する。
- ・ナベ：灰汁抜き用のナベ。ナベに湯を沸かして重曹か木炭を入れ、ゼンマイを浸けて灰汁抜きをする。
- ・ゼンマイのさく葉標本
- ・乾燥ゼンマイ

## アートワークショップ

# つくること・つかうこと

### SDGs12：つくる責任・つかう責任

ものづくりの伝統や、多様な祭礼など、奥会津地域には、豊かな自然の中で育まれた文化があります。一方で、超高齢化、過疎、継承者不足…など、様々な課題を抱えている地域でもあります。

日本有数のブナ林と豪雪で知られる只見町は、ユネスコエコパークにも認定されています。只見町を中心に、自然と共生する循環型の暮らしの中で、つくり・つかってきた道具、生活文化を様々な視点から見直し、考察することで、持続可能な地域社会について、次の世代と共有することを目指しました。

アートワークショップ  
「つくること・つかうこと」

## 県外事例調査

# 油谷コレクション 五城目町 秋田市文化創造館

◎日時：2021年11月5日(金) 14:00～18:00  
2021年11月6日(土) 14:30～17:00  
2021年11月7日(日) 9:00～17:00

◎リサーチ先：NPO法人油谷コレクション  
五城目町(「333」会場)  
秋田市文化創造館

◎お話を聞きした人：油谷満夫さん(NPO法人油谷コレクション理事長)  
小熊隆博さん(合同会社みちひらき代表)  
橋本誠(NPO法人アーツセンターあきたディレクター/LMN実行委員会委員)

◎調査者：塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)  
山口拓(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

11月5日～7日、LMN実行委員会委員でNPO法人アーツセンターあきたディレクターの橋本誠さんにご案内いただき、秋田市文化創造館をはじめとする秋田市内・近郊の取り組みをリサーチしました。

11月5日

まず始めに訪れたのは、秋田市の旧金足小学校に展示されている油谷コレクション。油谷満夫さんが収集された50万点の資料のうち約20万点、暮らしの道具、商家・酒屋の道具類、小学校の教材、楽器、レコードから雑誌…が展示されています。数量がするほどの物量と情報量です。油谷さんは個人のコレクターとして収集活動を行い、もともとは湯沢市に収集品を保管していましたが、近年秋田市に寄



贈し、展示・保管と分類整理を続けておられます。コレクションがあまりに膨大なこともあり、維持管理は難しい状況だそうです。秋田公立美術大学のギャラリーで開催された「アウト・オブ・民藝」秋田雪櫃編 タウトと勝平」(2020年)、秋田市文化創造館の「200年をたがやす」展(2021年)で紹介されたことをきっかけに、これまでとは異なる視点・手法での民具の展示に手応えも感じてもらえるとお聞きしました。

次に、近年Uターンヤー・Uターンした若手が活発に活動をしているという五城目町へ。五城目町では、地元の酒蔵・福祿寿酒造を紹介する「333」展が開催されていました。福祿寿酒造は今年で創業333年を迎えます。その物語を伝える展示やトークイベントが、



町内の酒屋、ギャラリー、カフェ、本屋などで行われています。

会場のひとつ、ギャラリー「ものかたり」の小熊隆博さんにお話を聞きしました。五城目町は500年続く朝市や江戸時代創業の酒蔵など古い歴史をもつ町ですが、若手が移住し新しいことを始めています。古い、新しい、どちらがよいということではなく、どちらもそのまま共存し、強い連携があるわけでもなくそれぞれに何か始めている。そんな不思議な空気を教えていただきました。

11月6日

2021年にオープンした秋田市文化創造館。NPO法人アーツセンターあきたが指定管理者となり、橋本さんがディレクターを務めています。



秋田市文化創造館の建物は、もとの秋田県立美術館。特徴的な三角屋根と丸窓が目印です。美術館が近隣に移転したことに伴い、市民の愛着がある建物を活かして、新しく文化創造館としてスタートしました。「出会い、つくり、はじめる場」をコンセプトに、誰にでもひらかれ、創造力を養う出会いの場、何かを始めようとする人を応援する場として、まちなかでやりたいことを公募・応援する「SPACE LABO」「秋田市文化創造館パートナーズ」やクリエイター・イン・レジデンス、子どもたちのやりたいことを全力で見守る「NEOびじゅつじゅんびしつ」など、数々の特徴的な事業を展開しています。

1階はあくまでフラットな空間。ショップやカフェ、ワークショップスペース、展示スペースな



どがあり、のんびりする人、会話する人、勉強する人などが思い思いに時を過ごしていました。館のスタッフが時に珈琲店を始めたり、利用者の方がホットワインをふるまったりと、人の思いに応じて可動する空間となっているようです。貸しギャラリーの機能もありますが、利用したい人・団体の希望に応じて、何をどこまで一緒にやるか、その場合場合に際して対応しているとのこと。「ガイドラインをつくらなければ」と思っているんですけど、橋本さんはおっしゃいますが、ガイドラインがないことがこの融通無碍な雰囲気を生んでいる秘訣ではないかと感じました。

11月7日

秋田市文化創造館のクリエイター・イン・レジデ



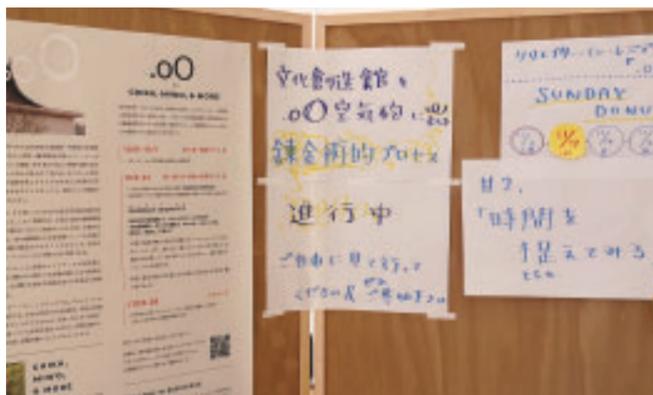
ンス事業「o」のワークショップ「SUNDAY DONUTS」時間を捉えてみる」に参加しました。「o」は松田朕佳さんと雨宮滯さんによる、20年後の秋田に煙の輪っかを浮かべる計画です。「20年後」という時間を捉えるため、「未来とは?」「時間は生き物?」「時間は無限?」「有限?」といった問いについて参加者が対話を重ねました。この事業の主体は「CHIKA, MIWO, & MORE」と名付けられていますが、その「& MORE」は参加者です。集った人々が徐々に語り合い、練られた思考によって20年後の輪っかをつくりまします。

後半は「NEOびじゅつじゅんぴつ」の報告会に参加しました。こどもたちの「夢」を募集し、それを実現するプロジェクトですが、今回の「夢」は「しぜんものを使いサバイ



バル生活をしたい」と「みんなデザインしたお皿で料理を出すレストランの店員になりたい」。二つのチームがそれぞれに試行錯誤する様子を、大人は口出しせずひたすら見守ります。時にはバスを間違えて全然違う場所に行ってしまったりしますが、それでもじっと見守る。何かあったら大変と先回りしがちな中で、手出しをしないというのは、大人にとってとても覚悟がいることかもしれません。こどもの「夢」を実現すると同時に、大人の考え方を揺さぶるプロジェクトなのではないでしょうか。

誰にでもひらかれた場所、言うは易く、行うは難しい。それを実現しようとしている取り組みについて、様々に教えていただいたりサ

RESEARCH  
AKITA

事務局…小林めぐみ  
今日は、柳津町の斎藤清美術館からお送りしています。このラウンドテーブルは福島県立博物館が事務局をしており、ライフィミュージアムネットワーク実行委員会の事業です。ライフ、「いのち」と「くらし」を震災後、あらためて大切にすべきじゃないかということ、その二つにミュージアムの機能をベースとして向き合っていくにはどうしたらいいか、いろんな方たちと一緒に考えたり実践したりということを福島でやっていけたら、震災からの学びをいろんなところに活かしていけたらということが始まった事業です。これまでライフィミュージアムネットワークという事業を3年間行ってきましたが、今年度から次のステップに移りまして、ポリフォニックミュージアムという事業をスタートしています。

ポリフォニックってあんまり聞いたことない言葉ですよ。私も最近ようやく聞き慣れてきました。シンフォニーでもハーモニーでもなくいろんな音がそのままそこにあれる、それがポリフォニックという言葉です。3年前にICOM京都というミュージアムの世界大会があって、その中でミュージアムはポリフォニックスペースであるべきだ、人種や考え方が違っていてもその人はその人のままでミュージアムにすることができて、違う意見の人同士も「あ、そうなんだ、そういう考え方もあるんだね」と言っていて、その違いを共有できるような場所であるべきだろうという提言がされたんです。確かにそうだよなと思うんですけど。特に2011年以降、考え方の違い、例えば避難している人と避難していない人と、これ食べる食べないとか。そういう考えの違いはそれぞれに背景があったことだと



谷野しずかさん



塚原有季さん

と思うので、その違いも共有しながら、じゃあなんで違っているのか考えてみたり、この人がこう考えているのはなんでなのかというのを、みんなでまず一緒に知ることからスタートできたらなと思ってんです。それで、ICOM京都で提示されたポリフォニックスペースという場所になりたいということ、そのためのテストをやっているのがこのポリフォニックミュージアムという事業です。しかも、それを福島県立博物館だけでやるのではなく、試行錯誤しながら福島県内あちこちにつくりたい。今日みたいな単発のイベントがその場になるかもしれないですし、もしかしたらそれがつながってネットワークになっていくかもしれないんですけど、こうしたテストを繰り返していき、対話の場が福島県内に増え、ミュージアムのような機能をするところが増えたら、とても創造的な社会になっていくんじゃないかなとも思っています。

「つくること・つかうこと」ということで前置きが長くなりましたが、そのポリフォニックミュージアムの活動の一つとして今年、奥会津の只見町をベースにした活動を行ってきました。そのテーマが「つくること・つかうこと」です。奥会津では、柳津町も含めて、いろんな方が自然の素材を採ってきてそれを加工して自分が使うものをつくっている。それだけじゃなくて、何代も前からお家に伝わっているものを使い続けている。そういう暮らしが何を教えてくれるのか考えていけたらなと思っています。そう考えたときに、この斎藤清美術館で「やないづの家宝展」が行われていて、これがまさに柳津

小林  
のみなさんの様々な暮らしの中の記憶、思いを伝えようとしているもので、ぜひそれをご紹介しつつディスカッションを繰り返したいなということ、今日はお邪魔しました。

小林  
ありがとうございます。続きまして塚原さんお願いします。

谷野しずか  
柳津町地域おこし協力隊の谷野しずかと申します。日本大学の芸術学部で油絵を4年間やってずっと絵を描いてきたわけなんですけれども、とある友達の縁でこの斎藤清美術館に来るようになりました(笑)。  
一応学芸員課程を履修していたので、ここに来てからは展示をやらせてもらったり、小学校に行くと版画の先生をやってみたり、色々なことをしております。本日はどうぞよろしくお願いたします。

塚原有季  
ありがとうございます。続きまして塚原さんお願いします。

小林  
ありがとうございます。続きまして塚原さんお願いします。

我妻泉香  
同じく地域おこし協力隊の我妻泉香です。彼女と同じく武蔵野美術大学の工芸工業デザイン学科陶磁専攻を卒業しました。柳津町には縄文土器などがたくさん出るといって、土につられてやってきたわけなんですけれども

## ラウンドテーブル

# つくる・つかう・展示する

～斎藤清美術館「やないづの家宝展」から考える～

柳津町にある斎藤清美術館では、2019年から「やないづの家宝展」を毎年開催しています。同館に所属する地域おこし協力隊が、柳津町のみなさんに地域のことを取材し、その中で出会った「家宝」のような大切なモノ・コトを地域おこし協力隊の視点でまとめ、表現したものです。3年目となる「やないづの家宝展2021」開催にあわせ、全国のアートプロジェクトに精通するNPO法人アーツセンターあきたディレクターの橋本誠さんを講師にお迎えして、類似する視点の事例についてお聞きしながら、地域に残るモノ・コトからわかる「つくること」「つかうこと」の意味と、「展示する」というミュージアムならではの手法の可能性を考えました。

- ◎日時: 2022年2月6日(日) 13:30～15:30
  - ◎会場: やないづ町立斎藤清美術館、オンライン
  - ◎講師: 我妻泉香さん(柳津町地域おこし協力隊)  
谷野しずかさん(柳津町地域おこし協力隊)  
塚原有季さん(柳津町地域おこし協力隊)  
橋本誠(NPO法人アーツセンターあきたディレクター/LMN実行委員会委員)
  - ◎参加者(オンライン):  
福留邦洋さん(岩手大学地域防災研究センター教授/賢者※)  
中野陽介(只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係主査/只見町ブナセンター主任指導員/LMN実行委員会委員)
  - ◎協力: やないづ町立斎藤清美術館
- ※共通の課題を抱える県内外の地域ミュージアム・アートプロジェクト関係者、アーティスト、研究者等の専門的知識を有する人を本事業では「賢者」と称しています。

我妻泉香  
武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科陶磁専攻を卒業。2019年5月に柳津町地域おこし協力隊に着任。

谷野しずか  
日本大学芸術学部美術学科絵画コースを卒業。2019年9月に柳津町地域おこし協力隊に着任。

塚原有季  
武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科を卒業。2021年5月に柳津町地域おこし協力隊に着任。

橋本誠  
2005年から、フリーのアートプロデューサーとして活動。東京文化発信プロジェクト室(現・アーツカウンシル東京)で「東京アートポイント計画」の立ち上げを担当(2009～2012)後、2014年に一般社団法人ノマドプロダクションを設立。芸術祭やアートプロジェクトに関わる企画制作や人材育成プログラム、調査・コンサルティング事業などを手がけている。主な企画にKOTOBUKIクリエイティブアクション(横浜・寿町エリア/2008～)、生活と表現(東京・台東区/2015～)など。近著に「危機の時代を生き延びるアートプロジェクト」がある。

(笑)蓋を開けると文化だとか人々の思いだとかその土から根付いた宝物たちが本当に素晴らしい。そちらを中心に取材させていただくようになって、「やないづの家宝展」を担当しております。よろしくお願いたします。

**小林**  
ありがとうございます。今日は三人の活動を形にした展示のご紹介とそれをどう組み立てていったのかをお話しいただいたあとに、ライフミュージアムネットワーク実行委員会の委員の橋本さんにもお話をいただきます。橋本さんはこれまで多数のアートプロジェクト、それも全国各地のものを見ていらつしゃる。その目でこの展示をどうご覧になったかのコメントを寄せていただきます。また同じように地域の歴史だったり記憶だったりベースにそれを伝えるような展開をしている活動もご紹介いただければと思っております。橋本さんどうぞよろしくお願いたします。

**委員・橋本誠**  
よろしくお願いたします。



我妻泉香さん

「やないづの家宝展2021」

**小林**  
ただ今「やないづの家宝展2021」の会場に来ました。展示を我妻さんにご紹介いただきながら、見ていきたいと思います。まず「やないづの家宝展」、今年3年目なんですよ。

**我妻**  
はい。3年目です。

**小林**  
今年度の「やないづの家宝展」を開催するにあたって、テーマ、どうしてこのような展示になったのかのあたりを、まず教えてください。

**小林**  
ありがとうございます。それではカメラを展示室のほうに移しまして、我妻さんと展示のご紹介をしていきます。ここからマイクを山口さんに渡します。山口さんは先ほど話した只見町拠点のアートワークショップの担当を務める福島県立博物館の学芸員です。

**事務局・山口弘**  
はい。それではここから司会を山口が引き継ぎます。どうぞよろしくお願いたします。今です、柳津町地域おこし協力隊の我妻さんと小林が展示室に向かっていきます。これから、我妻さんが展示室を紹介してくれます。そのあとに谷野さんからこの展示に至るまでの経緯とか、いろんな裏話的なものもお話しいただくことになっていきます。この辺を注目して見ておいてねというところがあったら、一言お願いたします。

**谷野**  
今回私がお話しするのは、今年の家宝展の活動の振り返りのようなものですが、実は、こちらの展示室には私たちの取材したもののすべてがあるわけではないんです。展示されないものも紹介するつもりですので、そのあたりも見えていただけたらと思います。

**山口**  
なるほど。ありがとうございます。では会場の準備ができたようなのでカメラを切り替えます。

**我妻**  
はい。今年は柳津町の年中行事やお祭りをテーマに組み立てていきました。前年、民具をテーマに「やないづの家宝展」を行ったんですけど、その際に取材にうかがったお家の方みなさんからこういう行事とかお祭りだとかも存亡の危機にあるんだということを聞かされたんです。それが念頭にあって、去年、丑寅まつりというものがあつたんです。これは圓藏寺で丑寅寅年に行われる祭りなんですけど、それに合わせてお祭りや年中行事をテーマに今回地域おこし協力隊が取材を行つていこうということになりました。

**小林**  
なるほど。ということでのテーマ設定なんです。じゃあ具体的な展示をご紹介いただけますか、よろしくお願いたします。

**我妻**  
今回の展示にあたって、本当はもっといろんなお祭りを取材したんです。ですが、展示が冬の時期であることと、冬を耐え忍ぶだけではなく楽しんで過ごすという柳津町の人々のしたたかな強さを伝えたいなと思ひまして、秋冬の祭りを抜粋して展示することになりました。

団子さし

一番最初、こちらは団子さしです。これは会津全域で行われていると思っんですけれども、こちらは斎藤清先生も以前訪れられたというそば処ふなきさんの船木キミ子さんから

いただいた団子さしの木です。こうやって団子さしとかお飾り、色とりどりのモナカ飾り、これを飾つて五穀豊稔を祈願するという小正月の行事です。私最初見たとき、絵本の童話のような世界だと思つたんです。

またこの団子さしの木はミスノキとも呼ばれているんです。このミスノキは燃えにくい木で、五穀豊稔と共に、火伏の意味が込められていまして。他にもこのミスノキをかまどにくべてそれでご飯を炊くと学業成就の祈願になるとか、本当にいろんな意味が込められていまして。この木はキミ子さんからいただいたもので、実際にキミ子さんのお家で持つる山に取りに行かせていただいたりして、こんなすごい立派な大きいものを取らせていただきました。昔はこんなもんじゃなかったというぐらいのお団子を刺していたそう、キミ子さんは腹ペコで帰ってきた子どもたちのためにあぶって出してあげていたそうです。

**小林**  
なぜこういう展示にしたんですか。

**我妻**  
キミ子さんのお家では植木鉢のようなものにこう刺して、立てて飾っていたんです。それで私たちのなかではもう立てるものだというイメージがあつたんですけど、他の地域では違うみたいです。

**小林**  
そうですね。上から柱に掛けたりして、枝が垂れ下がるような感じで飾るところもあります。そうすると船木さんのお家のやり方を真似てというか、それをイメージしてこうい

う感じの展示にしたんです。では次に行きましょうか。

センドモウシ

**我妻**  
次はこちらのセンドモウシと言われる行事です。西山の砂子原という、温泉のある地域の行事です。

**小林**  
西山というのはこの斎藤清美術館があるところからちょっと離れた山間地ですね。

**我妻**  
そうですね。車で私のノロノロ運転だと30分ぐらいかかっちゃう。

**小林**  
柳津と西山だと、同じ町内でも少し文化が違うみたいなのもあるんでしょうか。

**我妻**  
文化というか、何か人の気質とか色々違うなというのがあります。

**小林**  
その地区にあるものだったんですね。

**我妻**  
はい。これはそのセンドモウシという行事で使われる、麻殻でできた松明です。

**小林**  
松明なんですね。

ROUNDTABLE  
MAKE, USE & EXHIBITION



小林

宙に浮いてる感じが、我妻さんの意図を伝えてくれている感じがします。では、三つ目行きましょうか。

七日堂裸詣り

我妻

はい。三つ目は柳津町で最も有名な行事の一つなんじゃないかと思われれます。多分ご存じの方もいらっしゃると思うんですけど、1月7日に行われる七日堂裸詣り。そこで参加者に配られる牛王の矢と、参加者の方が実際に身に着けた下帯と鉢巻を展示しています。

小林

下帯っていわゆるふんどし的なものですよ。

我妻

そうです。はい。

小林

この展示方法も考えましたね。

我妻

はい。最初はただ伸ばして反物で展示しようかなと思っただんですけども、それだとやっぱり下帯らしさが伝わらないということで、三人で試行錯誤して。

小林

だってここに体があるように見えますから。

我妻

そうなんです。実際にこれ私を芯にして(笑)。



小林

下帯ってお祭りの中ですごく意味があるんだなというのを、私も展示で知ったんですけど、何て言うのかな、神様にお参りするための正装的な意味合いなんですよ。

我妻

そうですね。締める方も「下着ではなくてこれは正装だから下帯って言うんだ」とおっしゃっていて、締めたときも「気合が締まる」というふうにおっしゃっていました。

小林

七日堂裸詣りを象徴するようなものをこういう形で、しかもアクリルケースに入ることでもた何か特別感がありますね。

我妻

ありがとうございます。

小林

では四つ目になります。

ニンギョウマンギョウ

我妻

こちらが先ほどの砂子原地区と同じ西山で、その砂子原よりもっと少し奥、山のほうに行ったところにある胃中地区と呼ばれる場所で行われる行事で、ニンギョウマンギョウ、ニンニョウマンニョウというふうにおっしゃる方もいるんですけど、男女2体の大きな藁人形をつくって燃やすという行事です。これは自分の体の悪いところに割りばしを刺して燃やすことで、無病息災だとか悪鬼退散をういつ



た折りがこもっています。

小林

これも地区の方に展示用につくっていただいたんですね、特別に。

我妻

はい。本当に特別に。

小林

これは展示として対みたいな感じがよく出ているようにも思うんですけど、どんな意図があつてなんですか。

我妻

本当に迫力のあるものなのでこの迫力を殺さ



あるべき姿に近いイメージで空間の中に配置した

小林

ないような展示をしたいと思いました。離して展示するのは違うかな、2個でセットのものなので。男女2体というのが行事の中心的な意味合いを持つのでこういうふうには2体揃えて、ずれ落ちないようにまた線であつた迫力を出して展示しました。

という四つの年中行事から象徴的なものを選

小林

巻いてみたの？

我妻

そうですね。谷野さんに巻いてもらってこの形をつくって展示しました。

小林

そうでしたか。

我妻

巻くやり方も取材のときに、この下帯をお貸しいただいた方に実際に巻くシーンも見せていただいたんです。その動画とみんなにらめっこしながらこういう形に仕上げていきました。

小林  
では、トーク会場に戻りますが、我妻さんから一言、展示をご紹介するにあたって、伝えなかったポイントはありますか。

町の人たちの思いだとか記憶だとか

そういうものを伝えたくて

我妻

この展示では、やっぱり町の人たちの思いだとか記憶だとかそういうものを伝えたくて。物も本当に迫力があつて大事なんですけれど、こうやって壁一面を使って象徴的な言葉を展示するようにしました。

小林

形のない思いをどうやって伝えるかというのを考えてみたんですね。そんな協力隊のみなさんの思いも形になっているような気がしま

小林  
柳津町の秋冬に行われる四つの年中行事と祭りを象徴する物を用いて、その物に込められた思いをどう伝えるかをポイントに展示の手法を考えたということですね。さらに、リサーチのときに教えてもらった言葉と撮らせてもらった写真や映像を組み合わせた空間にすることで、みなさんの大事な思いを「伝えていこう、残そう、伝承していこう」とした今年の家宝展ということでしょうか。

我妻

ありがとうございます。まさにそのとおりです。

小林

ではトーク会場に戻ります。ありがとうございます。

山口

小林さん、我妻さんありがとうございます。二人が戻ってくるまでのつなぎというわけではないんですけども、塚原さんから、今見ていた展示の中で例えば「ここがちょっと苦労したんです」「みたいなのがあつたら教えてください」。

塚原

はい。ちょっと裏話的ではあるんですけど、

ROUNDTABLE  
MAKE, USE & EXHIBITION

ニンギョウマンギョウを美術館に運び入れるのがとても苦労しました(笑)。

山口

大丈夫でしたか、バラバラにならずにうまく運び込みました？

塚原

何とか。はい。みんなで力を合わせて。

山口

そうですね。大人の男性よりちよつと大きいぐらいですよ。180センチ超ぐらいは多分ある。持つてくるのは大変だったと思います。

谷野

四人で持つても重いぐらいでした。1体がすごい重くて。藁でできてるから軽いかなど思ったらめっちゃ重かったです。

山口

そんな話をうかがっている間に我妻さんが戻ってきました。じゃあここからはですね、今見ていただきました展示室がどういふふうにつくられたのか、あそこに込められたコンセプトはどういうものだったか、スライドなどを交えてご紹介をいただきたいと思います。今度は谷野さん、どうぞよろしくお願いいたします。

谷野

はい。よろしくお願ひします。それでは「やないつの家宝展2021着想から展示完成まで」

**町民と美術館が近くなるように**

谷野

くって。最終的に年中行事、お祭りに決まったんですけれども、なんでお祭りに決まったのかというところ、丑寅まつりなんです。私が事務室にあった丑寅まつりのポスターを見て、「今年が丑寅まつりだからお祭りなんじゃないんじやないですか」と我妻さんに言ったような記憶があります。勢いで決めたというか、このときはお祭りを展示するということがいかに大変なことかわかってなかった。お祭りのことを全然知らないから。私たちが当時知ってたのって歳の神とニンギョウマンギョウぐらいでしたよ。ね。

我妻

セントモウシも知ってましたね。

**協力隊に協力してくださる町民の方が**

**いらっしやるということ**

谷野

私は歳の神ぐらいしか知らなくて、最初どうすればいいんだろうと思ってたんです。取材に行くまでにはいろんな経緯がありまして、大体4パターンに分かれるんです。協力隊が直接仲のいい町民の方におうかがいして聞きに行くパターン。有名な町民の方なんですけれども、どうやってアプローチしたらいいかわからないということで、協力隊と仲のいい町民に仲介していただいて行くパターン。あとはこれが一番多いんですけども、町民の方から情報をいただいて、それで協力隊が調べて行くというCパターンがありました。最後にこれは1個だけだったんですけどDの偶然というのもありました。

ということで振り返ってお話ししているところ、2021の話をする前にですね、まず「やないつの家宝展」って何なのか、なんでこれを始めたのかをお話ししていきたいと思

います。私たちは柳津町地域おこし協力隊として、アートの力で柳津町を活性化させていこうという企画を考えています。歴代の協力隊も、町民と美術館が近くなるようにと色々なことをやってきたんです。この家宝展もその一つです。始まったのが2年前で、「やないつの家宝展」という展示でした。このときはまだ年が付いてなかったんですけども、このときのテーマはシンプルに家宝だったんですよ。家の宝と書いて家宝。何を展示していたかという町民の方が大切にしている宝物ですね、例えば思い出のコンサートのチケットだとか会津の天神様とか、あと何もありましたよ。

我妻

あと金子勝之さんのおいしい西山のお水とか。

谷野

それだけではなくてですね、武蔵野美術大学の学生たちが、協力隊と一緒にその町民のところへ取材に行つたときのエピソードとかそういうものをインスピレーションにして、作品に描き起こしてそれを一緒に展示しました。このときはパンフレットを配っていたんです。そこには町民の方の家宝にまつわる思い出が載っています。町民の言葉がどれだけ大切かというのは、もうこのときから始まっていたんです。

実はですね、この2021年家宝展で行つた取材先はかなりあるんですが、Cが一番多いのかな。Cが多いということは、協力隊に協力してくださる町民の方がいらっしやるということなんです。私たちが「お祭り調べたいんですよ」と言ったら町民の方が色々教えてくれたと。そうして教えてくれたからこそ、この家宝展が成り立ってきたんだというのを、今思い返しております。では、ここから取材について少し振り返っていかうかなと思います。七日堂裸詣りですが、これは去年の1月7日でしたよ。

**お祭りというよりは**

**これはお詣りなんだから**

我妻

はい。去年の1月7日に行つた取材ですね。

これは、当時美術館の係長だった新井田雅人係長から、ちょうど7日当日だったと思うんですけど、「ああ、七日堂行つたらいいじゃん」と言われて。本当に全くツテも何もなかったんですけど、係長が小池勇一さんといって粟饅頭で有名な小池菓子舗の会長さんにアポを取ってくださった。その方も町の大物なので、私は恐る恐るお饅頭屋さんに行つたんです。でも、本当に優しい方で、家へ上げてもらってふんどし締めるところまで見せていただいて、そのまんまもうマンツーマンで取材させていただきました。いつもだとお堂の中は男の人たちでもっとぎゅうぎゅうなんですけど、この年はコロナ禍の中で10人だけの精鋭でやつた年だったんです。それでも勇一さんは「この少人数でも行きたい。お祭りというよりはこれはお詣りなんだから、思いが

**町民のみなさんが主人公という感じの展示**

次の年は、民具をテーマにしました。なんて民具に変わったのかというと、このときにやっていった斎藤清美術館の秋の企画展が「斎藤清が見た日本求め続けた会津」という企画展だったんです。斎藤清が描いた日本の原風景を中心にした展覧会で、サブタイトルに「構図が、憧憬が」とあったんですけども、斎藤清にとって生まれ故郷である会津って何だったのかというのを問いかけるような展示だったんです。展示された作品の中に、会津の民具だったり、それを使ってる会津人があったり、が丁寧に描かれていた。家宝展のテーマを考える時にその絵を見て、民具というものに引き寄せられていったという感じで、2020年の家宝展は民具にテーマを絞ってやってみました。



あればこれが本当の七日堂詣りと言ってもらいたいんだ」というふうな男気を見せて、そのまま下帯姿で雪の中を走っていかれました。

谷野

実は七日堂裸詣りをちゃんと見たのこれが初めてだったんです。たった10人でこの雪の中を、しかも若い方たちじゃないんですよ。それがもう頑張って雪の中を走って上がってワッショイワッショイって言いながらやってるのを見て、本当に感動しました。今年は普通の七日堂裸詣りが見れたんですけども、去年のものは何かある意味特別な、やって良かったことだったんだなって思いました。では次に団子さしに行つてみたいと思います。先ほどお話があったように、柳津町役場の隣の隣ぐらにあるそば処ふなきさんという



こんな感じでお宿で使っているお膳、ご家庭で使っているワラダですとか、子どもの頃から何十年も使っている木製のそりだとか、粟饅頭屋さんで使っているお菓子の型とか、キッチンには町民の生の言葉を載せていて、やはりここでも言葉を大事にしています。奥のほうにある黒いパネルにも言葉が載っていて、この時は町民のみなさんが主人公という感じの展示にしてみましたね。

それで2021年はどうするかということにうながっていくんですけども、テーマが決まらない(笑)。民具の段階でわりと「もの」は出尽くしてしまつたんじゃないか、というふうになつちやつたんですよ。それで実は12月末というところ、本当はもう決めてないといけない時期だったんですけども全然決まってい



ところの団子さしを見学させていただきました。我妻さんはふなきそば屋さんとは仲良くなんです。

我妻

仲良くだと言わせていただけるとありがたいです。私が地域おこし協力隊としてここに来た時に住まわせてもらった職員宿舎が、このそば処ふなきさんがある龍蔵庵という地区の職員宿舎だったんです。そのときに龍蔵庵の方々に良くしていただいて。団子さしのお話を最初にお聞きしたのは他の龍蔵庵地区の方だったんです。でも、その方からそば処ふなきさんの団子さしが一番大きくて目立つからこちらに行つたらいいんじゃないかというところとで招いていただきました。

谷野

私も団子さしを飾るのを一緒にやらせていただきました。それから数日後に、飾つた後の乾いたお団子をもらったのですが、それがもうものすごい量で。一月ずつと食べていられるぐらいの量でしたね(笑)。そういうことで私も施しを受けながら、やらせていただきました。次は歳の神です。この歳の神は檀ノ浦地区というところのものなんです。この地区は柳津町の団地と言えはいいんですかね。西山の方で柳津に動機に来てる人や、私みたいな移住者が多い地区なんです。私が住んでいる地区ということで、直接区長さんをお願いに行つて写真を撮らせていただきました。写真が見づらいと思うんですけども、実はめっちゃめちゃ人がいっぱいいるんです、この燃やしてるところに。この日は朝から取材に行き、この歳の神をつくるところ、そして当日の夜に燃

やすところまで見せていただきました。樋ノ浦は移住者が多いということで、歳の神もあんまり迫力のあるものではないんじゃないかなと思っていたんですけど、写真を見るととても大きいことがわかると思います。結構大変そうにつくっていました。

こちらは先ほどもお話がありましたニンギョウマンギョウです。私たちがこの2021年の取材を始めるころには知っていた行事ですが、区長さんにお電話をして見に行ってもいいですかということで見に行きました。私と我妻さんと、あと学芸員の伊藤たまきさんとで取材に行かせていただいたんです。ほんの少しですが実際につくるのも手伝わせていただきました。我妻さんはニンギョウマンギョウって初めて知ったのいつぐらいでしたか。



**我妻** 初めて知ったのはここに協力隊として来た年、もうその年に金子勝之さんに連れて行ってもらいました。こんな行事があるんだと。たぶんそこで柳津のお祭りというものと初コンタクトを取ったような気がします。

**こんなにつくるのが大変なんだ**

**谷野** 私は話には聞いていたんですけど、この取材のときに初めて見に行きました。こんなにつくるのが大変なんだというの思いましたね。撮影に行った時は、一からつくって終わるまでずっといたのでとても寒かった



記憶があります。

次は般若会です。この行事自体は日本全国にあるんですけども、今回は柳津町の小巻地区で取材しました。小巻地区というのは、この美術館の川を挟んで向かい側の集落なんです。こちらには2020年の家宝展でお世話になった新井田順一さんという方がいらっしやいました、その方の紹介で行かせていただきました。この般若会の特徴と言えば何だと思えますか。

**我妻** 小巻地区の般若会では、前のほうに向けて参拝の方々が小銭を投げるんですよ。バラバラバラっとも本当に量が多くて。お坊さんもちよっと、いや怖いですよ、みたいな感じになるくらい量を投げるのが小巻地区の特徴ですかね。

**谷野** 私も「投げてみっせ」と言われて実際に小銭を投げてみたんですけども、投げた小銭が何と紹介してくださった新井田順一さんに当たってしまいました。(笑)。とてもびっくりしつつ、ちよっと申し訳ございませんと思いつつ、でもこういうものかなと思って楽しませていただきました。

次は7月の大日如来尊大祭と言っています、平たく言えば夏祭りですね。寺家町地区という、圓藏寺のすぐ下の商店街があるんですけども、そちらのお祭りです。圓藏寺の下にある大日如来様にお参りする行事ですよ。かわいらしい提灯も出したり出店を開いたりして。塚原さんがこの2021年の5月から協力隊になったんですけども、その塚原さんが初

めて行った取材がこれだったよね。

**ずっと続けてきたものだから、今ここで中止にはできない**

**塚原** そうですね。まずコロナが流行している中でもお祭りというものが中止にならないということに私はとても驚いて。その背景には、ずっと続けたものだから今ここで中止にはできないという町の方の熱い思いがあるんですよ。コロナ禍前の日常が1日だけ戻ったような感じがして、すごく楽しかったですね。

**谷野** そうですね。みなさん柳津町の方だと思うんですけど、この日はたくさんの方が来ていて。小学校の子もたちとか、本当に楽しみにしていたという感じで走り回っていたのを覚えております。この日は取材とは言いつつも、私たちが結構楽しんできましたよね。では次に熊野神社大祭という、柳津町の郵便局がある一王町地区というところのお祭りです。こちらもうゆる夏祭りというか、本当は寺家町地区の大日如来と同じように出店がたくさん出て盛り上がるお祭りみたいなんです。この年はかなり縮小してお参りだけという状況になってしまっただけです。ただ代わりにこの熊野神社の由緒に詳しい方がいらっしやいました、その方からもすごい濃いお話を聞きました。そのお話についてはちよっと展示で紹介しきれなかったのは残念なんですけれども、後々ご紹介できたらと思います。我妻さん、その濃いお話を聞いてどうでしたか。

**我妻** そうですね。私たちの中では神社って、たまにお参りに行くぐらいのイメージだったんです。けど、その方のお話の中ではもう日常的に神社に行ったり、そこで育ってきて、神様に見守られて宿題やったり遊んだり、神様に見守られて過ごしてきたんだというお話があつて。神社って町の人たちとこんなに近いものなんだというのを思い知らされる取材になりました。

**谷野** そうですね。その方のお話によると、この熊野神社では子どもたちが集まって勉強会をしたりだとか、鬼ごっこやかくれんぼをして遊んだとか、子どもたちが育っていく場所でもあつたということでした。そういえば私も小さい頃に神社で遊んだ記憶あるとか、そういうことを思い出しました。

**こういう神様との付き合い方があるんだ**

次のお祭りも神社系です。愛宕神社大祭と言っています、柳津町の門前町地区のお祭りです。こちらのお祭りが、神社にお参りしに行くだけかと思つたら、そのお参りしに行くまでがとても大変です。この愛宕神社というのが山の登って登って登って頂上に着いて、しかもそれが朝の5時からというところで(笑)。とても大変な取材になりましたね。塚原さんが来て最初の、一番取材っぽい取材と言えはこれだったんじゃないかなと思つんですけど、どうでしたか。



**我妻** 私の想像よりはるかに険しい山道を、30分ぐらいみんなで息を切らしながら登ったんです。でも登り切ってみたら80代ぐらいの方もいらっしやって、「ええっ」て。それで、登頂したあとに社の中でみんなでお酒を飲んだりという、ちよっと宴みたいな感じのことが行われてたんですけど、お二人はそこに参加させていただきましたよね。

**谷野** はい。参加してしまいました。一緒に山を登ってお参りしたこの達成感というのがあつて。それは門前町地区の方も感じていたのかなと思つて、お堂の中で宴会していたのにもちよっとだけ交えていただきました。そもそもお堂

の中で、神社の中で宴会するという発想自体私にはなかったんですけども。我妻さんはどうでしたか。

**我妻** 神社の中は神様のいる場所というイメージがあるので。でも、その中でみなさん少年時代に帰ったかのように、楽しそうに遊びながらお酒を飲んでいました。こういう神様との付き合い方があるんだなというのを、教えていただきました。初めて会った方々ばかりだったんですけど、さっき言った達成感で仲良く楽しく宴会させていたんじゃないかなと思いました。

**谷野** そうですね。お祭りってただ肅々とやるだけではなく、楽しんでやるの一番感じたのがここだったかなと思いますね。次は小巻の豆ぶつけという行事なんですけれども、これは我妻さんにどんな行事か聞いちゃつてもいいですか。

**我妻** どんな行事かと言うと婚礼行事なんですけど、そのまんま言ってしまうとお嫁さんに豆をぶつける行事というか。話をやって肅々と進めていた中で、突然みんなが豆を投げ出すので本当にびっくりするような行事なんです。さっきあつた般若会と同じ小巻地区の行事で、豆とか小銭とか投げるのが好きなのかなと思えました(笑)。

**谷野** この取材は本当の結婚式を見たわけではなくて、結婚式をこういふふうにやってたんだよ

# ROUNDTABLE MAKE, USE & EXHIBITION



願います」ということで何とつくっていただくました。

**私たちの目で見た「もの」**  
**耳で聞いた「言葉」を**

ニンギョウマンギョウができたからと言ってすべてが解決するわけではない、そのあといろいろな展示案が浮かんで消えていきました。最初はアートテラスという部屋で展示することを考えていたんです。でも、ここは窓から光がめっちゃ入ってくる場所なんです。それで見せ方が難しいんじゃないかということ、結局ライブラリーコーナー、今展示している場所になりました。こんな感じで窓沿いに色々並べてみようということ

やってみました。今の案に大分近づいていったのがライブラリーコーナーの案ですね。この案ではニンギョウマンギョウの間に白い幕が書いてあるんですけどこれが何だっただかというところ、ここに「言葉」を書いて展示する案が出てきました。家宝展を表す象徴的な言葉をピックアップして展示しようというのはここから始まりました。この時は写真の選別もあって、例えば葉を編んでいる写真だと手仕事の展示みたいに見えちゃうんじゃないかということ、ボツになりました。ニンギョウマンギョウの間に大きいパネルで言葉を載せたいんじゃないかということ、最初は言葉がとてつもなく長かったですよ。それがさつき展示会場で見えたように、短く短くするのもまた結構苦労しました。

こうして展示案をつくっていききました。七日堂標詣りの下帯は最初、実際に身に着けるときの形にするんじゃないかと、伸ばして布のようには展示しようとしていたんですけど、これを展示するぞとなったときにあの形に決まりましたよ。

ちなみに展示された言葉はですね、私たちが文字を印刷してカッターできれいに切ってそれを壁に貼ったという苦労がありました。そこから辺が実は展示の中で見ていただきたいところでもありますね。

そんなふうになかなか苦労を経て、「もの」やないの家宝展2021」の展示ができあがっていったわけなんです。でもこうした作業を通じて、私たちの目で見た「もの」であったりとか耳で聞いた「言葉」をみなさまに見えようという形にすることで、私たちの感動を伝えるというのが家宝展なんじゃないかなと思えました。すみません、長くなってしまってます。以上です。



谷野  
ありがとうございます。そのたまたまというのが、やっぱり私たちと町の方との関係を築いていったからこそ起きた奇跡だったのかなと思います。

次は九月堂御籠り（おこもり）と言って毎年9月30日に圓藏寺にこもって、お経を唱えたり色々やるんです。外で太鼓をドンドンと打ち鳴らしてにぎやかなお祭りです。柳津町で



我妻  
そうですね。すごい長い大きい綱を全部で四つにつくって、地区の鎮守様に1本と圓藏寺に3本納める行事です。

**もつと地域おこし協力隊の  
目線が伝わるような展示が  
いいんじゃないか**

は仮装大会という印象が付いてしまっているみたいで。こちらは先ほど話していたセンドモウシですね。泥まみれ煤まみれ土まみれになったとお聞きしております。

次は綱打ち構中ですね。こちらは柳津町役場周辺の安久津地区の方々による行事で、綱をつくるのでしたつけ。

谷野  
そんなこんなで取材を重ねていって、いよいよ展示ということになったんですけど、お祭りが13個もあつたら全部展示できないのではないかといいことになりました。冬のお祭りに絞ることにしました。初期の頃は、お祭りを展示するに当たって、①写真メインの展示、②映像メインの展示、③立体メインの展示ということ、ものすごく展示の案が挙がっていたんです。最初はやっぱり「もの」を展示したいよねというふうに考えていたんです。でもお祭りってほとんどのものが最終的には燃えてなくなってしまう、そもそも展示するものがないんじゃないかということで、写真や映像メインにした展示を考えていました。写真を壁一面にパインと貼って、正面の壁には映像を流したりして、ものは団子さしだけという、映像と写真に偏った展示だったんです。でも、これはボツになりました。なんでボツになったのかというと、柳津町も頑張っていて、観光パンフレットなんかにお祭りや行事の写真はものすごく紹介されているんですよ。ネットで調べてもかなり出てくる。そうすると、それらの写真と私たちの写真とに差をつけるのが難しいんじゃないか。もつと地域おこし協力隊の目線が伝わるような展示がいいんじゃないか、ということでも考え直しました。

地域おこし協力隊だからできるということと、私たちに何ができると考えました。そこで出てきたのが、町民の声、言葉を拾うことができる、そして私たちに何よりも一緒に祭りに参加した経験があるということ、この「もの」と「言葉」の展示で協力隊が感じた感動を伝えようということになりました。

**山口**  
谷野さんありがとうございます。三人の思いや経験が伝わるような内容のプレゼンテーションだったと思います。参加していただいているお三方からもコメント等寄せたいです。また、当ライフミュージアムネットワーク実行委員会の委員も務めていらつしゃいます。橋本誠さんからお呼びします。橋本さんには今の3人のプレゼンテーションに対するコメントも含みつつ、ご用意いただいた事例の紹介のほうもお話しいただければと思います。よろしいでしょうか。

**橋本誠**  
はい。ご紹介ありがとうございます。今日は事例としてどういうものを紹介するといのかというのをずっと迷って、まだ迷っているんですけども。

展示室のことだけじゃなくて、どういう取材をしてどういうことを考えながら展示をつくったのかということも聞かせていただいて、その奮闘と試行錯誤がとも伝わってききました。ということで、聞きたいことがすごい出てきちゃっているんですけども、そういう時間にしていいですか。

**山口**  
大丈夫ですよ。

**橋本**  
ありがとうございます。そつたな、じゃあ短く答えられることから聞いちゃうと、まず三人はどういう地域で育って、こういうお祭りとか年中行事の体験がどれくらいある方々の視

なので結局ものが必要じゃないかということ、で振出しに戻ったんですけども、私たち美術大学出たんだからつくれるんじゃないかと最初を考えておりました。それが甘い考えだったということ、お祭りをどうやってつくるかという。最初は自分たちでつくるうとして、背中の方に教えてもらえばいいよねというふうで考えていたんですけどもこれが無理で。ただ展示案は考えなくちゃいけない、ニンギョウマンギョウがあるのとなないのとは全然展示が変わっちゃうから、これをつくれるかどうか早く決めようということで、背中の方にお願いに行きました。

このニンギョウマンギョウ制作依頼についてはものすごく色々なエピソードがあるんですけども、最初は奥会津に知り合いの多い金子勝之さんに相談してみました。そこで、区長さんに言ってみてはどうだろうかということになりました。とりあえず言ってみました。そしたら断られました。最初は、「もうみんな高齢だしつくるのも大変だから」ということ。それでもやっぱりニンギョウマンギョウを展示したいという思いがありまして、もう1回交渉に行きました。背中の方に会いに行くと直接お願いしたんですけども、そつしたら「一番中心になっている人に聞いてみますか」とおっしゃってくださった。一番中心になっている人というのがもう九十何歳ぐらいの長老的な方なんですけれども、この方が何と「つくるならなんでも、つくるんないけねえなあ」と言ってくれました。それで地区の方々の総会で話していただいて、背中地区の方々の合意が得られて、「総会でやることになったからよろしくお



点なのかというのは、ちょっと確認させていただきたいなと思いました。どなたか代表しておっしゃっていただいても、それぞれで。

**山口**  
では、我妻さんからお呼びします。

**我妻**  
私は東京の港区のお台場というところで生まれました。お台場は埋め立て地で、建物の屋上にちよつと勧請した神社とかそういうのしかなくて。本当に神社とかお寺とかそういうものに関わりがないまま育ってきたんです。本で読んだ知識だけのお祭りとか年中行事はさつと憧れてきて、本当に憧れの存在でしかなかったの、ここに来て初めて触れました。

# ROUNDTABLE MAKE, USE & EXHIBITION

**山口**  
 ありがとうございます。塚原さんどうでしょうか。

**塚原**  
 私は埼玉県のわりと田舎のほうで生まれ育ったので、地域の神社で縁日の屋台が並んだりとか、そのぐらのお祭りはあったんですけど、柳津ほどのダイブなお祭りはなかったですね。

**橋本**  
 ダイブなお祭りっていう表現、ありがとうございます。

**山口**  
 谷野さんお願いします。

**谷野**  
 私は東京都の豊島区に生まれたくてだけれども、結構周りには神社があつて小学校の一環でその神社のお神輿を担いで町内を歩いたりとか、そういうのはありました。あと夏祭りとか盆踊り大会とかは普通にありましたね。でも、そのお祭りに関わっている人たちはどんな思いでやっているのかとか気にしたこともなくって、やっぱりここにきて初めてお祭りってこういうものなんじゃないのかなって自分で考えるようになりました。

**展示とは何か**  
**橋本**  
 ありがとうございます。僕のスペックは塚原さんぐらいかな。岡山で育っているんですけど、お祭りなんかね、やってはいけなくて下手すると軽トラで神輿を引くみたいな面白さでもあり難しさでもあると思うんですけど、僕の場合はまさにそれを最初に実感したのがこの街でした。普段憩いの場になっているような場所、こういう物をいっぱい並べてこれから楽しいイベントをやるんですけど、言っても、くつろぎたい人にとっては邪魔でしかないですよ。でも、案外始めるとそういう人が一番楽しんだりするみたいなのがあたりする。普段行われていないところ、やるというのはいくつかあったりもするのかなと思うし、子どものワークショップを見ている大人のほうがむしろ楽しそうみたいな話もあったりする。そんな風景を傍らに孤独に、孤独にというか自分に向き合って制作をする作家もいたりして、創作をするとか何かを感じて表現するということが、それが誰にどう届くのかみたいなことをすごく意識したのがこのまちですね。



逆に言うと美術館とかギャラリーでやっているお祭りとかもテーマで流して、でも一応あるみたいなの。ここ10年ぐらいいろいろな地域の芸術祭とか回るようになってきて、地域のことを併せて知るといって目標でもお祭りとかを少し体験するようになっていて、まさに大きなテーマと感ずいて。最後に自分たちが見聞きしたことをどう伝えるかということ、展示をつくっていったというのを見て、すごくいいなと思いました。本当にね、取材も大変ですけど、やっぱり展示とは何かという話だと思わなくて。選んでいくということは、何を残さないかということだから、そういう作業の連続ですよ。

さらに言葉を集めるということも、僕も編集の仕事もやっていますけど、すごくいろんなことを考えながらやる作業だから。四つぐらいの文節に、あの膨大な量の取材をある意味託しているわけですよ。そのような集中と選択がないと、やっぱりポイントがわからなくなってしまうので、すごく悩まれたらと思います。ただどこかここにぐっと来たんだなということはずっと伝わったし、リモートでの紹介で現場での体感ではないにしても、そういう展示なんだなというのを思いました。それから、何を題材にしていこうかということ、3年間の展開をお聞きしましたが、これからも続けられていくっていいですね。

**我妻**  
 定期開催することで町の人たちにも浸透していった、美術館とか家宝展に近い存在になってくれるのかなと思うので、できればこの先も、私たちが卒業しても続けていければなと思っています。

**橋本**  
 ありがとうございます。最初にこの企画の前提として町と美術館を近付けるということをおっしゃって、なるほどなと思ったりして。あの意味、メインターゲットは町の方というふう理解して合ってますか？展示はどれぐらいの期間やっていて、お客さんはどんな人がどれくらい来ていたという感じなんですかね。

**我妻**  
 そうですね。12月に始まって、一番来てくれたのは協力してくださった町民の方々かなと、体感としては思っています。

**橋本**  
 そうですよ。協力してくれた方、来てくれますよね。ちょっと話が飛びますけど、この前のライフミュージアムネットワークのラウンドテーブルでも「生きている人を扱うと生きている人が来る」という名言が原爆の図丸木美術館さんから出ました。いろんな人と関わって展示をやると、またそこで共有をもう一回し直せるという体験もすごく面白くて。そんなことも自分のいろんな企画の中であつたなというの思い出しました。とりあえず感想と気になることだけワツとしゃべっちゃったんですけど、自己紹介を兼ねて、秋田ではどんな展示が行われているのかも少し話せるといいのかな。秋田じゃないことも話したくなってしまったかもしれないんですけど。

**展示をするという事は見てもらうということ**  
 僕は81年生まれで今40歳です。生まれた瞬間



え方を変えたりとかいろいろ企画があつたなと思います。

と、本当に関係してくれている人とかその世界が好きになんか来ないですよ。有料だったりと余計。だから街中で何か活動する、そうじゃないんだ、いかに自分の普段の仕事のフィールドで出会う人について決まっちゃっていかんかというのを逆に感じるわけですよ。そういうことで、先入観を持って「こういう街だ」という人が多いいんでは」みたいなことを言われがちなまちだったんですけど、本当にいろんな人がいるから1周回ってシンブルに、昔ってどんなまちでもこんな感じのいろんな人がいたのでは？みたいなことを思ったりしました。

柳津町はすごく顔が見える地域だと思っので、いろんな人に会われて活動されると思うんですけど、ただでさういう中でまだ会ってない人がいるかもしれないとか、今回の展示誰に一番届きたいかとか、2番目ぐらいに届きたい人ってどういいう人だろうか。展示をするということを見てもらうということなので、そういうことをすごく意識するようになったんです。これ自己紹介しながら展示をする意味みたいなことについて話し始めてみますけど、今これをいせながらそんなことを思い返しました。この寿町は有志で始めた企画なんですけど、こういうものが経験になって、東京都内のあるような街中でNPOと一緒にアートプロジェクトをやるといって東京アートポイント計画の立ち上げに3年ほど関わっていました。豊島区のプロジェクトにも少し関わった記憶がありますけど、僕が主に担当したのは墨田区でしたね。屋台を引きこみユニバーシオンしながら活動したりとか、おみくじをお店の紹介に読み替えちゃうゲームっぽいアートのプロジェクトとか、こういう古民家の風景の見



# ROUNDTABLE MAKE,USE & EXHIBITION

椅子をいろんなところに置いてみる。その置く位置関係で滞在時間も変わるんじゃないかとか。小上がりみたいなところに寝そべろうと思えばそうできる。コロナだからあんまりべったりは気になるけども、その材質とかも気にしながらくつろげる場所をつくったり。だから展示空間の設計というよりも、いろんな過ごし方を誘発するような空間づくりというのをごく意識していただいたので、それがとても良かったなということは今思い出しました。コンテンツの見せ方ということと並行して、こういうことももしかしたら考えられるのかなと思ったりしました。

## 展示をネタにゲストとか お客さんと話すというのは、 どんな企画でも僕は宝物だなと

というくらいいいかなとも思いつつ、秋田でも民芸工芸系の展示を結構やってるので少しだけ紹介をしたいと思います。特に参考にせよとかそういうことでも何でもないんですけど、ネタ的に少し事例の紹介ということで。まず最初に見るのは「アウト・オブ・民藝」。これはですね、僕が秋田に来るきっかけになったことなんですけど、地元のケーブルテレビの社屋を共同で活用しようというプロジェクトがあったんです。それで、BIYONG POINT というギャラリーをつくりました。その運営を秋田公立美術大学でつくったNPOが行っているんですが、企画の公募をやっているんです。そんな中で生まれた展示です。

「アウト・オブ・民藝」という本が数年前に出てるんですけど、これは僕の知人でもある岡山にいるデザイナーの軸原ヨウスケさんと



大阪にいる中村裕太さんの2人のユニットが出版しました。その秋田版をやるうみたいで、ざっくり言うとそういう企画でした。秋田のある時代の民藝の動きを探る、みたいな展示なんですけど。文献資料と物を展示しながら、柳田國男みたいなキーパーソンや地元秋田の版画家である勝平得之、もしかしたら斎藤清みたいな存在と言ってもいいかもしれないんですけど、そういう人たちがその地域のいろんなものどう関係しているのかというのを線で結んで示している。彼らのすごく面白かったところは資料をめっちゃ読み込んでいて、とどころなんです。この月刊誌で対談して誰と誰が微妙にすれ違っているみたいな、結構細かい解説を彼らなりの視点で入れてるのが面白くて。読んでると、秋田もかまくらとかい

ろんなお祭りがあるということをもっと面白くしたりするし、結構民藝のコレクターがいるんですよ。そういうところからも、うまく物を借りてきて展示したりしてましたね。こんな感じで、トークもやったりして。展示をネタにゲストとかお客さんと話すというのは、どんな企画でも僕は宝物だなと思っております。展示自体に足を運びづらい方も、多いでしょうから。

同時に、これは秋田に来た理由の一つでもあるんですけど、自分が関わってきたものが拠点性がないもののほうが多かったんです。アートプロジェクトに関して言うと、何か始めるのも簡単だけれどやるのも簡単なみたない感じがあって。箱物行政みたいなものって批判されがちだし、箱はむしろ物理的に壊すことにもいろんなコストとか時間が掛かるという話もありますけど、特に行政のものに関しては実は拠点性があるということは何となく予算と人がそこにあるというイメージにつながる。今プロジェクトばかり新しく増えるけど、むしろ拠点のほうにいろんなことが統合されていく近い未来があるとしたら、むしろ拠点にそれまでにやってきたことだけではないいろんなミッションが託されていくんじゃないかなと思っんです。これはそういう事例を見たというのものもあるし、自分の感覚的な予感でもあります。あるいは自分とか自分の周りですらいうアートプロジェクトの仕事をしてる人たちがどういうところで今後活躍できるのかということを考えて、拠点がある程度担保するところがあるのではなからうかというのを思っています。

## 誘発するような空間づくり

コロナ禍になる直前、ほぼ2年前です。秋田面白くから来なよと藤浩志さんにずっと言われていて、遊びに来てみたら、こんな建物があった秋田市文化創造館というものになろうとしている。でも何をどうやっていくかみたいなことがあんまり決まっていなくて、そんなに大きい空間ではないんですけど、3階建



てですけれども実質吹き抜けなので2階建てみたいな感じです。1階はもともと県民ギャラリーみたいな感じで貸館中心だったらしいんですけど、一応多目的に使えるようにしてカフェとショップを入れたりしていて、あとは開口部を屋外とつながりを良くしたのでフリースペースとしても使える場所です。リノベーションなので少し昔の雰囲気も残ってますけど、普通に展示がしやすい空間。



んなことを建築家の人と一緒に考えて展示をつくってました。

で「これはどうやって使ったものかと思いませんか」みたいなことをお客さんに問いかけながら会場案内をされるんです。展示そのものはシンプルに見える、つくったものをとりあえず効率的に見てもらおうというフォーミングでもあるんだけど、そこにいろんな情報とかイベントを重ねて対話の機会にするということがやっぱりできるな。僕はプロジェクトも物足りないというか、展示とブラスアルフアヤるとか、プロジェクトと展示を交互にやるんとか、何かそういうことの面白さをいつも考えてしまいますね。

**地域の拠点を上手く使いながら、プロジェクトと展示というものを合わせ技でやっていく**



アートプロジェクトはプロセスが大事とよく言われるんですけども、やっぱりたまに展示という形に持っていくことで得られるものがある。それは、プロセスを追い切れなかった人が「あ、なるほど、これそもそもこういうことが気になってたのね」「こういうことが言いたかったのね」と気づくとか、シンプルに「格好いいね」とか、あるいはこういうことなら自分たちも参加してみたいと思うとか、またそれが何か次につながるということがあるはずなんです。家展展だったら、「それならうちにもあるわよ」みたいな人が多分たくさんいると思うんです。それがまた次に何か始まるきっかけになるみたいなことが、プロジェクトと展示を両方やっていく面白さであり、秋田の話に戻すとやっぱりそういう時に、何かこうやって使える場所があるというのはあり



がたいことなんです。常設展示的なこともしようと思えば多分できますよ。何かそういうことも含めて、いろんな地域の拠点を上手く使いながら、プロジェクトと展示というものを合わせ技でやっていくことをずっと考えている気がしています。みなさんも似たような形で活動されてきているようにお聞きしたので、何かその辺のごまごまの手応えとかね、今の悩みだとか、まだまだアイデアがあつて、みたいなことかあつたら色々聞きたいなと思います。今後の展開とかね。今、僕だけ展示の感想をお話したんですけども、せっかくなので中野さんと福留さんにも展示をどう見られたのかというの、またちょっと違う視点で感想をいただく面白いかと思ったりしました。

**山口**

ありがとうございました。本日はお二方、委員、賢者の方にもご参加いただいておられます。まず最初に只見町の中野さんから一言、お話を聞いた感想などがあればと思います。三人とは面識も多少あるとは思いますが、一応ご自身のご紹介兼ねて、短くても結構ですのてよろしくお願ひいたします。

**ミュージアムなんか全然関心がないという人に**

**委員・中野陽介**

ご紹介いただきました只見町の中野です。只見町プナセンターという役場の組織と役場のユネスコエコパーク係の両方の仕事をやっています。専門は森林というか樹木のことをずっと研究していて、若干この場にいるみなさん

ないかなというふうには思っています。

**我妻**  
どのお祭りも参加している方は大分年配の方です。若くて40代とかそれぐらいの方が多いので、ほとんど60代以降みたいな感じで。継続は難しいけれども、本当に思っただけで、強い思いだけでやると毎年欠かさずやっていられるんだというところで、みなさんも心配しています。私たちに何かできるなんというのはおおこがましいとは思っていても、このうやうやうなところでも美術館で展示することで、ほかの町や地区外の人たちにも関心を持っていただくことで、継続するのに少しでも役に立つのかなとは思ったりはします。

**山口**

ありがとうございます。次に福留先生からも一言お願いいたします。福留先生は昨年度までライフミュージアムネットワーク実行委員会委員を務めていただきました。今年度は賢者という立場で色々ご意見を頂戴してあります。ぜひご感想などがあればと思います。

**自分たちの地域にはこんなに豊かないろんなものがある**

**賢者・福留邦洋**

どうも今日はありがとうございます。ただ今ご紹介いただきました岩手大学の福留と申します。私自身は民俗学とか伝統芸能とかには全然知識を持っていないんですけども、都市計画、特に災害復興とか災害調査とかをやっています。昨年度委員をさせて頂いたたのも、福島の浜通りがどのように復興していくかというところにアートや地域の歴史が関わっていたりという接点があったからでは

とは毛色が違うのかなと思いつつ、一方で私も民俗とかそういうものにも興味があつて、プナセンターの展示でもそういうところを少しかじっている人間になります。

まずは斎藤清美術館のみなさん、展示を見せていただいたありがとうございます。私も地域のお祭りを見に行くことをプライベートでも結構やっているんですが、そのお祭りに当たり着くまでのプロセスというのが結構大変で、みなさんに4パターンぐらいあるとご紹介してもらって、「ああ、あるある」と思いつながら見ました。やっぱりあそこにとどまらず、着くのが外から来た人間にはなかなか難しいとは思ってまして、それを乗り越えてお祭りを見たときの感動みたいなものがひしひしと伝わってきました。

今回の展示は町民の方にミュージアムをより身近に感じてもらうというのが一つの目的であつたということでした。そうすると、あのニンギョウマンギョウウでしたっけ、自分たちで最初つくろうかと思っただけでなく、町民の方に協力してもらって結果的につくられたという。それが逆に良かったのかななんて、僕なんかは思いました。そこで町民の方との関わりができたということですから、それで町民の方も展示を見に来てくださったのかなと思うので、そういうプロセスがすごく大事だったのかなと思います。

私もミュージアムで働いてますけど、地元のキーパーソンみたいな人をやっぱりすごく頼りにするんです。でも、実は来てもらいたい人というのは、全然もうそこからは外れていく。ミュージアムなんか全然関心がないという人に何とか来てもらいたいと思つてはいるんですけど、たぶん関心がない人ってその人

祭りというよりは、まさに自分たちの地域の続いているものとしてやっていくというか、ちょっと極端な言い方もしませんが、やりたいからやってるみたいなところがかなりあります。特に、こつちに来て個人的に衝撃を受けたのは、結構若い人、小学生、中学生、高校生といったような人たちがかなりそういったものに関わっている。例を挙げると、虎舞とか鹿踊りというような伝統芸能。あと七夕とかですね、そういうものにはかなり熱心に関わっている若い人が多い。それはちょっと大げさかもしれませんが、盆や正月に地元で帰省するというよりも、その夏祭りがあるから帰るとか、虎舞があるからそこに戻るんだみたいな勢いで話さなければ。また、それをただ見るだけじゃなくて、そこで笛を吹いたり虎の衣装の中に入って踊ることを、若い人たちが義務感とか強制ではなく、まさに自分がそこに関わりたいから、やりたいからやっているんだと、震災直後から続けていらつしやるとかかなり驚きました。

今日のお話でも年配の方が多いというお話でしたが、その年配の方たちには義務感もあるのかもしれませんが、でも、やっぱり自分たちが若いときからそれに関わってやってきたということでの面白さという喜びと喜びを言いたいです。さっきお神酒を神社の中で召し上がったというお話もさせて頂いたんですけど、やっぱりその方なりにそれをやることの楽しさだったり、ちょっと言い方良くないですけど、やりたいからやっているとみないところがあるんじゃないかなというふう

# ROUNDTABLE MAKE, USE & EXHIBITION

間関係からは全然入ってこない人たちのなかで、そういう人たちにどう関わっていくかというのが課題だなと思つています。そうすると、あの4パターン目の偶然というのが非常にいいパターンというか、期待しているところではありますね。そんなことを感想としては思いました。あと気になったのは、柳津町のみなさんがお祭りをどういうふうに認識されているのかということ。大事だとは思つてはいるけど、お祭りの継続性、若い人が引き継いでいるのかというところはちょっと気になりました。只見町では若い人は少なくなつてきてて行事を維持していくのがなかなか大変なんです。仮にもし柳津でもそういうケースがあるのであれば、こういった家展展でそこにどういうふうに関与できるのかみたいなことも、考えていく必要もあつたのかなと思つました。感想になりますけども、ありがとうございました。

**行事や生活の継続性**

**山口**

中野さんありがとうございます。確かに今中野さんに言っていたような、行事や生活の継続性というのは、特に民俗や歴史関係、地域を題材にする上では非常に重視されることですね。これから先どう維持していくのか、あるいは維持できないとしたらそれをどう記録していくのかというところも含めて。例えば今回、三人が見た柳津のお祭りというのは、そうした継続性という面から見たら現状どんな感じに見えたでしょうか。教えてくださいいただけますか。

## 地域の人たちがやっていることをより勇気づける

そういう意味で、今回こういう企画を催されているわけですから、同じ柳津の中でそういうお祭りを知らなかった人たちにもそれぞれのお祭りの面白さという魅力みたいなものが少し伝わるようになると、柳津の地域おこしというかまちづくりにつながっていくんじゃないのかなと思います。これはすぐには難しいのかもしれないけれども、特に小学生であったり中学生、そして高校生といったこの先10年20年後ぐらいにそのお祭りがある程度担えるようになる方たちにはですね。自分の前任地は新潟だったんです。新潟でも小さなお祭りは結構あるんですが、太鼓一つ見ている、やっぱり昔からやっている70代80代の方が小学生とか中学生に伝えていく。またその地元の小中学生だけではなくて、みなさんのような地域外から来られている20代30代の方にそういう70、80の方が伝えていく。またその20、30代の方が祭りの日を目指して真剣にそれに取り組んでいく。その中でやり取りを通じて、高齢の地域の方にとっても色々と思うところが出てくるものなんです。だから、せっかくこの企画が地域の再認識、再発見を促しているわけなので、可能であればそれを知らなかった若い人たち、もしくは若くなくてもちょっとそういうのに興味を持って関わろうとしている人たちへの喚起というか掘り起こしにつながるといいなと思います。みなさんのような町外から来られた人たちが一人でも二人でもそれに関わることが、関わっている人数以上に、その地域の人たちがやっていることをより勇気づけるというか、間接

的かもしれませんがいわゆるエンパワーのよくなものになっていくと思います。そのことにつながっていくんじゃないかなというふうに感じました。まとまりない感想になりましたけど、私からは以上です。今日はどうもありがとうございました。

**山口**  
福留先生ありがとうございます。今のお話の補足的なところでおうかがいしたいんですけども、今回ご紹介いただいたお祭りというのはいずれも地域が違っていたと思うんですけど、どのくらい参加者がかぶっていたり、若しくは全くかぶっていないのかみたいなことをお伝えいただけたいと思います。

**我妻**  
そうですね。今回展示している四つだと、「団子さし」は全域でやられているんですけど、ほとんど地区は別になっています。柳津町というのは西山と柳津という地域に分かれているんですが、地理的にも西山と柳津だと三島町を間に挟む、みたいな地形になっています。元々は別の村だったんですけど、昭和30年に合併をして柳津町になっています。その中で、いまだに地域差が残っています。柳津の人は西山でこんなことやっているの知らないし、西山の人は柳津でこんなことやっているのは知らない、みたいなことは本当にみなさん口を揃えておっしゃいます。今回の展示を見ても、「へえ、砂子原はこんなことやってたんだ」というふうにおっしゃってくれる方もいるので、それは本当に福留先生のおっしゃるとおりだと思います。

**山口**  
ありがとうございます。実は今回ゲストとして、谷野さんのスライドでイラストにも出ておりました柳津町在住の金子勝之さんがいらっしゃっています。今回の展示を柳津の方が見て、展示やこの三人の活動に対してどういう感想を持っているかというのを聞きできればと思います。金子さんお願いできますでしょうか。

## 見せ物じゃない

**金子勝之**  
はい。突然のゲストになりました。金子勝之と申します。私は70歳で、柳津町の西山地区にどっぷりと浸かっている、そんな立場なんです。子どもの頃からですね、鳥追い行事とか虫送りだとかという子どもの行事をずっとやってきて、それは子どもの楽しみとしてやってたりしました。私自宅からほど近いところに40年前ほどに入りまして、それが先ほど言っていたセントモウシをやっている砂子原地区というところなんです。なので40年やっています。やってますというか交ぜてもらおうというか、もう自分たちがやらなきゃいけないという、そういう立場です。それともう一つ、ニンギョウマンギョウというあの行事も10年ぐらい毎年見に行っています。その中で色々思うことがあります。今回先生方のお話をお聞きして、確かに持続することとか今後どうなるかということとか、そういうようなことがやっぱりたくさんあります。ずっと私も考えていたんですが何もできないままなんです。ただ私らにしてみたら、他地区のそういう行

これはどうにかしなきゃならないことはあるにしても、しかし見せ物じゃない。この先どういうふうにするかについては私もわからないです。しかし、やっぱりやっていたらどうなるか。形を変えてでも、小規模にするにしても、それでもやっぱり続けることに意義があるんじゃないのかな。4年、5年前になりました。すかね、ニンギョウマンギョウの材料とする稲葉がなくて、「もう今年はできない」というふうに通話いただいたことあったんですよ。「できない理由は何？」って言ったって、「稲葉がもうない」と。稲葉あったらやってもいいのかもしれない。「まああははは」と言ったら、「人はまあい」と。「稲葉あったらやってもいいのかもしれない」って言うから、それで私、今年ぐらいたった雪の多い年だったんですけど、雪を掘って、集めた稲葉を軽トラに積んで「これでどうだい、やれないか」みたいな、そんなようなことをやった記憶があります。それでどうにかできたんですよ。やめてしまったら復活するのはたぶんかなり難しいのではないかと、何とでもやっていたらいい、そのために自分ができることはそのぐらいたった雪の多い年だったんですけど、それ以来稲葉を集めて持っていたりして、それ以来稲葉を集めて持っていたりして、それが失礼ながら博物館入りしないように我々は頑張らなきゃいけないのかなと、そんなふうに思いました。

**山口**  
金子さん、ありがとうございます。このラウンドテーブルのテーマが「つくること・つかうこと」なんですけど、金子さんに今おっしゃっていただいたように、つくること、あるいは使うことの意味合いというのが、やは

事についてはとりあえず見に行く。見に行くと、「ああ、いいの見せてもらいました、ありがとうございます」と、毎年その言葉で帰ってくるんです。私らができるところは一つだけであって、地区の人もそんなようなことが一つの張り合いになってくれるのであればいいなと思っています。だから地域おこし協力隊の人たち三人、あるいは自分の知り合い二人、三人ぐらいは毎年案内して見てもらって、こんなことやっているんだと伝える。これはセントモウシも同じなんですけれども、地域の人に知ってもらいたいんです。他地区の人やら知り合いやら、ぜひ見てもらいたい人数人は毎年呼んで内緒で見せてもらって、この二つに共通して言えるのは、確かに今後どうするかということ、そのことなんです。それと平均年齢が大変に上がっていて、ニンギョウマンギョウに関しては平均年齢80歳ぐらい。でも、これは10年見てて思ったことなんですけど、その地区の地形をつくるということとは地域の人たちの折りだとは私思っていますよ。ですから、それに他の地域から参加していただいってつくって夜火をつけてという形で、失礼な言い方かもしれないんですが、観光化する、多くの人に見てもらってワイワイとお祭り騒ぎをするというのは違うんじゃないのかなという気がしてしょうがないんです。

行ったたり来たりしますけども、セントモウシはここ40年ずっとやっていますけど、地区のみんなでも「よそに教えないようにしよう」と言っているんです。見に来る人はね、その地区の出身者とかね、連れとかその知り合いとかそういうので、メディアにもほとんど出たことないんです。私はそれでいいんじゃないかなと。もっとも継続という点で考えると、

りその人々、誰がつくるのか、誰がどう使うのかということによって、大分違ってくるんだろうと思います。博物館に来た資料というのはやはり展示という形で使われるわけですが、それも、そういった使われ方がその道具の本来のものなのか、あるいはそれを育んだ文化の使い方として正しいのかどうか。ミュージアムとしては、そういったことも考えながら資料を扱っていく必要があるのかなと、今のお話から思ったところです。

話がどんどん広がっていきそうなんですけど時間の都合もありましてですね、橋本さんにお話を振らせていただくと思います。先ほどのお話の中で拠点があることの有意性、拠点性ということについてご指摘をいただきましたけれども、まさにミュージアムはそういう拠点として機能する場所なんだろうなと思います。逆に我々のことを振り返ってみたいというところがあって、今回のようにこういった様々な活動を参考にさせていただいているという部分があります。

橋本さんが現場で色々見てこられたらちょうどこの20年ぐらいの間に、地域と何かをやるといっては増えたと思います。アートプロジェクトに関してはアーティストのほうも地域というものに目を向ける割合が高くなってきているというか、もうそれが当然のような認識になってきていると思います。そんな中で、地域と何かをやるといって橋本さんが大事にしなければならぬと思っております。これは押さえておかないとまず行かないよというところを、なかなか一言でいうのは難しいと思いますが、参考として教えていただければこちらの三人のこれからの活動にもつ



# ROUNDTABLE MAKE, USE & EXHIBITION

# ROUNDTABLE MAKE, USE & EXHIBITION

ながると思うのですが、いかがでしょうか。

**アクションを起こしたことを、どうやってら**

**足元とつないでいけるのか**

橋本

そうですね。パッと思いつくのは当たり前障りのないことになったり、みんさんはこの地域に來られたばかりですかね。数年、長くて3年目とかですかね。その視点ということだと、思うんですけど、知らないからこその何かやっチャャやることとか、持っている別の視点ってあると思うので、それがすごく重要だなと思っっています。今回も最終的にそれを意識して展示されたというのが、それはすごくいいなと思えました。もちろんあくまでインタビュアしたことを切り取ったということが中心だと思っるんですけど、でも、さらに今日プレゼンいただいたような、いや現場はこんな感じに実は思っってみたことも赤裸々に言語化するのかどうかって結構デリケートなこともあるとは思っるんですけど、でもそういうことをむしろさらけ出していくほうが有意義な機会も場合によってはあると思っるんです。自分たちがやる意義というのはそういうところにあるんじゃないかなと思っますし、もちろん気を付けながらも恐れずに何かをやる、思っ切ってやるということは必ずプラスのエネルギーを生むのではないかなと思っっています。もう1個は相反するんですけども、しっかりと足元を見ることが。あるいはとにかく何かやるといことは届けるということなんだと。出会ってもらっうという言い方も一緒だと思っ

んですけど。偶然会っうというの、出会いの一つだと思っるんですけども、それもいろいろあり方があると思っるので。発想を変えて拠点の話で言うと、僕は斎藤清美術館の中に入ったことではないんですけど、実は何年前に目の前の広場でマルシェとかイベントをやっていて、そのイベントにふらっと通りがかりに寄ったことがあって、あ、ここに美術館あったんだなって。逆に美術館を知らなかったという経験があっって、たぶん視点を変えろとそういうこともあると思っるんですけど。だからそういうことも含めて、せつかくアクションを起こしたことを、どうやったら足元とつないでいけるのかというのをいろいろなレベルで考えることが出来ると思っるんです。それは、短期間で活動するということではできないことだと思っるんですけど、そこに踏み込むということは。大きくはその2点。やっばりよく言われていることですけど、あらためてそこがうまく組み合わさっているんな活動というのはドライブしていくのかなと。以上です。

山口

橋本さんありがとうございます。最後に事務局からも聞いてみたいことがあります。三人のプレゼンテーションの中で、最終的にやっばり物が無いとどうしようもないという気があっったということだったんですけども、そういう物を持つ力というものをミュージアムとしてどう感じたかということを一言か言ったいかなと思っます。あと本日お三方からも色々コメントいただきましたけれども、それを受けての感想とか、あるいは今後に向けての意気込みみたいなものでも結構です

山口

ありがとうございます。それでは時間を大分超過してですね、このラウンドテーブルはここで締めさせていただきますと思っます。今回オンラインという形になりましたが参加していただきました橋本さん、中野さん、福留先生ありがとうございます。それから展示のご案内と、発表をいただきました柳津町地域おこし協力隊のみなさんもありがとうございます。それから、忘れちゃいけない金子さんもありがとうございます。ではこれにて、今回のラウンドテーブルを締めさせていただきます。みなさんどうもありがとうございます。

のでコメントをそれぞれいただければと思っます。じゃあ谷野さんから行きましようか。**ミュージアムって**  
**本物を見ることが出来る場所**

谷野

はい。家宝展はやっばり「もの」と「言葉」を展示したいというふうに、先ほどお話ししました。物に行きついた理由はプレゼンで話したこともあっったんですけど、私自身が美術館に來るお客さん目線なところが結構あっって、ミュージアムって本物を見ることが出来る場所みたいな認識が強かっったんですよ。なので来たお客さんが、「ああ、これは本物だ、本物の物で本物の言葉だ」というふうに思ってもらいたいというのがあっった。家宝展でいこう言葉だけでもダメだし、物だけでも全然伝わらないかなと思ったんですよ。なので最初、私たちニンギョウマンギョウを自分たちでつくっちゃえと言っっちゃったんですけど、やっばりそれだったらダメだっつたんだと思っるんですね。胃中の方につくってもらった本物の物であり、私たちが聞いた長老の本物の言葉であるという、その何か本当のというのが結構大事だっつたんじゃないかなというふうに思っっています。

山口

はい。ありがとうございます。じゃあ塚原さんお願いできますでしょうか。

塚原

そうですね、物を展示すること。本物がないと意味がないとか。やっばり無形文化財であっっても何かしらこう手繰り寄せるような、

その実体というのは絶対に必要だなと思っていて。そうですね、言葉よりもやっばり実体というような、想起させるものとしてとても重要だと思っました。

山口

ありがとうございます。じゃあ最後、我妻さんどうぞ。今日のお話を聞いての感想なんかも入れていただいても大丈夫です。

**町の中に溶け込む存在として**

**拠点を有効活用**

我妻

はい。ありがとうございます。物の展示ということなんですけれども、やっばり物を展示すること、その物をつくってもらっう過程とか、その物に込められた思いとか、それは目に見えないものなんですけれど、そういうものが伝わっていくのかなと思っました。地区の方々の思いとか制作に掛けた時間というものが、写真とかよりも実感を伴っつて來館者に伝わるし、展示の質量というか重みを感じられることにつながるのかなと思っました。そうですね、今回の感想としては、拠点があるかないというのは私も考えさせられました。この斎藤清美術館を使って、どのように町の人たちに開いていくか。町の人にもっと身近な存在になりたいというのがありますし、もっとふらっと来ていただきたいというのをおもいながら、町の中に溶け込む存在として拠点を有効活用できればいいなというのは本当にまた思われました。ありがとうございます。

ありがとうございます。この柳津の斎藤清美術館だからこそできることというのがきつとあるというか、今回の家宝展もそうだとおもうので、ぜひこういっった活動が続けばいいなと思っておっります。中野さん、只見もユネスコのエコパーク構想というのがずっと進んでますけれども、あの中にも民具とかそういう物を使うというんですかね、物に関するところが含まれていますよね。循環型の、今で言うSDGs的なものですが、自然環境だけではなく、そういった人の営みみたいなことも含めてのお話になっていましたよね。

中野

そうですね。自然とか野生生物だけじゃなくって、その中で暮らしている人の暮らしというのもユネスコエコパークのすごく大事な要素になってきます。

山口

そういう面で言うと、物を通じて伝えられることの幅というのが非常に広いというか、家宝展ではそれぞれの方の思いみたいなことを伝えていただきましたが、きつと何かもつと広いろいろなことを物から伝えられる可能性があるあるんじゃないかな、なんていうふうにおもうんですけどいかがでしょうか。

中野

そう思っます。素材もそうですね。素材というのはその地域から取れたものということでしょうから自然環境の話につながっていくと思っますし、そういった広がりには絶対あると思っます。



## アートワークショップ 「つくること・つかうこと」に携わって

中野 陽介 (只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係/只見町プラセンター主任指導員/LMN 実行委員会委員)

アートワークショップ「つくること・つかうこと」は、超高齢化・過疎化により地域の歴史や生活・文化の継承が困難になっていることを背景に、自然と共生する循環型の暮らしの中でつくり、使ってきた道具や生活・文化を様々な視点で見直し、考察することで、持続可能な地域社会について次世代と共有することを目的としています。ここでは「道具や生活・文化」として、LMNでのこれまでの実績を踏まえ、民具を据え、実施内容が検討されました。

超高齢化・過疎化により地域の歴史や生活・文化の継承が困難になっている事象は、奥会津のみならず、福島県あるいは全国の地方で起こっているものです。民具は最たるもので、各家庭で使われなくなり、捨てるなどして処分され、あるいは、博物館施設が引き取る場合もありますが、そうした場合も施設の収容力や管理するための人員・予算が限られるために集まった多くの民具を収蔵・保存しきれないといった問題が生じています。一方、民具は、多くの場合、地域の自然環境に依存し、影響を受ける中で、そこに生きる人々がつくり、使ってきたものです(原材料は地域に自生する植物資源となっている、など)。すなわち、民具は人と自然との持続可能な関係のものでつくり、使われたものであり、その関係性を私たちに教えてくれる資料になりうるのです。そうした意味で、大量生産・大量消費・大量廃棄の社会から持続可能な社会への転換が求められている現代にあって、民具は持続可能な社会の実現に向けた手掛かりの一つとなる可能性があります。しかし、言うは易し、具体的にどのような形で民具から持続可能な地域社会に向けた手掛かりを引き出す

し、それらを共有すれば良いのでしょうか。

2021年12月1日、LMN実行委員の橋本誠さんと事務局(福島県立博物館)の塚本麻衣子さん、山口弘さんと只見町でのリサーチが行われました。昼食に農家民宿「山響(やまびこ)の家」で只見の田舎料理に舌鼓を打った後、帰り際に居間にいるご主人に挨拶しようとする、秋に収穫した豆類を鞘から外す作業をしていました。仕分けられた鞘は地域に自生するマタタビというつる植物でつくられたザルにまとめられていました。挨拶をした後、玄関を出ると玄関わきに、料理に出てきた家庭菜園で採れた野菜の端切れが木製の桶の中に放り込まれていました。このように只見町では民具がさりげなく生活に溶け込む形で現役の道具として生きています。現代においてはプラスチックのザルや桶が主流になっているにも関わらず、只見町ではなぜ、いまだに自然資源由来の民具が使い続けられているのでしょうか。その理由には、民具の道具としての実用性・利便性、そして使う人の価値観があるはずです。現役に使われる民具には現代社会の生活様式に無理なく馴染む形で持続可能な社会を実現するヒントが隠れているのではないのでしょうか。

2022年2月6日、ラウンドテーブル「つくること・つかうこと」が開催され、オンラインの形式で参加しました。同館に所属する3名の地域おこし協力隊のみなさん(我妻泉香さん、谷野しずかさん、塚原有季さん)から「やないづの家宝展2021」の展示内容、展示に至るまでのエピソードを紹介いただきました。「家宝展」は、協力隊が柳津町民

に地域のことを取材し、その中で出会った「家宝」のような大切なモノ・コトを町外者の協力隊の視点でまとめ、表現したものです。3年目となる今回は、柳津町の祭りや年中行事をテーマに取材を重ね、ニンギョウマンギョウの薬人形、七日堂裸詣りの下帯、セントモウシの麻製の松明、団子さしのミスノキ、町民への取材の中で協力隊の心に留まった言葉などが展示されていました。こうした年中行事などもやはり地域の自然環境と関わりあう暮らしとその単調な日々の中の楽しみや喜び、折りなどとして受け継がれてきたもので、これらにアクセスすることは自然と共に生きる社会を考えるうえでも重要なもののように思います。展示の素晴らしいさはもちろんではありませんが、この展示の大きな成果は、展示までのプロセスであり、よそ者の協力隊と伝統を引き継ぐ町民との関わりであったように思います。特に、当初、ニンギョウマンギョウの薬人形を自分たちでつくり、展示しようと計画した協力隊の方たちでしたが、当然ながらそれは難しく、結果的に青中集落の人たちの力を借りることになります。集落の人たちと一緒に薬人形をつくる作業は、少なからず自然の中で暮らすことの何かが地域の人から次世代にあたる協力隊の方たちに共有された時間であったはずですが。

アートワークショップ「つくること・つかうこと」は今年度で完結せず、今後も継続していきたいと思いますが、今後、まずは只見で自然環境と関わりがうかがえる現役の民具を中心に、その民具の背景にある自然環境や生物多様性、つくり方、使い方、使われなくなった時代的な背景、使い続ける理由、などを丁

率に調べ、使い方を知る人の力を借りて現地を使うなどの方法を通して広く共有する作業が必要となりそうです。こうした作業の中で、民具が内包する現代社会が失ってしまった人と自然との関わりや、後世に伝えるべき大事な何かが浮かび上がってくるはずです。長い時間をかけて先人たちが引き継いできたものを意識することは、未来に託すべきことを意識することにつながると思います。



Polyphonic Museum



## ■ ワークショップ「博物館部」

- ① 適応指導教室のみなさんと、行ったり来たり。  
放課後にふらっと立ち寄れるような場所になるための試行錯誤を重ねました。
- ◎ 期間：2021年10月～2022年3月
  - ◎ 場所：適応指導教室、福島県立博物館
  - ◎ 内容：パート1：企画展「ふくしま 薫の文化」対話型鑑賞  
「どうしてそう思ったの?」「どこが好き?」とお話しながら博物館の展示を見学しました。  
パート2：博物館でどうぶつさがし  
博物館の展示に隠れている動物を探して、博物館を楽しむためのMAPをつくりました。  
パート3：こどものにわであそぼう  
博物館が日常の場所になるために。五感を使った学びを繰り返しました。
  - ◎ 講師：パート1 伊藤達矢(東京藝術大学社会連携センター特任准教授/LMN実行委員会委員)  
西澤真樹子(認定NPO法人大阪自然史センター職員/LMN実行委員会委員)  
パート2 北村美香さん(結creation代表)  
西澤真樹子  
パート3 柳田拓哉さん(こどもアートディレクター/こどものにわ主宰/NPO法人ふくしまグリーンキャンパス代表)
- ② 福島県立会津支援学校ヤベアベ学級のみなさんと、行ったり来たり。  
博物館が居心地の良い場所になるための試行錯誤を重ねました。
- ◎ 期間：2021年11月～2021年12月
  - ◎ 場所：福島県立会津支援学校、福島県立博物館
  - ◎ 内容：ステップ1 博物館を知ってもらう  
ステップ2・3 博物館見学、博物館標本箱をつくろう、  
ステップ4・5 博物館見学、博物館で感じたことを描いてみよう
  - ◎ 講師：ステップ2・3 佐野美里さん(彫刻家)、大江ようさん(TEXT主催)  
ステップ4・5 中津川浩章さん(アーティスト)
  - ◎ 撮影：森内康博さん(映像作家/らくだスタジオ代表)、らくだスタジオのみなさん

## アートワークショップ

# 博物館部

博物館が、誰もが安心して自己表現できる場になるために。

先進事例に学び、現地を訪れ、対話を重ねました。

適応指導教室のみなさん、福島県立会津支援学校ヤベアベ学級のみなさんと、  
教室・学校と博物館とを行ったり来たりする日々を過ごしました。

試行錯誤しながら、一つ一つ確認しながら。

これは、福島県立博物館が柔らかく開かれるための第一歩です。

## ■ リサーチ

- ◎ 岡山 生活介護事業所ぬかつくるとこ(p118～p133)  
柴川敏之・弘子夫妻(p134～p147)  
大原美術館(p148～p161)
- ◎ 三重 三重県総合博物館(p164～p173)  
三重県立美術館(p174～p183)
- ◎ 大阪 国立民族学博物館(p188～p189)

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

## ラウンドテーブル

# 放課後博物館を考える

アーティストの滝沢達史さんと、アートを活用した自分らしい生活をおくることのできる福祉事業所「ぬかつくるとこ」(岡山早島町)との協働から、生まれた「なんでそんなんエキスポ」についてお聞きし、多様な人が「集い」、「あそび」、「まなび」、「表現する」ことのおもしろさと広がりを考えました。ミュージアムがもっとやわらかく開かれるための、心地よくざわざわできる空間になるための対話です。

- ◎日時：2021年10月16日(土) 18:00~19:30
- ◎会場：福島県立博物館、オンライン
- ◎講師：滝沢達史さん(ホハル代表/アーティスト)
- ◎参加者(オンライン)：

上島雅彦さん(竹田総合病院精神科長)  
大政愛さん(はじまりの美術館学芸員)  
北添紫光さん(障害者芸術文化活動広域支援センターバスレル支援コーディネーター)  
櫛田拓哉さん(こどもアートディレクター/こどものにわ主宰/NPO法人ふくしまグリーンキャンパス代表)  
楠本智郎さん(つなぎ美術館主幹・学芸員)  
久保田沙耶さん(現代美術家)  
小林竜也さん(はじまりの美術館企画運営担当)  
柴川敏之さん(現代美術家/就実短期大学教授)  
柴川弘子さん(ESD 研究者/岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室助教)  
高山裕美子さん(エル・グルメ コントリビューティングエディター)  
仲川邦広さん(南相馬市博物館学芸員)  
中野厚志さん(生活介護事業所ぬかつくるとこ代表)  
原忠信さん(筑波大学芸術系准教授)  
宮原克人さん(筑波大学芸術系准教授)  
柳沢秀行さん(大原美術館学芸員)  
岡部兼芳(はじまりの美術館長/LMN 実行委員会委員)  
西澤真樹子(認定NPO法人大阪自然史センター職員/LMN 実行委員会委員)  
橋本誠(NPO 法人アーツセンターあきたディレクター/LMN 実行委員会委員)

滝沢達史  
多摩美術大学油画専攻卒。東京都特別支援学校にて知的障がい児への美術教育に従事した後、越後妻有アートトリエンナーレなど日本各地のアートイベントに参加。ひきこもり・不登校の子どもたちとの活動「アーツ前橋」や、子どもの主体性に任せた表現活動「カマクラ図工室」などにも取り組んでいる。  
2018年4月、放課後等デイサービス「ホハル」を立ち上げ、障がいのある人もない人も一緒に居られる社会を目指す。

事務局：塚本麻衣子

みなさん今日はお集まりいただきありがとうございます。オンラインでのラウンドテーブルです。「放課後博物館を考える」というテーマで滝沢達史さんをお招きし、滝沢さんの携わっていらっしゃる「なんでそんなんエキスポ」を中心に話をお聞きします。超豪華メンバーにお集まりいただき緊張しております。

滝沢達史

はじめましての方がいるので簡単に自己紹介しましょう。今日は、福島県立博物館にいます。アーティストの滝沢達史です。昨日、岡山県倉敷市からやってまいりました。よろしくお祈いします。次、中野さんお願いいたします。

参加者：中野厚志

岡山県都窪郡早島町にある「ぬかつくるとこ」。こは成人の事業所で、もう一つ「アトリエぬかつく」という事業所放課後等デイサービスをやっています。中野厚志です。よろしくお祈いします。

滝沢

同い年です。

中野

同い年です。(笑)

滝沢  
はじまりの美術館岡部さんお願いします。

委員：岡部兼芳

はい、こんばんは。はじまりの美術館の岡部と申します。実ははじまりの美術館でも中野さんにお話をさせていただこうと今ご相談をし

ていたところで、予定演習じゃないですけど、予習させていただこうと思います。よろしくお祈いします。

滝沢

そして次に、現在秋田にお住まいですが、数日前岡山にいらっしゃった橋本誠さんお願いします。

委員：橋本誠

こんばんは、橋本です。実家が岡山にありまして、岡山県の地域版アーツカウンシルの仕事も少ししています。去年の6月から秋田市文化創造館を立ち上げて、NPO法人アーツセンターあきたの事業部門にいます。あとはノマドプロダクションというインストラクターとマネージャーの団体もやっています。こちらは東京拠点です。よろしくお祈いします。

事務局：小林めぐみ

橋本さんにはライフミュージアムネットワークの実行委員会委員も本年度からやっていただいています。ありがとうございます。

滝沢

大原美術館が映っております。柳沢さんお祈いいたします。

参加者：柳沢秀行

大原美術館の柳沢秀行と申します。岡山県早島町在住でぬかさんには何かとご厄介になっております。福島県立博物館では収集展示委員会委員という公的なお仕事もさせてもらっております。久保田沙耶さんとはつい一昨日一緒にいました。よろしくお祈いします。

滝沢

柳沢さんには「なんでそんなんエキスポ」で審査員をやっていたいただいております。その点についてもまた後ほど話をうかがいます。

はじまりの美術館の小林さんと大政さん、ご無沙汰しております。よろしくお祈いします。簡単に自己紹介をお願いします。

参加者：小林竜也

はじまりの美術館の小林です。よろしくお祈いします。

参加者：大政愛

はじまりの美術館の大政です。猪苗代町からつないでいます。よろしくお祈いします。

滝沢

お隣は楠本さんです。僕は初めてですけど、つなぎ美術館での活動は遠方からですが拝見させていただきます。よろしくお祈いします。

参加者：楠本智郎

今日のメンバーの中で一番南から参加していると思います。九州の熊本県の南端にあります水俣市、その上にある津奈木町、その町立美術館、人口4500人の小さな町ですが、その直営のつなぎ美術館にいます楠本智郎と申します。橋本さん、柳沢さん、福島県博のみなさんにはお世話になっております。よろしくお祈いします。

滝沢

よろしくお祈いします。西澤さんは存じ上げないので、小林さんお願いします。



滝沢達史さん

小林めぐみ

昨年度までライフミュージアムネットワークの実行委員会委員に入っていたいただいていた南相馬市博物館から仲川さんが参加しています。去年までの委員のみなさんたちには「買者」としてライフミュージアムネットワークを引き続き応援していただいております。南相馬市博代表仲川さんお願いします。

参加者：仲川邦広

こんにちは。南相馬市博物館の仲川邦広です。今日、館長は別件があつて参加できないので代役です。南相馬市は福島県太平洋岸の北部にあります。南相馬市博物館は自然、歴史、それから野馬追を中心とする博物館です。色々とお世話になりたいと思います。よろしくお願いします。

滝沢

それではお隣、北添紫光さんです。高知県の障害者芸術文化活動の広域支援センター「パスレル」の職員で、「なんでそんなん」にも主催として関わっていただいております。実はミュージシャンでもあります。

参加者：北添紫光

バスレルで支援コーディネーターをさせていただいております。北添と申します。よろしく申し上げます。

滝沢

ありがとうございます。じゃあお隣、榎田拓哉さんです。福島県の二本松市で「こどものにわ」という表現活動をする学童保育をなさつ

ていて、今は長野在住になったのかな。

参加者：榎田拓哉

長野です。

滝沢

実は、僕の大学の後輩で、20年ぶりにこの間サウナで会いました。

榎田

サウナと言っても、焚火を囲んでいるような山のサウナですね。

滝沢

そう。僕もさっそく二本松に行つて場所を見せてもらつて、大変興味があつたので今後も何かできないかなと、今日は急遽参加してもらつています。簡単にどうぞ。

榎田

みなさま、はじめまして、急遽参加することになつてのように僕はいればいいのかと思ひながらも、滝沢さんのお話を聞き勉強させてもらいたいと思つています。福島県二本松市出身で、二本松に20年、東京に25年、そして、今長野に移り住んで、3拠点を移動しながら放課後の子どもたちの場所づくりをしています。

二本松では、福島グリーンキャンパス、学童保育と放課後アート教室と、今度里山をつくることになりました。一体化して色々な場所をつくつていきたいと思つております。何か色々な形でつながれたいいなと思つております。臈も飼つておりまして、なんちゃつ

て鷹匠ですけど、子どもたちの場所を訪問して、幼稚園、保育園の園庭で飛ばしたりしながら、生きた生物に感動して絵を描く、そういうこともあちこちでやっています。今、コロナ禍で、その活動はできていませんが、長野に来て、そろそろ猟期が始まるので、そちらがワクワクしています。ちよつと長くなりましたが、よろしく願ひいたします。

参加者：上島雅彦

小林めぐみ

続いてお隣、ライフミュージアムネットワークの2年前のトークでお話を聞かせていただいた会津若松市にありますが竹田総合病院で精神科医療をやつておられる上島先生です。今日もご参加いただきありがとうございます。

滝沢

ありがとうございます。

参加者：上島雅彦

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました竹田総合病院の精神科で勤務医をしております上島雅彦と申します。今日は門外漢というか、場違いという感じで申し訳ありませんが、福島県博の方にお声かけいただき、色々な方がいてもいいと言つていただいたので出させていただきました。みなさまのお話を聞きながら勉強させていただければと思います。

滝沢

久保田沙耶さんです。現在は鳥取にいます。アーティストで各地のアーティストインレジデンスを渡り歩きながら地域に根差した作品を発表されています。現在鳥取にいます。お訪ねしています。「いのち」と「くらし」を考えるミュージアムネットワークをつくるという活動をしておりまして、そういうことに携わつておられる方々にお話を聞きに行つたり、福島県内、県外、あちこちで対話の場をつくつたりしてまいりました。その中で今年ポリフォニックミュージアムという事業を立ち上げました。I COM 2019 京都大会で様々な声に耳を傾ける包摂的な空間、ポリフォニックスペースをつくるのがミュージアムの役割ではないかという提言がなされました。それを受けて福島県立博物館でもその空間を実現する取り組みをしていけたらということで始めました。

滝沢

その一つ、福島県立博物館で「博物館部」というワークショップを、まだ始まつてはやほやのところですが、みなさまのお話を聞きながら育てていきたいと思つています。「博物館部」が目指しているのはミュージアムという場所が一つのプラットフォームになって、アーティストの方などに入つていただくことで、色々な価値観、世代が共存して色々な声が出るといふイメージでやっております。ポリフォニックという色々な音が共存しているイメージを博物館でつくり上げていきたいと思つています。

それで今日はそういうことに様々な立場で携わつておられる方々にお声がけて参加していただきました。様々に教えていただきましたと思つています。「博物館部」の活動について簡単に説明させていただきます。そのあと滝沢さんに具体的な実践についてお聞きします。「博物館部」の前身について事務局の江川さんからお話しします。

表しています。ちよつと「なんでそんなん」の時期に鳥取にいたということと、「なんでそんなんエキスポ」のバビリオンホールとして参加していただきました。自己紹介をお願いします。

参加者：久保田沙耶

小林めぐみ

はい。「なんでそんなんエキスポ」のバビリオンホールをやつた久保田と申します。よろしく願ひいたします。ちよつと山陰にいたもので滝沢先輩に来て言われたらあらがえなくて行きました。

滝沢

そんなことはない(笑)。

参加者：久保田

遅刻しながらも毎日バビリオンホールをさせていたいただいた、あの時のことを昨日はずっと思ひだしてました。柳沢さんとは一昨日会いました。よろしく願ひいたします。

滝沢

柴川さんはつながっているでしょうか。簡単に自己紹介をお願いします。

参加者：柴川弘子

みなさん、こんにちは。岡山の柴川弘子です。なぜか私が中心でしゃべつていますけれど、2018年に熊本の本木さんのつなぎ美術館で夫婦のプロジェクトをさせていただきました。「ぼくのおくさん」展で「夫婦の事件簿」という企画をして、それがきっかけとなって、ぬかさんと大原美術館の柳沢さんにもつないでいただき、「なんでそんなん」展の審査員を夫婦で務めさせていただきました。とても楽

### 誰もが集える場所としてのミュージアム

事務局：江川トヨ子

みなさん、こんにちは。ライフミュージアムネットワーク事務局の江川と申します。よろしく願ひいたします。我々が勤めているこの博物館で誰もが集える場所としてのミュージアムを実現したいという思いがあります。多様な価値観、多様な世代、多様な存在が共存して誰もが安心して広がる広場のような場所であることを目指していきたい。今年はこの二つの団体と連携させていただきました。

一つはこの福島県立博物館から車で10分足らずの場所にある会津支援学校、県立の知的障がいの子どもたちが通つている学校です。その高等部2年生の1クラスの子どもたち3名と一緒に取り組んでいきたいです。それからもう一つが県内の適応指導教室です。ある地域の小学校、中学校の子たちが月曜日、水曜日、金曜日、朝の9時から2時半くらいまで通つている教室です。その子たちにも博物館に来てもらつて、どんなところなのか知つてもらひ、お近づきになつて、博物館でも少ししたら楽しいところじゃないのかな、放課後ちよつと遊びに行つてもいいかなという思いになつてもらへるような、そんなワークショップを考えています。それで滝沢さんのお話をつかひ参考にさせていただきます。今日はどうぞよろしく願ひいたします。

### 「なんでそんなんエキスポ」

滝沢

「なんでそんなんエキスポ」というプロジェクト

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

滝沢

ありがとうございます。

参加者：柴川敏之

旦那の柴川敏之です。2000年後をテーマに作品をつくつています。「ぼくのおくさん」展の時には3人生活だったので、今回は4人生活になりました。またこれから事件簿が増えていくと思ひます。「ぼくのおくさん」展第2弾もいつか登場するかもしれません。楠本さんどうかよろしく願ひします。

小林めぐみ

楠本さんがきつとね。

柴川敏之

はい、お世話になります。

滝沢

ありがとうございます。宮原先生と原先生が別の事業で福島県立博物館に来ていらしたので、参加していただいております。一言お願ひします。

参加者：原忠信

筑波大学の原忠信と申します。今、県立博物

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

トを事例に何か参考になることがあればということと話します。まず初めに成り立ちについて話します。

ことの起りは、バスレルさん、先ほど紹介した広域支援センターと呼ばれるところですが、それが何かという基本的なことについてお話しします。厚生労働省が始めた障害者芸術文化活動普及支援事業というものが、これが起こったのが3、4年前かな。現在47都道府県のうち37都道府県に支援センター、七つのブロックに広域支援センターが設置されています。広域支援センターが置かれているのは(1)北海道・東北ブロック、(2)南東北・北関東、(3)南関東、甲信、(4)東海・北陸、(5)近畿、(6)中国・四国、(7)九州というブロックです。中国・四国ブロックのバスレルさんがこれを普及するにあたって山口、岡山など支援センターが設置されていない県で設置に向けた活動をしています。そこで今回は、展覧会をやっ行政にも働きかけようということで岡山の展覧会のディレクターを僕が頼まれた経緯になります。ちなみに福島県はというとはじまりの美術館さんがやられております。はじまりさんは広域でしたか。

**岡部**  
いえ、福島県単体です。

## 「なんでそんなんプロジェクト」

**滝沢**  
展覧会の詳細については、この「なんでそんなんエキスポ」の記録集「そのうち月刊」に書かせていただきましたが、時間的にタイト、コロナ禍でもあるということで、「ぬか

色々な方に混せてほしい。ぬかは空気を入れないと腐っちゃうので、色々な方に来ていただくことを「ませびと」とさんという形で受け入れている、そんな場所です。食べ物も美味しいです。近くのイタリア料理店さんがつくってくれていて、ランチも要予約で食べられるようにしています。今はコロナ禍ですけど、もうちょっとしてみなさんに提供できたらと思っています。

**滝沢**  
ランチもすごく面白い。ランチを食べに行くこと素敵な料理が出るのですが、「ぬか」さんの事業所の真ん中のテーブルで、みなさんは食事を終えていて、じっと見られながら食べる。

**中野**  
そうですね。スタッフも合わせたら40人近い人がいるのですが、みんなに見られながら食べるというすごく居心地の悪い場所になっています。あえてそうしています。混ぜられることによって、ランチを食べた方も一緒にものづくりをして帰るみたいなの、そんな空間にしています。お客さんなのか、業者さんなのか、スタッフなのかはまったくわからない変な場所になっています。

**滝沢**  
そこが面白い。社会に出て行くとかではなく、社会を事業所の中に取り込むシステムとしてランチをやっている。

**中野**  
そうですね。生活介護施設自体がなかなか一般の方が来られる場所ではないので、どうやっ

くると「こ」さんに、すでに走っていた「なんでそんなんプロジェクト」をそのまま結びつけられればいいのではないかとということ、即座に、その日のうちに電話をして夜にほぼ決まるといふスピード感でやってきました。「なんでそんなんプロジェクト」については、僕よりも中野さんに話していただいていたほうがいい。中野さんお呼びしてもよろしいでしょうか。いきなり振っちゃってすみません。「ぬか」についてです。

## 「ぬか つくるとこ」

**中野**  
8年前から生活介護事業所というサービスでやり始めたのが「ぬか つくるとこ」です。2年前ぐらいいから「アトリエぬかごっこ」という放課後等デイサービスもしています。デイサービスは2時間という枠で子どもたちに何でもやっというリースペースをつくって提供している場所です。生活介護は18歳から65歳までの方が日中通われる場所で、介護を重きにした事業所です。そこで表現活動を中心にもう好き勝手、好きなことをやっています。ちなみに「ぬかびと」とさんと呼んでいます。福祉事業所って利用者さんと言っているのですが、あまりそう呼びたくないの、「ぬかびと」とさんと呼んでいまして、そこで「ぬかびと」とさんがやりたいことをする。

**滝沢**  
職員さんは「ませびと」とさん。

**中野**  
「ませびと」で、色々な方に来ていただきたい。

たら来られるか。そのための一つのツールとしてランチを提供しているような感じですが、「アトリエぬかごっこ」という場所でも一軒家を使っています。音楽もできるし、絵具も使える。できるだけ子どもたちにイエスと言ってあげるのがコンセプト。怪我と喧嘩さえなければだいたいオッケー。「オモシロオトナ」という企画もあって、子どもたちにこんな面白い大人がいるよと、色々な方に出会ってもらいたいので、月に1、2回色々な方呼んでワークショップをしてみよう企画もやっています。

## 面白がる視点で捉えたい

自分たちがやってきたことを一つ紹介します。「なんでそんなん」につながるのですが、癖とかこだわり、その人たちの面白ところをだめと違うのではなく、すごく面白がる視点で捉えたい。それが「なんでそんなん」の起点です。一つの事例が「小池さんの池をつくらう」。新聞ちぎりが大好きな方に、新聞ちぎりを生業としてもらった。「コイケノオイケ」という新聞の池をつくり、池の主として君臨してもらい、その場所で自由に過ごしてもらおう。そうすることで、その人の新聞ちぎりがただの困りごと行為ではなく、その人の役割になっていく。そういったところにデザインを入れながら外にアーカイブしていく。色々やっていますけど、ただ口説く人がいた。ただ女性を口説きたいのでホストクラブをやった。本当にその人の特技をいかに。女性を口説くのも悪いことじゃなくて、その人の特技。口説き文句が出るのも特技ではないか。福祉事業所って色々なわからない行為、もの、

ことがある場所。福祉の現場はそれを断絶という拒絶しちゃうストーリーをつくりやすい形になっている。

## 突っ込んでもらいながら、でもそれっていいよねって

自分たちみたいにそこが面白いこと、もの、行為なのだというところを発見することが大事だと思っっている。で、そこに突っ込みを入れる。みなさんに突っ込んでもらいながら、でもそれっていいよねって。基本的には愛を持ってるのが前提ですけど、色々な視点の変換ができるのではないかなとやり始めたのが去年です。「なんでそんなん」は、スタッフの「アンデバ

ンダンとなんでそんなんって似てるよね」っていう言葉から生まれました。アンデバダン展の無資格、無審査というところを踏まえて、誰でも参加できるものになるかなという思いがありました。自分たちはまとめることが下手だったので、当初から柳沢さんに会議に入っただけ、発見者が大事だということなどをブラッシュアップしてきた。柳沢さんのおかげでブラッシュアップできたというか、つくり上げてきたこの1年です。

今、やっていることは、色々な事例を収集する収集型、オンラインセミナーで発見者を育成するプロジェクト。来週の月曜日に第2回目のオンラインセミナーが始まるところで、今年度は2回やる予定です。そういったところでみなさんに自分たちの考えをどんどん伝えていこうとしています。

**滝沢**  
僕、「なんでそんなんエキスポ」についてしゃ



べろうと思っただんですけど、福島県立博物館に「NI」がないっていうことが先ほどわかりまして、非常に不安定でスライドが出せないかもしれない。「なんでそんなんエキスポ」をそっちで流してもらおうかな。まず、僕もあまりそこを知らなかったけど、「なんでそんなん」がブラッシュアップされていくまでを柳沢さんに、そして、柴川さんの「ほくのおくさんプロジェクト」も参考にされているところも聞きたいな。柳沢さん、どんな感じだったのですか。

## 一番近くにいる人が実はその可能性に気づいていない

**柳沢**  
僕が美術館にいて感じていることと、「ぬか」さんが実践している、考えていることが非常に近かった。そして言葉にすることに僕は慣れてるから、中野さんたちが日ごろから考えていたことを僕が言葉に置き換え、そしてそこから何ができるかと考える作業が多かったです。例えば、支援学校の中でもアイトってあまりわかられていないよねとか、認識が一致すると、じゃあ、地元の支援学校に行っこれすこいって褒めまくって帰るプロジェクトやってみようかとかそんなことを考え始めるわけです。そうした中から、みんなそれぞれに発達のでこぼこがある中で、一番近くにいる人が実はその可能性に気づいていないという話になった。そこで、こういう表現が面白い、こういうのが素敵だよというだけじゃなく、それをちゃんと見いだせる、認識なおせる人を少しでも増やしたい。そういうところが「なんでそんなんプロジェクト」につながるっていったと思います。

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

**滝沢** ありがとうございます。本当に言葉をまとめてくれて助かります。

**中野** 何も言えないです。

**滝沢** そういうことです(笑)。当初から展覧会を中野さんも考えていたけど、今年度じゃないねっていう段階だったのが早くその場が来てしまった。じゃあエキスポでということをつくっていったのです。「ぼくのおくさんプロジェクト」を参考にされたところもあるのですか？

**中野** 中野さん、事例いくつか見てみようか。

**滝沢** 中野さんが見つけているうちに僕が言っておくと、やはり人的資源、面白い人がいっぱいいるという話になった。柴川さんは、旦那さんのアーティストとしての仕事もあれば、奥さまがとても素晴らしい研究者で、なんと言っても奥さんの実家が我が家とも近かったんで、こんなに面白い人たちがいるよと片端からあげていった。その中で中野さんたちが柴川さんたちとも出会い、つなぎ美術館の楠本さんところでの展覧会の話も聞かれた。結果、審査員としての登場になったと思います。

**中野** そうです。事例収集しようということになっ

**滝沢** これが中野さんの閉め忘れたセンチメートル。ぬかの丹正さんがこれを記録した。ちゃんと写真に日付と何センチだったかが全部記録されていたので非常に作品としてつくりやすかった。



**中野** ガラスも、その場所のガラスを探してくださいね。

**滝沢** 取り寄せてつくりました。できるだけ忠実に再現するというインスタールにこだわりましたが、ちょっと頑張りすぎちゃったかな。合わせて事例紹介しようか。展示会場と入り口です。この古いビルの中に入ると一室一室がおしゃれにつくられている。面白がつくれる人しか来ない展示にしたいと思って、町の中心部じゃなく、ちょっと遠くの宇野港でやった。本当に見たい人だけ来てくれる、そういうものをつくりたいと思いました。

## 「展覧会じゃなくて」「博覧会」

で、僕はタイトルに「エキスポ」と付けた。エキシビジョン、展覧会じゃなくて「博覧会」

たのも「ぼくのおくさんプロジェクト」の色々な事例を参考にさせて頂いた頂きました。障がいの人々だけではなく、今回の「なんぞそんな」に関しては全世界の人を対象にしています、あえて。障がいの人々に特化してしまうとおかしな感じになるので、「なんでそんな」という事柄は本当に身近にあるじゃないか、些細なことでも何でも事例が上がってくればいいなというところで、一番参考にさせて頂いたものが「ぼくのおくさんプロジェクト」でした。

## 困り感が逆に楽しみになる

で、私の事例です。私、ぬかでは「クロン」と呼ばれておりました。私は閉め忘れをするらしいのです。寒い時に「何でこれだけ開いているの？」というのをスタッフがずっと何月何日、何ミリと記録しているのです。私もどうして閉め忘れのかわからない。けれども、こうやって記録することによって、発見者にとっては困り感が逆に楽しみになる。閉め忘れとすぐくいものを発見したみたいな感じで楽しみになっている。「困るわ、寒くて」バシッって閉めるのではなくて、そういった記録がどんどん積み重なることで何か一つの大きな事例みたいになっていく。これは続きがありまして、記録されることによって私、物心ついて以来、閉め忘れなくなりました。

**滝沢** 展示の写真マニに出そうかな、閉め忘れの。

**中野** こんな形になるのだと思って興奮しました、

にしたかった。展示という選ばれてきたものという印象があつて、そうじゃなくて雑多なものが並んでいる、よくわからないものが並んでいる。僕らがやりたいことには「博覧会」がちょうどいいのではないかと思ったのです。「エキスポ」というと華やかな雰囲気があるの、大阪万博の過去の写真などを見て、インスタールを考えましたが、限られた予算である豪華なものをつくれな。ということ、パビリオンガールだ！と用意したのが久保田沙耶さんです。当時の衣装を研究して、古いものを買ったたりして、彼女が案内をすることで、エキスポ感を出せた。非常にうまくいったと思っっています。沙耶ちゃんはとうでしたか。



滝沢さんのキュレーションに。ここでウイスキーとか飲んだら美味しいだろうなと思いがら眺めていました。

## 僕らが何かそこに参加する ということをやりたい

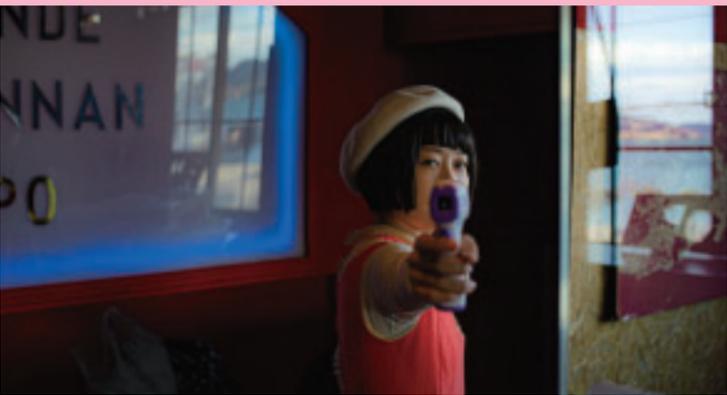
**滝沢** 事例はすごく面白いけど、それを展示にする時にどうするか。「なんでそんなエキスポ」は、障害者芸術文化支援の展覧会ですが、いわゆる展示会場に並べて作品として見てもらうのが居心地悪くて、それはやりたくないというのが僕らの一致した意見でした。美術の文脈に引く張ってきてそこで評価するのは違うと思っっていて、逆に僕らが何かそこに参加する



**久保田** すごく楽しかったです。たまたま入って来られたお客さんもいらして、エキスポが懐かしい、大阪万博が懐かしいと言っで見られる方もいらして、そこがとっかかりで普段美術館にいらっしゃる方とはまた違った雰囲気をご覧いただけた印象がありました。

## 理解も排除もせず保留する

**滝沢** ビルの入口。窓の外はこんな光景です。2月だったけど、暖かな風が来て気持ちがいい。で、これがコンセプトです。人の行為か



ということをやりたいと思った。全然違う会場を借りようということで、古いビルを改装したホテルで展覧会をすることにしました。

## 柳沢

展覧会は素晴らしい。中野さんたちが集めてくれたたたくさんの事例を空間に落とし込むのは、空間に落とし込むプロジェクトがいないとできない。そこはさすが滝沢さんがプロ中のプロの仕事を見せてくれました。あの会場は「ぬか」の関係者から見つけたのですか？建物、ビルそのものが展覧会場、巨大なインスタレーションになっていたし、久保田さんのパビリオンガールなど、展覧会として見せる形も抜群に良くできあがった空間だったと思う。一方、それを審査する段になった時、逆に難しさを生んでしまった。本来「なんでそんなプロジェクト」は空間に落とし込まれていない事例の中から選ばなきゃいけないんだけど、滝沢さんの展示があまりにも素晴らしいので、展示された人はその空間の強さも含めて事例が評価されかねない。そんなところには気を付けて審査をしたのを思い出しました。

## 滝沢

光の入る白い部屋に額装され、標本にされているような展示をしています。展示でこだわったのは、閉め忘れる窓と同じ当時の昭和のガラスを、40〜50年前のガラスを日本中探して、富山にあったそれを取り寄せてカットして使いました。

## 中野

その写真があるので共有しましょう。



ら生まれるよくわからないものを排除しない。無理にでもわかり合おうとする、これも大事なと思う。でも、わからないことをわからないことと思うことってストレスです。理解も排除もせず保留する、とりあえず保留する。保留したことを楽しんでみるということを考えて。それが、「なんでそんなエキスポ」の神髄だと思っっています。コロナ禍で幼稚園に通えなくなった3歳の男の子は野球が大好きで野球図鑑をずっと見ていて、選手の名前とか言える。その選手をつくっている。阪神ファンなので、阪神の危機を救うロボットのキャッチャーのロボットくんという友達をつくった。その長く伸びてい

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM



る紐はオボットくんのチンチンらしい。このチンチンをコンセントにさして電気を供給するっていうストーリーらしい。この選手、1180体だったかな、当時。それをどっさり送ってもらって展示しました。

他には、これは高知のパスレルさんに行った時に見つけたものです。この机、膨らんでいるところがありますね。高知のパスレルさんは高次脳機能障害という後天的に交通事故などで障がいを負ってしまった方たちが作業する場所で、カッターを使って切った次に渡すという作業をしているのですが、カッターの刃が切れなくなると折る。で、それを捨てるのではなく、机の板に6年間打ち込んで膨らんだという机です。紫光さん何か補足ありますか。



**北添**  
まさにその通りで、これをレントゲンで撮るとこのアイデアはすごかった。

**滝沢**  
これをレントゲンで撮ってみたいという衝動にかられて、パスレルさんに了解いただいて、この机を持ち出して、しかるべき専門的なところで撮っていただきましたところ、こういう美しい光景が出てきた。これが出た時には本当に我々も何か背筋に走るものがありました。非常に美しい。

これは審査会の様子です。賞を設けて、お米を大賞には30キロだったかな。



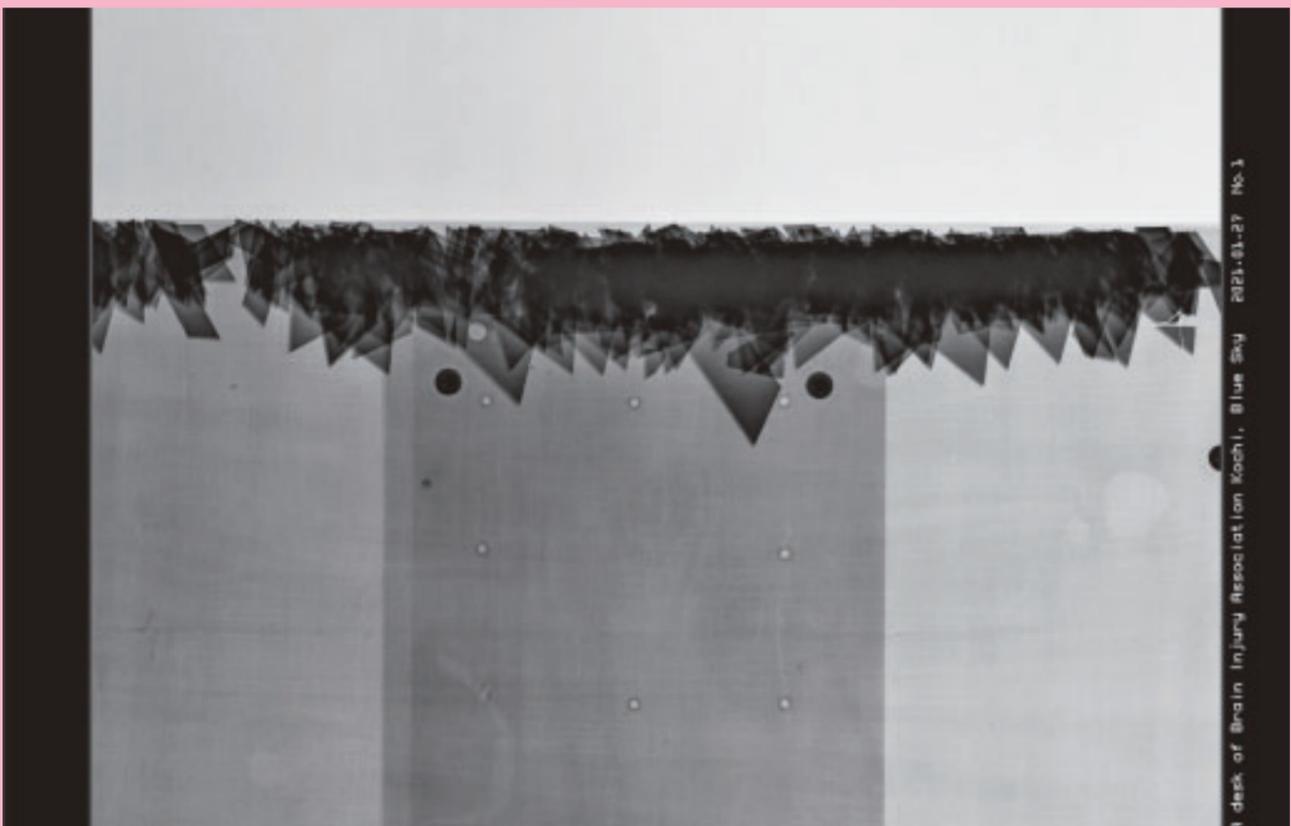
清掃をして、予約した人が泊まることができ。この部屋の作者のことを中野さんから。

**中野**  
みーちゃんといううちの「ぬかびと」さんの作品です。作品というかモノなのですが。みーちゃんは新聞をぐちゃっとして、それにガムテープを貼る。それが食べ物だったり、色々な塊、お手だったり。日々量産しては投げ捨てる。そういうことずっとやっています。もうこれが日々溜まっていく。モノとしてすごく魅力的だったので、「ガムテープの種」という名前で投稿させていただきました。

**滝沢**  
パスレルさんの記録集の表紙にもなっていますが、僕もこの部屋について書かせていただきました。ベッドの上に置くものと床に置くもの、アクリルケースの中に入れるもの三つの展示方法をしています。この三つの展示方法は、制作物の扱われ方の比喩です。例えば障害者芸術文化事業とか展覧会に出されると、展示台に置かれてショーケースに入り、照明を浴びる。非常に芸術的に優れたものに見えてくる。

**お客さんは作品を  
変えることができる**

ですが、この部屋では、ケースの隣に白手袋が置いてあって、このアクリルケースは後ろが筒抜けで、抜き出せるようになっています。で、床にあるものを拾って差し替えると展示作品が変わる、変えられる。お客さんは作品を変えられることができる。床に転がっているのは割とぞんざいに扱われて、たぶん支援者側



**中野**  
一俵です。

**毎日どんどん事例が溜まっていく**

**滝沢**  
一俵だ、一俵。60キロ。博覧会中に日々オンラインで事例が集まってくる。全世界の人から、現地に来られなくても、今日はこんなものがあつたというのを送ってもらおう。それを集めるきっかけとして博覧会をしています。で、毎日どんどん事例が溜まっていく。100何件か事例が集まりました。それでも一つこの博覧会のポイントは泊まれるということです。部屋を昼間は公開しているのですが、その後アルコール消毒と



# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM



**滝沢**  
この台座には御影石を使用しています。おかつぱに似ていると思っただけですけど。このあたりの無駄な労力もエキスポに込めています。次お願いします。この部屋、何もなかったかと思ったら、トイレトペーパーがある。これ

**中野**  
これはすごく人気がある場所で、子どもは怖いと言いますが、大人には人気があつて、エキスポガールの久保田沙耶さんがレンブラント風にレオさんを描いてくれている。これをうちでまた展示しようかなと計画をしています。

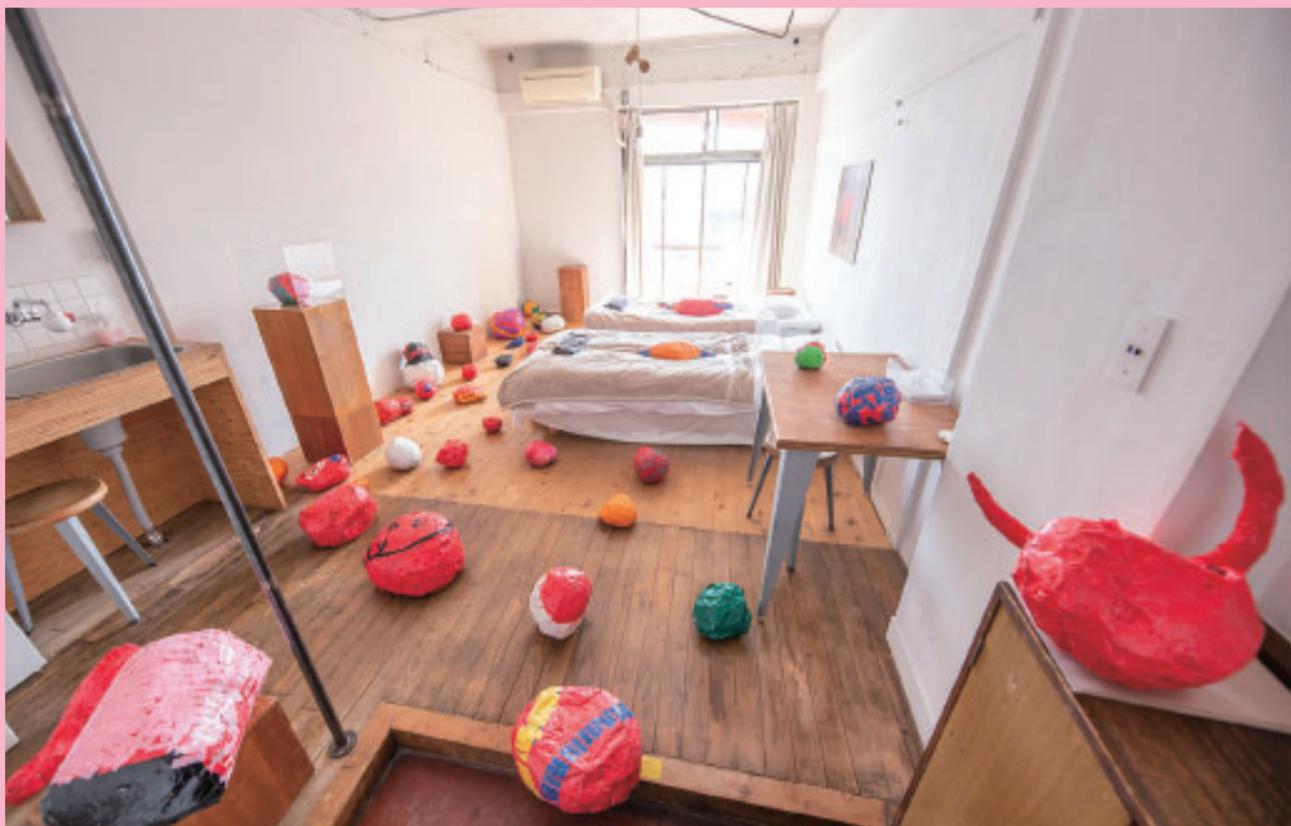
**久保田**  
ありがとうございます。



**中野**  
「アトリエぬかごっこ」のお子さんで、カンちゃんと言いまして、カンちゃんは一時期太陽の塔にはまっていた。NHKの「びじゅチューン」で太陽の塔を見て。これ切り絵なのですが、「ぬかごっこ」に来るともうひたすら、何も見ずに黙々と太陽の塔を切りまくる。何十個と切つて、そこから中に投げて。ぬかごっこ

はお母さまの投稿。子どもの時はトイレトペーパーをぎゅっと握つてちぎって、皺になつちゃつて。そうじゃなくて、切れ目があるところを切るとだよつて教えたのにずっと覚えなくて、今では自分の背丈を超えるぐらいになつたのに、朝トイレに入るとくしゃつてなつている。そこに愛おしさを感じるという素敵な投稿がありまして、そのクシャつとなつたトイレトペーパーがここにあるという展示でございます。

次のこれは？中野さん。



からは「ゴミばかりつくつて」と言われて捨てられていくのですが、そのような現状を床に転がして、ぞんざいに扱ふことで伝えておられます。一方作者にとつてどうかというところも。やっぱり傍に置いておきたい。愛着あるものとしてこれをベッドに抱き枕として置いて、お泊りになつた方はこれを抱きながら寝ることができる。

**中野**  
実際に泊まつた人は夜トイレに行く時にすごく邪魔だつたと言っていました。

**滝沢**  
意外と重いね。  
この作品の説明もお願いします。

**中野**  
これはうちのスタッフで、「レオの髪型」。レオさんですね、語ると涙な話になるらしいんですけど、どうしておかつぱにしているのか。彼は180センチぐらいの長身の男性です。レオさんすごく直毛で短髪にしていると寝癖がついちゃうらしいのです。美容師の人と寝癖ができない髪型を追求した結果、このおかつぱになった。でもおかつぱは賛否両論があつて、家族には不評、色々一悶着がありながら行き着いた髪型です。このおかつぱそのままのストーリーにした。髪型っておしゃれをするためと思うんですけど、アプローチが全然違つたというので、この「レオの髪型」を投稿させていただきました。これはうちのスタッフが投稿しています。

**滝沢**  
さらにレオさんについて調べていくと、息子さんはおかつぱじゃないけど、娘さんも奥さんもおかつぱだった。そこで、奥さんと娘さんとレオさんの身長に合わせた棒に子ども用のカツラと奥さんのカツラを乗せ、それが体験できるようにしました。これでも体験型かぶつて鏡に映して写真を撮つたりできる。もちろんおかつぱで寝られるという人気のもの。

**中野**  
朝起きて寝癖がついているかどうか確かめることができる。

**滝沢**  
まあ、つかないでしょう。



では1枚だけ持って帰っていいよと話して、最終的にカンちゃんが何か念を込めたようにプルプルブルって気を入れて、気に入ったやつだけ持って帰る。というのをずっとして、それを溜めていたのですね。で、今回「太陽の塔」で投稿させてもらい、こういった形に展示をしていただいた。全部の数を数えてくださったのですよね。

### もう地層発掘レベル

「ぬか」さんでは丁手にダンボールに保管していたのですが、数が多すぎて、もう地層発掘レベルになっていました。太陽の塔だけじゃなく色々なシリーズがあつて、それが段ボールに開けた瞬間ぐしゃっとなった状態になっていて、とりあえずそれを全部分析しました。太陽の塔の他に昔話シリーズ、ハロウィンシリーズなどに分けて、延ばして数を数えてフィリングしていく。久保田沙耶さんが分類を、久保田さんはイギリスで修復を勉強していた経験もあるのでフィリングをお任せしました。沙耶ちゃんその時はどんなでしたか。

久保田  
全部欲しいって思いましたね。

滝沢  
なんか宝探しみたいにまたすごいのが出てきた、またすごいのが出てきたみたいな感じだったよな。

久保田  
発掘しているみたいだった。裏にも記録がちゃ

で売っています。もしお気になる方は買っていただけとありがたいです。表紙の絵はミロコマチコさんにこのために書いていただきました。

滝沢  
ありがとうございます。今後のプロジェクトのためにぜひお買いあげをお願いします。途中で宣伝を入れてさせていただいております。他にも「ぬか」さんのオンラインショップには面白いものがあるので、ぜひ見ていただけたらと思います。ここには僕も寄稿しているし、柳沢さん、それから柴川さんの奥さま、そして久保田沙耶さんも執筆をされているので読んでいただければと思います。そこに書かれていることについてもそれぞれお話をいただければと思います。

柳沢  
もう時間も時間だから柴川さんの話を先にうかがいましょう。

滝沢  
柴川さん来られるかな。

### 「夫婦の事件簿」

柴川弘子  
今ちょうど落ち着いたところです。心の準備ができていないですけど。「なんでそんなん」のコンセプトを聞いた時、審査員を務める中で感じたこと、それから「夫婦の事件簿」をした時のこととリンクして驚きかさ波のよさに広がった。自分のプライベートなエピソードを含めてですけど、そういう突っ込みが広がっていくことの社会的効果という大げさ



かもしれないですけど、すごく希望が見いだせたと思えました。自分たちが関わった「夫婦の事件簿」は私の怒りに端を発しているようなものだったのが、「なんでそんなん」になると、どうしてこんなに優しく、楽しく、緩やかに行けるのだろうという、ヒントも逆になっていた。そういう話を書かせていただきました。

楠本  
つなぎ美術館では2008年から住民参画型アートプロジェクトをやっていて、毎年色々な作家さんに来ていただいています。柴川さんは2018年に来ていただきました。2016年頃、2年ぐらい前から準備はしていました。

柳沢  
どうも展示をするのかまったく決まっていな中、柴川さんと相談をする中で海底遺跡だとか色々なアイデアが出たんですけど、どれも今一つとぼとけない。

最初、奥様の弘子さんに関わってもらう予定はなかった。ですが、柴川さんが時々弘子さんの話をされる。なんか「ココロ」と言われるのですよ、弘子さんの話をされる時、「僕の奥さんが」といふような言方をされる。そして、弘子さんと呼ぶ時に、「おーい弘子」とか名前を呼ばない。「ねえねえ」とか、「ちよっとお姉さん」とか、なんだか照れを交えたような

んと書いてあって、紙というよりモノみたいな感じで、すごく楽しくて時間を忘れて首が痛くなるぐらいでした。あつという間にやっちやいましたね。アーカイブするって面白いなと思いました。一人一人のそういうのを。

### やりたくてしようがない

滝沢  
その時の気付きですが、そういうのを楽しめる人じゃないと苦痛と「ミミでしかないな」と思った。やっぱりアーティストや修復をされる方だと、それはやりたくてしようがない、もう職業病でやっちゃう。福祉の現場で困っているところにアーティストが入るのはいいなってその時に思いました。

中野  
作品を展示する時、裏にも書いてあるから展示方法をどうするか非常に迷いました。そこであ



呼び方をします。それが不思議だなと思っていた。たまたまたったのか、僕と柴川さんがスカイプで話している時、ちよと弘子さんが、後ろにいた。柴川さんと2000年後から見たら日本がどうだとか話をしていたら、弘子さんが後ろから冗談交じりに、「2000年後の未来を心配するよりも自分のこと心配したほうがいいんじゃないの」という感じのことをおっしゃった。それがなんだかすごく面白かった。夫婦の韻語というのか、行き違いみたいなのころがあつて。柴川さんは一所懸命やつているのだけど、それがなかなか認めてもらえない。弘子さんの立場で言うと、全然一所懸命やつてないし、そもそも一所懸命やらないといけないといふこと自体、考えること自体がおかしいのではないかと。

柳沢  
そういうものを美術館の展示に活かしていけないかなと思って、それで弘子さんにゲストキュレーターとして今回のプロジェクト関わっていただけないかお話をしたのです。最初は弘子さんも美術館で展示したことはないの、できるかどうかかわからないとお話されたので、重なお願ひしたところ引き受けていただけた。そこからほとんど色々なアイデアを弘子さんに出していただいた。どちらかというと弘子さんにアイデアを出していただいて、僕と柴川さんがそれをブラッシュアップして、もう一回弘子さんに返して、3人で展示、プロジェクトのアイデアを決めていく。そういうことを積み重ねながら、柴川さんは中盤から作品制作に専念する。そんな感じでした。最初からこういうことをやるとうと言っていたわけじゃなくて、1年か、1年半ぐらい経った頃に偶然こういうプラン

が決まったということなんです。

のファイルは挟むタイプで接着しないようにした。次の誰かが額装するとか、次の人に託すための保存、一時保留という形でフィリングをしております。

中野  
写真はこれくらいですね。

滝沢  
はい。ではヌーは。

中野  
記録集集なもの、そのうち月刊になるのではないかという思いを込めて「ぬか」がつくったのが「そのうち月刊ヌー」です。本当のところは何もわからないというのがコンセプトで、また今年、来年に記録集として出せればいいなと思っています。オンラインショップ

滝沢  
ありがとうございます。事件簿を集めてどうだったか、柴川夫妻から感想をいただけますか。

### 事件が起きないようにしていく

柴川敏之  
夫婦の事件簿を集める時は、結構意気込んで2000ぐらい集まるといいねと思ったのですが、応募方法も工夫はしたのですが、やっぱり、なかなか。集めてみて思ったのは、夫婦の間柄というのは、年月が経つにつれて事件が起きないようになっていく、起きないようになっていくのだなと思いました。波風を立てていると面倒くさいのですよ。事件が起こると大変だし。だから、なかったことにするとか、そんなもんだよね、みたいな感じとどちらかが諦める。私たちから見ると事件ですけど、年月が経って事件ではなくなってしまうと、それが当たり前になっている。

柳沢  
それが今回の「なんでそんなんエキスポ」にも通じると思います。一番近くの人にすごい事件が起きているのに、そんなもんだとか、他にもあるとか、そういう感じで取めていく、その思考の癖みたいなものができていくのだからと感じています。思ったほど集まらないのはきつそういに違いないと思つた。

楠本  
事件を事件として認識するかどうかは人それ

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

それです。事件の風化じゃないですけど。僕は割と用心深いので非常食をきちんと家に保管しておくんですけど、妻は全部食べちゃうんですよ、災害用の非常食を。当時はそれが事件化していたけど、いくら指摘しても変わらないから、もう今は自分の中で事件としては認識してないです。

**柴川敏之**

そんな感じですね。130個集まった。

**滝沢**

逆に見に来た方の反応はどうでしたか。

**橋本**

見に来た方の反応はそれぞれでしたね。夫婦のあるあるで共感するという方もいらっしゃるし、これくらいが何で事件なのだ、うちでは当たり前だという反応は先ほどと同じです。この人、夫婦Aにとってはすごく事件だけど、他の人から見たら当たり前のことだったりする。あるあるで共感してくれる方と事件の内容によっては、何が特別なことなのかわからないという方もいらっしゃいました。それがなかなか集まらなかったことの原因なのかもしれないですね。

**滝沢**

はい。ありがとうございます。柳沢さんこの次はどういう流れにしたいですか。

**柳沢**

せっかくですから、ここにいらっしゃるみなさんに、もし意見があったらお聞きしたいと思います。

**面白そう。**

**中野**

実を言うと人間だけじゃなかったんですよ、投稿は。

**西澤**

そうなんですか。

**中野**

お父さんの靴下の下に潜り込む犬。絶対にそこに居座ってしまう犬は何でなんだっていう投稿があった。「なんでそんなん」はどこまで行くのだろうなとすごく思っている。何でも当てはまっちゃ。柳沢さんが審査の時にどうしていかを苦慮していた。ジャンルがどんどん集まれば、カテゴリー的に色々なものが出来上がっていく可能性がある。

**西澤**

そうそう。物理学賞とかできるかも。

**中野**

出る可能性がありますよね。募集もしているけど、全世界の人対応と言っておきながら海外の人はまだ出ていない。海外の「なんでそんなん」が来ると、日本とまた違う文化なのかなとか、見てみたい部分がある。「なんでそんなん」から始まると思っています。

## 思考する喜びと共有する喜び

**橋本**

発見することからのアプローチ、しかもそれ

**滝沢**  
今日のテーマとして、博物館が居心地の良い場所になるために子どもたちにどんなアプローチができるかというように広い話でも大丈夫です。

## 他人事じゃないなと思える時間

**久保田**

展示期間中、日中はみんなで「なんでそんなん」って言って笑い合っていました。私もすごく笑ったし、面白がってくれるのが楽しかったんですけど、閉館時に施設する時に、なんかこう、展覧会として素晴らしいかつたというのがあるのですが、なんだか泣けてくる。日中は面白おかしくユーモアを持って「なんでそんなん」って突っ込みをするけど、夕方になると一人でその場所にいると、自分もそういうことをしているし、なんだか他人事じゃないなと思える時間が、その時の私にあった。会期中はあまり気づかなかったんですけど、生活においても制作においても私自身がどちらかというと「なんでそんなん」って言われるタイプだった。すごく怒られることも多かった。その後ちょっと、身の回りの人に「なんでそんなん」が流行りだした時期があって、家族の間でも「なんでそんなん」って言うてくれて、少し生きやすくなったし、制作する幅と生活する幅の境界線を考えることにもなった。

「なんでそんなん」

## ユーモアの「なんでそんなん」

共有してもらええる。何が面白そうに思えたのかあためて今日お話を聞きながら考えていたんですけど、面白がるで終わりにするのはなく、それをパブリックに共有するということがプレゼンテーションする側の喜びです。受け止める側も突っ込んで終わりじゃなくて考える。受け止める側も考えることができるって、人間らしい行いというか、思考する喜びと共有する喜びがあり、その辺にヒントがありそうだなと思っていました。

**滝沢**

ありがとうございます。もう一つ博物館として南相馬の仲川さん、一言思ったことを、何でも結構です。

**仲川**

南相馬の仲川です。正直、難しいなと思って見ていたのです。うちの場合は、震災後なのか、震災前からのかもしれないですが、仕事に余裕がなく、僕は最近、博物館の中で出た害虫の駆除作業をしていた。色々な方との共同作業、そういう話をお聞きして新鮮な感覚をいただきました。うちの場合は地域博物館なので、震災で避難してきた人、逆に南相馬市から避難している方、除染作業でこちらに働きに来ている人、本当に色々な方がある町なので、何かヒントがもらえるかなと思って、今回お話を聞かせていただきました。うちには美術分野がないので、なかなかアートでどんなふうにしたらいいのか考えさせられるのですが、今後ヒントをいただければありがたいです。

**滝沢**

お笑いだったら、「なんでやねん」って言ったから、「ありがとうございます」ってみなさん言うじゃないですか、漫才で。もしかして「なんでそんなん」って問いかけることって、最後に「ありがとうございます」って返ってくるような結果があると思う。ごまかしになってしまふ可能性もあるのかもしれない時に、ここで言っている「なんでそんなん」とユーモアの「なんでそんなん」はちょっと違うのではないかなと思っていて、最近引つかかって、考えていたところです。もしかしたら博物館で何かが起きている時にその辺りのことがわかるのかなと思っていました。

**滝沢**

「ありがとうございます」って言って、そこでシャットしちゃうという構造、お笑いの場合は。

**久保田**

はい。お笑いの場合もユーモアのもともとの語源はフモールという言葉で、ちょっとシニカル。イギリスのちよつと違う気質を面白がるっていうところから来ている。とすれば、だいたい喜劇は「ありがとうございます」だと思えます。「ぬか」さんが言っている、保留しておいて、そこからどう楽しんでいくかを保ち続けるということ、それはまた違うところなのだろうと思う。次にエキスポの機会があるのだったらその部分を考えています。

**滝沢**

ありがとうございます。今すぐ答えが出ないけど。はじまりの岡部さんは、「ぬか」に別オ  
ありがとうございます。そろそろ締めに入りたいと思えますけど、まだお話ししたいじゃない方に一言ずつ回していこうと思っています。上島先生の観点からはどのように目に映られるでしょうか。

## 見つけ出す力、面白がれる力

**上島**

今日は楽しい時間をありがとうございます。たくさん感じるところ、思うところがありますが、障がいを持つ方の芸術の魅力についてはそれを見つけて出す力、それを面白がれる力が両方必要なのだとみなさんの話をうかがって感じたところです。私は治療の中で障がいや症状を持つ方とお付き合いをされていて、心のリハビリテーションという言い方ですが、作業療法の中で多少文化的な試みもやっています。

障がいの重い方でも、今日見せていただいた作品群のようにとても緻密できれいで魅力的なものを見せてくれることがあって、僕は自分のiPhoneでパチパチ撮っていますけど、なかなか医療者、専門職の中でそれを面白がれる人は少ない。作業療法をする人、OTは別ですけど、なかなか専門職は面白がれないです。だから専門職もそうですが、一般の方も含め、障がいを持っている方の魅力に気づく、面白がれる力をどうやって養っていかればいいのかと思ったのが一つ。もう一つ、私は、結実した作品、作成物を私たちが見るだけではなく、つくった本人という当事者にフィードバックしていこうと思っています。今日は作品をたくさん見せていただいてすごいなと

ファーをされていますけど、どう見ておられますか、「ぬか」さんのユーモアのスタイルを。

**岡部**  
東北の人間だということもあって、「なんでそんなん」のニュアンスをたぶん取り切れないところもあるかと思えます。二面性というか、なんとなくわかるのですが、「なんでそんなん」って、「何なのそれ」と「何でそんなになっちゃうの」というところの裏表みたいなことが今のお話だったと思います。合っていますか。

**西澤**

他の地域にそういう言葉はないですか？面白がりつつ言ってほしい感じの、えーって。嫌じゃないけどみたいな。

私はそういうのが大好きで、見に行きたいなと思ってお話を聞いていたんですけど、博物館ともしコラボする時があれば、いっぱいやることがあると思えました。今、人間だけの「なんでそんなん」ですよね、登場している作品たちは。でも、よくわかると思いますが、生き物って、えーっみたいなことをいっぱいやっている。ただひたすら海のスープを濾し取って生き続けるとか、なんかどっかに貼りつき続けているとか。それはそれぞれ意味があって、そういうのを研究しているのが生物の研究者です。そういう各ジャンルの博物館なり、専門性の中の「なんでそんなん」を一緒に展示したら面白いなと思った。私だったらこの虫のこれは絶対に出すとか、そういうのを考えながら聞いていました。

**滝沢**

思いました。つくった本人は、どんなふうを受け取っているのか、どんなふう本人たちは認めているのかも気になりました。私たちの中には個々に本人たちにフィードバックしていくことを楽しみにしていたり、それが本人の希望につながったりしていくことがあるので、そこも大事にしていければいい。今日見せていただいたものを周りにもぜひ伝えていければいいなと思ってお話をうかがいました。

**滝沢**

ありがとうございます。「なんでそんなん」の第2回もやるので、ぜひ投稿いただき一緒に考えていけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。

**上島**

こちらこそありがとうございます。

**滝沢**

次に、はじまりの美術館から小林さんと大政さん。

## 伝わらない部分をあえて残して

**小林竜也**

小林です。今日はありがとうございます。先ほど言葉の話がありましたが、「なんでそんなん」って突っ込みがやっぱり西の方のノリかなと思っています。今度、中野さんにもお越しいただきますけど、うちでは「気になる表現」「気になるといふのをコンセプトにやっています。「なんでそんなん」という突っ込み待ちみたいな、そこでコミュニケーションが

# ROUNDTABLE AFTER SCHOOL MUSEUM

生まれるのが面白いと思う。博物館、美術館だと来てくれた人にどうしたらわかりやすく伝わるかを考えるんですけど、逆に伝わらない部分をあえて残して突っ込ませる。「なんでそんなん」と思わせるというのが意外で、視点として私もなかった。逆に盛り込むのが、来た人とのコミュニケーションのきっかけになると思っていたので、非常に勉強になりました。続きは今度、オンラインで開催する予定ですので、ぜひ中野さんと多くの話をできればと思います。

**滝沢**  
ありがとうございます。大政さんも一言。

**大政**  
刺激的なお話ありがとうございました。いつも見せ方がお上手だなと思っています。行っていないけど絶対に面白い。「なんでそんなん」もそうですし、「ほくのおくさん」も行けなかったけど、何か面白いことが起こっているのがチラシ、記録集、色々なものから伝わっていたので、今日はお話をうかがえて良かったです。

先ほどエキスポの会場はあまり、博物館っぽい場所、美術館っぽい場所、ちょっと離れた場所に、わざわざ行きたいと思う人しか行かない場所に設置したとおっしゃっていましたが、ポリフォニックミュージアムの方は誰が行きやすい場所ということでも、またターゲットが変わってくる。でも博物館って居場所としてはいいけど、少し距離がある。導線のつくり方を考えると楽しいかなって聞いていました。

最後に良い話を。柳沢さんにもう一回。

**柳沢**  
本当にみなさんありがとうございました。僕はつなぎ美術館でも「なんでそんなん」でもシンポジウムに入れていただき、テキストも書かせていただいた。僕がこの数年考えていることを文章化する機会をいただいた。二つの機会は本当にありがたかったです。

今日も、こうしてお名前だけよく存じ上げている方に会えました。つなぎ美術館と「なんでそんなん」の間で小松理度さんが浜松のクリエイティブサポートレッツについて書かれた、「ただそこに居る人たち」を読んで自分の整理がついた。一方でそこは違うなということも含めてよくわかった体験だった。

ライフミュージアムネットワーク、その前から福島県立博物館がつないできた絆、ネットワークの中で今日こういう話ができたし、直接面識はない方からも色々なことを教えていただいた。こういう場をつくっていただいた福島県立博物館のみなさまに心より感謝を申し上げます。

## 「計画的偶発性」

事務局・川延安直

みなさんありがとうございます。柳沢さんにまとめていただいた後で、蛇足ですけど、自分が動めているところなので最注目になっちゃいますが、博物館はとて大事な場所だと思つてます。最近、なおのこと。大学、図書館、学校と色々ありますけれど、役割がそれぞれ決められている、そういうところが多い。そんな中で博物館は、やりようによっては色々

**滝沢**  
ありがとうございます。原先生と宮原さんは自分には来ないだろうと余裕で構えているから回してみよう。

そういうものをパブリックにして

**原**  
筑波大の原です。めちゃくちゃ楽しかったです。「ぬか」さんの障がいがある方の本面に白いものを見つける力、先ほど上島先生がおっしゃったんですけど、それを取り上げるキュレーションの力がやっぱりすごい。柳沢先生もおっしゃっていたように空間に展示する、形にするという展示の力ものすごいなと思いました。勉強になりました。

このいい感じの緩さ、ファンな感じ、そういうものをパブリックにして、共有、共感とおっしゃっていましたけど、そういう緩さが社会にとって居心地の良い場所、幸せな場所につながっていきそうだなと感じてワクワクしました。美術館、博物館がそういう形になっていくといいなと思いました、ありがとうございます。

**宮原**  
久しぶりな方が多くて、久保田さん、柳沢さん、岡部さんも。すごく面白く聞かせてもらいました。久保田さんが言っていた太陽の塔を選ぶことか、障がいを持った方の表現のすこさを常と感じます。そのバックボーンには段ボールいっぱいものすごい太陽の塔が積み重なっている。表現が結果を求めているのではなく、作者の必然、必要から表現されていると思うのです。作品を評価するという展示の方

なことに使える、使うことのできる、今我々が持っている数少ない場所だと思っています。そういうところに、ぜひこの「なんでそんなん」の視点を取り込みたいと思っています。

**塚本**  
楠本さんが、「ほくのおくさん」の図録に書かれていますけど、「計画的偶発性」を生み出すのが我々学芸員の仕事だと思っています。これからは色々な偶発性が起こるように計画しますので、お付き合いよろしくお願ひいたします。どうもありがとうございます。

**塚本**  
こんなにあくさんのメンバーが集まったのも今まで滝沢さんがやってこられたネットワークと我々のネットワークが結びついた結果なのだと思います。とても楽しかったです。またこれからはこういう形で意見交換していきたいと思っています。では、今日は遅い時間までありがとうございます。

法もあると思いますが、何かそういった方が居心地良く表現できる空間を博物館が用意する。すごく安心感を持って日常の表現に落とし込めると思う。パブリックの場でそういう場所をつくれるといいなと思いました。

**滝沢**  
ありがとうございます。僕も思いましたので、展示会場に「ぬか」さんがツアーで来てくれた日があった。その時、展示してあるレゴをガシャンってひっくり返して、散乱して、その時にやっとならされたと思ったんです。そこに人が来て、あるものを動かす、別のこだわりを始めた時、その人がいる空間ができたなと思った。今の話を聞いて、つくっている人がいる場所いいなと思いましたね。

**小林めぐみ**  
それでですね。それはできそうな感じ。

**滝沢**  
じゃあ榎田くん。どうですか、今後。

**榎田**  
衝撃的な時間でした。滝沢さんと長野で会って、まだ2、3週間です。20年ぶりの再会。そしてここでまたみなさんとお会いして、まったく知らないプロジェクトばかりでもって受けています。とても楽しい時間でした。僕はどちらかという子どもたちの日常、放課後の場所でも子どもたちを迎えて20年ぐらい経ちます。福島、東京、長野、色々出かけます。最近ですが、例えばお皿となった時にみんなつくる形が同じようになってきています。20年前と20年後は随分違う。日常をみんななぞ

り始めていて、誰かが決めた形。お皿についても工業製品のお皿をみんなイメージする。色々な意味で通ってきている子どもたちの感覚が大人たちの決めた日常を無意識になぞり始めている。

**滝沢**  
それを問わなきゃいけない中で、「なんでそんなん」の発見には、子どもたちが普段から持っているワクワク感がすごくある。博物館はとて大事な場所になるだろうと思います。日常的に毎日通うような場所になったらいいなと思つています。何かの形で関われば。

心の中にある突っ込みが変わったら

**北添**  
はい。今年は山口の方でまたプランを進めておきます。「なんでそんなんエキスポ」の会場にも行かせてもらい、雑誌も読ませていただき、自分も「なんでそんなんプロジェクト」について知っていると聞いていたんですけど、今日聞いていて、またすごい発見がいっぱいあった。行動が変化せんでも、感じ方、捉え方が違っただけで幸せに感じられる。ボケじゃなく突っ込みの方が変わる。世の中に突っ込みって出てこないじゃないですか、言わないから。ボケ、現象は変わっていないけど。心の中にある突っ込みが変わったらなとか、今日話を聞いていて考えさせられました。ありがとうございます。

**滝沢**



## アートワークショップ「博物館部」

県外事例調査

生活介護事業所  
ぬかつくるところ

「ぬかつくるところ」。

なんて秀逸なネーミングでしょう。

生活介護事業所「ぬかつくるところ」は、

その人のやりたいこと・やりたくないことを受け止めます。

障がいの有無という壁を軽く乗り越えるような仕掛けを

次々と繰り出しています。

そこには、いつもユーモアがあります。

ぬか床のように、様々なものを受け止め、

混ぜ合わせ、発酵を促すような場所。

そんな場所にミュージアムもなれたら。

多くの「！」を得るリサーチとなりました。



中野厚志さん

## ぬかつくるところーぬかるみ商店

中野厚志

今日はハロウィンなので、パンキン関係のものですが、日々色々つくったものをそのまま「ぬかるみ商店」に出しちゃおうという流れです。たまたま、ある時期が来ると捨てちゃう(笑)。やあつて捨てる。なので、捨てる前に神さまに委ねようかと。地域の無人商店みたいな感じで、雑多なものを置いて、投げ銭で、そこでももらわれなかったら捨てようかっていう商店です。月に1回やる。今週は、急遽決まりました。日がちゃんと決まっていなくて、もうブックキングしちゃおうって。この木、金、土で「ぬかるみ商店」。ついでに「イドノウエ」も。雑多すぎるくらい雑多なもの、本当に何これみたいな。で、中にはお宝っぽいものもある。ちよっと探してみたいな感じがいいなと思って。最初、無人商店が基本でしたけど、やりとりするのも面白いな。ストーリーが入れられ



るように、プレートに何か書く。こういう行事で使いましたとか。人が来ると「いらっしやいませ」って、あそこから言う。何事って、地域の人が(笑)。うわあ、人が来た、来た！って。みんな「いらっしやいませ」って、ここから言うんですよ。今日はお隣で食育のイベントがあったので、その流れでお客さんが(笑)。

柳沢秀行

早島町には小学校、中学校、幼稚園、みんな1校ずつしかない。で、お隣が「いかしの舎」という古民家改築をした町の施設。ここは基本的に車を通らないから、中学生たちの登下校のメインルート。だからすごく落ち着いた一角。町唯一のスーパーがそのマルナカ。だからすごくいい場所だけど、静かなところ。結構、罪な値つけをされるようになりましたね。

中野

子どもたちが値段をつけたらしくて、そのま

RESEARCH  
NUKA TSUKURUTOKO

まで出しているんですけど。

柳沢  
強気だなあ。

中野  
俺、絶対この値段では買わないって言うています(笑)。普通に値切るよって言うてるんです。

事務局：江川トヨ子  
このハンカチ。かわいいな。

事務局：小林めぐみ  
この看板もかわいいね。

中野  
シルクスクリーンの職人さんがスタッフにいますので、デザインして、シルクスクリーンの版をつくってくれて全て自分たちで刷るんです。

小林  
自前ですか、これ。

中野  
自前。自前です。看板も全部自前です。

### ぬかつくるとこー戸田書院

中野  
戸田さんは言葉のおみくじを書かれる方。「戸田書院」は戸田さんが完全セレクトした古本屋さん。この本が欲しいという戸田さんの注

ですけど、それが結構。

江川  
当たる。

小林  
いい感じに心に刺さっちゃうんですね。

中野  
そうですね。泣き出す人が出るくらい。京都にも行って、今までに500人以上の人が受け取っている計算になる。全部直筆で、そのまま渡して。

小林  
これもいいですね。「知性は孤独から生まれる」。

中野  
そのとおりです。戸田さんの字をモチーフに

して戸田書院のTシャツとバッグを作りまし  
た。戸田さんは結構社会派なのですよ。

柳沢  
うん。パンチが効いています(笑)。

中野  
戸田さんは、ここに来ると最初に新聞にチャ  
チャ入れから始まります(笑)。それで、アナ  
グラムみたいな感じで言葉を書いて、面白い  
言葉に変えたりする。

小林  
あれ、「光あるところに影がある」。

柳沢  
カムイ伝。

小林  
「栄光の陰に数知れぬ忍者の姿がある」。

柳沢  
あ、なつかしい。お茶も売っている。戸田茶。

中野  
あれは「下山さんのお茶」です。「下山さん  
ちのお茶」、知らないですか。東北でつくられ  
ている。結構おいしいです。パッケージが書  
いていないものをいただいて、戸田さんが一  
筆書いて、「戸田茶」って。一応、オーケーを  
もらっています(笑)。

江川  
あ、ティッシュが。

文を受けて、自分たちが仕入れて、その本の見  
出し、吹き出しを書いてもらっている。結構秀  
逸な文章を書いてくださる。「とだみくじ」は、  
戸田さんがいて、200円払うと、戸田さん  
がインスピレーションで出してくる(笑)。

小林  
インスピレーションで。

中野  
そうですね。数は関係ないです。  
「とだみくじ」は木・金開店。戸田さんが木・  
金に来られるので。

小林  
この人にはこれだっていうのを渡すわけですね。

中野  
はい。インスピレーションで渡してくれるの



中野  
いや、これ、しおりです。

江川  
しおりですか(笑)。

中野  
これ、しおりです。戸田さんは本を読む時に  
ティッシュを挟む。そのエピソードを聞いて、  
これはしおりだって言うてあげよう。

江川  
なるほど。

### ぬかつくるとこーイドノウエ

中野  
「イドノウエ」。

江川  
本当に井戸の上にある。

中野  
はい。コミュニティの場所としては最高だと  
思っています。全国、イドノウエネットワー  
クをつくりたいな。

※「イドノウエ」ぬかびとさんによる作品発表の場、「ぬ  
か」の展示スペース。井戸を囲む東屋ほどの壁面に平面  
作品を、実際の井戸の上の展示台に立体物を、周囲の庭  
ではインスタレーションなどを展示しています。



### ぬかつくるとこーハナレ

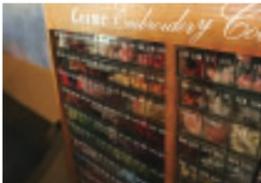
中野  
それ、刺繍糸です。最初は彼女の展示会、「チ  
カさんのちくちくルーム展」というのをやっ  
たんです。立ち上げてすぐにそれが新聞に載っ  
た。そうしたら一般の方が糸をあげる言うて  
運ばれた。チカさんの刺繍はこれです。ス  
ウエーデン刺繍というのをやられてって。下  
描きも何もありません。色も自分で選んで。

江川  
すごい。

小林  
中心からどんどん広がっていく感じですか。頭  
の中に図柄があるんですね。色の使い方もす

ごいですね。

中野  
うん。何パターンか図柄がある。作品だけじゃ  
なくて、チカさんの縫っている姿がすごくか  
わいくて、なので、縫っている姿をその場で見  
てもらいたい。いつもの定位置はここです。  
チカさんと一緒にワークショップをするちく  
ちくワークショップが、うちの最初の展示です。  
ここはだいたい5、6名で、精神の方中心。  
時間もフレックスにしていて、ランチだけ食  
べに来るとか、一日はしんどいから昼前に来  
て午後帰るとか、本人さんに沿った時間にし  
ています。でもそれで長く通うことができる。  
無理せずに。こっちはそういうスペースにし  
ています。あっち(ぬか)は本当ににぎやか  
ですけど、こっちはすごく静かです(笑)。静  
と動という感じ。



### アトリエぬかこつ

中野  
建物が自分と同じ年の50年くらい。

小林  
すごい、どこも素敵。

して戸田書院のTシャツとバッグを作りまし  
た。戸田さんは結構社会派なのですよ。

柳沢  
うん。パンチが効いています(笑)。

中野  
戸田さんは、ここに来ると最初に新聞にチャ  
チャ入れから始まります(笑)。それで、アナ  
グラムみたいな感じで言葉を書いて、面白い  
言葉に変えたりする。

小林  
あれ、「光あるところに影がある」。

柳沢  
カムイ伝。

小林  
「栄光の陰に数知れぬ忍者の姿がある」。

柳沢  
あ、なつかしい。お茶も売っている。戸田茶。

中野  
あれは「下山さんのお茶」です。「下山さん  
ちのお茶」、知らないですか。東北でつくられ  
ている。結構おいしいです。パッケージが書  
いていないものをいただいて、戸田さんが一  
筆書いて、「戸田茶」って。一応、オーケーを  
もらっています(笑)。

江川  
あ、ティッシュが。

中野  
スリッパのまま上がってください。みんな走  
り回っているの。

小林  
何人くらいいらっしゃいますか。

中野  
登録が80人。

小林  
来たり来なかつたり。

中野  
市町村によって使える日数が決められていて、  
市町村によっては月に5回。

小林  
なぜそう決まっているのですか。

中野  
増えすぎちゃっているのじゃないか。わか  
らないですけど。10日使える市町村もある。月  
のマイナス4日間使えるところも。ばらばら  
ですよ。使える日数が。この近場の人たちは、  
10日、5日くらいしか使えない。そうすると、  
一日定員10名として、登録数的には増えてい  
く。

江川  
自由にとりわけにはいかないんですね。

中野  
そうですね。だから倉敷市の方は5日以上使え

ない。だから週1回かそこらです。何が療育だっという話です。月に5日間とどうするのって。数が増えすぎるとお金を圧迫するのですかね。市町村の考え方ですね。

**小林**  
人口規模が大きい都市は数が少ない感じですか。

**中野**  
その可能性は大です。ここは、2時間枠にしていただいて、今日、土曜は休日、午前中10時から12時の2時間、午後1時半から3時半の2時間の枠で、午前午後合わせて10名弱ぐらいの方々が来られています。

**江川**  
午前からずっといる子もいるのですか。

**中野**  
いえ、2時間だけ。でもね、子どもたちは100%で来るので、2時間が限界かも。

**小林**  
エネルギー持っていけますよね(笑)。

**中野**  
そうですね。ここは、喧嘩と怪我がない限り、だいたいはいエスと言ってあげるコンセプトにしているんで、絵の具もどれだけ使ってもいいし、ガムテープも好きなだけ使っても普通にスタッフがぐるぐる巻きにされるとか(笑)。がんじがらめにする子もいる。固定のおもちゃじゃなくて、できるだけ廃材をいっぱい用意して、創作意欲をかき立てる。一からつくるほうが子どもたちにとってはやっぱ

りいい。色々な廃材をいただいて、集めて自由に使ってもらっています。

一応、音楽室もあります。もともと白い壁だったのを子どもたちが塗って、えらいことになっています(笑)。ほぼいいただきものの結構いい楽器もあります。好きに使って、爆音で叩いたりして、もうもう、好きなだけでつかい音で結構いい音で叩いていますよ。苦情は言われたことないです。今のところは(笑)。もともと、ここは、ボツンだった。後から新興住宅地で住宅が増えた。で、昼間だけ、遅くても平日は6時まで。音を出してもそこまで。

近々アップライトピアノも来る予定です。クラウドファンディングでピアノを届けようというのでいただけたことになった。子どもたちはギターもなかなか弾く機会がない。うちではもう自由なので。アコーディオンもある。8割方いただきものです。そして、贅沢なことに茶室がある。ここ、逃げる場所になる。



**柳沢**  
正しい茶室の使い方。

**小林**  
隠れています。見つけなくてください。

**中野**  
こういう版がつかれます。自分たちのTシャツとかは全部自分たちで刷る。Tシャツ関係とか、何でもつくれます。

**江川**  
「田書院」のものもそうですか。さっきの看板とか。

**中野**  
そうですね。看板をみんなで刷った。さっき、黄色いガムテープをくっつけていた子がいましたね。彼、「ベタベタックン」っていうのをつくりました。これは子ども用Tシャツですけど、ガムテープをシャツに貼っていい。それで「ベタベタックン」っていう名前の商品。大人用Tシャツ、サコッシュも。意外とかわいいですよ、ガムテープ。でもね、汗を通さないの。

**小林**  
全部にやると、だんだんしんどくなってきますね。

**中野**  
日替わりで、気分によって色を変えられるのが利点ですが、そのまま洗濯できない。長細い柄、四角い柄、黒と白のハイジーンがあって、ネットショップでアップしています。「ベタベ



タックン」という名前。

ガムテープを貼ることを、その人のこだわりだけでなく、特技、商品にする。テープを貼ることをワークショップにして、タックンと一緒に地域の中に出かけていく。すぐ、グッズをつくる。ぬかグッズを(笑)。

**江川**  
大事ですね。いいですね。グッズになっていく。

**中野**  
今からの季節おすすめがうちのパーカー(笑)。「そのうちパーカー」。

**江川**  
生地もすごくしっかりしている。

**事務局・川延安直**  
この手の売れるものは、かなりありますか。

**中野**  
あります、あります。

**川延**  
うちのショップにつながる。これはおいくらですか。

**中野**  
3,500円くらい。これはすごく温かいです。「そのうちね」って魔法の言葉ですよ(笑)。ちょっと許されるけど、あまりやりすぎたら怒られると思う(笑)。

**小林**  
なんかいいですよ、博物館からも商品が生まれたらいいね。

**中野**  
色々つくっていますよ。意外とやっているんですよ。CDもつくった。「なんでそんな」のテーマソング(笑)。ミュージシャンの方に歌ってもらった。「ほんとのことはわからん音頭」。中ムフサトコさん。

**川延**  
YouTubeで上がっていましたね。頭の中で繰り返す。

**中野**  
やばいですね。うちのスタッフは、こういうのをやったり、もう、何ですか、体のいい大人の遊び。  
.....

# RESEARCH NUKA TSUKURUTOKO



小林

「ぬかつくると」「と」アトリぬかごっこ」ご案内下さってありがとうございました。改めて、私たちの活動のこと、今日お邪魔した背景をお伝えさせていただきます。

東日本大震災、東京電力の原発事故があり、みなさんに色々なところで出会って、お話を聞き、何が起こったのかを調べていくうちに、「いのち」と「くらし」ということを突き詰めて考えなきゃいけないと感じました。じゃあ博物館に何ができるかとあらためて考えると、みなさんとネットワークをつくりながら、「いのち」と「くらし」を考えることだろうと。

最近「震災」ストレートなテーマの事業をしても、すごく関心のある方は来てくださるけど、福島の人にも「もういいや」みたいな心配がある。けれども、すごく大きなことが起きた、震災・事故からの学びを大事にしたいと思っています。

例えばちょっと時間をさかのぼって、ダムがたたくある奥会津の歴史を探っていたら、そこも水力発電で電気をつくって東京に送り、そのために山の暮らしが変わって、貨幣経済に巻き込まれて、人口がどんどん減っていったことが見えてきた。そういうことを学ぶことで、原発事故、震災を捉えられたらいいなと、ライフミュージアムネットワークでは福島県全体を学びのフィールドと考えてみなさんと学ぶ場をつくらうとしてきました。

もう一つ行なってきたのは、語り合う場づくり。2011年以降、お互いに違う考えでも議論がもつちよっと上手にできたらしいのにも思うことが福島で結構あって。色々な考えの人が同じ土俵で話をする場所をミュージアムはつくれると思っていて、役割の一つとして

たのです(笑)。それが10年以上前か。

丹正

もう10年以上前ですね。

中野

うんうん。やっぱりアーティストと言われる人なので、すごく、なんか懐にすっと入る人たちだった。もう一人、レオさんという人もいて、その二人が来てくれていて、接し方もすごく好きで、利用者さんと接する、懐に入る、何も強制はしない。そつとそばにいて、生まれるものを一緒に見届けるスタンスは、すごくすてきたなと思っていた。

前の法人はすごく大きな法人で、15年くらい働いていると、必然的に上になって、何をやっているかわからなくなってきた時期があった。いい人はほとんどら、6年で辞めていっちゃって、残っていた部類ですけど。たまたま立ち上げの機会、きっかけがあって、じゃあやろうと。

その時ももう40歳くらいで、子どもも二人いたけど、1年くらいブータローをして、みんなと一緒に日本全国を回った(笑)。色々な面白いところを回らせてもらいました。しょうぶ学園さん、工房まるさん、大阪のアトリエコーナスさん、やまなみ工房さん、色々回らせてもらった。そして今の物件に出会い、ここでやろうとなったのが8年前です。

ここでやるために、半年かけて事業申請、改築を三人で、もう一人いたので、今はいない。中心三人で立ち上げの準備をして始めたのが「ぬかつくると」です。

そこで、既存のものづくりだけじゃなくて、

て取り組んできました。

さらに最近、ようやく会津の支援学校さんと事業を始めました。会津支援学校のみなさんに私たちが出会い、すごいと思ったことを、博物館に来た人にも出会ってもらえるようになったらいいなと思っています。そんな風にも、いろいろなことを様々な人と学んだり、考えたりする。そんなミュージアムのあり方を実現するために、「ぬか」のみなさんの活動に教えてもらえることが多いと感じて今日は参りました。

柳沢

川延さんは、僕の大学の直接の先輩でもある。なおかつ、岡山の県立美術館でも一緒にさせてもらっていた。そこから福島に移ったのです。

我々の美術館からすると、福島に何かできないかと思っていた時、当時の博物館長だった赤坂憲雄先生、民俗学で有名な大先生がいちゃって、そこからつながって、会津若松の北にある喜多方で大原美術館の所蔵品を展示しました。継続的に関係をつくらうということで、都合5年通いました。

川延さん、小林さんにも、そちらでずいぶんお世話になった。というところで、関係が深まっているんですけど、今おっしゃっていたライフミュージアムネットワークの段階、「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」、その前の「会津・漆の芸術祭」、色々な仕掛けをしてできあがっているネットワークに、僕は僕で知っている面白そうな人をもかくなげた。気づいたこの前のZoomの会議に知り合いばかり出ていました(笑)。

中野

すごい会議でしたね、あれ。やばい会議でした。

本当にやりたいことをリアルにやっていく。自分たちは「利用者さん」と呼ばずに「ぬかびとさん」と呼んでいますけど、「ぬかびとさん」がリアルに楽しめる空間にする。それもやってもやらなくてもいい。

福祉の業界って、絶対に何かをしなくちゃいけない感じがらめの状況になっちゃうので、そうじゃなくて、やらないこともその人にとって必要だったらやらなくていい。肩肘張らずに過ごせる空間で、その一つの表現としてアートを使っていこうとやり始めたのがここです。

求められている場所

「アトリエぬかごっこ」に関しては、色々あって、本当は就労支援をやるうという話が頓挫して、じゃあ子どもの事業所をやるうと始めたのが3年前。この場所を借りていたので、持て余しちゃうって、どうしようかって時に、じゃあ、子どもの事業所をやるうって、「ぬかごっこ」が立ち上がった。

放課後デイサービスって、療育みたいなものに特化しているんですけど、そうじゃなくて、アトリエに特化したものをつくりたくて、2時間の枠にして、どれだけの反応、ニーズがあるかやり始めていたら、やっぱりすごく子どもたちのそういうニーズが高いというか、自由にできる場所がなかなかなくて、学校でもダメダメ言われる。そういう子たちが、ここでは100%発散する。あれよ、あれよという間にすごく登録者が増えて、やっぱり求められている場所なのだなって実感し始めているんです。

そういうところで、必然的にできあがった成人期の事業所と子どもの事業所で、8年目。

た(笑)。

柳沢

一方、「ぬか」さんとは、こんな近い距離だし。

中野

ほんとに足繁く通っていたら、色々な話をして、「なんでそんなん」を始める時にすごく勉強になりました。今もなっています。柳沢さんのおかげ(笑)。

柳沢

美大出身者は何人いますか。

中野

三人ですね。絵描き一人。

丹正和臣

だから四人くらいいます。服をつくっている方や、そういうものづくりに普段から関わっている、パートタイムで来てくださる方もいます。

中野

ですね。多彩な人たちがいますね。



丹正和臣さん

もつちよつとで、12月で9年です。

小林

福島県立博物館は、去年くらいからようやく、江川さんが支援学校さんと関係をつくって、新しく知ることが多いです。授業では、はさみが使えるようにとか、技能的にできるようになるのを目的にしている点もあるとお聞きしました。それはそれで重要ですけど、「ぬか」さんは、やりたくない時はやらなくていい感じで時間を過ごしている場所なのだろうと思うのですが、そういう場所になり得ているのは、なぜでしょう。

活動に関して全然決めず、しかも自由にする

中野

やっぱり、意外とないんですよ。生活介護というカテゴリが就労支援と介護に分かれるのですけど、障がい介護を重きにした場所って、生活介護というサービスになるのですが、そこは基本的に自由で、こうしなさいというのがない。だから何をしてもいい。

でも福祉業界って、何をしてもいいですよと言われて、何もできないのですよ、意外と(笑)。だから、よくやられているのが委託作業とか、集まって何かするとかに留まっちゃって、差別化じゃないですけど、特化したものが意外となくなっちゃう。

自分たちの指針としては、活動に関して全然決めず、しかも自由にするということ。福祉ってまとまって何かをする、グループピングすることで把握しやすくなっちゃうけど、うちにあえてそうしない。活動の上で一つだけ決め

小林

中野さんが、「ぬか」を始めるようになったお話を聞いていいですか。

中野

そこ、何時間くらい(笑)。うそです、うそです。

柳沢

2分くらい。

「ぬかつくると」

中野

だいたいそれくらい収まります(笑)。自分もともと福祉畑オンリーで、福祉を始めて何年かな。この業界に入ったのが平成10年なので、もう20年以上になる。近くの社会福祉法人で15年くらい働いていて、そこで、利用者さんと呼ばれる人たちのものづくりを間近で見ている、一番のファンでずっと接してました。そこでも絵の教室があった。20年以上前は、福祉展全盛期で、「福祉展」と呼ばれて、残念なパネルに絵が飾られているみたいなの、そういうのが残念で仕方がなくて、すごく嫌でした。

その当時、福祉業界の友達、色々な人たちを集めて、自分で展示会をしていました。いいものをいい場所で飾りたい。というのをその頃からやっていて、社協の人たちを巻き込んで、蔵とかを借りて、障がいを持っていての人たちだけじゃなく、健常の人たちも混ざり合うような展示会をやっていた。一番のファンとして。ずっと携わっていた前に所属していた法人の時に、彼が美術の先生として来て

たのが委託作業をしないということ。そしてやりたいことをやるうと。そういう場所が意外になかった。だから、逆に差別化が図れた。

意外とみんな同じような活動になっちゃっている。

江川

「ぬかごっこ」に通われている子どもたちがここで過ごした後の保護者の方たちの変化がありますか。

中野

一番子どもが変化していない。

その子のペースによって変化が生まれていく

丹正

保護者の方ももちろん変化されています。もともと、ここは成長する途中段階の場所ですけど、絵がうまくなるのを目標にしているわけでもないし、工作が上手になるのを目的にしているわけでもない。その子のペースによって変化が生まれていく。1年で、例えば、ものの貸し借りをするための声かけられるようになるとか。僕たちはそれを狙ってはいないですけど、やっぱりちょっとずつ人は変化する。子どもはその変化度が高い気はしていますが、親御さんも僕たちの価値観をある程度事前に理解してくれた上で、通わせてくれているので、弊害はないです。「うちの子、絵がうまくな

中野

自由にできるから、これをつくりたいって自

スタッフも足繁く学校に行ってくれます。

「なんでそんな」の裏テーマは  
学校との出会い

小林  
それだけ安心できる場所。

中野  
リアルにやりたいことができる、そこだと思  
います。

ハブとしての機能

丹正

スタッフと話がしやすいから、他ではしゃべ  
れないけど、ここではしゃべれる。親の前で  
も子どもたちって思春期にはしゃべりにく  
かったりすると思う。この情報を学校と共  
有して、小学校から中学校に上がる進学のタ  
イミングで支援級に行くか普通級に行くか、  
本人の意見をここで吸い上げて、現場に反映  
する。ハブとしての機能もある。

中野  
僕はその場にはあまりいいんですけど、本人が  
どう思っているかの意見は、意外とケア会議  
でないがしろにされがちで、本人が言いつら  
かったら、それで黙殺されてしまったりする。

中野  
学校と連携はしています。支援級の子も先生  
の障がい理解が乏しくて、もっと本人を認め  
てあげたらいいのにすり合わせがなかなかで  
きず、住みにくさを感じている子どもたちも  
多い。学校に行って、ケア会議をして、こう  
いう子だということも踏まえてお伝えする。

交流の機会がないと。

後づけで障がいを知ってもらう

中野

そうですね。そのきっかけをどうしたらつくれる  
か。そこでやり始めたのがたっくんみたいな、  
その人の特徴を生かしたワークショップにし  
て、ちゃんとデザインも入れながら、普通の  
マルシェに出店する。ワークショップをやっ  
ているうちに、「ここって何だろう」という後づ  
けで障がいを知ってもらう。障がいを表に出  
せずに、「ぬかつくると」という名前で、「ぬ  
か」って何だとか、後からどんどん知っても  
らうことをやり始めました。こうやろうとや  
り始めたのではなくて、なんかそつなってい  
たのですよ。

その一つの取り組みで、今、地域のイタリア  
料理店のシェフがごはんをつくってくれてい  
ます。そのランチをあのこつた返している  
場所であってもらう。営業許可を取って(笑)。  
でも、ランチと一緒に食べたなら、きっかけに  
なるじゃないですか。あ、ランチがあるのかつ  
て。要予約で、今、コロナでちょっとあれで  
すけど。ランチがあるのか、行こうかとか、  
敷居を下げるじゃないですけど、あえて軽く  
またいでもらえるように仕掛けをつくって  
いった。

コロナの状況で、なかなか食事ができなくなっ  
ても、「イドノウエ」「ぬかるみ商店」は半野  
外で、今のご時世、ちょっと良かった。「イド  
ノウエ」って、昔の井戸端じゃないですけど、  
ちょっと寄って、何をしているのって、気さ  
くに何かやっているから寄ってみたいいな、  
それで知ってもらう。そういうきっかけで、「ぬ

いじったら、今の状況になったっていうのが  
結果。

丹正

狙って、ビジョンがあつてみたいな感じでは  
ないです(笑)。

小林

私も行き当たりばったりで偶発性を狙って進  
むほうで、長期ビジョンは何だと言われる  
と、どうしようかって。

あいまいの中を自由に動いて楽しむ

丹正

「ぬかびとさん」のそれぞれの生活に対する計  
画も、法律で定められているんですけど、「ぬか」  
は極力シンプルにしたいと思っています。大人  
の事業所でも、子どもの事業所でも、短期目  
標と長期目標を設定して、それを達成したか  
どうかって問われる。でも、人間は常に成長  
しているわけではないので、何か達成しないとい  
けない目標がずっとあるってしんどいと思う。  
僕は評価を「結果」という言葉にしました。  
上か下かではなくて、結果。やったことだけ  
を書く。スタッフそれぞれの主観で、ばらばら  
まちまちですけど。

中野

そうですね。「目標」は使っていない。「テーマ」つ  
ていう名前になっている(笑)。目標にはしてい  
ないです。絶対せねばならない目標ではない。

丹正

だからたぶん、ぼんやりしている。「ぬか」の

かるみ商店」と「イドノウエ」は面白かった。

江川  
人がいっぱい通る場所。あそこを選んだのは

そういう意味もあつたのですか。

丹正

いや、たまたま。

中野

たまたまそこに出合ってしまった。

丹正

基本、たまたまです。

小林

「たまたま」もパーカーになりそうですね(笑)。

中野

「たまたまパーカー」。そうですね。

丹正

何か素材があつて、それをいじっている感じ  
ね。

中野

そうですね、そうですね。

丹正

「イドノウエ」も、井戸がある。上をちょっと  
小さいギャラリイに見たら面白いとか。  
手遊びしたくなる。

中野

きっかけは周りからいただいでいて、それを

支援計画も活動もちょっとあいまいなところ  
があつて、そのあいまいの中を自由に動いて  
楽しむ。でも、日々の活動は、さっきみたい  
に決めていないので、逆にたぶんスタッフは  
動きづらいです。

小林

臨機応変にしなきゃいけない。

丹正

そつ。即興性が求められる。

小林

瞬発力と判断力が要りますね。

丹正

それが、たぶんリスクとのバランス。でも、極力  
自由に思いつきで動ける状態をつくっている。

江川

瞬発力と判断力ね。

「そのうち」はいい言葉だよ

中野

だからこそ「そのうち」という言葉も生まれ  
たと思う(笑)。「そのうち」はいい言葉だよ。

丹正

後で気づきましたね。名つけた後に、「あ」「ぬか」  
と合うな。

中野

親和性がかなり高い。「そのうち」だったら何  
でもできる。だから、記録集も、「そのうち」



刊ヌー』。月刊じゃなくていいです。

**小林**  
初めての方が来られるスタートの段階は、どういうふうに入ってきたようになるのですか。このライフミュージアムネットワークの事業を通して福島県立博物館も色々な方が来られる場所にした。ただ、私たちが来てほしいと思っただけでは実現しないので、どうしたらいいか探りたいのです。その辺がなかなか悩みどころで。

**江川**  
福祉は敷居が高いとおっしゃいましたが、博物館もつくりが重厚過ぎて。私たちの想いとしては、支援学校の子どもたちが、学校の枠から外れて、社会に出た時に、ふらっと来て、ここは涼しくていい、この椅子は誰々さんの専用、そんな状況でいられる場所がうちの博物館にあったらいいな。

不登校の子どもたちも、本当に狭い世界で動いている。学校になかなか行けないから、適応指導教室という場所で活動しているのですが、小学校、中学校の子どもの登下校の時間にぶつからないように、ささっと帰るような姿を見て、だとしたら博物館に寄って、気分転換したり、おなじみの学芸員としゃべったりできる、そんな空間にできないかと、ちょっとずつ近づこうと思っています。フワッとという感じ、さっきお邪魔した時も、自然にこっちがにやにやしちやう。そういう空間に、どうやったらなるかなと思って。

**なんかわからない、でも楽しそうって、うつつから**

**江川**  
コピーライターがすごい(笑)。

**きつかけをどつつくるか**

**中野**  
いやいや、ちょっとした、足を向けるような何かがありさえすれば、ニーズが多くなってよくて、やっぱりきつかけをつくってあげないと、なかなか来られないですよ。そういうきつかけをどつつくるかだと思います。

**丹正**  
あまり売上を目標にしていないですけど、「ぬかるみ商店」、初日、5,000円。

**中野**  
この3日間、やばいかもしれない(笑)。捨てるものがこうなるって。

**丹正**  
僕は、ものを捨てたいから始めたけど、捨てられなくなってきたという矛盾が生まれている(笑)。

**中野**  
そうなの。これは「ぬかるみ商店」でいけるって、結局、たまっている。ちょっと欲が出始めている。

**小林**  
すごい石マニアとかね。

**中野**  
石を売る、いいですよ。いいと思います。

**中野**  
取りあえず最初は発信しようって、ことごとく「Jpopo」で発信しました。活動のことや、もう取りあえず何でもいからあげていく。そうすると、何かしらヒットしていく。どっちかっていうと県内よりも県外にヒットし始めて、「何をしているのだ、ここは」みたいな。見てもわからないですよ、何をしているのか。それでいいかと思っていて、今日の行事、「パイで乾杯かぼちゃパイ」って、なんなんだみたいな(笑)。

最近、マンスリーでご家族に行事予定も出すんですけど、あまりにもタイトルがわからなくて、最初は「何ですか」と言われていたけど、最近は聞かれなくなった。こんなもんなんだらう、「ぬか」はって(笑)。悪ふざけがすぎてくるけど。

なんかわからない、でも楽しそうっていうところから、「Facebook」を見て、行きたいなあって。ランチもしているし、ごはんを食べに行きたらって、そこでどんどんつながっていったのが最初の頃。県外から来ていただいていたよね。

**丹正**  
ランチおいしいよっていう噂だけ広がって、地域の人が「忘年会やりたいんだけど」とか、「今から行ってもいいですか」って県内の方かと思ったら、姫路から来ていたり(笑)。

**中野**  
そうそう。どうしたんですかって言ったら、「Facebookで見て」とか。

**丹正**  
すげえ売るじゃん。

**中野**  
1年目には、「ここの市」という1周年記念をしたんですけど、大人と子どもが本気のお店屋さんごっこをしようというコンセプト。雑貨、陶芸家の人、普通にマルシェで出すドーナツ屋さんの中に、ここで生まれた、段ボールでつくった銃、武器とかを売るお店屋さんをやったんですけど、意外に売れた。売れたものは、そのまま子どもたちにあげた。

**丹正**  
そうですね。今回、石を出していたソウちゃんという男の子も、つくった武器を置いていて、店番の時に500円の銃が売れていました。

**中野**  
全員は店を出せないの、オークション的な感じで作品とか絵を置いて、入札方式で絵を売ってね。そのまま売れたものはご本人さんに。結構面白かったです。

**丹正**  
これもコロナになってできなくなりました。

**江川**  
コロナの影響は大きかったですか。ランチもNGですもんね。

**人と関わっていないと  
変な感じになる**

**閉じているイメージと  
観光というオープンな  
言葉とのギャップが**

**丹正**  
一回、あの場所に二泊三日で泊まる企画をやった。「コトノネ」という雑誌の企画で。でもやってみて、なんか間口が違うというか。ランチできますよの間口じゃなくて、観光できますよって。それだけで、今まで気になっていたけど、来る機会がなかった兵庫や静岡の人がふっと来てくれる。受け入れの情報提供の仕方なのか、来る人の性質が変わって、あの時、面白いなと思った。

福祉施設の入りづらさ、閉じているイメージと観光というオープンな言葉とのギャップがちょっと面白かった。ランチをやっていたので、デートスポットになったら面白いなと思っていたのです。カップルが来て、イチイチやしなながら、ごはんを食べている。そういう場所になっても面白いなあって。

**中野**  
みんなが茶々を入れる(笑)。そういう場所になつたら面白いねって目標があった。デートスポットになるという。

**丹正**  
「じゃらん」に、岡山城、後楽園、「ぬか」とか(笑)。

**小林**  
岡山といえば、デートスポットは「ぬか」。

**中野**  
そうですね。やっぱり人と関わっていないと変な感じになる。風通しを良くするために、色々な人に入ってもらうって部分もあった。

「ぬかびとさん」にもスタッフにとっても、見られているっていうことが必要。福祉の業界では「福祉病」と呼んでいますが、事業所の中での当たり前が当たり前になっちゃう。でも外では当たり前じゃない。それが「福祉病」、そうならないためにも、色々な人に来てもらう。それも踏まえてのランチだった。「ぬかびとさん」もですけど、スタッフも見てもらう意味合いがあったので、関わったほうが絶対お互いのために良い。

**丹正**  
「なんでそんなプロジェクト」に柳沢さんにも関わっていただいて、オンラインで事例を集めることで、視点が多様にある、発見者の視点がいっぱいあることを共有できた。オンラインはオンラインの可能性があると思う。もちろん、身動きのしづらさ、怖さはありますけどね。

**中野**  
ああ、でもいっぱい人に来てもらう、見て、話を聞いてもらいたいと思っちゃいます。

**江川**  
来て、ずっというらっしゃる方も多いですか。

**中野**  
以前のランチはそうでした。ごはんを食べて、そのまま普通に一緒に活動して帰る。行事に参加して、ランチ代をもらい忘れるとか(笑)。

そういった、ちょっとした仕掛けをちょこちょこやってきた成果があった。「イドノウエ」はすごくいい。「ぬかるみ商店」もいい。イドノウエ水脈で全国につながっている妄想をしています(笑)。全国イドノウエネットワーク。同時多発イド。イドノウエから何か始めてみませんか。

**丹正**  
蓋さえあれば、テーブルができる。だから井戸端でお茶を飲んだりできる。語り合う場所づくりとしては、面白い。

**中野**  
最近はギャラリーじゃなくていいと思って。

**江川**  
そうだね。井戸端会議ですもん。

**丹正**  
妄想、仮説ですけど、誰か研究されている方がいるかもしれないですけど、地域ごとに、井戸の外寸のサイズにある程度決まりがあるのか。東北エリアの井戸の蓋は何センチとか。そういう設計図があって、プリントアウトしてつくれるみたいなのが良かったら面白いなと妄想していました(笑)。

**中野**  
いきつかけつくりになる。「イドノウエ」、どうですか。福島で。

**小林**  
同時多発もいいですよ。

**小林**  
もはやスタッフじゃないですか。

**丹正**  
「ぬかるみにはまる」と呼んでいます。

**小林**  
言葉の使い方がすごくお上手です(笑)。

**中野**  
スタッフも個人的すぎて、「ぬかにくぎ」な人たちがいっぱいいます(笑)。

**丹正**  
この前、京都市立芸術大学の人と作品交換のプロジェクトを始めました。軽いパベルを重そうに持ち上げるという企画です。あり得ないけど、アイデアでは面白そうなことを言う。そのマインドはいいなって思いました。

**小林**  
そういうのが、自分の中からどんどん出てくる。みんな頭いい。

**中野**  
今のうちの流行りの競技(笑)。アーティスティック・ウエートリフティング。

**丹正**  
こんなに流行るとは思わなかった。滝沢さんのホタルとZoomで、お互い持ち上げ合う。特に得点とかないですけど、カメラの前で重そうに持ち上げるんですけど、面白いです。

**中野** そう。それをみんなで讀み合うという競技(笑)。これ、全国でいけるんじゃないかな。

**小林** 同時多発で、オンラインで。

**中野** 協会を立ち上げました。アーティストック・ウエートリフティング協会。名前だけはね(笑)。意外と秀逸な活動だなと思っっています。ただ重そうに持ち上げる。どこでもできます。

## 面白そうだねって、っていう雑誌から

**江川** こんなふう楽しんでる方々と福祉の方たちも触れあうと、目から鱗ではないけど、すごく楽になる。もしかして、もっと楽しんじゃっていいのかなって。

**中野** いや、色々大変ですよ。ほんとに(笑)。もう、この8年間大変でした。

**江川** 私たちももっと楽しんじゃって、その結果をさらに楽しんじゃっていいのかな。

**中野** こうしたいっていう根本的なものはある。知ってもらいたい大きな根本的なところに、色々お話を肉つけて、肉つけて、今がある。「なんでそんなプロジェクト」もここまでくると思わなかった。柳沢さんのおかげです(笑)。

**中野** 日本はそう。きっちりしたい(笑)。分けたら楽ですからね。柳沢さん、ぼちぼちまとめてください。

## 「ぬかびとさん」個人個人のスイッチ

**丹正** 去年、入ったスタッフが入りたてで、まだ「ぬか」に漬かりきっていない、浅漬けの頃(笑)に浅漬けトークをして、それを YouTube にアップしているのですが、よく言っていたのが、やっぱり「活動が決まっていけないからやりづらい」。

**小林** 何をしていいかわからない。

**丹正** それは、他の福祉事業所から来たスタッフ二人でした。他ではスイッチのコントロール権限はスタッフにある。でも「ぬか」は、たぶん、どっちも持っているけど、基本的にプレーカーは入りっぱなし(笑)。小さいスイッチの権限はスタッフにはあまりない。「ぬかびとさん」個人個人のスイッチがあつて、それがふいにパチンと入る。あ、入ったってなることに気づくか気づかないか。

**江川** そのタイミングを見ることが大事。

**丹正** 受ける能力というか、変化を感じる能力とい

**丹正** 最初、「アンデパンダン」と「なんでそんなん」が似ているねって(笑)。なんでそんなんばかりのナンデパンダン展があつたら面白そうだねって、こういう雑誌から生まれた。

## いかに混ざり合えるか、自然なかたちでぼやかせるか

**江川** 知ってもらいたいというのは、知ってもらったって、どうなるかと思っっておられますか。

**中野** いや、知られるだけでいいと思っっています。障がいの人々を知ってもらおうとは思っっていないです。その人そのものを知ってもらいたい。障がいはどうでもいい。一応、福祉としてのカテゴリーはあるけれど、この人のこの部分、面白よねとか。それは「ぬかびとさん」だけじゃなく、スタッフもそうです。スタッフも面白い人たちがいっぱいいる。同列に扱って、この人のこれ面白いわってところを「ぬか」として押し出していく。その結果、今がある。

色々なところを回っていた時、九州の工房まるさんの方が言っていました。障がいて、その人の障がいがいだけじゃなくて、健常といわれる人と、障がいがあるといわれている人の間にある壁が一番の障がいで。いや、まさにそれだなと思っって、その壁をどう低くするか、ぼやかすか。障がいの人々でカテゴリー分けされるのではなく、いかに混ざり合

うか、要領よく全体をまとめて、プレーカーをパチンと落としたり上げたりするのはなくて、一人一人のスイッチに気づくというのは疲れる。

**中野** 疲れるわ。毎日が文化祭の前日だって言われます。

**江川** ずっとマニュアルをやつてこられた方が多いですね。

**小林** うちもそうでしょ、お客さまに対して、管理したがる傾向がある。

**川延** それはどっちもどっちじゃないですか。ああいう施設は、こちらからそういふふうに通きかけちゃうところもあるけれど、そういうふうにして欲しいというお客さんからの声も一定数ある。自由に見てくださという言葉に「ありがとう」と言ってくれる人と「なんだそれ」って怒る人、両方いらっしゃいますよ。

**丹正** そうですよ。ぬか」にもおられました。朝来て、「何すればいいんですか」って。慣れるのに6年くらいかかった(笑)。

**川延** 3年かかりましたか。

**中野**

えるか、自然なかたちでぼやかせるか、というところが「ぬか」の目標。

今日の夕方、「ぬか」にいた時、誰がスタッフで誰が「ぬかびとさん」かわからなかったじゃないですか。私もあつたして、何だこは、あれ誰だっけみたいな感じになっていましたけど、それでいいと思っっている。なんかもう、むちゃくちゃでしたな、夕方(笑)。

**小林** あその空間にいさせてもらえてうれしかったです。

**中野** みんなに「いらい」って声かけられるし。「いらい」ってハイタッチ。

**江川** すぐに名刺交換会(笑)。

**中野** ハイタッチの中にスタッフがいたかもしれな(笑)。その辺をあやふやにできたらしい。変にカテゴリー分けしたがるからね。

**小林** そのほうが安心な人もいる。

**中野** そうなんです。岡山の学校って、普通校の中の支援級が14クラスって、異様じゃないですか。昔って普通にそういう人たちもクラスにいたと思う。もうちょっと混ざつてもいいのに、そういうのをどうぼやかせるかというところで、マルチイベントや一般の方たち

長い人は長いですね。合う、合わないはありますよ。

**川延** その辺は、先ほどのお話ですけど、塩梅だと思っっていて、仕掛けは難しい。

**丹正** うん。振りすぎると極端になりますし。

**川延** 指示を出している風だけでも、実は徐々に引いていくようなやり方で、限りなくグラデーシオンを突き詰めていくしかない。

**丹正** 解がないのは難しいですね(笑)。

## 押さえながら、自由を担保していく難しさ

やっぱり押さえなくちゃいけないところも確かにある。支援として、しっかりとなくちゃいけない部分は確かにあるので、そこを押さえながら、自由を担保していく難しさ。みんなすごいことをしていると思う。自分は最近、現場に入っていないですけど、みんなすごく高度なことをしている。

**川延** そうですね。24時間真剣勝負な感じですね。

**中野** あつという間に一日が終わる。

の中に、自分たちがあえて潜り込んでいく。福祉ってわからないように、正体は明かさないでいく(笑)。意外、そうだったのって、後の気づきで、じゃあ行ってみようかってなる。そういう逆の方向で。

知らない人知ってもらつたことって面白くて、まったく畑違いの人だったり、福祉の「ふ」の字にも関わつたことのない人たちが意外とはまってくれたり、そういう時はすごくうれしさを感じますね。

今、たまたまスタッフで募集をかけたら来てくれた23歳の若い子がいる。知り合いの人たちのツテで、中に入ってみたら、すごくはまってくれて、将来は京都に帰るけれども、福祉業界に入りたいて言っている子がいる。そのぎっかけになれたのはうれしい。ハマちゃんね。知っている人は、やっぱりアンテナを張って、来てくれる。意外と来てくれる。どう知らない人に伝えるかがすごく難しい。

**小林** 私たちばかり話していますが、川延さんはどうですか。

**川延** 「ぼやかす」の一言に尽きますよ(笑)。

**江川** お聞きしていたら、なんとなくぼやかして知ってもらおうあたりが、震災のことと似ているなという気がしました。

**川延** 何事もそうです。ぼやかさなすぎると。

**小林** すごくやりがいもありそう。

**丹正** スタッフも楽しめるのは、職場を立ち上げる時のテーマの一つで、スタッフも無理しないというか、環境づくりはムードというか。

## やっぱりスタッフが生き生きしていないと

**中野** 福祉業界ってバーンアウトしちゃう人が多い。若い子も3、4年くらいがピークで、そこをどう乗り越えるか。やっぱりスタッフが生き生きしていないと、「ぬかびとさん」に全部伝わっちゃう。感受性豊かというか、その辺を読み取る能力がすごく高いので、スタッフが発笑顔で楽しくるところさえどうにか担保できたら、その場は成り立っていくけど、そのバランスが確かに難しい。色々なバランスがあると思っつんですけど。そこは今もお、悩みながらです。

最初は5名くらいの登録者から始まったので、少しずつつくり上げてきた感は確かにあって、今は50名くらい向こうにいる。スタッフがマンツーマンくらいの勢いで、最初はやつていたけど、それが今は20名以上いる。それを同じように担保するって、すごく難しくって、ほんとに力オス。でも、そこでも押さえなくちゃいけないところがあつて、いかに情報を共有できるか、パートナーさんとも働き方がそれぞれなので、家でも情報が見られるようにするとか、家でゆっくり情報もちゃんとシェアで

きて、スタッフで共有できるか、その辺はやっていきますね。

**小林**  
情報の共有はどういうふうに使ってやっていますか。

**中野**  
メールで。

**丹正**  
もうちょっと何かいいツールがあればいいんですけど。基本的にはスタッフ全員、何十人か見られるメールアドレスが一つあるような感じですね。ラインも使っていますけど。

**中野**  
ラインもいっぱいありすぎて、気づいたら300とかになっている。

**柳沢**  
そろそろ締めに入ってください。

**小林**  
そうですね。すみません。本当にありがとうございました。参考になることをいっぱいお聞きできました。



RESEARCH  
NUKA TSUKURUTOKO

## アートワークショップ「博物館部」

## 県外事例調査

## 柴川夫妻

障がいのある人、ない人が、互いに排除せず、支援される人、する人という枠組みをこえて共生する社会。

アーティストの柴川敏之さん、

ESD(持続可能な開発のための教育)研究者である柴川弘子さんに、お二人のこと、「ぼくのおくさん☆プロジェクト」のこと、「なんでそんなプロジェクト」との出会いについてお聞きしました。

ミュージアムは、される人・する人の枠組みをこえて、一人でいてもいい、誰かといってもいい、そのままでもいい、そういった場所になれるのではないか。

その可能性について考えるリサーチでした。

◎日時：2021年10月31日(日) 10:00～13:00

◎リサーチ先：柴川夫妻

◎お話を聞きした人：

柴川敏之さん(現代美術家/就実短期大学教授)

柴川弘子さん(ESD研究者/岡山大学大学院教育学研究科ESD協働推進室助教)

◎調査者：江畑芳さん(アーティスト/「博物館部」レポートライター)

川延安直(福島県立博物館副館長/LMN 実行委員会事務局)

小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

江川トヨ子(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

**事務局・小林めぐみ**  
ここからが本題なんです。すみません、前置きが長くて。ライフミュージアムネットワークという事業を2018年から始めまして、まず3年間、福島全体をフィールドと考えて、震災と原発事故のことだけじゃなくて、そこから、そこに至るまでのことを考えられるようにという目的で事業を行いました。

## 歴史からわかることを、今につなげる

例えば奥会津に行きました。奥会津って、戦後に、戦中からなんですけど、大きなダムがいくつもつくられている場所。ダムっていう電気をつくる場所がつかわれて、そこでつくられた電気が東京に行くと。ダムがつかれたことから貨幣経済が入ってきて、もともとあった山の暮らしが壊されたということであらためて知りました。

その地域のみならず色々なことをお聞きしました。自分たちはダムを最初は受け入れただけで、そのことによって町が潤うかと思っただけで、結局ダムの工事が終わった後にたくさんいた人たちはみんな帰っちゃって、さらにダムで仕事をした村の人たちが現金収入という選択があることに気が付き、それまでは自給自足だったところもあったのに、現金があれば自分でつくりたくなくても手に入るということに慣れてしまっただけで、出稼ぎに行くようになり、逆に人口はどんどん減ってしまいました。そこで奥会津の、三島町という地域の人が選んだのは、もう一回自分たちの山の暮らしに立ち返ろうということ。樹皮とか山のものを採ってきて、それで物をつくっ

てというのを大事にする活動を始めました。過疎が進んでも、苦しくても、企業誘致ではなく、大事にすべき暮らしを大事にしている自分たちもいるので、これから原発事故が起きた地域のみならず、もう一度まちづくりをしようとする際に何を大事にしたらいいかをよく考えてほしいということ、三島町の人には言っていました。そういうのをつなげる、歴史からわかることを、今につなげるみたいなこともしたいなと考えたんです。

## いろんな人が居られる場所に

加えて、そういういろんな人たちの意見や、歴史的なことと今が交差する場所って博物館だと思ってるので、博物館がそういう場であるようなこともやりたい。テーマは2018年から一貫して「いのち」と「くらし」なんですけど、そこからさらに発展して、いろんな人が居られる場所に博物館がなるためには、どうしたらいいんだろうって考えて。昨年度、会津支援学校さんとこの事業で一緒に活動することができたんです。

これは江川さんが担当してやってくれたんですけども、これまで福島県立博物館って、あんまり障がいのある方向けのことってやってきていなくて。どうやって使っていたか、やってくるかという発想もほぼなくて。障がいのある方たちは時々団体で見学には来てくれていたんですけど、お話があったときに受け入れてという感じで。あまり積極的に「どうしたらいいんだろう」ということを考えてこなかったんですけど、それは一方で不勉強なままにアプローチしたらいけないんじゃないかなとも思っていたからだったんです。

RESEARCH  
SHIBAKAWA TOSHIYUKI/HIROKO

それは、今もそう思っているんですけど、ただ動き出してみたら、結構、教えていただきながらできることもあるんだなと実感しています。

去年は「コロナだったこともあってですね、iPadとかを使って、通常だと行けないミュージアムの学芸員さんにオンラインでお話ししてもらって、それを教室で聞いてもらい、同時に学校に持っていきけるものをお借りして、生徒たちに触ってもらったりして、いろんなミュージアム体験を学校にしながらしてもらおうということをやったんですね。そうしたら支援学校のみなさんも、先生たちも、可能性を見いだしてくださって。行けないところにオンラインで行って見られるということもあるでしょうし、「実際に行く前に学びがいったん自分たちのなかに落ちて、その上で現地に行ける」ということの意義も言っていただけなんです。

さらに今年は、もうちょっと福島県立博物館を来ていただきやすい場所ができたらなというところで、「博物館部」という名前の事業を立てました。その事業の枠のなかで、滝沢達史さんの取り組みを、柴川さんたちの「なんぞなんプロジェクト」のことを、お聞かせいただいて勉強しようということで、この間のオンライントークになったという流れでした。

**柴川敏之**  
なるほど。そういうことだったのですか。わかりました。結び付きました。

**小林**  
それで今日は、柴川さんに「なんでそんなプロジェクト」に参加されているのとか、柴川さんから見て「ぬか」がどう見えているの

とか、そんなお話を、そこからさらにミュージアムについても、いろんなところでミュージアムに関わってらっしゃると思うので、お聞きできればなと思ってやってみました。

「博物館部」では、今年、会津支援学校の高校生たちと、それから適応指導教室という不登校の子たちが来ている場所と、二つの団体の人たちに、少しずつ県立博物館に来てもらって楽しんでもらったり、仲良くなってもらうところから始めています。昨日は「ぬか」におじゃまして、本当にいろんな人たちが、もう瞬間ちょっとカオスだったけど(笑)、楽しいなというのが、エネルギーが、ばぁんと出ている空間になっていて。こんな場所に博物館もなれたらいいなと思いがおじゃましてきました。

柴川さん、あらためてなんですけど、「なんでそんなプロジェクト」に参加されることになった経緯みたいなところから聞いてもいいですか。どうしてご一緒されるようになったんですか？

### 最初のきっかけ

**柴川敏之**

ええ、おくさんがまだ来ていないので、来たらうまく言語化してくれと思うのですが…。僕はほぼ直感だけで生きているので、うまく言語化できないんです。一方、おくさんは何でも論理的に理路整然と言語化できるんです。

ええっと、最初のきっかけは、「ぬか」の中野さんご夫婦からご連絡をいただきました。「なんでそんなプロジェクト」を立ち上げる際に、大原美術館の柳沢さんがアドバイザーをされていて、参考例として私たち夫婦が熊本



柴川敏之さん

県のつなぎ美術館で行なってきた「ほくのおくさん☆プロジェクト」(2018年)のことを紹介してくださったそうです。柳沢さんにはこのプロジェクトの成果展「ほくのおくさん☆柴川敏之展「PLANET HOME」で、トークセッションにお招きしたり、本展の記録集に執筆していただいたりとかとお世話になりました。翌年の秋に、岡山県の東北で「美作三湯芸術温度」というアートプロジェクトに参加し、僕は「湯郷温泉かつらぎ」という旅館で展示していました。コロナの影響もあって終了後も撤回しないまま展示を続けていたのですが、それをたまたま中野さんご夫婦がご覧になって、「あつ、これは運命だ」みたいな感じでお二人からご連絡をいただきました。最初は家族で「アトリエぬかごっこ」へ遊びに行かせていただいたのが始まりです。

**小林**  
そこからお付き合いが始まって。

**柴川敏之**  
おうかがいしたのは、その2日後の16時ぐら

かという作品制作の相談をくださったのが丹正さんと滝沢さんでした。丹正さんからは、今度「なんでそんなプロジェクト」の記録集をつくるため、そこに「2000年後のなんでそんな」のコーナーをつくりたいということでした。締め切りまであまり時間がなかったのですが、私もワクワクしたので、ぜひとお受けしました。普段なら、僕の作品は1個つくるのに半年から1年かかるのですが、それをぎゅゅっといつもよりも短時間でつくりました。隣の美術教室にありますので後でぜひご覧ください。

**小林**  
ありがとうございます。「ぬか」さんからお声がかかって行かれた時の印象はどうでしたか。

**柴川敏之**  
その時は、ワークショップが終わったばかりでスタッフの方しかいらっしやなかったと思います。

**小林**  
子どもたちはいなかったんですね。

### 帰りたくなくなりました

**柴川敏之**

帰りがけの子どもたちを、何人かちらっと見かけました。人も場も温かくて、帰りたくなくなりました(笑)。おくさんに言わせると、僕自身はかなりの発達障害なので…。

**小林**  
そうですね(笑)。

当時5歳の息子と近くの公園でサッカーをしていたらギックリ腰になっちゃって…。

その時は、施設内を見学させていただいた後に「なんでそんなプロジェクト」のプランについて色々とお話ししてくださいました。僕は腰がズキズキと痛いまま話をうかがっていたので、あまり頭に入ってこなかったんです(笑)。一方、おくさんは、しっかりとより深く理解していました。

**小林**  
柴川家は面白いですね(笑)。

**柴川敏之**  
帰宅後に痛みが落ち着いてから、おくさんから詳しく教えてもらいました(笑)。

「なんで、そんな、グランプリ」でしたか、何だったかな？

**小林**  
「第1回なんでそんな大賞」

**柴川敏之**

そうでした！これからプロジェクトをつくっていくので、ぜひご協力をという感じでした。その後にはばらく経ってから「第1回なんでそんな大賞」の審査員の依頼がありました。

**小林**  
そして、柴川さんが作品にしていくな流れも生まれていった。

**柴川敏之**  
審査、発表会が終わった後、「なんでそんな」の投稿事例を2000年後の化石にできない

**柴川敏之**  
結婚してからずっと言われていて(笑)。はい、とっても共感しました。

**小林**  
居心地がいいからですね。

**柴川敏之**  
はい、とても居心地が良い空気感でした。子どもの頃にこんなところがあれば、僕も毎日いりびりだったかも(笑)。

**小林**  
昨日、私たちも帰りたくない感じでした(笑)。

**柴川敏之**  
子どもの頃、僕は大阪、名古屋に住んでいたのですが、小学校の時の通知表は当時ABCで付けられていて、僕はほぼオールCでした。名古屋にいる3年生の時はオールCで、4年生に上がる頃かな、特別学級に行くことになっていたので、人数が満員で普通学級になりました。

**小林**  
特別学級が満員で。

**柴川敏之**  
みたいですね。そして4年生の時に新任の女性の先生、ウサミ先生が担任になりました。その先生とクラスの雰囲気が変わっちゃ楽しくて。

**小林**  
ああ、良かったですね。



柴川敏之

そう。初めて図工を褒めてくれて、初めて通知表で図工だけAをもらったんです。そのことがすごくうれしくて、そこからずっと図工や美術だけはずっと好きなんです。

小林  
そうですか。先生との出会いは大事です。

いつも先生の教卓の隣に

柴川敏之

友達も一気に増えて、とっても楽しかったですね。他の成績は相変わらず悪くて、いつも先生の教卓の隣に特等席が設けられて、みんなの方向を向いて座っていました。とにかく落ち着きがなかったので(笑)。

小林  
先生の隣が席だったんですね。

柴川敏之  
そうです、そうです(笑)。

小林  
そういう子がいた気がします。私の頃も。

柴川敏之  
僕がうろろろするので、なぜかいつも学級委員の女の子が近づいてきて、よく面倒を見てくれました(笑)。

小林  
人の面倒を見ちゃう性の人。40人、30人に一人ぐらいいます。

柴川敏之

そう、そう。そんな感じで、いつもその子に片思いをしていました(笑)。

小林  
そうでしたか。すてきな話。

柴川敏之  
毎年、毎年、クラス替えのたびに、新しい学級委員の女の子に恋をしていました(笑)。

小林  
いいですね(笑)。

柴川敏之  
聞いてみたら、おくさんは僕は全く逆で、ずっとそういう子のお世話をしていたらしいです(笑)。

小林  
ああ、もつ運命の出会いですね。

柴川敏之  
後で聞くと、おくさんはいつも学級委員と生徒会とかしていたらしくて。「私は一生そういう役回りかあ」と嘆いています(笑)。

事務局・江川トヨ子  
ご夫婦になるべくしてなった感じですね。

柴川敏之  
おかげさまで、面倒見てもらっています。最近は、いつ捨てられてもおかしくない状況で毎日怯えています(笑)。

江川

大丈夫ですよ。

柴川敏之

いいえ、結構危機的な状況です。特に今年二人目の子ができてから、余計・・・。

小林  
面倒を見なきゃいけない子が増えたから。

柴川敏之  
6月に生まれたばかりの娘です。そう言えばおくさんから電話が来ている。

小林  
大丈夫でしたか。

柴川敏之  
着いたら連絡すると言っていたから大丈夫です。

小林  
ありがとうございます。小さい頃を思い出させるような「ぬかごっこ」の雰囲気でしたか。

柴川敏之  
小学校4年生の頃のあったかい教室の雰囲気思い出しました。

小林  
その後に、「ぬか」さんへ行かれたのですか。

柴川敏之  
あちらの「ぬか」さんの方には、うちのおくさんの実家があるんです。

小林

お近くのですよ。昨日、柳沢さんにお聞きしました。

柴川敏之

実家から歩いてすぐで、おくさんの小学校時代の通学路だったそうです。

小林  
そうでしたか。昔から知っている建物がそういうふうに使われるようになった。

柴川敏之  
そうですね。

かつて暮らしがあった場所だからこそ

小林

中野さんたちの場所の選び方と使い方がすごく秀逸だと思いました。歴史のある空間を少し壊しながら自分たちの居心地のいい場所にする。かつて暮らしがあった場所だからこそですね。

柴川敏之

おくさんは、子ども時代から「ぬか」のある建物やこのエリアのことをよく知っているようです。かなりネイティブですね。

小林  
そうですね。

柴川敏之

子どもの頃よく中をのぞいたり入ったりして

柴川弘子さん  
いたらしいです。昔はこうだったとよく言っていました。

小林

それから「なんでそんなん」審査の話が来たのですか。

柴川敏之  
そうですね。夫婦で。

小林

「なんでそんなん」の取り組みを、ああいう障がいの方たちを支援する団体さんがやっていることについて柴川さんたちはどういう印象ですか。色々なみなさんにどんどん楽しいこと、ご自分たちの面白いと思ったことを広げている。いいですねあれは。

柴川敏之

すごくいいと思います。「つづのエピソードをお聞きました。「ぬか」と」さんの個展をしていたところ、新聞に記事が出て、それを見た当時の同級生たちから「ぬか」に連絡があったり、花が送られてきたりという話は聞かれましたか。

小林

いえいえ、それは。

柴川敏之

「ぬか」の向かいにある「イドノウエ」という野外の展示スペースで開催されていました。

小林

ああ、やっていました。



柴川弘子さん

子どもたちとワークショップをやった生まれ  
た成果物、それから、事業でできた作品を各  
地に持って行って、福島のことを知ってもら  
うということをやっていました。つなぎ美術館  
は2017年の1月に展示させていただいた。

柴川弘子

2017年。そうですね、「ほくのおくさん☆  
プロジェクト」の準備をしていたぐらい。

小林

学芸員の楠本さんから柴川ご夫妻のお話を  
いっぱいお聞きしました。楠本家の話も出て  
いましたが(笑)、面白かった。両家の話を聞  
きながら展示準備をしていました。

柴川弘子

お互いに盛り上がってしまっ。

小林

楽しそうだなと思いが。

柴川弘子

そうだったのですか。

小林

この前のオンライントークの時もお声かけし  
たら楠本さんが参加してくれました。

柴川弘子

そうでしたね。もう大集合というか、あの感  
じいいなと思って。

小林

豪華なメンバーでした。

写真やパネルなんかを利用して、次はこうや  
るよ、こうやるよっていうことを言っと、落  
ち着いて活動できるっていうこととか、とて  
も勉強になった。

今年は、支援学校の高等部の生徒さんたちに  
博物館に来てもらおうっていう計画を立てて  
います。

柴川弘子

そうですね。中学校と高校と。

江川

そうですね。それから、ちよつとチャレンジでは  
あるんですが、適応指導教室のみなさんとも。

柴川弘子

ああ、適応指導。

## ちよつと居心地のいい場所に

江川

不登校の生徒さんたちに、博物館を活動の場  
にしてもらえたらいいな。家と学級だけの  
狭い行き来だけで、なおかつ、学校帰りに他  
の子どもたちと会わないように、さつと帰っ  
てくるような状況が見受けられるので、そう  
いうんじゃないかと、部活動とかそういう感じ  
で博物館に寄ってもらって、少し自分の発散  
する場所であったりとか、ちよつと居心地の  
いい場所に博物館がなれば、なんていうこ  
とをやるつととしています。

小林

うちも敷居が高いと言われ続けて35年なん  
ですが(笑)。

柴川弘子  
はい。そうですね。

小林

「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」は  
2017年に終わりました。成果展もあちこち  
でできたので、役割りを果たせたかなとい  
うことで終えました。そのあと、震災後、「いのち  
とくらし」というのが究極的に大事なことで  
てわかったよねということと、じゃあミュージ  
アムという私たちのいる場所に立ち返ったと  
きに、「いのち」とくらし」ってものをどうや  
って考えていったらいいかをミュージアムの手  
法で、そのネットワークを使ってやっていこ  
うと新しく立ち上げたのがライフミュージア  
ムネットワークという事業だったんです。

## 入っちゃいけない気がして

3年やって、今年4年目になるんですけども  
その事業の一端で、去年から支援学校さん  
と一緒に事業をやってみて、私たちの博物館、  
あんまりこれまで支援学校ですとか、障がい  
のあるみなさんに対してアプローチができて  
なくて、こちらからアプローチをもつちよつと  
できたら、と。あと盲導犬を連れてきた方の出  
会いもあって。その方からそれまでうちのレス  
トランは来てたけど、展示室の中は入っちゃい  
けない気がして入ったことがなかったなんてお  
話も聞けて。ああ、そうか、私たちの方から  
どうぞお入りくださいって言っている雰囲気  
がないんだなっていうことも考えたりした。  
それで、みなさん来てくださーい、全然入っ  
ただけの場所なんですよってわかっ

江川

35年。

小林

はい。敷居がベルリンの壁よりも崩れにくく  
て、どうにかしたいなと思っはいるんです。  
それで、いろんなところで、今やつらつしゃ  
ることをお聞きして、なんとか壁を低くし  
たいと思っはいるところなんです。勉強に來ま  
した、みんな。教えてください(笑)。

## 社会教育の可能性

柴川弘子

博物館のポテンシャルに注目しています。私は  
ESD(持続可能な開発のための教育)の研究  
をしています。もともと学校の教員でした。  
社会教育の可能性に途中から目覚めました。  
さつき先生が変わられてきたと言われたと思  
うのですが、学校の外に出て行って広げてい  
く方が楽しいと感じるようになって。ど  
んな外に出て行く一方で、学校も学校で壁があ  
るという状態だと思っはいました。

学校はやっぱり小さい四角い箱の中に収め  
たというペクトルがどうしても働いてしま  
う。それは仕方ないところがあって、子ども  
たちにも成果を出させよう、見えるようにしよう  
と思うと、どうしても同じ時間的枠組み、空間で  
制限する。でも、子どもや若い人は、その制  
限された空間の中で発想するとは限らないで  
す。むしろそういう制限された空間を外れた  
ところで、一番学んでいて、すごい発見がある。  
生き生きと目が輝くのは数値化できないです。  
そう考えたときに、逆に学校にすごい壁があ

たらなっていうのもありまして、昨年度は支  
援学校にミュージアムを届けるという趣旨で  
事業を行いました。

柴川弘子

届けるアートですね。

小林

今年は博物館に来てもらう活動をやれたらな  
と思っはいて、展示の見学でももちろんいい  
ですし、そうじゃなくても来てもらえるよう  
な場所になれたらと思っはいて。そんな時  
に「ぬか」の活動を滝沢さんからもお聞きして。

柴川弘子

滝沢さんからですね。

小林

はい。それで、勉強させていただけたらな  
いうことでのこの間のオンライントークでし  
た。今回はオンライントークに参加してく  
ださった「なんでそんなプロジェクト」に関  
わっているみなさんにそれぞれ個別にお話を  
聞ければというので、おじゃましてたんです。

柴川弘子

そうだったのですね。あらためてクリアにな  
りました。

小林

ありがとうございます。江川さんが、ずつと  
この支援学校の事業を担当してまして、去年  
はコロナだったから、情報機器を取り入れて  
つくり上げながら。

。自分が中にいて、外に出て行きにくい、  
突破口をどうにかしたいと思っはいたのです。  
その一つが、ESDだったという感じ。外  
とつながるにはできない仕事、学びなので、  
絶対学校の中で取められるようなものではな  
いことに気付く。ESDとか、この言葉を使わ  
なくとも、持続可能な社会と地域もつないで  
いけると、何年経っても、何年後かの未来を  
一緒につくっていくことに地域の人とか色々  
人が、分野を越えてつながれる可能性がある  
と思っはいて。そこからESDですね。その中  
で、一度学校の枠から出て学んで、色々やっ  
てみたいという気持ちから、研究の道に進  
んだのです。

## あらゆる命が共生できる社会

「ぬか」さんの記事にも少し書かせていただき  
ましたが、そこでESDで目指そうとする社  
会は、あらゆる命が共生できる社会と言  
えるのではないかと考えました。博物館で取  
り上げられているような生き物や、今こ  
で、目に見えているものの中だけで暮ら  
すようになっていく。福島のことでもさ  
水俣もそうかもしれないですが、今ま  
うことが起きてしまったのは、分断された社会  
だったからではないか、と思っはいます。

つまり、今こで目に見えているものだけでなく、  
あらゆる命を大事にして、つながりを感じる  
ということを実感したというか、大学院で体  
験できたのです。大学の中に、例えば障が  
い

## まず知ってもらおう

江川

そうですね。コロナということもあって、あ  
らためてではあったんですけど、身体的にも  
なかなか弱い立場にある生徒さんたちが気軽  
に博物館を利用するっていうことが、今まで  
できていなかったんじゃないかという気持ち  
にもなりました。

そこで、なかなか来る機会がないなら、まず知  
てもらおう、届けてみたらどうだろうかとい  
うところで、お話をしていたわけなんです。  
そうしますと、やっぱり支援学校の先生方も  
少しずつ変わってきて、我々も生徒さんたち  
の特徴を伝えていただきながら進めてきました。  
例えば猪苗代町にあるカワセミ水族館に遠足  
でこれから行きますよっていう時に、どうし  
てもそういった特徴のある子どもたちは初  
めの場所に慣れるまでにすごく時間がかか  
て、いつも楽しむっていうところまでは行  
かないんだっていうお話があったんです。で  
すので、事前にこういう場所だよっていうこ  
とを、この事業を活かして紹介をして、向  
こうはこういうものがあるって、こういう人  
がいてっていうようなことを丁寧にやら  
せていただいたことで、遠足がすごく充実  
して楽しめたと言っはいただきました。

柴川弘子

そうですね。事前、事後、大事ですものね。

江川

そうなんです。見通しを立てて、次はこう  
やるんだよっていうことが、子どもたちには  
すごく重要で、それも言葉だけじゃなくて、

いはなくても脳性麻痺でほとんどコミュニ  
ケーションが難しい方たちがカフェマスター  
をしているカフェをみんなで作る、そ  
ういう取り組みをそばで見せていただき、一緒  
にすることができた。そういう中で、私もいつ  
の間にかコミュニケーションが当たり前にな  
っているというか、できるようになっている。

## 「意味ある他者」

そこに行く前、学校の教員だった頃はコミュ  
ニケーションがいつの間にか自分の中でで  
なくなっていた。小さい頃は障がいのある、  
雙唾の友だちがいました。いつの間にか話  
ができなくなっていた。小さい頃は通  
合って、遊んだ記憶があるのに、なぜか別の  
世界の人になっていく。神戸大学の大学院  
はちよつと特殊で、当たり前にかそういう  
方たちと一緒にいた。ご飯を食べる時にそば  
にお仕事を。他のお仕事も学内で任せる  
ようにしていたので、例えば書類の仕分け  
などもその方たちがほとんどやってく  
れ、庶務や事務のセッションにも入っ  
ていて、日常的にコンタクトを取っ  
てくるうちに、筆談するのも当たり前になっ  
てくる。最初はちよつと構えるけど、  
いつも顔を合わせて、知り合いの何々  
さんとなっていく。それを大学院で学  
びました。つまり、どれほど「意味ある他者」とい  
う関係になれるかが大事だったのかなと思っ  
はいます。教育の中で、障がいのある人  
たちが、いわゆる健常者にとつての意味  
ある他者になっていく。そうはな  
っていない。意味ある他者というより、  
「あの人たちのために自分は何か

できるのか」という感覚。結局、「あの人たち」の範囲と「自分たち」の範囲は違っていて、そのために何ができるか?という実践が多く多くて、すごく違和感を感じています。「ぬか」と知り合った時、それが無いと思った。「ぬか」のスタッフさん自身も「あの人たち」という捉え方がなくて、もちろん困り感はあるけど。

**小林**  
スイッチは向こうが持つって言ってましたね(笑)。

## 「あの人たち」と「この人たち」

**柴川弘子**  
そうそう。それにすごく納得があったというか、素晴らしいと思った。じわじわ来る感動。そういう人たちにあまり出会ったことがなくて、どちらかという福祉教育って気張っていて、なんとか「健常児に障がい児の素晴らしいさをわからせてやろう」、みたいになると思うのです。一生懸命頑張っているけど、どうしても「あの人たち」「この人たち」みたいに、いつの間にか枠をつくってしまふ。

**小林**  
なるほど。線引きしますね。

**柴川弘子**  
境界線を線引きして、その人たちのために何ができるかという感じになる。いやいや違うよ、仲間だよ・・・と。それを体現している。

**小林**  
それが「ぬか」なんですな。

かっている。数年前にやっと取り入れたけど、それまでに法的整備があるとかなんとかかんとか言いながら十何年。

韓国はそれが出たらバツとそれに従って社会を変えましようという感じ。支援学校自体がそもそもなくなっているんですけど、障がいのある人も普通学級へ自分で選べば必ず行ける。普通の授業を受けたいと言えば、その人の権利だから、どんなに障がいがあっても普通の健常児と一緒に授業を受けられる。

ナザレ大学の取り組みでは、寮で障がいのある人と健常の学生をペアにして生活させる。健常な学生が障がいのある学生から学ぶことも大きく、健常学生自身が色々葛藤します。すごく大変なこともあり、相手の出す音がうるさいとか、トイレの問題とか色々なことが出てくるけど、その中でどういうことを学んでいるかを私たちが調査させていただきました。

## 一人の人間として見る

長い目で見て、いい成果しか出ていないというか、結局、一人の人間として見る。障がいのある人を障がい者というカテゴリーじゃなく、障がいのある友人というふうに、いつかはなっていくプロセスが研究の中で見えてきた。すごく大変でしょうねと思ったんですけど、そういう取り組みが、日本ではまだどこにもないので、少しずつ広がっていると、また社会が変わる。キャンパスで普通に椅子を押している学生、集団が普通にある。手話を使っている障がいのある人と一緒に語り合う光景が見える。それが当たり前だけど、岡山大学で見ることはないですよ。そういう学生の姿を見ることがないですし、学校に勤めていた時

**柴川弘子**  
何だろう、この空気は何だろう?って。

**小林**  
そうなんですよね。昨日行ったときにね(笑)。

**江川**  
どなたがどなたかわからない。

**小林**  
スタッフなのか、「ぬかびと」さんなのかね。

**江川**  
タッチしたり、名刺交換したりとか。でも、役者さんだったり、スタッフだったって、なんか札を下げるかなぐらいで。そこにはみんなここにこ、ここにこ笑ってて。

**小林**  
お世話されてるとか、ケアされてるみたいな感じが全然ないですよ。よく施設に行くと、なんとなくそういう気配があつて、されている人としての側みみたいな感じがわかったりするんですけど、それはね、別になかったよね。

**江川**  
なかった。

## 本当の社会はそうだと感じる

**柴川弘子**  
そうですね。本当の社会はそうだと思う。ESDを通して私たちが実現すべき、持続可

は、車椅子の子を一人受け入れるのでも大ごと。すごいですよ。エレベーターどうする?ということから何から始まって。そもそもエレベーターが備え付けられていないのはどうしてだ?という方はいかない。この世の中の仕組み自体がおかしいのだけれど。

**小林**  
そうですね。なんかほんとにはと気がつくけど、そういうことをまるで考えないで、いろんなことができてるなと思って。最近、美術の展示をつくる時に話をしたんですけど、ちっちゃいものとか工芸品って、目の高さに近くしたくて、高く展示してあったりしたんですよね。だけど、車椅子の方からしたら。

**柴川弘子**  
高すぎる。

**小林**  
うん。そういうことを意識のなかに入れるってのが、昔はほんとになくなって、今ようやくなんですよね。だから、展示室の構造自体もそういうことを前提にしてなくて。ただ、ちょっとずつ変えられることは、変えられたらいいなと思いますし、ほんとにうちが何かできることはないかなと思って始めてるんです。理想としてあったらいいなと思ってるのは、障がいのある方も、そうじゃなくても、個人と個人として出会ったり、お話ししたりみたいな場所に博物館がなるといいなと思うんですよね。

## すれ違える場所に博物館が

能な社会っていうのは、たぶんそういうことなのだと思います。誰と関わるのも大変。夫婦間も大変、親子間も大変。だけど、制度上の縛りで障がい者と健常者、夫と妻みたいな役割の中でしか解決できなくなるものではなくて、お互いの存在を認め合って、大変なところも含めて、放っておけないよね、いないとつまらないよね、という関係になる。

**小林**  
古典落語ではよくそういう描写があったと大学院で学んで。アジア圏だと障がいのある人はほんとに神様のように扱われている地域もある。

**小林**  
そうですね。日本もそうですね、昔は。

**柴川弘子**  
沖繩とか、まだ残っていると聞いています。

**小林**  
宝子っていうんですよ。

**柴川弘子**  
本当の社会は「ぬか」さんのような小さいコミュニティがたくさんあって、それぞれが生きてしている状態なのだろうなと思っえています。それを理論ではなく実現されているのが「ぬか」さん。

**小林**  
神戸大学の場合は理論を持って実践している先生たちだから、実現できるのは当たり前といったら変ですけど納得いく。そういうアカデミズムから離れたところで自然とできているのがすごい。

**小林**  
うちの全部とは言わないけど、どこかがあるという空間になれるといいなと思いました。

**柴川弘子**  
ライフミュージアムネットワークに、浜松のNPO法人クリエイティブサポートレッツの久保田翠さんに参加していただいて、久保田さんから聞き取ってほしいんですけど、レッツをつくるきっかけになったのが、久保田さんの息子さんのタケシさんの行く場が家と学校しかなくて、そこに隔離されている感じがしたからだっておっしゃってたんですよ。社会とつながったり関わるっていうところが全然なくて、それができるといいと思って、レッツをつくったっていう話をされて、ああ、ほんとだなと思っただけですよ。私も小さい頃って、すごく当たり前に周りに障がいのある方がいた気がするの、いつの間にかほんとに接することがなくなっちゃって、こうやって仕事で支援学校に行かなければ、支援学校のことを知ること、たぶんないですよ。

**小林**  
まさにそうおっしゃってました。

**柴川弘子**  
辺鄙なアクセスできないようなところに囲い込まれている。それをよしと思っっている人がまだいっぱいいる。

**小林**  
良いと思っちゃっていらっしやるということ

**柴川弘子**  
ちょっとずつでも小さな実践の力はすごく強くて、ああいうところが増えていくと、社会も変わってくるかなと思っえています。

**小林**  
そうですね。

**柴川弘子**  
最近は全然行けていないですけど、韓国のインターネット社会の共同研究をしていました。韓国のチョナン市にナザレ大学という大学があった、そこは知的障がいのある青年の方を学生としてたくさん受け入れている。

大学なのに知的障がいがある。私たちは、最初どうやって試験するのだろうとか、どうやって他の学生さんと一緒にやるのだろうと思っで、先端の取り組みを知りたくて、何回かそこに行かせていただいたのですけれど、そこも素晴らしいので、大学の先生も障がいのある先生がいっぱいおられる。

その先生たちが言っていました。自分たちが子どもの頃は、車椅子に乗っていたら大学の先生なれると思っっていなかった。肢体に小児麻痺があつたらなれると思わなかった。そういう状況から、今のこういう状況に変えるまでに、どれくらい大変なプロセスがあつたか。ですけど、韓国ってすごくわかりやすい社会で、1回いいなと思ったら、あつという間に社会が変わっしていきます。

バラリンピックがあつた時に、共生社会という言葉と理念がワッと広がって、それもいいということに。日本は、国連の出している障がい者の差別禁止法を批准するのに十何年か

なんですな。

**柴川弘子**  
そういう人たちは、そういう人たちのスキルを身に付けて、そういう人たちにそういう人たちが暮らすのが、差別を受けたりしないから良いのだと思われの方が本当におられるのですよ。支援学校派の人もおられて。そのあたりは、理論的に喧々轟々で、学会が真二つに分かれたというような経緯が障害学でもある。

**小林**  
福島、支援学校の生徒さん、増えつつありますよね。

**柴川弘子**  
支援学校の生徒さんは全国的にどんどんどんどん増えてきている。

**小林**  
そうですね。

**柴川弘子**  
普通の学校へ行って、追い付かなくなって差別を受けるからこつちへ行かせたいという親御さんも増えてると聞いています。障がいのある人なりの学習をした方が良いという学者もいる。

共生社会というどんな葛藤や困難やけんかがあるうとも、やっぱり一緒に暮らすべき、それがお互いにとって良いと考える人たちと、いや違う、ちゃんとそれなりの教育を障がい者の程度、スキルに合わせて科学的に身に付けさせ、教育を受けさせないと、それは障が

い者にとつての福祉ではないと本当に思っている方もおられる。その辺はすごいバトルがある。

事務局・川延安直

さつき、柴川さんの小学生時代のお話をうかがっていました(笑)。

小林

面白かった(笑)。

川延

素晴らしい先生に出会っていらしたのだなど。

柴川敏之

その先生、後で聞くとたった2年しか先生をしていなかったんです。今は辞められて。今でも年賀状やりとりしています。

小林

すごい出会いでしたね、じゃあ。

柴川敏之

そうです。結婚の時もお祝いをもらって。

柴川弘子

そうですね。

小林

そうでしたか。

柴川敏之

そう。いまだに。

柴川弘子

愛知県にいる先生です。

柴川敏之

愛知県にいるウサミ先生という先生(笑)。僕は愛知県には3年間しかいなかったのですが、今は愛知県のように出会いました。

すごい覚悟を持った特別扱い

川延

普通だったら一番後ろの席に、背も高いしと思うけど、あえて自分の隣に座らせる。すごい覚悟を持った特別扱いですよ(笑)。特別なキャラクターを柴川さんは持っていて、それを教室の子どもたちみんなに伝えなきゃいけないと思われたのでしょうか。

柴川敏之

そうかな(笑)。

川延

柴川さんだけを守るといふより、柴川さんがいることでその教室を特別なものにしたかったという思いがあたりだったのだらうなと思う。

柴川敏之

楽しく、楽しい。

柴川弘子

私も教員をしていたのですが、排除しようとすればするほどつまづいかなくなります。

柴川敏之

確かに小学校3年生までは排除されていた感じがありました。

あって、もしかしたらそういうふうにいる人な人が出会う場所の一つになることで、例えば病院からまちに出て暮らすようになった人に行く場所の一つとして選んでもらえる可能性もあるかもしれないですし、医療の方たちともうちうちとつながってできることもあるような気もするんですよ。

プラットフォーム

柴川弘子

過去の社会を表現できるのが博物館。私たちが近代化していく中で、失われてしまった共生の概念、自然界でのシンパシーというか、私も表現に悩んで、誤解があるかもしれないですけど、例えばキツネにだまされなくなった日本人という話がある。ああいう霊的なものはスピリチュアルだからちょっと嫌がられるのですが、そうは捉えていなくて、人間の一つの能力として自然界と共振する。だまされるとかそういうことではなかったらしいです。共感しているが故に、だまされたようになる。つまりだまされる能力。一つの人間の能力。その世界にパッと入れる。それが1965年頃からパッと日本中で消えた。65年以前の社会を探る手があり、もともと人の持っていた限らない自然との共感力みたいなものを探る糸口がミュージアムの中にあるといいなと思っています。私はそういうミュージアムに行くのがすごく好きです。そういう目で展示品を見てしまうのですけれど、そういうところで障がいのある人もない人も関わり合える、話し合えるプラットフォームみたいなものが学校より実現しやすいのではないかな。ものを通して対話する。

小林

その先生に出会った。

柴川敏之

そうそうそう。

柴川弘子

先生も困るでしょ、そしたら排除していく。

柴川敏之

ほとんど4年生より前の記憶がないんです。3年生までは、よく学校も仮病して。両手でこすりこすりすると熱くなるじゃないですか。そこに体温計をばっと挟むと一気に42度ぐらいに跳ね上がるから、これは高過ぎるなと思って(笑)。少しずつ振って下げながら37度5分ぐらいにして学校を休んでいました。

小林

いいところまで下げて(笑)。

柴川敏之

こんな感じでもよくよく仮病して休んでいたら、病院の先生から扁桃腺の手術しようって言われて、3年生の夏ごろに入院して扁桃腺を二つ切られました…。

小林

ああ…。

柴川弘子

切るのも怪しいと思う。そんなことするかなあ。

小林

熱が出やすいみたい。

江川

そうですね。ものを通してなので、余計なことをしゃべらなくていい。

柴川弘子

感じるのです。

江川

「そう思うんだね。どうして面白いの？」なんて、お互いに会話ができる。そうすると、こは居心地のいい場所になる。子どもたち、支援学校を卒業した人たちが私たちはまちで目にしなくなる。支援学校を卒業した子どもたちが大人になってどこに行っているのか。もしかしたら、私たちは自然と排除していて、目につかない場所、家と作業所とかそういう場所だけの往復で終わっちゃってないか。

私たちのような博物館に、いつもなんとなくおじさんがいる、いつも本を見ている誰々君がいる、そういう居場所が博物館に色々あったら。学芸員さんが大好きで、いつも会いに来るとか(笑)。そういうのが博物館にあったら面白い。

一人でいることに対して

何の批判も受けません

川延

「ぬか」さんとは逆の方向性から同じものを目指すことになるかもしれないです。博物館、美術館も含めてですけど、基本的には一人になってオツケーというところなのです。みんなと一緒に仲良くしようバイアスが強い世の中ですが、一人でいることに対して何の批判

柴川敏之

そうそうそう。手術は鳴咽しながら激痛に耐えて、入院中も数日間は喉が痛くて血だらけで、まさに生き地獄でした…。

柴川弘子

見せしめ的な感じがしないでもない。学校に行かせるため。

柴川敏之

かなりの衝撃で辛かった…。それからはもう休まなくなった(笑)！

小林

ですね。

柴川弘子

でも、昔ってそうだったなと思う。

柴川敏之

昔は叩かれたり、廊下に立たされたりして(笑)。

柴川弘子

私の子どもの時もそうだった。特別学級があった、その中に何人かいて。

支援学校だけ増えている

川延

大変です。そして支援学校を福島も増やすと言っている。支援学校に入るような子が増えているという話じゃなくて、支援学校に入ってもらいように枠組みを広げましょうという

も受けません。時間の制限も5時には帰ろうというぐらい。そういう場所として、もう少し認知されたい気持ちがあります。

江川

支援学校の子どもたちやあのぐらいの年齢の時に博物館ってもしかして行ってもいい場所なのかなと知ってもらうことが一番かな。不登校の子どもたちも。

川延

おかげさまで今のところ、博物館、図書館はなぜかわからないけど認知されていると思います。いわゆる悪所とは思われていない。ゲームセンター、ネットカフェに行っちゃうよりは、たぶん通りがいいですよ。そんなところなので一人で行ってもいいし、一人で行くのが好きな何人かで行ってもいい。神通力が社会的に認められている間になんとかしたいと思っています。

柴川敏之

キツネの作品は記録集に出ています。キツネのその話を自然との関連で表しています。

川延

すごくうれしいことに柴川さんが、今のようになっています。原典には広島市の福山市のミュージアム(広島県立歴史博物館)がある。その時の学芸員は、たぶん今の柴川さんの姿までは想定してなかったと思う。けれども、そういうミュージアムから始まった活動がこうしてまたミュージアムに戻ってきてくださる。もう素晴らしい循環なのです。

柴川敏之  
なるほどですか…(笑)。

柴川弘子  
私は、その頃は知らなかった。

内部の人間のビジョンも  
揺るがせられる

川延

本当にもっと早くからできれば一緒に活動したかった。ミュージアムの視点を持って活動されているアーティストが何人かいらっしやいます。そういう人たちの例えばキツネの作品などを見ると、博物館の内部の人間のビジョンも揺るがせられるわけです。学芸員はどちらかというときキツネに化かされる話は排除している。キュレーター、学芸員としては扱いにくい。だけど、「そんなことはない」で済む話でもない。だまされたと言っ人たちが延々といたわけですから、そこそこを考えなきゃいけない。それをアートの表現でもう一度復権させてくださるような流れは我々も真剣に考えないといけないと思います。

柴川弘子

そうですね。そういう感想をいただけて良かった。この企画はドキドキしながらしていた。なんだか一歩間違えると、ちょっとおかしい人、非科学的な事を言っている人と思われてしまうかもしれない。環境教育者として「キツネにだまされる力」を取り上げて注目している方もいます。それをつなぎ美術館、公的な場所やって、本当に良かったのかどうか。

川延  
そこは、学芸員の楠本さんは、かなりクレーバーにやっている人なので。

ミュージアムだったからこそその

柴川弘子

よくやってくれました。その辺は打ち合わせをしながら、どういうふうに通話を通していくか、お役所で話を通るようにしていくか、よくヒアリングしていただいた。どんなふうに通話を通せたのかなって笑、いつもドキドキしながら思っていました。ああいうことは学校教育、大学でさえ危ういかな。公的な研究としてするのはなかなか難しいところもある。ミュージアムだったからこそその自由な解釈。

小林

つなぎ美術館で展示をしたときに、緒方正人さんに来てもらったんですね。その時に「作品を通じて伝えるやり方も二つの方法だね」ということを言ってくださって。緒方さんは、自分の言葉で伝え続けてこれたんじゃないですか。あれがすごく私たちにも響くんではないかと、一方で、誰かの表現について介入するものがある形での伝え方もあるんだねということも言ってくださって。表現の強さって、なんかそういうところもあるのかなと思うんですね。

触媒として存在している

柴川弘子

そうですね。展示とか展示物は、介入する、

媒介するようなものだから触媒として存在している、色々な人の自由な印象、発想みたいなものを引き出し、交差させる。特に最後のあたりの展示は、玉石混交で色々なものを混ぜて、全部さらけ出した状態で展示したので、作品として成立するの心配なところはありません。

きれいなものだけ展示することへのアンチテーゼといったら変ですけど、今はインスタとか色々なSNSなどのツールがはやっていて、その中で切り取られる日常は、やっぱりわべというか、きれいなものをみんな見せたい。きれいなもの、すてきなものがずっと並んでいる。

私、育児が嫌なわけではまったくなって、そういうことよりも、社会的な育児期の家庭をサポートする制度がまったく不十分なところ、そして介護に憤りを感じていて、きれいなものだけを並べる傾向にすごく怖いものを感じていました。トランプ政権が発足した頃で、政治のことを言うのはタブー、議論するのはイケてないという風潮が出てくる。その代わりにかわいい子犬の写真でも上げておこうかという、あの傾向が怖いと思った。

育児もかわいことばかりじゃなくて、すごく大変なこともあるんですけど、そういうものは上がらなくて、すてきママの楽しいところだけが上がっていく。それがCMで強調されて、炎上することもありましたけど。

そういうのと一緒に、障がいのある人のことに関しても展示にしても、美しい姿だけを取り上げて、もやもやしたり、葛藤があったり、大変なことがあるのを見せないようにする。夫婦なんか最もそうじゃないですか。絶対見せたくないじゃないですか。それにチクツと刺

したかった。私の性格の悪さですけど。そういう思いもあって、展示の最後は「夫婦の事件簿」で埋め尽くす感じにさせていただったので。だから展示会の人気は出なかったと思います。

小林

そうですね。見たかったですよね。

柴川弘子

人気が出るとそれも複雑(笑)。ちょっと違う。聞いてほしいけれど、人気になるはずはないだろうと(笑)。微妙なところがあります。

小林

すごく共感するお言葉をいっぱいいただきました。ありがとうございます。

柴川弘子

楠本さんもポピュリズムにはまり過ぎないようにセーブしてくれる感じで、ついつい人が来てほしいから、こんなプロモーションしたらどうかとか私は思っちゃうんですけど。そういうふうには走らないようにいい感じで止めておいてくれたような気が、今思い返すとします。

川延

そこも含めてのキュレーションですね。

柴川弘子

手綱を引くのがお上手なですよ。アーティストは突っ走りがちなので(笑)。ひたすら作品をつくって、見てもらいたい。

川延

最後にすみません。今日は柴川さんにヒント

なるほど。いつでも呼んでください。行きますよ(笑)。

柴川弘子

今の話を聞いて思いました。そうか、確かに一人一人が熱中して、最後にワツとなる。はい、みんなでこうなりました、こんなのができましたという予定調和のワークショップが多い中で、この人はそうじゃないですね。あらためて。



予定調和ではなくて

川延

柴川さんは、予定調和ではなくて、参加者一人一人が熱中して、それが完成すると何かになっているというスタイル。私たちの博物館もできればそういうやり方のワークショップがいいなと思っています。ぜひ一度、お越しください。アドバイスをちょうだいしたいです。博物館を救済するプロジェクトをまた教えていただけたら。

柴川敏之

## アートワークショップ「博物館部」

## 県外事例調査

## 大原美術館

未就学児童対象プログラムの充実や

生活介護事業所「ぬかつくる」との協働など、

先進的な活動に取り組んでいる岡山県倉敷市の大原美術館を訪ね、美術館のスタンスや運営体制についてお聞きしました。

子どもたちや障がいをもった方と一緒にいることで、

ミュージアムも、親や先生や、事業所の方も

相互に、当たり前と想っていることが当たり前ではないことに気づける。

目の前にあることの別の可能性に気づける。

そんな贈りものをし合えるような関係が築けたら。

多くを学び、持ち帰るリサーチとなりました。

## 事務局・小林めぐみ

今回のリサーチは、「ぬかつくる」と「」からのスタートでした。柳沢さんから「ぬか」さんの活動はどう見えているのかお聞きしたいなと思います。大原美術館の方がスタッフとして入っているのにも、びっくりしましたが、そのあたりのこともお聞きできたらなと思います。まず、どういっかけで「ぬか」さんに関わるようになったのですか。

## 柳沢秀行

もっと手前から話をしましょう。なぜ私が、様々な障がいのある人のことまで首を突っ込むのだろうと思いませんか。

## 小林

大原美術館と言っているのか、柳沢さんなのか、そうやって関わりだしていらっしやるのが数年前から見えていて、「なぜ」ということはなくて「さすが」と思いながら、遠くから見せていただけていました。

## 20年ぐらい前から

## 柳沢

岡山県立美術館時代までさかのぼるので。岡山県内で対話型作品鑑賞の授業を最初にやったのは私も含めたチームでした。

その時は誰かに教わったわけじゃなく、参加者へと提供するプログラム、スタッフを教育するプログラムを自分で考えました。中学の先生と美術館のボランティア、岡山大学の学生でチームをつくって。そういうこともやっていたのと、岡山県立美術館の頃から現在で言えば、支援学校との連携をやっていました。

それから、県美以外の仕事もNPOベースでしていた。知的障がいのある子どもたちの教室とも関わりを持っていました。それゆえ、それぞれの障がい者団体の存在も色々な難しいことも含めて、だいたいわかっていました。オール・ブリュットみたいなものには違和感を持ちながらも、表現の幅のありようや、障がい者と健常者の境界に、20年ぐらい前から専門じゃないけど関心を持って動いてきていた。

大原美術館でも「みんなの美術館」という事業を2015年から16、17、3年か4年やりました。視覚障がい者向けプログラム、聴覚障がい者向けプログラムを、美術館もどうしてよいかよくわかっていないから、来館者を含めて多くの方々に教えていただきますというスタンスでやっていました。

## いつでもOKにしなきゃ

だけど、僕は、そうした障がいのある方や、乳児を抱えた方に向けての特別開館には正直懐疑的なところがあった。いつでもOKにしなきゃ、ほんとはいけないと思っていた。それに障がい者の団体に声を掛けると動員がかかったりする。障がい者団体とプログラムをやりたいたと言くと、「何月何日何人まで呼べばいいですか」という話が始まるのです。

逆に言うと、障がいを持つ方たちが個人として活動するのはやはり難しい。やっぱり団体に関わってもらってやらなければいけない。そういう状況がわかっていたから美術館がそこにとどのようにはたらきかけるか懐疑的でした。

「ぬか」さんの存在は知っていたけれど、最初はよくわからなかった。それに私は自分から仲

良くなるうとしないほうだから、しばらく様子を見ていました。一方、「ぬか」から歩いて5分ぐらいのところに早島町の公的施設で「梅檀の家」という同様の施設がある。そこはもっと人が少なく、空間密度が低く、さをり織りを主にやっている。そちらは、知人が関わっていたので、前から作品の展示など、お手伝いできることがあれば関わっていました。

昨日の中野さんの言葉で言うと、要介護の方たちや通所者さんたちは、一日のプログラムを決めて、いかにそれをルーティンで回していくかという施設が多いけど、「梅檀の家」でも結構自由です。

## 「ぬか」との交流が始まりました

そうしたこともあったので「ぬか」と「梅檀の家」がお互い交流して、特に「梅檀の家」が「ぬか」さんの先鋭的なものを少し学んだほうがいいかなと思っていたタイミングで、ちょうど大月ヒロ子さんが「ぬか」に隣接する「いかしの舎」で中野さんも招いてのシンポジウムをしたのを機に、「ぬか」との交流が始まりました。

大月さんは、日本の美術館教育の先達であり、最近はいくつエッセイを書き、その大月さんが東京都と実家のある倉敷市玉島を拠点にして、今、岡山県の文化政策アドバイザーみたいな仕事をしていらっしやる。ちょうどその県の事業が「いかしの舎」で行われていた時、大月さんがいると思っ行ってたら、大月さんから、「柳沢君、せっかくならから手伝ってあげなさいよ」となって、「じゃあ、手伝うよ、ともかく、何ができるか話しましょう」といっかけでした。2年ぐらい前かな。

- ◎日時：2021年10月31日(日) 15:00～17:30 (ヒアリング)
- 2021年11月1日(月) 10:00～11:3 (未就学児童対象プログラム)
- ◎リサーチ先：大原美術館
- ◎お話を伺った人：柳沢秀行さん(大原美術館学芸統括)
- 大塚優実さん(大原美術館員)

- ◎調査者：江畑芳さん(アーティスト/「博物館部」レポートライター)
- 川延安直(福島県立博物館副館長/LMN実行委員会事務局)
- 小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)
- 江川トヨ子(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

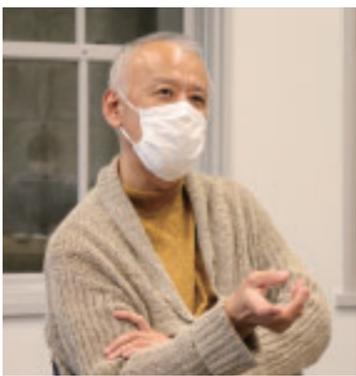
※p146～157に掲載している未就学児童対象プログラムの写真は、11月1日(月)に行われたプログラム取材し撮影したものです(撮影：江畑芳)

クリエイティブティに  
気付いてもいない

最初は、仲良くなるう、何が問題なのか共有していこうとした。そして、完全に一致したのは、福祉産業に関わる人たちや施設についての認識。作業所や支援学校にいる人たちが、そこに通ってくる通所者さんたち、生徒さんたちに対してルーティンをはめ込んで、管理型で、それぞれの持っているクリエイティブティに気付いていないということ。

「梅檀の家」の展覧会に支援学校の生徒さんたちが来て、すごく楽しそうに見ている。ちょっとしたワークショップですごいものをつくる。でも支援学校の先生が「何々さん芸術家じゃない。何々さんすげえな」とは言っても、それで終わり。それがどうすごいのか、どういう意味付けがあるのか、そこにもうちょっと火を着けると、もっと、わあって広がったり、深まったりするの、それが全然見つけられない状況をどうにかできないかなと感じてきたところでした。

だから、ローザンヌだけ、オール・ブリュットの聖地に行くようなのじゃなくて、本当にそ



柳沢秀行さん

それぞれの人たちのクリエイティブをもうちょっと拾い上げるために、既存の福祉業界の施設、支援学校に少しよっかいを出したほうがいいと最初に話がまとまっていたかな。

昨日あった「ものを成仏させる話」も、そうした雑談から出てきたもの。「ぬか」にもあふれかえるものがあって、私はミュージアムの人だから、ものをキープするのが仕事だけど、でもなんでもかんでもキープするのはどうなのか。回していくためには廃棄するただであげちゃう、そういうことをやっていかなきゃダメ。

だから、それをどうしようコンセプトで成仏させるか、月に1回、施設の中を全部空っぽにして、また隙間ができれば、また始める。そういうことをやるうか、そういう話ばかり最初はしていました。

「なんでそんなん」という輪郭を持ったのは、彼らが橋本財団という岡山市にある財団の助成金を取り始めたことも引き金です。

助成金を取ると、もうちょっと輪郭のあるプロジェクトにしなければというところから、「なんでそんなん」になっていったというところですね。

小林 はいはい。C/Dになっていた人。

柳沢 彼は河口龍夫先生の教え子だったりする。

小林 そうなの。

## 発達度の凸凹に対する感受性

柳沢 倉敷芸術科学大学で、とてもコンセプトチュアルな仕事をしている作家さんに薫陶を受けて



小林めぐみ

様子を知り、肌で感じて自分で関わってというのをやった人がまた美術館に戻ってくるというのは、今のミュージアムには求められていると思う。

柳沢 はい。

小林 そうですね。

柳沢 うん。

小林 だから、それは、さっきね化けるためにとおっしゃったけど、美術館の専門職として必要なけれど普通だったらなかなか得られない経験をさせてもらって、帰って来られるのではないのでしょうかね。

柳沢 彼女は地域コミュニケーションみたいなことを勉強していたし、方向としてはそっち。学芸員資格も持っていないくて、エデュケーターとして採用した。

小林 なるほど。

柳沢 非常に優秀。塩竈の事例を見に行かせたりして、とてもいい状況ではあったので、次のステップに行くなら、「ぬか」で、と思っていた。

小林 なるほど。そうすると、今までの、なんていうのですかね、柳沢さんの時間の色々なことが関わっていて、「ぬか」さんに来た。つながった。

## つながったという感じ

柳沢 つながったという感じだね。私は「ぬか」さんだけでパフォーマンスをするわけじゃなくて、場を与えられれば美術館でもやりたい。

小林 柳沢さんから見て「ぬか」の人たちはどう見えるのですか。さっきも町でやっている施設に「ぬか」さんのような感覚が入るといいと思ったと言っていました。

柳沢 丹正和臣さんとおかつば頭の人がいたでしょう。

小林 はいはい。C/Dになっていた人。

柳沢 あとは中野さんのキャラですよ。

小林 そうなの。

## 発達度の凸凹に対する感受性

柳沢 倉敷芸術科学大学で、とてもコンセプトチュアルな仕事をしている作家さんに薫陶を受けて

小林 「ぬか」さんにとっても、美術館に籍を置いて、ちゃんと美術館でのお仕事もわかっている人が入ってくることで変化も出ると思います。

柳沢 お互い大変だと思っけど。

小林 なるほど。わかりました。もしかしたら、ここから何かまた、一緒にする事業が生まれるのかもしれないですね。

柳沢 今、状況が状況だから、公的でクリエイティブな変化につながっているか正直ちょっと辛いと思います。

小林 そうか、そうなんですね。そっちに行くといいですけどね。

柳沢 柳沢 柳沢

柳沢 柳沢 柳沢

小林 柳沢

柳沢 柳沢

いるから、絵を描いたり、彫刻をつくったりというよりも、発想の仕方が河口龍夫先生的な柔らかさを持っていらっしやる。丹正さんも同じような考え方をされていて、彼はグラフィックに落とし込む力が強い。あの二人がいるというのはすごく重要だった。

あと昨日、小山田君という名前が聞こえていただろうけど、一番元気に動き回っている係長。彼は倉敷芸術科学大学で博士号も取っていて、VOCAL展にも出ている造形作家でもともと版画をやっていた。アーティストとしてずっと頑張っていると同時に長らく別の社会福祉施設で働いていた。そして期待の大型新人として「ぬか」に入ってきた。小山田君は大学院生ぐらいからよく知っていたし、彼の得意な作品を僕も持っています。

小林 あとは中野さんのキャラですよ。

柳沢 僕と一度オンラインで対話型作品鑑賞をやってみたけど、そういう時の発想は決して豊かじゃない。わりと固定観念にはまっていた。

でも、それをすぐにわかって、変えていけるのがすごい。あと、あのパフォーマンス能力。しゃべらせたら上手だし。すぐ使えるものを即座に見抜けるっていうかな。自己更新が速い。それが強いところだなと思って見えています。

小林 そうですね。

柳沢 そうすれば、今日みたいなこういう仕事、そっちでやれたのに。

小林 もう江川さん、めきめき色々吸収して。

事務局・江川トヨ子 色々教えていただいた。

小林 はい(笑)。柳沢さんがいなくなったら、大原美術館はどうなるのだろうと、こちらは思ってしまうのですが、行きたいとおっしゃってくださるのはありがたいです。

柳沢 本題に戻しましょう。

小林 なるほど。作家さんや美術系の人「ぬか」さんに集まったのは、たまたまなのでしょうかね、それとも。

柳沢 たまたま。昨日の話を知ったら、やっぱりたまたまだね。でも、小山田君は意図的に採ったと思う。でも、彼はそこでアート型というより、ああいいう施設の一番体力使って動く仕事をすごくよくやっている。

小林 昨日も大原美術館さんのシヨップとつながるかという話が出ていました。「ぬか」と美術館として関わっていく、ああして、美術館の社会との連携を担当するスタッフを在籍型出向として「ぬか」さんに送り込んでいけるのは、すごいことだなと思って見えています。

## 違う世界を見てくる

柳沢 在籍型出向に関しては、採算面からすこしも人件費を浮かせたいというねらいもありますが、私からしたら外に行って違う世界を見てくることはすごく大事。特に専門職って、一生同じところで、一生同じチームで動いていたら成長の仕方が難しいよね。

「ぬか」というのは、化けるためにはいいかなと思って。「ぬか」の濃厚さからすれば、僕は3ヶ月あればいいと思っていただけ。

小林 あの場所に勤めて、毎日あの場所にいる。あの

小林 「ぬか」さんについてありがとうございます。色々なことを大原美術館さんはすでにやってらっしゃいますが、当館はまだです。ここからは江川さんの悩み相談室に近いかもしれません。

柳沢 どうぞ。

## 未就学児の支援事業

小林 江川さんはここ数年間、未就学児の支援事業を博物館で進めています。パートナーになってくれる幼稚園をつくって、定期的に博物館に来てもらい、桜の季節には博物館の周りの桜の下でワークショップをしました。

江川 そうですね。

小林 子どもたち目線の解説をつけながら、定期的に展示を見てもらうこともしています。支援学校との取り組みも始めていて、数年前からようやく、支援学校とどう連携していったら良いかというお話も出てきました。

柳沢 私は「作品は多様な情報体」という言い方をしています。美術作品には、目の前にある作品の観察で得られる情報とどんなに観察しても得られない情報がある。例えばその絵を描いた人は何歳で死んだかなんて情報はわからない。



江川トヨ子

## 作品から取り出せる情報を基点に

でも、多くの人は知識を吸収するという感覚でいて、絵を見てわからない情報を知識や情報として獲得することが絵画を理解することだと思いがちだとすごく思っています。だから、ミュージアムで現物を前にしてプログラムを組む時は、あくまで、現物から収集できる情報をどれだけ取らせるかを基点に考えています。そうはいっても見てわからない情報が実は有益だったりするから、その難しさがありません。特に歴史系の博物館は、農具をどうやって使っていたのか、見て、想像してもわからないものも多い。その差はすごくあると思います。

あくまでも私たちはミュージアムにおいて、ミュージアムでプログラムをやる時は、作品から取り出せる情報を基点にプログラムを組む。どんなに見てもわからない情報をべらべらしゃべるトークなんかは、絶対にしらない。そのバランスに気がつけることが一つ。

特に美術の場合、どうしても理解しなきゃいけないという先入観がすごく強い。一方で、これを見てどう感じた、それを見てどう思った、これを見たらお団子食べたくなっちゃったとか、作品をスタートラインに、色々なマジネーション、クリエイティブな感覚が動くわけです。

鑑賞支援のプログラムを組む時は、理解する系のプログラムを組むのか、作品を見ることをスタートラインにして自分の想像力をかき立てるプログラムを組むのか、整理することを大事にしています。

## わからなくなったら構わない

アされていけば、おしゃべりしたって、絵の前で絵を描いたって、問題はない。これだけはあらゆる世代に言っている。5歳児にも必ずやる。

それに我々は壁に掛かった絵が宝物だと当たり前で思っているけど、5歳児にとっては這いつくられる床や窓の外から見える景色だっですごい宝物でしょ。そこから始めたほうが良いと思う。彼らにとって初めて出会う世界ばかりなのだから。大人が思っているミュージアムのありようとは全然違ったものがそこにあるわけだから。

そうやって初めて出会ったこの場所に、彼らは何を見いだすか。「ぬか」のような施設への通所者さんや未就学児童に沿って、彼らに教えていただく方がプログラムは面白い。

そうしたことを考えて、最近、経済学とか社会学、ビジネスノハウ系の本を読みます。



未就学児童のプログラムをやった時に、誰かどこかのブログで、「5歳児に絵がわかるのか」と書いていた。わからなくなったら構わない。

作品と出会った子にどういうイマジネーション、クリエイションが動いたか。それがアウトプットされる場をつくるのが、我々にとつてのプログラムであって、理解しなくなつていいとは、15年ぐらい前から言い切っている。発達段階に応じてということもあるけど、未就学児が絵の前で絵を描くプログラムについて、長らく「模写」と呼んでいただけ、僕が担当してからは模写と呼ばせない。模写して写す観察訓練、再現訓練ではない。観察して、何か引っかけたものを吐き出す場として絵を描くのだから模写じゃないです。

未就学児童を相手にする時に理解させよう、知識を習得させようではなく、出会った何かから、その子の中に何がどう動いたかをお話でもいい、絵を描くでもいい、身体を使ってダンスをするでもいい、そういうプログラムに寄せてきています。



小林  
読むのですか(笑)。

柳沢  
読むよ。ノーベル賞を取ったダニエル・カーネマンの古典と言ってもよいような『ファスト&スロー』や、最近とても話題になった『FACTFULNES(ファクトフルネス)』なんて、鑑賞支援にすごく参考になる。

小林  
そうですね。

柳沢  
『ファスト&スロー』だと、よく脊髄反射的とか言うけど、人間がまず何かに対してリアクションを起こすことと、それからセカンドな

江川  
未就学児との取り組みはコロナになる前から始まりました。福島県立博物館は鶴ヶ城の三の丸跡地にあつて、三の丸のお堀の跡に桜が植えられています。そこを子どもたちと一緒に歩いて、桜の花を見ながら「コロンと運転がって、ここはお堀だったんだよねって話をして、そこからまた散歩のように企画展を見て帰ります。

この春には川延さんがやった企画展「会津の絵画」を見に来てもらいました。水墨画の屏風の前でお座りした。

## 「女の人がない」

小林  
その時、すごくびっくりしたのですが、女の子だったかな、男の子だったかな、山水の屏風を見て「女の人がない」と言った。そう言われるまで、そんな目で見ていなくて、よくよく見たら高士とお付きの侍重みみたいな典型的パターンばかりで、女の人全然描かれていない。ああ、ここはそういう世界観なのだ、そう言われて初めて気が付いた。あまり色々言わないで一緒に見て、何が描いてあるか探しながら見たら、こちらが気付かされたりする。

江川  
説明もなく、この絵はどういうことだろうね、昼間かな、夜かなとか、そんな話子どもたちからぼんぼん出てくる。「きつここれはね、海だよ」とか。なぜと聞くと、「船がここにいたよ」とか、そういうお話をしながらやっています。そうすると、先生が園に戻って絵を

脳で、もう一回それを自制的に振り返って振る舞うこと。作品鑑賞で最初に質問をして、まず返ってくるのは、ファストな脳が答えていることが多い。そこに、他人の意見を聞くこと、ファストな脳が動いて言っちゃった最初のことに対して、疑問が付いて、もう一回考え直して、セカンドな脳が動きだして、また違う話が出る。読んでいると、対話、作品鑑賞の構造分析そのままじゃんという感じ。で、今、ビジネス書をよく読む。

そういう指南書で良く出てくる、観察バイアスというのが、美術作品鑑賞でも絶対かかる。我々はいかに無垢でフリーでやろうと思っても積み重なったバイアスが絶対ある。

小林  
うん。ですね。



描いた時に、「博物館で見た時の絵と同じでしょ」とか、ちょっとした変化を感じとってくれる。今は定期的に来てくれるようになって、企画展の開催に合わせて、それぞれの学年でお散歩がてら一緒に博物館を回ってくれています。それをもっと広めていきたいです。難しいと思われる企画展はやっぱり敬遠されず。園児たちを連れて来ていいのだからかという先生たちの心配があります。そうではないですよというところで、一緒に取り組んでいる園の写真を広報に使わせていただいております。誘いようかなと思ったら、コロナになってしまつて。

## なぜしゃべっちゃいけないかを、なぜ伝えないのか

柳沢  
今のお話だと、難しい展示会は子どもたちにもわかるだろうかというのが前提になつてしまっている。でも、わかるかわからないか、そこはもつ気にしない。

僕は、5歳児が美術館にいらしたら、ピクトグラムを見せて禁止事項を伝えて、なぜ禁止事項があるかという、美術館はみんなの大事な宝物を楽しむところだからだよと教える。以前「おしゃべりデー」の設定が話題になつたけど、おしゃべりなんかいつだっていい。おしゃべりデーとか設定するのがおかしい。なぜしゃべっちゃいけないかを、なぜ伝えないのかが僕の疑問。だから、大原美術館では、他のお客さまに迷惑を掛けない、作品に危害を加えない、これが美術館で様々な規制が生まれる理由であつて、それがクリ

## 教えていただけるありがたい相手

柳沢  
5歳児たちの観察を聞くと、こちらの方が、とても揺さぶられる。大人同士でも複数人で見ると、全然自分が気付いていなかったことが、確かにそうだよと気づくことは山ほどある。僕は立場上、未就学児のプログラムを自ら担当することはないけど、園児たちの発言は可能なかぎり聞き、いまだに對話型作品鑑賞で、自分がファシリテーターなのに、そこで教わることはものすごく多いです。教えていただけるありがたい相手だし、5歳児とこれだけ時間共有できるなんて美術史家としても観察能力は絶対高まると思つたね。

小林  
未就学児の事業って、今、コロナもあつて、モデルを一つ一つつないでやってきたところで止まっちゃっているんです。

これから、もう少し広くみなさんから申し込みを受けるような形で、博物館で未就学児のみなさん、こんなことができますよっていうアナウンスをしようとしていたらコロナになっちゃったんですよ。それで、実際にはたくさん園に来ていただくようなことって、まだやってないんですけど。試行から本格実施へ移行という話が出てきたときに、どうして出がちなのがマンパワー問題で、どこまでできるのだろうみたいな話が出て来がちですね。これも、本当にオペレーションの、運営の話だと思つんですけど。オペレーションの際に、やり方のポイントとか、大事にしたほうがいいところ、とかありますか(笑)。ぜひ、教えてください。



柳沢

「そのモディリアーニ動かして」は通じませんから。

柳沢

若いうちにそういうものだと思込まないと。きっと、そこから気づいたことが、自分の研究に戻ってくると思う。

大塚

そうなのですよ。つい、作家名や作品名を使ってしまうけど、それだと通じない。私たちが一番それが伝わるけど学芸員の人以外には伝わらない言葉だということに、そこで気付けるのは大切です。私たちの中では作家の名前、作品の名前で言うのが一番早く確実に伝わるけど、作業する方には「その縦長の女の人の絵」とか言わないと伝わらない。

小林

共通言語になっていない。

大塚

早い段階で共通言語じゃないというところに気付ける、気付かせてもらえたのはありがたかった。



大塚優実さん

けました。ミュージアムのオンライン映像、ものと互いの対話で、ライブ的に映像でやり取りしました。一週間後にそこに遠足で行くので事前に紹介させていただく。そんな届けるというやり方をしました。障がいを持つ子どもたちは初めて行く場所にとっても抵抗がある。そこで事前にそういう場所だと紹介することで、少し楽しめる時間が持てるようになるのではないかと。そして院内学級の子どもたち、病弱な子どもたちが社会の勉強でテレプレゼンスロボットを自分で動かしながら博物館の縄文土器を見る。そこには学芸員もいて、実際にそこでやり取りしながら、質問する。そのようなことを去年はさせていただきました。

大塚

はい、本当に。さっきの、子どもさんが気づいた、女の人が描かれていないこととか、そういうのはディスプレイシヨンの力に直につながってくる。やっぱり話しながら見るということはすごく大切。

小林

そうですね。

柳沢

うちの若いスタッフたちはみんな優秀だろう。

### 支援学校

小林

本当ですね。うん(笑)。

支援学校のこともお話していきましょうか。

江川

そうですね。

小林

今、どんなことをしようとしているのか。

江川

支援学校とは去年から一緒にやらせていただいています。去年は学校に博物館を届けることを主にして、子どもたちがミュージアムに来るための事前学習としてミュージアムを届

入ったかを伴走者が見つける。そういう立ち位置で関わっていかないとけない。

### 評価はできない

学校、教員には評価という恐ろしい足かせがある。僕は教員免許の更新講習もさせていたでいてるけど、質疑応答をやると最後にその話になる。もう答えは決めてあって、「みなさまご愁傷さまで、その子が今日どれだけよく読めたかなんか評価はできないです。そんなことで、そんな真面目に悩まないで、もういいようにすればいいですよ」と言って終わりにしちゃ(笑)。

真面目な先生ほど、学習指導要領に沿っていかん評価するかという評価基準とかを一生涯命考えているけど、そんなもんできつくないじゃん！ってミュージアムにいる私はいつも思っています。ただ、我々が提供するプログラムについては常に評価をしています。この子がどれだけできるようになったかの評価はできない。けれども、我々が提供するプログラムに関しては常に評価しますという話で、教員研修はごまかしちゃ。

「それは先生、無理ですよ」と。「今日、その子が鑑賞でどれだけ良かったかなんて、そんな点数化、それは指標もつけれない。そこに力を注ぐよりもスイッチを自分が押せるように、そう気付く方を大事にしましょう」とね。そこを考え直さないと変わらないと思う。

江川

ミーティングをしていくうちに先生の発言に少しずつ変化があるのです。

### 我々がきやつきやするだけで向こうの意識は変わる

柳沢

うん、うん。「ぬか」と真面目に考えました。支援学校なんて、僕らから見たら宝の山のよいうな工作物がいっぱいあるけど、教員がそれを見つけれない。そこで考えた作戦は「ぬか」が大原美術館の柳沢さんという人を連れて別件で話をしに来る。そこで、僕がええっ、ええっ！って専門家の権威をかさにきて、それらについて再発見してしまい、先生たちに意識改革を迫ろうという寸劇的なプロジェクトも冗談半分のアイデアとして出ました。そのくらい、自分の使えるものは、自分の肩書きが相手にとって権威だったら使えばいい。詐欺もしていない。

僕は出掛けるっていいなと思っている。出掛けるというのはそういうふうに使おうと思っている。相手の現場へ行って、これすごい、えもらっていいんですかぐらいの勢いでやっちゃう。我々がきやつきやするだけで向こうの意識は変わるから。そういうことから関係をつくっていったほうがいいと思います。

江川

本当にそうですね。ミーティングで花火の絵の話をした時に、伊藤達矢さん、川延さんが、その子すごいよとかバンバン言っていたら、先生が「えっ、そうですね」みたいになる。子どもたちはやっぱり約束を守れていないよいうなやり方をするから、どうしたらいいのかわずと悩んでいたんですって。それでいいのですかね。

今年度は、さらに取り組んでいるのが適応指導教室の不登校の子どもたちとの事業です。その子どもたちと連携できないかなと考えています。まずは企画展にお誘いして来てもらうよくなかたちで、打ち合わせと子どもたちの

江川 担任の先生が。子どもたちの良さをアーティスト、博物館を通して知りたいし、保護者にも知ってほしいという思いがあることをミーティングでお聞きしました。これからどんなかたちで博物館と連携していくか、今やれること、子どもたちの遠足の様子を外から見せていただいたりして、まず博物館で写真を使っているの気に入るところで写真のボタンを押すというようなことをしてもらい、その写真を集めた動画をつくってみようかとか、そういう計画を立てています。

柳沢

支援学校というひとくくりの中にはいくつかのタイプの障がいがあって、その中に重複の方だって結構いらっしゃる。

江川

そうですね。

柳沢

何を目的に集団教育をするかはすごく設定が難しいから、学校側にどういうことをしたいのか投げるのは正しいと僕は思っている。健常者の学校だって、これだけばらばらなのに、さらにハンディキャップも色々なタイプ、重複があるのに、その子らに集団で画一的なプログラムを提供するってかなり無謀だと僕は思う。だから、よく子どもたちのことを知っている先生に投げる方がきつーっていいと思う。

昨日の「ぬか」の話がそこでしたよね。どこかで突然スイッチが入る。そのスイッチは通所さんに渡っていて、いかに今スイッチが

小林

先生がね。

柳沢

どんなにクリエイティブなやる気のある教員でも、やっぱり子どもたち、目の前にいる対象者が、自分らが考えたことをできるようにと仕向けてしまう。その子ができることに、どれだけ火を焚きつけるか、それが昨日中野さんの言っていたことだよ。

江川

そうですね。私たち先生たちが出会ったことで、先生もクリエイティブな見方がちよっとできた。私たちが、それをちよっと応援できるような関係性。単年度ではなくて、違う学年、違うクラスで、先生たちと私たちがちよっといい関係になっていければなんて思っています。

柳沢

学校現場に対しても、「継続は力なり。でも機会ごと刷新」。うちも学校丸ごと美術館をずっとやっているけど、形骸化して継続させると絶対駄目になる。学校って、普通は7年おきに先生が替わっていくから、ものすごく変わっちゃう。だからこそ、同じ学校相手でも、相手はどんどん変化しているのだから、それに応じて、機会ごと刷新。

### 不登校の子どもたち

江川

今年度、さらに取り組んでいるのが適応指導教室の不登校の子どもたちとの事業です。その子どもたちと連携できないかなと考えています。まずは企画展にお誘いして来てもらうよくなかたちで、打ち合わせと子どもたちの

ヒアリングをさせていただいた。で、チームを組んで、そこにコミュニケーターというかたちで一般の方を入れたかったのですが、教育委員会から、それはクローズでお願いできませんかと言われて、学芸員が子どもたちと一緒に話を聞きました。

柳沢

相手先の様子は不登校というくりだけなのでしょうか。

江川

小学校、中学校の学校になかなか通えない子どもたちに対してこういう教室があるので、けれども、県立博物館へ行ってみませんかとお誘いして、体験的に何回か来て、そこだったら自分が行けるよとなるといいなと考えています。先生がお二人いらっしゃって教科の勉強を教えてください。子どもたちが下は小学4年生から上は中学3年生まで21名ぐらい在籍していますが、実際には通常学級に戻った子どももいるので15名ぐらい。その子どもたちと博物館を少し近づきたい。子どもたちは、家と学級を行ったり来たりするだけの本当に狭い世界で生きているので。

柳沢

家から出られていることが重要だから。

江川

そうですね。

## セーフティーネット

柳沢  
また遠い話から始めちゃうけど、僕は美術館、ミュージアムが図書館とか公民館とかどっかの原っぱとかと同列に何かのセーフティーネットになれることを願っています。

江川  
まさに、そう。

柳沢  
全ては救えないけれども、もしかしたらミュージアムに引っ掛かる子がいるかもしれない。その点、美術館より歴史や自然史系の博物館のほうがよいかも。美術館は博物館の一種です。だから、みなさんのような総合的な博物館のほうが、救えるネットが我々より多様なと思います。福島県博の中にある何がその子たちの居場所になれるかは、たぶん、受け入れてみないとわからないだろうね。それが、もしかしたら裏の駐車場かもしれないし、植栽かもしれない。あるいは地質の部屋の何か1個の資料かもしれない。集中力がとれだけ保つかわからないけど、ともかく様々な選択肢を一度見せてあげて、引っ掛かるものを見付けられたらいい。だから、あまり教育的なプログラムをつくり込むより、自分たちの持っているリソースの何がその子たちの引っ掛かれるネットになるかというマッチングがな。

不登校と言っても、色々な要因があるから、もう来られているだけで大丈夫だって思っちゃう。家から出られている。

「ゲーキの切れない非行少年たち」。読んで

みなさんが来るので対応しますよという流れ動き。そういうかたちにしていけば、博物館のコミュニティの方なので、教育委員会からクレームが来ることはないかなと思っています。

柳沢  
教育委員会は個人情報保護を心配していると思う。

江川  
そうですね。

柳沢  
まさに境界をぼやかす話。福島県立博物館という外縁がはつきりしているもの、学校というはつきりとした輪郭があるもの、これを今はつないでいて、ここは話を付けなきゃいけないけど、いざ子どもたちがやって来た時、お世話というか見守りをやるための内だか外だかわからないような緩衝帯となる人材のチームは絶対につくっておくべき。それを未就学児でも何でも色々なところをつないでいくところだよというイメージでつくっちゃった方がいいと思うな。

江川  
そういう何となく博物館を支えるメンバー。

小林  
一緒にやる人。

江川  
そう、一緒にやる人がいて、たまたまその学級の子が来るから、対応しますよってという関係を徐々につくっていくければ。

とあります。犯罪を繰り返すちゃう子どもは、何がいけないことなのか、体罰で知らしめても、それをしてはいけないということがわからない。そこにもまた多様な個性、キャラクターの見極めや、尊重という問題が横たわっている。不登校も、不登校とひとくくりにはできないなと思っています。でも、通えているなら、まずは大丈夫。もうそこがすでに居場所になっているなら、まずはその学級が彼らにとって少なくともセーフティーネットになっている。だから、あとはそこへの信頼度。そこへの信頼度とミュージアムをどうつなげるのが大事だと思いました。

江川  
そうですね。ちょっとずつお近づきになりました。まず博物館に来てもらって一緒にものを通してコミュニケーションを取るようなことから始めたい。

スイッチが入る瞬間を  
どれだけ見付けられるか

柳沢  
いや、そんな難しいことを考えないで、もう野に放って、スイッチが入る瞬間をどれだけ見付けられるか。どれかの作品、建築に突然スイッチが入る人だっているわけだから、基本、好きにさせて、あ、来たという時に、シュツと行く、そのスキルかな。

小林  
それを見極める、発見する感じ。



川延安直

事務局・川延安直  
子どもたちを一通り見ると、利口な子が多いです。だから、何か課題があった方が食い付きやすい感じがする。

柳沢  
それがわかっているならその方がいい。人を見て方法を探る。

## 心の距離が近いところになればいい

江川  
そうですね。子どもたちの様子を見に行くと、事前に先生たちから子どもたちに企画展情報を入れてもらう。まずそんなことを第一段階でやるのかなと思っています。次に、野に放つてはいいですが、博物館を楽しんでしまう人たちと一緒に連れ立って博物館を見に行く。最終的には博物館と一緒にお手伝い、例えば、これから「貝殻パラダイス」という特集展

がありますが、バックヤードを見せながら、こういうことがあると助かる、ちょっとお手伝いお願いなかなたちで一緒にやればなんて。そうすることで、うちのミュージアムが彼らにとって、物理的距離だけじゃなく、心の距離が近いところになればいい。そこから今度は、子どもたちが、もっと自由に活動できる場所として設定する。学級が終わって、子どもたちが先生に、「博物館で何々してきます」なんて、博物館にもその連絡が来る、そういう関係性が生まれればなと思っています。

## 受け入れと立ち会う人

柳沢  
そうすると、ミュージアム側の受け入れと立ち会う人は大事だね。

小林  
この学級のことだけではなく、未就学児でもこれから数多くやっていくと、ミュージアムコミュニティのような人も必要になってくる。そういう人が必要だから館として制度をつくって、手を挙げてくれる人を集め、その人たちに関わってもらう。館としての制度にならと思う。

柳沢  
今言ったとおりの順番がいいと思う。

江川  
そうですね。今回は私たちも未経験な状況がたくさんあるので、まずは中の人間で少し動いてみたいと思いますが、徐々にそういうふうになりたい。コミュニティとしてある程度研修を受けている人たちが、今回はその学級の



柳沢 早島町は、二つの町に1小学校、1中学校で地元民が多いから、普通に朝夕、おじいちゃん、おばあちゃんが道路に立つ。今は、そういうのが少なくなっちゃったけど、それだって実はこれだよ。

小林 そうですね。学校の外でももんね。

江川 見守ってくれる町の人。近所のなんとなく気に留めてくれる人がいるだけで、子どもたちの安心できるエリアになっていくと思っています。人が通るたびに下を向いて、さっと帰って行くこの子どもたちの様子を見かけると、何て言うか、悪いことしていないのに、何でそんなに下を向いて歩かなくちゃいけないのかなと思う。その辺の感覚を少し柔らかくしてあげたい。

下を見たまま来てもいいと思う

柳沢 それは、下を見たまま来てもいいと思う。温かくみんな「よく来たね」とか言わなくなっていると思う。下をずっと見ていて、そのまま帰ってもまったく構いません。

小林 何か見付けるかもしれないね。

柳沢 昨日も言ったけど、ミュージアムは対話を必要としない施設でもあるので。自分に没頭してくればいいのですよ。

小林 一人でいられるっていい。そういうのが大事な人もいる。

柳沢 とっても一人になりやすい場所だよ。

江川 ですね。ちょっと一人になりたいという時、学校でもない、家でもない、何となく人はいるけど、自分にもあまり関心を持たれない空間は、あなたたち、特に中学生には、いい場所なのかな。

柳沢 さつき、川延さんがおっしゃっていて、ああ、そちらのタイプなのかと思った。IQが低い子ども東大の先生たちも偏差値では中心からは大きく離れた人たちなのです(笑)。

中学生には逆にでき過ぎちゃう子の不登校も結構いる。そっちだったら、それは、課題を明確にしてあげたほうがいい。

江川 事前学習でスケッチブックに博物館のチラシを切って貼って、企画展を見るためのノートづくりしてもらったのですが、ある中学生は真つぐ切らないと自分が許せないのか、何回もはさみを入れてきれいに切ろうとする。きちっとやりたい生徒さんもあります。

柳沢 います、います。まったく同じことを反復し続けるとか。

小林 柳沢さん、最後に福島県立博物館はこうしたらいいというご意見を。

柳沢 まず柳沢さんを雇う。

小林 ああ、そこか(笑)。

柳沢 柳沢さんを雇うと一気に進むかも。

小林 大原美術館が困るじゃないですか。うちに来てくれたらすごい。

柳沢 冗談は抜きにして、やっぱり福島県立博物館は組織が大きいから、私にはわからないことも多いと思う。

小林 そう。重たくて変わるのも大変。

柳沢 東京国立博物館が中世絵画とか近世絵画とか研究領域だけにしてた組織性を広報チームとかアーカイブチームとか機能ごとの二重編成にした。すごく軋轢があったけど、それはそれで機能し始めている。大きい組織になればなるほど、マネジメント階層、設置者階層が気を付けなくちゃいけません。

江川 片や小学生は散らかし放題、散らかしてベタベタと貼っちゃう。小、中生が同じ教室の中にいるので、どうしても先生たちは小さな子どもたちに対応している状態。

柳沢 さつき僕が言った、障がいとかみんな違うキャラなのに集団教育することの困難、そこですよ。

江川 本当に彼ら、彼女らにとって居心地がいいのか何とも言えないですけど、学校よりはここには通える。

柳沢 そうしたら、もう一歩こっちは進めば、さらに来られるかもしれない。

江川 もう一歩、エアコンが効いているような広い空間で、ものが何となく置いてある、そんなところにぶらぶらと遊びに来られるような、来てもいい場所を知ってもらおう。そういう場所があることを知ってもらおうから始めたい。

小林 ミュージアムも図書館も最近是不登校の子たちに学校へ行きたくない時には来てねというメッセージを発しています。少しずつ博物館、美術館の役割は拡張していると思います。昔からのオーソドックスな博物館、美術館の役割から、プラスアルファの部分がすごく大きくなってきていますよね。

一方で、本来と言つのも変だけど、収集保存・

調査系の仕事になかなか手が回らなくなって、私たちも課題として持っている。拡張しているミュージアムの役割は必要だと思うのでやっていますが、人によって考え方が色々で、そこまで博物館がやる必要があるのかと、私たちはよく言われます。色々な考えがあったいいと思うのですが、そういう役割を果たし得る可能性があるのだったら、私はやりたいと思うのです。

自分たちはどこを向いて、どこに重点を置くか

柳沢 そこがガバナンスの問題。ポトムスの現場運営をしている人たちはそういうことに悩み苦しんでもうわかっているけど、設置者、館長さんレベルが自分たちはどこを向いて、どこに重点を置くか、そこはちゃんと決めない。ポトムアップの提言でも、そこを決めてくれた時にマンパワーの再配分とか起こる。自分で時間を配分してやっちゃえばいいけど、なかなかかかい組織になると、それがね。ガバナンスの問題です。

小林 そろそろ時間ですが、江川さん、お聞きしておきたいことは。

柳沢 たぶん欲張らない方がいい。

江川 そうですね。やりたいことはたくさんある。



喜多方から電車と新幹線を乗り継いで7時間と少し、岡山の早島という駅に着きました。アートワークショップ「博物館部」のみなさんが賢者たちにお話を聞きに行くということで、同行しました。駅に着くと、出迎えてくださったのは生活介護事業所「ぬかつく」と「この代表の中野厚志さんとスタッフの方、そして大原美術館学芸統括の柳沢秀行さんでした。私はこの柳沢さんのことを中心に書く」と思います。

柳沢さんは背がすらりと高く、おしゃべりな、それも自分の気に入ったものを選んで身につけているというような雰囲気、落ち着いた空気を漂わせています。私が大学に通っていた頃、恩師に付いて柳沢さんを訪ねたことがありました。そのとき、歴史ある大原美術館の学芸員さんということ、その落ち着いた空気にとても緊張して恩師の影に隠れていたのを覚えています。そのこともあって、早島の駅に着いた時、最初に目に飛び込んできたのは柳沢さんでした。

最初の訪問先は、生活介護事業所「ぬかつく」ところでした。ハロウィンのかぼちゃの帽子を被った中野さんに案内していただいてから最初の部屋に戻ってくると、利用者さんと打ち解けて話している柳沢さんがいました。利用者さんの表情と仕草から、柳沢さんに会えたことをとても喜んでるのが伝わってきます。少し離れた場所にあるアトリエぬかつくも案内していただいたあと、席について中野さんに今までの経緯や、運営していく上で大切にされていることなどのお話をうかがいました。一番隅でうん、うん、とうなずきな

話を聞いている柳沢さん。きつとお忙しいはずなのに、この日一日、リサーチに同行してくれました。

福島県立博物館の学芸員小林さんはいつも下駄を履いていて、このリサーチのときも下駄を履いていました。柳沢さんが倉敷美観地区の案内をしてくださって、新幹線に乗る前にホテルに荷物を取りに戻ろうというとき、小林さんの下駄の鼻緒が切れてしまいました。「直す方向で考えますか？それとも、代わりになるものを探す方向で考えますか？」と、整理して質問してくださる柳沢さん。小林さんが手ぬぐいを持っているのでそれで直せるかもしれない、とホテルのロビーで下駄を直してくださったのも柳沢さんでした。おかげで、帰りの新幹線にも間に合いました。

いつもゆったり立っていて、必要なときにさっと出てきて解決する柳沢さん。この細やかなの正体は何なんだろう。私に「この人は立派な人だ」と思わせた落ち着いた雰囲気は、最初に思ったものとは違ふところから来るものであるという気がしてきました。

このリサーチの中で心に残ったことの中に、相手と向き合う姿勢を語る言葉がありました。「ぬかつく」と「このユニークな活動の秘訣を中野さんにうかがうと、「相手が動き出すのを待っている。そして動き出した時にこちらがそれを受け止められるか、こちらの受け止め方次第。」とおっしゃっていました。現代美術家の柴川敏之さんと一緒に展覧会「ぼくのおくさん★柴川敏之展「PLANET HOME」に携わったESD研究者の柴川弘子さんは、「自分と違う誰かと一緒にいるのは大変なことだ

けど一緒にいるっていうことが大事」と語りました。柳沢さんの細やかさは、そんな他者との向き合い方を体現しているように見えませんでした。

大原美術館の新館の「新児島館」で柳沢さんにお話をうかがっていたとき走り書きしたメモには「覚悟から始めないと、僕は思ってる。」と、書いてあります。この言葉が柳沢さんの他者への姿勢を支えているような気がして、これだけは持つて帰ろうと思いました。アートワークショップ「博物館部」のなかには適応指導教室の子どもたちとの連携の中で進めるパートがありました。私には不登校になった家族がいます。プロジェクトに関わるなかでどうしても色々なことを考えずにはいられませんでした。そのときに、柳沢さんの、ゆったりと受け止めて細やかに相手を思う態度を支えているであろう「覚悟を持つて取り組んでいる」という言葉に、向き合ってきた先駆者がいるという安心感を覚えました。ポリフォニックミュージアムの志すことは簡単でも単純でもなく、覚悟の必要なことだと思えます。それでも、ミュージアムが開かれて、誰かの居場所になってくれることを切に願うばかりです。

このリサーチの中で心に残ったことの中に、相手と向き合う姿勢を語る言葉がありました。「ぬかつく」と「このユニークな活動の秘訣を中野さんにうかがうと、「相手が動き出すのを待っている。そして動き出した時にこちらがそれを受け止められるか、こちらの受け止め方次第。」とおっしゃっていました。現代美術家の柴川敏之さんと一緒に展覧会「ぼくのおくさん★柴川敏之展「PLANET HOME」に携わったESD研究者の柴川弘子さんは、「自分と違う誰かと一緒にいるのは大変なことだ



Polyphonic Museum



## アートワークショップ「博物館部」

### 県外事例調査

# 三重県総合博物館

三重県総合博物館と三重県立盲学校との連携、それを支えるミュージアムパートナーの活動について、学芸員の中村千恵さんにお聞きしました。

盲学校の生徒さんに、触れることを楽しんでいただくための様々な工夫、触れる楽しみを伝える展示を生徒さんをつくってこられたこと、その二つの取り組みは、

ミュージアムが誰にでも開かれた場所になるための一歩です。

ミュージアムパートナーの中から結成された、ユニバーサルミュージアムグループの存在は、ミュージアムを楽しみつつ、共に歩いてくださる方々の大切さをあらためて教えてくれました。

◎日時：2021年12月21日(火) 9:30～12:00

◎リサーチ先：三重県総合博物館

◎お話をお聞きした人：中村千恵さん(三重県総合博物館学芸員)

◎調査者：北村美香さん(結 creation 代表)

竹村望さん(相談支援事業所エマリタ相談支援専門員)

西澤真樹子(認定NPO法人大阪自然史センター職員/LMN実行委員会委員)

川延安直(福島県立博物館副館長/LMN実行委員会事務局)

小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局)

### 県立盲学校さんと

中村千恵

障がいをお持ちの方、色々な方との鑑賞のための事業ということで、当館でもやっている事例をいくつかご紹介します。

当館は今、県立盲学校さんと一緒に色々な事業をさせていただいています。文化庁の「地域と共働いた博物館創造活動支援事業」の支援をいただき、平成30年度と31年度とやってきました。

連携するきっかけは平成28年度、県立盲学校の文化祭に資料を貸し出したという記録が「年報」に残っています。これが、記録される限り最初の連携だと思っています。当館からというよりも、向こうから。

事務局・小林めぐみ  
学校からですか。

### 文化祭で博物館をやりたい

中村

高等部の生徒さんたちが、修学旅行で岩手の「桜井記念視覚障がい者のための手でみる博物館」におじゃましたそうです。それを見て、自分たちも文化祭で博物館をやりたい、資料を貸してもらえませんかということでご提案いただいたのが関わりのきっかけです。もともとは津駅の西口に旧県立博物館があり、この博物館はそこから新築移転しました。その建築計画の時には、様々な障がい者団体の方々に建物の設計、展示の設計に関わっていただきました。

開館してみると、なかなかソフト面での事業

の連携って進まないというのが実感で、障がいをお持ちの方、当事者の方も足を運ばれることが少ないという感覚が職員にもありました。もともと何かできないかと思っていましたので、次の文化祭の時に、よかつたら一緒にやりませんか、平成29年度は当館の移動展示も兼ねて文化祭におじゃまするかたちを取りました。資料をお持ちして、文化祭の一角を貸していただくかたちで、触る展示を行いました。この時は、化石資料、貝の展示をしました。砂浜で潮干狩りをするような体験も。

委員・西澤真樹子  
めっちゃ楽しそう。

中村

貝は浜の中にあるよという話をしながら、触っていた。貝殻だけ触るのも形、大きさ、そういうことを比較できて面白いのですが、違ったかたちでもいいのかなど。なかなか海に連れて行くことはできないですから。疑似体験的ではありませんけれど。

西澤

三重のどこかの海岸を再現しているのですか。

中村

そうですね。松名瀬(三重県松阪市)とかその辺りという感じです。近場のところですよ。

西澤

スタッフの方にはボランティアさんも。

中村

ミュージアムパートナーさんがいます。ミュ

ジウムパートナーの中にユニバーサルミュージアムグループというのがあります。特に、こういった様々な方と展示を楽しむ、博物館を楽しむことができなにかを考えているグループで、そのメンバーと一緒に移動展にも参加してくれました。スタッフとして一緒に展示の解説をしてくれています。

平成30年度の事業として行っています。この年は、いきなり文化祭におじゃまするというよりは、もう少し時間をかけて一緒に事業として取り組みましょうということ初めてやった年です。小学部の子もたちと先生たちと一緒にさせていただき、教頭先生が非常に積極的な方だったので後押ししていただいて、大変助かったのが正直なところです。博物館ですと、複製とか、そういったものを触ることも多いですが、色々なものを触ってみる体験もいろいろです。肩幅以内の大きさ、机で座って触る、その方が触りやすいのももちろんですが、それで全部が把握できるものはかりではない。

小林  
そうですね。

### 触るのって面白いという体験

中村

あえて体より大きい、唐箕(とうみ)を持っていて、子どもたちにとってまったく謎のものに挑戦した。博物館の特別なものを触るのももちろんですけど、身近にも触って面白いものが結構たくさんあると思うので、そういうものを自分で見つけて、触るのって面白いという体験をしてほしいと思った。文化祭で博物館と一緒にみんなで展覧会をつくる



中村千恵さん

できるとよかったのですが、子どもたち  
に身近な生き物と聞くとワンちゃん、ネコちゃんに  
触りたいという要望が出てくる。ごめん、  
ちょっとうちの博物館にはないや、三重に  
いる生き物ということで妥協して、子ども  
ちにお話し、哺乳類を触ってみましょうと  
いうのでニホンジカ、イノシシ、ツキノワグマ、  
ニホンウサギの4種類を選定しました。4  
班に分かれて、それぞれの生き物を学びます。  
平成31年度は、5月の校外学習では博物館で  
剥製を触り、夏休み前に出前授業でもう一回  
学校に行き、5月の校外学習で触った生き物  
をちがう視点で触る。5月には剥製資料を触っ  
たので、6月の夏休み前には骨を触る。この  
前触ったやつの中身ということで、頭の骨、  
可能なものは足の標本を持って行きました。  
夏休みの宿題は、実物資料を持って来てみた  
いな話になると、めちゃくちゃハードルが高  
いので、今度は鳴き声とか、何を食べるかを  
図鑑でもネットでも自分が担当した生き物に  
ついて調べて、動物園に行ってみてきてもら  
い、それを最終的に文化祭で展示しよう  
と、そういう宿題を出しました。

### 『さわってみるガイドブック』

その時につくったのがこの『さわってみるガ  
イドブック』です。剥製を触っている時に、  
先生に一人一人の子どもたちが何を言ってい  
るのか聞き取って、書き取ってもらいました。  
その中から、子どもたちと相談して、触りど  
ころ、触ると面白いポイントを紹介するガイ  
ドブックをつくりました。

学校が創立100周年だったので、晴眼の子  
どもたちが通っている近くの学校の子たちに

も見てほしいという要望がありました。いつ

もは文化祭の1日だけでしたが、1週間ぐら  
い期間を設けました。盲学校の先生、児童が、  
時間が合えば、来場した小学生たちに、ここ  
が面白いですということをお話して、展示  
解説みたいなこともしていただきました。

見るだけでは、「ふうん、ウサギね」みたいな  
感じになっちゃうのですが、爪が鋭い、おで  
こ背中で毛の質感が違うことは、触っては  
じめてわかる。そういうことに気付いてい  
たにも、普段は目を使っている人たちが手  
の感覚を使う、そういう方向性の発信とい  
う位置付けでガイドブックはつくりました。  
本日は、盲学校でやった文化祭をこちらの博  
物館に丸ごと持ってきて、成果報告展とす  
る予定だったので、コロナで中止になっ  
てしまった。

他に特別支援学校などもあるのですが、一  
気に連携できなくて、特別に深くお付き合  
いしているのは、今のところ盲学校さんが多  
い状況です。

小林  
ありがとうございます。

中村

ご不明な点ですとか、聞きたいことがあれば、  
お尋ねください。

西澤

企画をする時の体制を知りたいのですが、標  
本管理する学芸員に触ったら壊れないかと、  
抵抗があると思うのですが。

中村

あ、なるほど。

西澤  
その辺の調整を、ミュージアムパートナーの  
人、標本管理の学芸員さん、企画する学芸員  
さんどう進めてきたのですか。

### 「絶対ダメ」というところから スタートしなかった

中村

この事業は、平成30年度、31年度も私の他に、  
脊椎動物分野の学芸員の田村さんが主に関わ  
り、剥製標本の管理を担当しています。彼女  
もそういう触る活動に非常に関心が高い学芸  
員です。ですから「絶対ダメ」というところか  
らスタートしなかったのが幸いでした。剥製  
をつくるのにヒ素を使っていたりもするので。

西澤  
ああ、そうですね。

中村

安全に触れる状況をつくるため、何人かの学  
芸員がそれぞれの立ち位置で関わっています。  
返ってきた時の標本のチェックは保存科学と  
脊椎の2人でしています。そういった意味で  
も、体制としては、スムーズに入りやすかった。

西澤

脊椎、標本管理の人が企画していた。

中村

そうですね。でも、今年は歴史の分野でと言  
い出したら、歴史ではやりにくい。人による

ところはある(笑)。脊椎動物の分野が積極的

に事業を重ねてくれているので、自然史分野  
だったら、例えば未登録の標本だったらい  
いですとか、そういう可能性は出てきている。

西澤  
貝類とか古生物とか。

中村

そうですね。岩石の学芸員も一緒に行っ  
てく「石を触って見分けよう」というワー  
クショップは、岩石の人が「石なら触っても  
いよ」という感じで出してくる。

西澤

触れる、触る用の標本をつくっている。

中村

田村さんともう一人稲垣さんという学芸員が  
2人で神奈川県立生命の星・地球博物館に  
触るための標本のつくり方を聞きに行った。やっ  
ぱり、触る時に剥製を支える土台があると、  
ちょっと微妙。

小林

なるほど。

西澤

そうですね。

中村

とはいえ、立たせて触らせるなら、土台がな  
いとうにもならない。土台なしで、丸ごと  
触れる標本として、ぬいぐるみ型の標本をつ  
くりました。うちでは今、脊椎と岩石メイ  
ン

でやっています。

### ミュージアムパートナー

ミュージアムパートナーのメンバーは、基本  
的にお仕事をしている方がほとんどで、移  
動展示の当日に1日来ていただく。ワー  
クショップの実施、展示の解説で関わって  
いただくことをやっています。

竹村望

ボランティアさんですか。

中村

ボランティアのようにこちらからお願  
いするといよりは、もともとご自分たちで同好  
会的にグループをつくっているもので、それ  
やったら一緒にやりませんかというかたち  
です。

西澤

ミュージアムパートナーはいくつかありま  
したが、担当学芸員さんが付いているのです  
か。

中村

そうですね。それぞれのグループごとに担当  
学芸員が。

西澤

立ち上げは、みなさんからこういうグル  
ープをつくってと学芸員さんに相談したとい  
う感じです。

### ユニバーサルミュージアムグループ

中村

ミュージアムパートナーという大きい  
グループがある。友の会的な中に同好  
会的グループというか、クラブ活動みたいな  
ものがいくつかある。という中の一つが、  
ユニバーサルミュージアムグループです。ボラ  
ン

そうですね。ユニバーサルミュージアムグル  
ープは、もともとうちの民俗の学芸員が担  
当フランスの触る展示とかを見にいて、あ  
んな、うちでも楽しくできたらいいけど、誰  
か興味ある？みたいな感じで。あ、そんな  
やってみたいっていう人が、この指止まれじ  
やないですけど、何人が集まって、グル  
ープができていった感じです。

西澤

ミュージアムパートナーにはならない博物館  
を困っている層はどう感じの人たちですか。

中村

今、うちはミュージアムパートナー、ボラ  
ンティアの二つしかないです。他に、地域の  
団体は色々あると思うのですが、うちと直  
接関わる団体は、ミュージアムパートナ  
ーかボランティア。こういう活動をして  
もらうと、ミュージアムパートナーに入  
って一緒にやるというかたちを取っています。

西澤

特に、分野とか目的を定めずにボラン  
ティア登録があって、その中にミュージ  
アムパートナーというテーマに沿った活  
動がもう一つあるのですか。

中村

ミュージアムパートナーという大きい  
グループがあって、会報誌が届くと、会  
員限定のイベントに参加できる。友の  
会的な中に同好会的グループという  
か、クラブ活動みたいなものがいくつ  
かある。という中の一つが、ユニ  
バーサルミュージアムグループです。ボラ  
ン



ティアはまた別に登録します。

小林 ミュージアムパートナーは新しく移転してオープンする時から、もう活動していらっしゃるのですか。

中村 前身になるグループがありました。サポートスタッフという名前前で館の事業として運営費を全部持っていた。新館整備の中でみなさん、新しい博物館をつくるのを一緒にやりませんかという趣旨で立ち上げました。それが平成19年度ごろ、新館整備が始まる段階でつくられていた。平成24から25年度ぐらいに組織改編をし、現在は会費制で運営しています。みなさんから年会費を払っていただき、事務局の運営、会報誌の発行、郵送、そういったことをしていただいています。

小林 このユニバーサルミュージアムグループは、学芸員からの投げ掛けということでしたが、盲学校との取り組みは、学芸員さんから、今度、盲学校でやるので一緒にやる方がいいんじゃないかと声を掛けています。

中村 そうですね、事業自体は博物館が窓口になりますので、博物館と盲学校で話を進めて、文化祭に行くから来てもらいたいな、何月何日にあるけど、どうですか、みたいな感じ。

小林 学校は博物館以外の方たちも関わることに関し  
31年度は100周年でもあったので。  
中村 毎年じゃなくても。  
小林 があったのでしよう。先生たちもちょっと疲れたなみたいな感じがあった。31年度の終わりに振り返りをした時は、もうちょっとマイルドでもいいかなという感じがあった。

小林 向こうとしても、頑張ってもええかみたいなところはあったと思う。他の地域のこと、あまり存じ上げないですけど。三重言は人数が少ないです。  
中村 そうなのですか。  
小林 そうですね。  
中村 小学部は今年3人かな。一緒にやっている子たちがみな中学部に上がったので、中学部に入ると、勉強、進路のこともある、のんびり博物館と一緒にというわけにはいなくなってくる。

小林 人数だけじゃないですね。  
西澤 博物館の入口に、ユニバーサルミュージアムグループの活動紹介として、イラストでオオ

てスムーズでしたか。外の方が入ることについて。

中村 それは何も言われなかったです。たぶん、博物館の中の人みたいなイメージ。ミュージアムパートナーですと言ったら、あ、今日はどうも、みたいな感じで、職員以外が来るのは困るということはなかったです。

小林 平成31年度以降は学校との連携はどういうかたちで続いていますか。

中村 去年はもう完全に何も設けなかった。

小林 コロナですね。

中村 児童の関係者以外は、もう来てくれるな、何か持ち込まれると困る。

小林 そうですね。

中村 すごく制限が強かったので、去年はメールで「元気ですか先生」のようなやり取りしかしてない。今年の文化祭は中の人限定にするので、ごめんなさいという話になった。校外学習は来てもらえたので、中学部と小学部の子たちが来て、鳥の剥製標本と岩石を触るワークショップをして、展示も見てもらいました。12月の初旬には、通常学級に通っている地域

サンショウウオやウサギを触っている絵がありました。来館者に触ってもらう活動を提供していたのですか。

中村 はい、8月の第1日曜日に向かい側の総合文化センターで子ども向けのワークショップ祭がありました。その日は、この一帯すくく来場者が多くなります。そこに合せて、ミュージアムパートナーの成果発表を毎年して、各グループの活動を紹介します。その中でユニバーサルミュージアムグループは触るワークショップのブースを構えていました。

## 展示室の中に

小林 展示室の中に、こういう触れるものをコンスタントに常設するお話が出てきたりしますか。

中村 一応、すでにあるにはあります。

小林 どういう展示でしょう。

中村 たとえば大台ヶ原の標高差によって森の様相が変わるといって、特徴的な樹幹を展示して、手前のカウンターに触れる樹幹が置いてあるのだけど、あまり触られていないような気がする。熊野灘の展示では、海を渡って旅してくる海浜植物の紹介があって、大きな種の展示があります。それは触れるのですが、触れるけどなあ、みたいな感じ。どっなんやろっ。

の子たちにも、弱視、視覚に問題がある子たちがいますので、そういう子たちとの交流会があって、その場所でワークショップをさせていただきました。

小林 学校以外の、大人の目の不自由な方のご来館の動きが増えてきたり、つながったり、派生したりはありますか。

中村 それが実は全然ですね。

小林 そうですか。

中村 館内でも言われているのが、盲学校という限られた人数しか相手にしていない、そこから広がっていない。

小林 情報がそんなに広がるわけではないのですね。

中村 視覚に障がいをお持ちの先生はおみえになるけれど、それじゃあ博物館に行ってみようかというところにはなっていない。盲学校関係者以外の方にご来館いただくこともほとんどないです。知らないのか、行ってもしょうがないと思われている。

小林 そうですか。うん。

小林 難しいですね。



中村 ヤシの実とかを触る機会はないので、実物が触れてよかったという声もあれば、どうなのだろうという疑問もないわけではない。開館時にやれたのは、それが精一杯。石の重さ比べで、密度が違う石の重さが比べられるようなものもあります。実物に触れるのはそれぐらい。

小林 うちにはタッチパネルが多い。アンケートに書かれている「触れる」が、モノなのか、タッチパネルなのか、内容を読んでいると、どっちかなという時はあります。

小林 タッチパネルは音も出るのですか。

## ゼロよりましなちゃん

中村 盲学校で展示する時、視覚障害者協会が発行している通信に盲学校を通じて載せていただき、地域の方もご来場いただいているのですが、そういう学校の文化祭はやはり主に保護者が来る。限られた人たちだけでいいのかとは言われていますが、ゼロよりましなちゃん(笑)。

小林 そうだと思います。

中村 いきなりなんでもかんでもできるようなならない。

小林 できないですよ。こうして関係性をつくり、こういうこともできるかなという積み重ねだと思おう。ここに至るまでたくさん打ち合わせをされたでしょう。

中村 そうですね。31年度は、校外学習では剥製を触って、学校の授業では頭骨を触って、夏休みの宿題をして、それを展示するという博物館の筋書きを厳密につくりました。話としては綺麗ですけど、先生に労力をお掛けした部分が結構あったと思います。展示にするというので、子どもたちが調べてきたことを学校で壁新聞みたいなものにつくってくださったのですけど、小学部の子たちです、なかなか子どもたちだけではできないので、先生のお力添え

中村 ありますが、あまり音はないですね。ジオラマのところでの情景再現とか暮らしの展示でインタビュー映像が流れています。基本的に流しっぱなし、音が出っぱなしで、うるさいと言われることもある。混じって、よくわからない。

小林 そうですか。色々な音が。

中村 情景再現の雨の音、滝の音が、ザアッと流れている横で人がしゃべっている音がする。スピーカーが指向性のものでいいのですが、なかなかそこまでできない。当時は、それでいいことだった。盲学校の子どものコメントに音に興味を引かれるというのがあります。実感を持つ、体感する意味では、見て音がして触れてという現場感が出ていいとは思っていますけど。音もちょっと難しい。

小林 そうですよ。福島県立博物館は展示室の中にまったくそういうものがないです。コロナでやめてしまったためもありますが。福島県立の盲学校の先生とお話した時、触るものと音声ガイドがあると、もうちょっと子どもたちがわかるのですけど、というお話をいただきました。どうやったら、展示室に落とし込めるか考えたんですけどなかなか難しい。やれたとしても一部。展示室に1個、2個のそういうものがあつたとして、それだけでは伝わりきらないと思う。試行錯誤のまっただ中にいます。



中村  
そうですね。触って体験するのは時間がかかるので、点数はそんなに多くなくていい気もします。それが言い訳になるかわからないですけど。展示コーナーを象徴する一品を出せるかどうかで違うんじゃないですか。レプリカにするか実物にするか、交換が可能なのかなとか。講座として一時的にやるのは調整が利いても、展示となると厳しいなというところはあります。

西澤  
今月の定食のような感じで月替わりとか。大阪自然史博は、最近、放課後児童デイサービスの子たちの利用がめちゃくちゃ多いです。Tシャツ着たスタッフと子どもたちがそろそろ歩き回っている。でも、それに対応している展示が特にあるわけではない。触れる展示はあるけど、何かできないかと最近よく思っています。予約しないで小グループで来るから、わからないかもしれないですけど、最近増えてきていますか。

中村  
そうですね、もともと建物的に使いやすいのか、高齢者団体、老人ホーム、放課後デイサービスも結構、前から多いです。増えたというよりコンスタントに利用がある感じ。特別に何かをしているというより、こちらは「よく来てくれたね」とあとはお任せで。

西澤  
昼食の時に介護が必要な人たちが予約して部屋を借りるようなことはしていますか。

中村  
はい、あります。ものを広げて準備したりで部屋が要る時は博物館に連絡してもらって、担当の学芸員が部屋を取るシステムです。ちょっと、寄って話したいというくらいだったら、学習交流スペースのどこかで集まって話していることもある。

中村  
はい、あります。ものを広げて準備したりで部屋が要る時は博物館に連絡してもらって、担当の学芸員が部屋を取るシステムです。ちょっと、寄って話したいというくらいだったら、学習交流スペースのどこかで集まって話していることもある。

西澤  
交流スペースは複数あるのですか。

ありますね。教護室、貸していただきとか。学校でも特別に対応が必要なお子さんがいるので、そういう時は教護室を取っておきます。

西澤  
予約がなくても入れる場所はありますか。

中村  
着替えぐらいたったら、多目的トイレにベッドもあり、わりと広いので、使っていたいたいようでしたら、落ち着いて離れた空間に居たいればすぐご案内できる。そんなにしょっちゅう使っているわけではないので。

西澤  
放課後デイサービスは、今、文化庁がグループ設置の助成金をものすごく出しているらしく、スタートアップの助成金がいっぱいあるからすごくグループが増えている。

中村  
だから放課後デイサービスの数が増えていく。

西澤  
むちゃくちゃ増えているみたい。スタートアップの助成金が1年後にどれだけ残るのか。でも数は増えている。

中村  
こういう連携以外にも普通に職場体験があります。今年は豊学校の子が来ます。職場体験はきっちりメニューが決まっているわけではないので、豊学校、他の学校でも何ができるかを先生とご相談しながら、やれること、やり

中村  
フリーエリアにあるミーティングスペースで自然と、この空き場所がいいということであれば。本格的な打ち合わせだったら部屋のほうがいいという感じです。

川延  
ユニバーサルミュージアムグループに続いてご紹介いただいたのが支援学校との事例ですが、他の事例はありますか。

中村  
触って見る館内マップ

中村  
近隣の学校で、この博物館の建物のユニバーサルデザインについて学習したいという要望



たいことを相談しながら進めています。特別に何か変わっているという感じはしていません。

事務局：川延安直  
すみません。戻っちゃいますが、ミュージアムパートナーのことを詳しくお聞きしたかったのですが、現状の人数、年齢構成、活動頻度をもう少し教えていただけますか。

中村  
会員数は300名程かと思えます。ただ、グループに入っておられる方は非常に限られている。

川延  
ユニバーサルミュージアムグループは何名ですか。

中村  
4、5人ぐらいです。

川延  
精銳ですね。

中村  
はい少数精銳で。

澤  
どんな方々ですか。

色々な人がいるのが結果的にいいのかな

中村  
年齢は若い方から年配の方まで幅広く、フルタイムで仕事されている方もいれば、主婦の方もいます。色々な人がいるのが結果的にいいのかなと感じます。それぞれ、自分の経験を持ち寄っていたく。

西澤  
お互い、あるいは学芸員さんとの連絡は何を使っていますか。

中村  
学芸員との連絡は、グループリーダーを決めてもらうので、その方とメールか電話のやり取りです。グループに入っている場合は各グループ、月1回例会があります。歴史グループは2回ぐらいやってた。他のところはだいたい月1ぐらい。週末、土日の第何曜日とか例会の日が決まっているので、そこに合わせて集まる。

西澤  
ユニバーサルミュージアムグループだったら、先ほどの盲学校の文化祭でのワークショップや、ユニバーサルマップをつくる計画をしていただく活動をしています。グループに入っていない会員の方は会報誌の購読、月に何回かの会員限定のイベント、今は講演会が主になっていますが、そういったものに参加していただいています。

西澤  
年間いくらですか。

中村  
一般会員が3,000円、家族会員4,000円。賛助会員もあります。

が出てきたことがあります。ここに点字ブロックがある、ここは段差がないつくりになっている、スロープがある、そういう主に建築面ですが、そうしたマップをつくっていたこともあります。触って見る館内マップをつくらうと木工してもらった。

西澤 手づくり触地図ですか。

中村 手づくり触地図。そのために、色々な研究会にメンバーが参加しました。学芸員と一緒にくっついて行くことも、自分たちだけで行くこともあります。

今年の夏、県立美術館さんでやっていた「美術にアクセス」展も、一緒に行こうと言っていたんですけど、日程が合わなくて。情報があれば、今こんなところまでやっていますよと情報交換しています。私は、ユニバーサルミュージアムグループの直接の担当ではないですけど、接する機会が多いので話をしたりします。ユニバーサルミュージアムグループに入っているメンバーの一人は私が担当しているグループに兼務で入っているのです。

小林 好きなものに複数入っているのですか。

西澤 中村さんが担当しているのは、何というグループですか。

### 「おもしろ博物館」グループ

地学かな。ミュージアムフィールド昆虫調査と骨探、哺乳類と鳥類の3分野。

中村 ざっくりの話ですが、たぶん少ないのが、ユニバとおも博と染織、10人以内です。歴史と民俗はメンバーが被っていて、二つとも入っている人が多い。ホネ探は増えている20人ぐらいになっている。昆虫は小学生ぐらいの親子連れが多い。

西澤 家族会員さんとして関わっている。

中村 そうです。家族会員として入るのが多いと思います。にぎやかで活気がある。で、最近勢力を増しているのはホネ探ですね。

西澤 作業があるやつはね。

竹村 勢力を増している(笑)。

中村 自分がやりたい人と、子どもがやりたいという人の2パターンがある気がする。昆虫調査は、子どもがやりたいと言うタイプ、ホネ探は私もやってみたいです、子どもがやりたいですと両方。ホネ探には結構中高生がいて、昆虫調査もずっと続けて来ている中高生がいる。普段はお見かけしない若者、中高大学生が多い。

西澤

中村 私は「おもしろ博物館」グループです。

西澤 そう、それ、何をやっているか聞きたかった(笑)。

小林 気になる。気になる。

中村 ワークショップをするグループです。子ども向けの体験イベントを企画して実施するグループを担当しています。人数が減ってきちゃってね。

西澤 そうなのですか。

中村 少数精鋭みたいな状態。今年は、「やっぱり石が好き!」という岩石の企画展を夏にやっていたので、その時は河原の石を使ったロックバランスのイベントをしました。毎年12月はしめ縄飾りの体験イベントを担当しているグループです。この人たちに講師をやっていたらいい。

西澤 道具を出して世話係ですね。

中村 そうそう、裏方さんで活躍していただきました。

大学生もいるね。

中村 三重大学の海洋生物サークルや生物資源学部の子どもたち関わっています。歴史、民俗、染織は年配の人たちです。ダブって入っている人も多い。おも博のメンバーにも、歴史、民俗、おも博と三つ掛け持ちしている人もいます。

小林 満喫していますね。

竹村 忙しい。

小林 お好きなのですね。

西澤 いますよ、はしごしている人。午前中に植物園案内のボランティアした後には、昼にミーティングに出て、その後読書サロンに来る。一日中ずっと。

中村 すごくですね。

西澤 またあの人あそこにいる。

竹村 満喫。満喫。しょうもないこと聞いていいですか。

中村

中村 盛んな、自然発生的に人が入ってくるグループもあれば、ユニバーサルミュージアム、「おも博」もそうですけど、開館の立ち上げからのメンバーがずっと来ていて、ご自身の事情で参加しづらくなる方もいる。

西澤 人狩りするイベント、タイミングがないと減っていく。

中村 「おも博」特有の悩みとして、ワークショップに参加したい親子連れはいるけど、それを企画したくない。サービスは受けたけれどサービスを提供したくない。難しいなあ、変わるんな仲間がって言うて毎年終わる。解決策は全然見いだしてないです。

西澤 自然史フェスティバルは、そういう場になっただけど、今の団体さんも2年連続できていないので結構やばい。

中村 厳しいですね。オンラインでしたものね。

西澤 オンラインです。今年の状況だったらやられたような気はするんですけど。

小林 自発的にやってみてみたいことが出るのはそれぞれのグループごとの動きですか。

どうぞ、どうぞ。

竹村 盲学校の子にガイドするとおっしゃっていましたが、盲の子はたぶん触り方が優しいと思うのです。でも一般の子はもうちょっと手荒で雑。その辺で、問題はなかったですか。

中村 特になかったです。小学校の子たちも最初に

中村 そうですね。それぞれあると思います。グループとしてやるか個人的にやってみるか学芸員と相談しながらです。私が担当しているのは、みんなでわいわい系のグループですが、博物館資料を扱うグループもあるので、そういうところは相談に応じているかたちです。

西澤 グループの中から外部資金を取りたいという動きはこれまでにありましたか。

中村 どうやろう。今のところ、運営費にまだ頑張れているので、切羽詰まってミュージアムパートナーとして申請するという話が出ていないようです。材料費が要るようなグループもあるんで、そういう時は、どうしようかなという問題はある。

西澤 今あるのは5グループでしたか。

### 歴史、民俗、染織、ユニバ、おも博

中村 グループとしては、歴史、民俗、染織、ユニバ、おも博の五つで、ホネ探とミュージアムフィールド昆虫調査、化石調査の地球探検隊は学芸員の調査補助グループ。ちょっと違う。

西澤 歴史、民俗、染織、ユニバ、おも博の5グループと共同研究の地球探検隊、化石、岩石、鉱物、

触り方を言えば、そんなに調子乗ったことする子はいなかったです。遠足のテンションと学校で来るのとは、ちょっと違うのかな、そんなに危なっかしい感じはなかったです。大丈夫でした。

竹村 ありがとうございます。



## アートワークショップ「博物館部」

### 県外事例調査

# 三重県立美術館

障がいを抱えた方や、小さいお子さんのいらっしゃる方、誰もが利用しやすい環境を整えることを美術館のミッションとし、アクセシビリティ向上推進事業に取り組んでいる

三重県立美術館を訪ねました。

学芸員の鈴村麻里子さんから、ソーシャル・ガイドや音声コード、触地図、多様な鑑賞ツールなど、

当事者の方と意見交換をしながら工夫されてきた様々な実践についてお話しいただきました。

◎日時：2021年12月21日(火) 13:00～16:00

◎リサーチ先：三重県立美術館

◎お話を聞きした人：鈴村麻里子さん(三重県立美術館学芸員)

◎調査者：北村美香さん(結creation代表)

竹村望さん(相談支援事業所エマリタ相談支援専門員)

西澤真樹子(認定NPO法人大阪自然史センター職員/LMN 実行委員会委員)

川延安直(福島県立博物館副館長/LMN 実行委員会事務局)

小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

### アクセシビリティ向上推進事業

鈴村麻里子

もうホームページをご覧いただいているかもしれないですが、今回、リサーチに来ていただいた目的は当館でやっている美術館のアクセシビリティ向上推進事業の聞き取りだと思うので、まずこの事業についてお話しします。この事業は2020年度からスタートしている、当館がミッション、ビジョンを策定したのが2018年の3月です。そこで五つの指針をうたっています、その一つに「誰もが利用しやすい環境を整えます」というのがあります。それを達成するための取り組みとして、文化庁からお金をいただき、たぶんみなさんがやっていらっしゃる事業と同じ助成金だと思っております、それで事業をしております。スタートが昨年度でしたけれども、コロナ禍で出鼻をくじかれてしまっ、本当はもう少し大規模にたくさん人を集めてお話を聞き、色々な当事者の方に協力していただいて、大きいことをやりたかったです。それが、人を集めることが難しくなって、昨年度はなるべく少人数でできることやメール、電話のや

りとりできることを優先的に行いました。

「美術にアクセス！

ー多感覚鑑賞のすすめ」

今年度の夏に「美術にアクセス！ー多感覚鑑賞のすすめ」という展覧会、アクセスに関連したコレクションを使った展示を私が担当することが決まっていたので、それに向けた準備として、昨年度のアクセシビリティ推進事業を進めた事情があります。

こちらのアクセシビリティ向上推進事業のリーフレットに項目を1から6まで設けています。様々な対象という最初の予定どおりには全然いかなかったですが、目が見えない、見えにくい人と協同するプログラム、障がいのある人というわけではなく美術館を利用しやすい乳幼児と保護者向けのオンラインの鑑賞会をしました。3番の「多様な作品解説の展開」は、コロナ禍でギャラリートークが一切できなくなっ、展示室に美術館慣れしていない人、子どもが来た時、比較的読みやすい作品解説があつて、積極的に対話をしなくても自分でとりかかろうとつかんで鑑賞できる解説はどういう解説だろうかとかと学芸課内で考えて、執筆することを昨年度はやっていました。

ソーシャル・ガイド

4番の「ソーシャル・ガイドの開発」もホームページ上で公開しています。自閉症スペクトラム障害のある方向けの来館支援教材、ガイドを自閉症協会さんと協力してつくりました。当事者ご本人と協同して何かできたかと思つたのですが、なかなか私が当事者ご本人とやりとりす

るのができなかったもので、当事者ご家族の方のご意見を聞きながらソーシャル・ガイドの編集を行いました。

事務局・小林めぐみ

直接お会いになれなかったのはどうしてだったのですか。

鈴村

最初、自閉症協会さんとコンタクトを取った時、きたら来館していただければと申し上げたのですが、コロナ禍ということもあつて、外出を控えておられる方もいましたので、こちらから強くはお願ひしなかつたです。ご家族には編集、校正の段階でご本人に見せてもらい、反応をうかがって、そのご意見を教えてくださいという言い方をしていました。

小林

コロナが理由として大きかったですね。

委員・西澤真樹子

自閉症協会さんは児童、成人も全部含めての会ですか。

鈴村

そうですね。幼いお子さんをお持ちの方もいらっしゃると思うのですが、成人のお子さんをお持ちの方もいらっしゃいました。

西澤

意見を出していただいた人数はどんな感じでしたか。

鈴村

理事会で話っていたいただきました。20人弱ぐらいだったと思います。

一応ソーシャル・ガイドは昨年度末に公開して、夏に「美術にアクセス！」展をやっています。夏に「美術にアクセス！」展をやっていた時には、このソーシャル・ガイドを開発する過程でみなさんにいただいたアドバイスが入った校正紙みたいなものも一緒に展示していました。それはウェブサイトでは公開していません。ソーシャルガイドに関してはソーシャル・ストーリー、ソーシャル・ナラティブのよくなる書き方で最初はご提案しました。例えば一人称は「私は」にしてと色々な決まりがあるので。細かくつくって、どうですかと投げたところ、色々なアドバイスをいただいて、最終的には一人称の



鈴村麻里子さん



「私も取りました。一般的なソーシャルストーリー、ソーシャル・ナラティブとは形式が違つと感じられる方が多いかもしれません。やはり、一緒につくつてもらうのが大事です。当事者も当事者家族も利用しづらい人たちの一部だと思えます。そういう方々と一緒に検討するのがすごく大事で、多少王道から外れているかもしれないですが、今回はそういうかたちで公開しました。」

その他は人材育成、ボランティア向けの研修、利用者の調査はこの館でもやっているアンケートみたいなものを昨年度は主に実施しておりました。今年度も同じ助成金を取っていて、まだ報告書はつくれていませんが、主にこの「美術にアクセス」という展覧会に助成金を使わせていただきました。

## 誰もが利用できる方法で展示する

この展覧会は当館のコレクションをアクセシブルな方法で展示する、誰もが利用できる方法で



展示することを目標にしていたのですが、それができたかどうか。実際に現場で見ているとどこでできなくて申し訳ないですが、その時に配っていたリーフレット、チラシがこちらです。ホームページ上で展覧会の記録も公開しています。今年度の事業の報告書はまだできていないですが、でき次第上げていきたいと思っています。

**西澤** チラシのこの横のカットはなぜ入っているのですか？

**鈴木** これはですね、音声コードを示すため。あ、ここを読み込むための目印ということですか。

**西澤**

**鈴木** そうです。

**西澤** なるほど。

**鈴木** 全音の方が受け取った時に、触覚でここにコードがあるとかかる。

**西澤** このあたりを写せば聞かえる。

で、頼めば白、アイボリーもつくれると思います。

**西澤** 当事者の方が社長さんですか。視覚障がいの方。

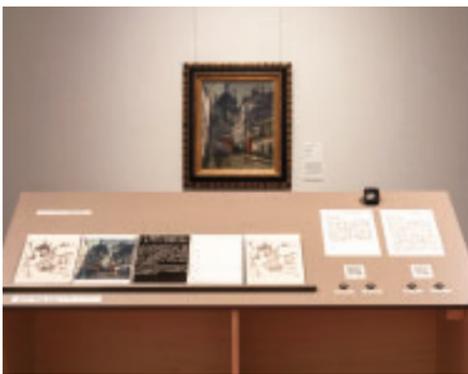
**鈴木** 最初につくった鳥根のメーカーの社長さんが当事者の方だったはずですが。それを使って區別をしておらおうと考えました。触れるもの前にピンクのマットを敷いて、ここは触れるものが置いてありますよと。

**西澤** 地図の台の下の空間は車椅子が入られるのですか。

**鈴木** そうです。ここを塞いじゃうと足が入らないので、業者さんに車椅子が入れるようにとお願いをしました。



撮影：松原豊さん



撮影：松原豊さん

**鈴木** 音声コードには、隅から25ミリだったか、右下にこれを入れる規程があります。音声コードを掲載はしてみたのですが、実際、当事者の方に使っていないと言われたことはなくて、あまり普及していないかもしれないです。もしかしたら使っていないかもしれないかもしれない、今後、普及する可能性もあると思つたので、載せてみました。一応ウェブサイトに、オンラインでこのリーフレット、テキストが読めるようにするためのQRコードも付けています。音声コードにQRコードがこの位置にありますというテキストを組み込んでいて、QRコードにたどり着けるようにしているつもりです。

**小林** 音声コードは、ミュージアムで、他に最近使われているところはありませんか。

**鈴木** そうですね、最近見ました。九州国立博物館のリーフレットでも見ましたし、福岡市美術館もやっていたらいいな。

**西澤** 福岡市美術館のサイト見ました。

**鈴木** 音声コードを読み取るアプリUnibonnieというアプリがあるので、それでQRコードも読み取ることができるので、半円形の切り欠きを入れて、音声コードじゃなくてQRコードをつけていらつしやるチラシもあります。渋谷公園通りギャラリーのチラシ、これにも切り

## 画像を言葉に翻訳したような解説

これは黒い部分が盛り上がった立体コピーで、これは解説の点訳、こちらは白黒反転の解説文です。音声ガイドは再生スイッチでスタートとストップができるようになっていて、触ると音声案内ガイドを読み始める。押すと止まる。2種類の音声ガイドで、一つ目が一般的な、作品の制作背景、作家について話している作品解説で、もう一つがディスクリプション、記述です。目が見えない方と一緒に鑑賞する時に、この作品には左にこれが描かれていて、右にはこれが描かれていてという、画像を言葉に翻訳したような解説が書かれています。ホームページ上で音声データを公開していますので、聞いていただけたら。

**小林** ディスクリプションの作成は、どのようになさったのですか。支援センターの方と一緒に作ったのですか。

**鈴木** 本当は当事者の方と協同でつくったかたのですが、時間がなくて、良くないと思いがら私一人で書きました。ちよつと長くて、最初に寸法の説明「縦165センチ、横112センチの縦長の画面いっぱい」と私が執筆しています。直したほうがいいところもあると思います。

**小林** 鈴木さんはどうやってそういうテキストの書き方を学んだのですか。

欠きが入っていてQRコードがあります。音声コードはコードが細かいので読み取るのがすごく大変です。印刷が粗いとか汚れがついちゃうと読めなくなってしまう。どちらかというとQRコードのほうが読み取りやすい。音声コードはテキスト自体が入っているというもの。800字のテキストがオフラインでも読み取れる。QRコードはアドレスが入っているだけで800字のテキストがここにコードに入っているの、オフラインで読めるメリットはある。

展覧会の展示風景もモニターで見せします。会場には触地図も置きました。展示室には、HODOKUN GuideWay（歩導くんガイドウェイ）というマットも敷いています。何人かの弱視の方は床のグレーとマットのピンクはコントラストがあまりわからないっておっしゃっていた。見やすいと言ってくたさる方もいました。人によって見え方が全然違いました。素材はゴムです。いろんなところ、三重県だと視覚障害者支援センターにありますし、盲学校にも置いてある。従来の点字ブロックはがたがたして車椅子利用者、ベビーカーを利用する方が、通るのが難しいというデメリットもあって、これは当事者の方が社長さんをされているメーカーが開発した。今は、大阪の錦城護護さんも取り扱っています。

## 触れる、触れないという区別

今回の展覧会ではイレギュラーな使い方をしています。通常は点字ブロック代わりに使うので線状になる。A地点からB地点まで案内するための線として使う。今回は、触れるもの触れる、触れないという区別

**鈴木** 私自身がもともと美術史の専攻です。ディスクリプションは、美術史をやっている人は慣れていると思うのですが、私が2018年度に文化庁の在外派遣研修でアメリカに行かせていただき、現地のミュージアムの方に、目が見えない人向けの言葉による記述の仕方、マニュアルを見せていただきました。それをベースにしながら書いています。

**西澤** 見えない人向けのガイド、マニュアルなど公開されているものはありますか。

**鈴木** マニュアルは公開されていません。右の音声再生装置にはQRコードが付いています。コロナ禍でなるべく接触しないほうが良いということで、QRコードを付けました。QRコードを読み取って自分のスマホで聞くよりは、押してオンオフする方がわかりやすい方は会場内のスピーカーで音を聞くこともできます。それが嫌だという方は、QRコードを読み取り、ご自身のデバイス、スマホ、タブレットで聞くことができるようにしました。イヤホンも配ったのですが、イヤホンジャックタイプだったので、Phoneの方は使えなかった。金期序盤は「使えないです」という連絡がよく展示室から来ていました。

## 特別支援学校と連携してつくった鑑賞ツール

これは、2017年度に特別支援学校と連携してつくった鑑賞ツールで、佐伯祐三の油絵

に対応しているキューブパズルです。連携していた特別支援学校は肢体不自由の児童生徒が通っている。その高等部の生徒さんたちと一緒に作ったのですが、デザイナーさんと美術館と学校の三者で作りました。生徒さんには意見を言ってもらい、それを取り入れながら美術館とプロダクトデザイナーと一緒に、どういうものをつくろうか考えて、制作していった感じでした。結構難しいので、私もすぐできるか。フェイクとかも入っているので(笑)。

西澤 フェイクを入れたのですか。

鈴村 そうです。

小林 トラップがある。



鈴村 ぜひやってみてください。

小林 中で音がするのも、学校と一緒に考えた部分ですか。

鈴村 デザイナーさんのアイデア。硬い音がすると、感覚過敏の人はしんどいので、ゴムの柔らかい音にしています。

西澤 このカタカタするのは、あえて入れているのですか。

鈴村 そうですね。クルッと回した時に、何か感触があったほうが。

小林 これは支援学校にお持ちになって使ってもらいましょう。

鈴村 貸し出しはしていません。開発した当時は、学校に行っていましたけれど、最終的には美術館で使ってもらうプロタイプとしてつくったので、量産はしていません。

小林 支援学校との連携は今もコンスタントにやっています。

鈴村

2015年度から3年間はやったのですが、単年度事業で、毎年連携先が変わる。なので、全然継続はできていなくて。その時お世話になった先生には、今でもご連絡したり、今回も来てもらったりというつながりがあります。

小林 長くなるのが難しい。

### 継続性が一番の課題

鈴村 難しいですね。継続性が一番の課題です。

小林 そうですね。その時だけになってしまわないようにしたいと思いつつ、なかなか難しい。

鈴村 学校連携はその後の生徒さんとはつながりやうがない。個人情報もいたたけなかったりする。

小林 デリケートなところはありますよね。

鈴村 その人が自分からコンタクトを取ってくれない限り、つながりは難しい気がします。この時はコレクションに関するものをつくったので、何年後かにもう一回展示することはできると思っています。

小林 この作品には難易度の面白さがありますね。簡単で、すぐ終わっちゃってもね。

小林 三重県美さんでこういう事業をやると思うのは、ミッションの実現ということですか。

鈴村 そうですね。ミッションが策定されたのが2018年の3月、特別支援学校との連携は2015年度からやっていました。2015年度は工事情事を5ヶ月くらいした。その時に、外に出てアウトリーチ活動しようという話になって、いくつかやった事業の一つが特別支援学校との連携です。同時並行的に、ミッションの検討もした。2003年度に「アートカードみえ」という鑑賞支援教材を私の前任者がつくっています。その時に色々な種類の鑑賞支援教材、カード状のもの、先ほどお見せした触れる立体コピーなどをつくりました。様々な彫刻、立体作品の素材になっている金属、木をブロック状にして触れるようにした素材コレクションなどもある。目が見える人向けの鑑賞支援教材だけでなく、目が見えない人が通っている盲学校でも使える教材をちゃんと含めたほうがいいという話が2003年度の時点でされたらしいです。その時に開発された教材も「美術にアクセス」展で紹介していました。特別支援学校との連携は2015年度から、アクセシビリティ向上事業は2020年度からですが、それより前から教材の開発はしていました。

### 触地図

「美術にアクセス」展で会場に置いた触地図は全部で4枚あったのですが、そのうちの2点の天板だけ残してもらっています。最初の部屋には大きい4部屋分の触地図があっ

西澤 あ、ここに答えがあったじゃないですか。

鈴村 そうです。実は全図が掲載されていました。高等部の子、知的障がいや伴わない肢体不自由の子もいらっちゃって、簡単すぎても面白くないから、ゲーム感覚で難しいのがいいということも言われて。最終的には難易度が高いものが出来上がりました。キューブ状の六面体で、パズルの面だけじゃなく、他の面にはテキストが。

小林 色々な情報が入っていますね。生徒さんの感想とか。

鈴村 そうです、他の人の感想もある。

西澤 面白いですね。

鈴村 くるくる回して楽しむこともできるようにしています。

西澤 指し示しているところが、絵で見えるようになってる。

鈴村 そうです。もう一つ2017年度につくったのが、こういうブロック。これも今回展示し



ています。先ほどちらっと写真をお見せしたと思いますが、「アレクサンドリアの聖カタリナ」こちらの17世紀スペイン美術の作品の前でやっていました。

並べて文字、文章をつくることもできる。ひっくり返すとあいうえお文みたいになっていて、「お」から始まる作品の情報とかみなさんの感想、めくると何か出てくる構成になっています。

西澤 点字があったり、なかったりするのなぜですか。

鈴村 もともと、2017年度に開発した当時は点字を付けるつもりはなかったです。目が見える人たちと連携していたので、そうした発想はなかった。けれども、今回「美術にアクセス」展で展示をする時に、あった方がいいなということで付け足しましたが、文字数的に全然貼れないので、貼れるものだけ、本当に数ブロックだけ貼ったという感じ。短い説明文を選んで。点字も2021年度に追加したものです。

### ミッションの実現



2番目、3番目、4番目の部屋にはその部屋ごとの小さい触地図を置いていました。

竹村望

置き方はどう決めるのですか。

鈴木 昨年度、目が見えない、見えにくい人に来館してもらってテストをしました。そのためプロトタイプを1枚だけつくりました。1枚に全部の情報を盛り込んだものをつくったら、

最初の部屋で全部覚えて2番目、3番目の部屋に行くのは、すごく難しいとご助言をいただき、それを受けて「美術にアクセス」展では触地図を4枚つくることにしました。

竹村

音声スイッチ、現在の地のパターンとか決まっているのですか。

鈴木

晴眼者と一緒に来ることが多いから、晴眼者

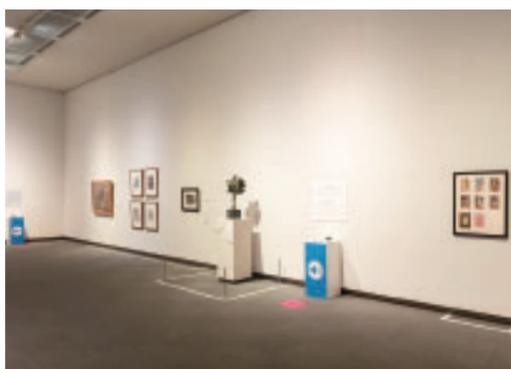
が見て、バツとわかるようにしてほしいというリクエストもいただき、現在地がわかりやすいように工夫したつもりです。

当事者の方からというより、当事者と一緒にいらっしゃった晴眼者の方から、案内がしやすかったというご意見をいただきました。

私は点字も全然わからなかったのですが、三重県の視覚障害者支援センターさんで点訳指導などを担当している方が確認しています。マスクとかすごく難しいです。表記を何回も間違えて、直してもらった。

通常、当館の場合は表面保護のガラス、アクリルが額に入っている作品の前には境界は置かないですが、全音の方がいらっしゃった時に、その壁に作品があるのがわかるようにしました。見た目でも白で区切られて分かりやすいのではと思いついてテープを貼りました。

作品の高さも下げています。いつもは額装の作品の場合、作品の中心が床から145センチになるくらいにしていますが、今回は130



撮影：松原豊さん

たので、それを活用しました。今回のために固定具をつくり直したものの、新しく固定具をつくったものもあります。

コロナ禍でしたので、触る展示をどうするか、すごく不安がありました。入口にゴム手袋、消毒液を置いていましたし、検温もお願いしていた。手袋を持っていく人が多かったのですが、7月にかけてこの展覧会をやっていたのですが、強制ではなく使いたい人は使ったという感じでゴム手袋を置いたら、白手袋とかゴム手袋を使われる方は結構いました。ゴミがすごかったですね。環境にいいのかわどか、ゴミ回収を同僚に毎日してもらっていました。

この展示室より前は、教材、音声ツールを触る展示でしたが、この部屋では作品そのものを触ることになるので、指輪、時計を外してもらい必要がある。なので、もう一回、展示室内に受付を設けて、触りたい人に、監視受付のスタッフからガイダンスしてもらいま

した。時計外してください。指輪を外してください。荷物をロッカーに置いてください。優しくゆっくり触ってください。手ももう一回消毒してもらっています。手袋もここで交換してもらいました。

触らない選択肢もあり、触れるけど触らない方も一定数いらっしゃいました。人数のカウントはしていませんでしたが、監視スタッフにだいたい感触として何割くらいでしたかと聞いたら、6割くらいが触って、4割くらいは触らなかったかなど。そんなに混雑する展覧会にはならなかったため、人が集中して混雑して困ることはなかったですね。

もつちよつと抽象的な作品も

もうちよつと抽象的な作品も含めるとよかったです。かもしれない。具象の作品ばかりになってしまったので、どうしても名前当てゲームみたいになりがち。この展示には点字のキャプションだ



撮影：松原豊さん



撮影：松原豊さん



撮影：松原豊さん

まで下げた。

この展示室では、視覚とか聴覚、嗅覚、味覚をテーマにした展示をしており、触れる作品とかツールはなく、音声の装置くらいしか触れません。高さがちよつと低いくらいで、いつもの美術館の常設展とそんなに変わらないと思っています。

彫刻を触れる部屋

隣の3番目の部屋は彫刻を触れる部屋。7点あるうちの2点はサイズが大きい全身像で、これは学芸員と一緒に立ち会って触ってもらったほうが安全ということで、あの2点については、触れる日時を指定しました。その時間帯だけピンクのマットがあそこに敷かれました。この写真では白いテープが貼ってあります。

それ以外の5点は、いつどなたにお越しいただいても触ることが出来ます。いつもの彫刻の展示台よりは低めで、展示台と固定できるブロンズ作品を選びました。転倒しない構造になっている作品を選んで、かつ、展示台と床も固定しています。強い力で触られても作品が動かない固定の仕方を保存や彫刻の担当者と相談しながら考えました。

西澤

もともと展示の固定用に開けられている穴があるのですか。

鈴木

そうです。もともとブロンズの鑄造をする時に中ものを出すために穴が開いています。その穴を固定用の穴として使える作品があっ

鈴木

大きさとしては、だいたい等身大。手前が頭です。ちよつと頭を上げている。

西澤

カメ、イタチ。

鈴木

近いですね。

西澤

カワウソ。

鈴木

あの、実は猫です(笑)。

小林

猫ですか。

鈴木

柳原義達の作品。

西澤

柳原義達は猫をつくっているのですか。知らなかった。

視覚を遮りながら鑑賞できる作品

鈴木

ガラスだけではなく猫も。これにはコの字型のカバーが付いています。大人が立って触ると、ちよつとこのカバーに隠れて上から見えないようになっていきます。視覚を遮りながら鑑賞できる作品を1点入れました。

西澤

この字のカバーに横から手を入れて触る。

鈴木

天板がほしい80センチ四方なので片側から手を入れてもらいました。全然見えないうのでですけど、透明の点字のシールに柳原義達の猫みたいな感じで書いていました。やっぱり墨字（すみじ／点字に対して、印刷してある文字や書かれた文字）のキャプションが付いていたほうがいいというご意見もありました。

西澤

もともとの展示台に直貼りしているのでしょうか。

鈴木

展示台は新調しました。触る用の台と見る用の台、高さ天板の大きさも見やすいものと触りやすいものは違う。全部つくりました。

西澤

固定用ボルトを通せる展示台ですか。すごい。

小林

お客さまの層は、どういう感じでしたか。

鈴木

人数は、かなり少なく。層としては、意外に若い方が多い印象を受けました。広報物のビジュアルを今回は若手のデザイナーさん、民博のユニバーサルミュージアムの展覧会のチラシもつくっていらしゃった桑田知明さんにお願いました。

鈴木

約70人です。コロナで休会、退会した人もいます。

竹村

今はどんな活動をされていますか。

鈴木

今日、部屋に行ったら新聞の切り抜きをしていました。美術に関連する記事をスクラップする活動をしていました。当館のインフォメーションカウンターの中にいるのはボランティアです。来館者案内もボランティアの活動の一つの柱です。インフォメーションとは休止していますが団体案内、それから資料整理、ポスター発送作業、自分たちの研修の企画運営、新聞、会報も出しています。

川延

ボランティア向け研修は当初はどんな内容で取り組まれる予定だったのですか。

鈴木

もちろん座学もあり、当事者の方に来ていただき話を聞くと、県の障害者支援団体がいくつあるのか、そちらに来てもらって車椅子の利用法など、そういう研修をしてもらうことも考えていました。ワークショップ的なものとか。

小林

キッズモニターとはどういう制度ですか。

鈴木

三重県が県政のヒアリングのためにモニター

当事者の方も、もちろんいつもよりはたくさん来てくださった。視覚障害者支援センターとは前年度から連携していて、その視覚障害者支援センターさんが出している広報誌に宣伝文を掲載していただきました。それもあって、それまで知り合いじゃなかった当事者の方、利用者の方が来ていただきました。

その一方で、聴覚障害者支援センターさんとは連絡ができていなかったたので、情報が届いていなかったという印象はあります。

西澤

その会報は全国の人たちが読むものですか。

鈴木

三重県の利用者の方が主に読んでいます。県内の当事者、目の見えな、見えにくい方全員がセンターの利用者ってわけじゃなくて、いつもその広報誌をよく読んでくださっている方には情報が届くという感じだったと思います。

小林

こういう手法を常設に取り入れるお考えはいかがですか。

一過性の取り組みではなく

鈴木

そうですね、取り入れたいと思っていて、この展覧会をやった時から、これが一過性の取り組みではなく、その継続が一番大切で難しいけれども、課題ですという話はしています。現状、なかなかできていないですけど、少しずつ無理のない範囲でやっていきたいと

に登録してもらって、年に何回かアンケートに答えていただく制度があるのですが、大人のe-モニターというもあり、昨年度はキッズモニターのアンケートをやらせてもらいました。登録している人にアンケートを送って、それに答えてもらうものです。作品解説がわかりやすいかというアンケートもやりました。

小林

どうでしたが、回答は。

鈴木

5段階で、上から2番目、どちらかというとわかりやすいを選んだ方が多かったですね。

西澤

博物館、美術館関係者以外でこの取り組みに対する視察、見学に来られた例はありますか。

鈴木

関係者以外はないです。もしかしたらプライベートで関心を持って、例えば福祉関係の方が来てくれたのはあるかもしれないですけど、組織として視察にいらっしゃるのはミュージアムの方ばかりです。後は大学でそういう研究している方。

小林

視覚支援学校の生徒さんが見に来てくださるとかは。

盲学校の高等部が団体として来てくれたのは初めて

鈴木

本館に少ないですけど、何人か視覚障がい

思っています。

例えば、来年度事業の全部とは言わないけれども、何か音訳とか点訳をつくって、それが当事者の方に届くようにする。全部とは言わないけれども、手話通訳付きの講演会をつくる。それは館としてやっていったほうがいいのは、みんなわかっている、やりたいと思っていますが、なかなか実現できていないです。

西澤

受付に指を指して意思確認できるようなシートがありました。

鈴木

「美術と手話プロジェクト」という、アーツ千代田のエイブル・アート・ジャパンさんが関わっていらっしゃる団体があって、そこがああいうコミュニケーションボードのデータをくださる。そのまま刷って置かせてもらっています。カスタマイズしてもらえるとあります。うちの館はA3で出してハレバネに貼り付けています。先週末、ユニバーサルミュージアムの展示をやっていらっしゃる徳島県立近代美術館にうかがったら、そちらではもう少し小さいサイズのボードをつくって置いていらっしゃいました。

事務局・川延安直

先ほど三重県総合博物館でもお尋ねしたのですが、推進していく上で担当者問題は必ず出てくると思います。また試行プログラムとされていますが、運営担当の会員の方たちは、当初からほとんど取り組もうとしているような方々が潜在的にいらしたのですか。

団体来館がありました。すごくありがたかったです。支援学校は7月に2校受け入れました。

1校が知的障がいのある子たち、もう1校が盲学校の子たちでした。私も11年勤めていますけど、盲学校の高等部が団体として来てくれたのは初めてだったかもしれません。

小林

うれしいですね。

鈴木

そうですね。それまでは触れるものが常にある状態じゃなかったたので、来てくださって本当にありがたかったです。

小林

うちも、今は全然、訪問先として選ばれてないと思う。ああ、行きたいなと思ってくださる場所になれるといいなと思う。今日はすごく勉強になりました。

鈴木

とんでもないです。ありがとございます。

小林

この音声コードはもう少しちゃんと調べてみます。教えていただいてありがとうございます。

鈴木

JAVISという協会（日本視覚障がい情報普及支援協会）に連絡すると、自治体や公益団体には無料でソフトを貸与していただけます。

小林

本館に少ないですけど、何人か視覚障がい

もっと巻き込みたかった

鈴木

そういうことに関心がある人ばかりではないと思います。例えばスタッフやボランティアにも色々なバックグラウンドを持つ人がいて、モチベーションの高い人ももちろんいると思います。

コロナ禍で、当館のボランティアも活動を休止していた時期が結構ありまして、学校が来た時に案内をするのもボランティアでしたが、一時休止中です。いつもはやっていただけなんです。接触を回避することがどうしてもできないのでやめています。本当はこの展覧会も展示室にボランティアに常駐してもらい、プログラムのサポーターとしても入ってもらって一緒に企画したいと思っていました。その集合研修すら難しい状況に前年度はなってしまった。準備もままならず、会期中の6月もボランティア活動は休止していた。これは思うように進んでいないです。もっと巻き込みたかった。

川延

理想としては、ボランティアさんたちが主導してやってくださるのが、最終的ゴールですか。

鈴木

そうですね。多様な組織、グループとして、そういう企画運営をできるようにするのがベストかと思っています。まだそこまでの道のりは長い感じ。

西澤

ボランティアの標の会の人数を教えてください。

方が来てくださるようになって、解説は具体的内容、形、大きさがあるとわかりやすくと教えていただいて、視覚障がいの方向への解説の仕方を理解するようになりました。普通に作品解説は仕事で書きますが、それだけじゃだめだと思うので、どうしたらいいか工夫をもっと学んで、できたらこういうのを取り入れていけるといいなと思いました。

鈴木

こちらも試行段階なので。たぶん人によって欲しい情報が全然違う。

小林

そうですね。障がい後からか最初からかでも違うのでしょうか。

鈴木

コミュニケーションしながら

鈴木

一番いいのは、音声ガイドをただ一方的に聞かせる、聞かされるよりは、コミュニケーションしながら、その方が欲しい情報を的確に出すのがいいと思います。

小林

そうですね。それがベストですね、きっと。ありがとございます。

西澤

ありがとございます。

## 二つのミュージアムの実践に触れて

西澤 真樹子 (認定NPO法人大阪自然史センター職員/LMN実行委員会委員)

### 三重県総合博物館 「博物館の専門性・地域性を活かし 仲間を増やす」

三重県総合博物館は1953年に開館した歴史ある博物館で、2014年に現在の場所に移転しリニューアルオープンしています。リニューアルにあたってさまざまな障がい者団体の方々に建築や展示設計に意見をいただいたりしたものの、開館後はそれほど障がい者団体・当事者との連携が進まないという問題意識を持たれていました。2016年から資料の貸し出しを通じて関わりができたことから、県立盲学校さんとの連携が始まりました。具体的には文化祭での展覧会をゴールに設定し、実物資料に触れて観察してから、それぞれが観察した内容を言葉で表現し発表しました。2年目にはテーマを三重県の哺乳類とし、毛皮やホネ、剥製をじっくり観察して、触る観察のコツをまとめたガイドブックを作成し、文化祭での展示と展示解説まで実施したそうです。博物館が資料を調べ、情報を引き出すのと同じように、「子どもたちの「なぜそう思うか」の感覚と言葉を引き出すプログラムです。私はこの頃、アートワークショップ「博物館」のメンバーとして福島県立博物館の展示の見どころを子どもたち自身で紹介してもらう「どうぶつ探しマップ」のプログラムを実施しており、三重県総合博物館の取り組みの、当事者である子どもたちが資料に何度も触れて自

分の中に情報を蓄積し、それを取捨選択し、誰かのために発信する体験まで含めた流れは私たちの目指すところとも共通していました。一つ一つの資料選定や体験にしっかりと背景があるのも特徴です。砂に埋まった貝殻を掘り出すプログラムは、盲学校から近い松名瀬干潟あたりをイメージして準備されたそうです。自然史系の博物館に関わる私としては、ただ資料に親しませることが目標ではなく、その先の地域の自然に興味を開くことが博物館の使命だと思います。そのための伏線をさらりと張られているのがさすがでした。さて、このユニークな実習は教育普及担当の学芸員さんと哺乳類担当学芸員さんがタッグを組んで実施されています。教育普及と自然史資料の専門性を持つお二人が組むことで、子どもたちや学校の要望に合わせて、効果的な資料(足裏まで全身観察できるぬいぐるみ型の剥製!)を開発する工夫にもつながりました。

### 三重県立美術館 「利用しづらい」層への 六つのアプローチ

午後は県立美術館へ。こじんまりと落ち着いた静かな空間で、個人的にも何度も訪れているところです。お話をうかがったのは学芸員の鈴木さん。美術館のアクセシビリティ向上推進事業として、美術館を「利用しづらい人」のニーズを把握するための六つの取り組みを

実施されてきました。今回「利用しづらい人」とされたのは、子ども、目が見えない/見えにくい視覚障がい者、主に自閉症スペクトラム障害のある発達障がい者、乳幼児のいるご家庭などです。「美術館を利用しづらい人」と聞こえますが、情報・交通弱者でもある子どもたちや、障がいの当事者の家族や支援者、コロナ禍中で会話がしづらくなった美術館初心者をも含んだターゲット設定は、私たちが自分たちの施設に取り組みを置き換える時にたいへん参考になるものです。地域によっては「利用しづらい」の要因が距離や交通手段の有無であったり、また貧困であったりもするのでしょうか。県政への意見を募るキッズ・モニター制度を利用し、美術館全体のアンケートとして、行きづらい理由、作品のキャプションのわかりやすさなどについて調査をされていたのも印象的でした。

### 「すべての人」につながる 糸を見つける

日本博物館協会が2012年7月に公表した「博物館関係者の行動規範」では、「博物館が不特定多数の人に広く開かれた機関であるために、利用の可能性を最大限確保する必要がある」とあり、そのために「利用が想定される人ができるだけ快適に利用できる条件を整備すべき」と解説されています。社会的な背景として

も、2005年4月に制定された障害者差別解消法の中で「障害者から：意思の表明があった場合に」「必要かつ合理的な配慮を行う」ことと定められています。このように博物館のあり方としても、また社会の要請としても「博物館を全ての人にひらく」取り組みが求められていますが、ひとことで障がい者と言っても多種多様。博物館に関わる私たちは、障がい者や福祉についての情報不足や経験不足も相まって、まずどこから誰に対して、何を、どのくらい・どう取り組んでよいか、踏み出せずにいるようにも思います。

「博物館をすべての人にひらく」という目標に向けて、三重県総合博物館は、盲学校と連携事業を始めたことから「視覚障がいのある子どもたちと支援者」を最初のパートナーに得ることができました。三重県立美術館は「誰もが利用しやすい環境」を整えることを活動指針の一つとして、その「誰も」に出会うため、様々なはたらきかけをおこなっていました。今回の三重県リサーチは、目標に向かうはじめの一步を、あるいはすでに数歩先まで歩き出している二つのミュージアムから具体的に

お話をうかがう貴重な機会になりました。学びの多いリサーチに参加させていただきました。ありがとうございます。全国のミュージアムがそれぞれの場所で「すべての人」につながる糸を手繰り寄せ、その知見を分かちあえることを願っています。

博物館が誰でも気軽に、自分のペースで日常的に楽しめる場になるためにはどうすればいいのか?永遠の課題とも言えるこのテーマに対するヒントをいただければと、事務局のみなさんと一緒に三重県総合博物館と三重県立美術館(どちらも同県津市)へうかがい、それぞれの館の取り組みについてお聞きする機会を得ることができました。

最初に訪れた三重県総合博物館(MieMu)では、数年前より県内盲学校と連携し、出前授業や出張展示を実施されています。まず、この連携事業の始まりとなったエピソードや、当時の館の課題などについてお話を聞いたあと、個別の取り組み事例についてご紹介を受けました。きっかけはそれぞれの立場で違ったにせよ、生徒さんを始めとする学校側の思いと博物館側の思いが重なり、実現に至ったプロセスは必然だけでなく偶然の面白さを感じました。双方がその偶然に関心をもち、楽しもうとしたことが、今のいい関係構築へとつながるひとつの要因ではないかと考えています。

他にも、障がいをお持ちの方を始め、誰もが博物館を使いやすく楽しめることを目指して、館内においてもユニバーサルデザインについて検討をされていました。この活動を担っているのは、学芸員の方や館の職員の方だけで

なく、参加されているみなさんの好奇心に基づいて、博物館とともに三重の自然と歴史・文化について探究し、広くその価値を発信する活動を行うMieMuの連携団体(※1)の方たちが中心となっておられることが印象に残りました。先にご紹介した盲学校への出前講座などにも同行され、またユニバーサルデザイン視点から館内の案内マップの作製など精力的に活動されている様子が興味深かったです。これらの取り組み自体を博物館の利用者と一緒に行うことで、より開かれた博物館を目指しておられるのが印象的でした。

次に訪れた三重県立美術館では「誰もが利用しやすい環境を整えること」を美術館の五つの理念のうちの一つとして挙げられ(※2)、多くの方と連携されながら複数の事業に取り組んでおられました。対象が「すべての人」とされているためのご苦労や、コロナ禍で対面での打ち合わせなどができない状況が続く中、作品へのアクセスに焦点を当てた展覧会「美術にアクセシー多感覚鑑賞のすすめ」を準備・開催されたことについてお話を聞きました。事業を進めるにあたり、自分たちの取り組み全体を可視化するリーフレットの作成や、対象に合わせたオンラインを含む作品鑑賞の多様なプログラムを準備されていたの

が印象に残っています。複雑になりがちな全体像をそのままにするのではなく、「誰もが」わかりやすい資料を作成することなど、小さなことも含めての積み重ねの結果、アクセシビリティ向上へとつながることをあらためて感じました。どの活動にも、当事者の方の意見が多く反映され、ともに考えていくところが社会的包摂を考えていく上での最も大事なことだと実感できました。そのためには各事例の結果報告だけでなく、取り組み中での考え方の変容や視野の広がりを、ツールやレポートとしてホームページなどを活用し、常に外部へ発信されていることは大変参考になりました。

今回の実践調査では2館の事例をご紹介いただいただけでなく、実践に至るプロセスや工夫、それを支える周囲の協力者との関係についてもお話を聞けることができました。また、私の中にあつた個別課題に対しての考えや、他の実践事例への意見や疑問。これまで何となくイメージとして考えていた社会的包摂への思いを、一歩前進させてくれたように感じています。実際に取り組んでいくためのより具体的な計画などへと進むきっかけを与えてくれたとも思っています。学んだことは数多くありますが、大きく二つの点について

特に新しい知見を得ることができました。1点目は、博物館が様々な方や地域へ今後さらに開いていくためには、館の職員だけでなく、来客ことは時間的にも、人員的にも、そしてアイデアやモノを見る視点にも限りがあるため、多くの方と一緒に考え、取り組んでいくことの重要性を改めて感じました。

2点目は、障がいの有無だけでなく、様々な立場から博物館を楽しく利用できるようにするために、まずは利用者の意見が重要になります。そして得た意見から改善し、継続して維持できる環境を設定することが必要だということでした。物理的な障壁を取り除くだけでなく、それぞれ実践に参加、協力する中で、個々の考え方や接し方を変えていくことにつながるのではないのでしょうか。

誰かのため特別なことではなく、「みんな」のために存在し、様々なことを「当たり前」に受け入れられる場として博物館があり続けるために何をすべきか。冒頭でも触れましたこの永遠のテーマについて、多くの仲間と一緒に楽しみなが考え続けていきたいと思った調査でした。

参考資料

※1 三重県総合博物館「ミュージアムパートナー」

https://www.bunka.pref.mie.jp/MieMu/8279494502.htm

(2022.2.25 発稿)

※2 三重県立美術館の「5つの」

https://www.bunka.pref.mie.jp/art-museum/000215351.htm

(2022.2.25 発稿)

## 三重県での実践調査より得たこと

北村 美香 (結creation代表)

# 博物館の中にある福祉

竹村 望 (相談支援事業所エマリタ相談支援専門員)

私は普段、大阪市内で精神保健福祉士として相談支援専門員という仕事をしながら、大阪市立自然史博物館にボランティアとして関わっています。

西澤さんから「福島県の博物館の人が三重県の美術館と博物館に見学に行くから、福祉の視点で見学に同行して」と言われた時にはその意味がよくわかりませんでした。その後、福島県立博物館でのポリフォニックミュージアムの取り組みを聞き、私でお役に立てるのであればぜひ参加したいと思い、参加に至りました。

まずは、三重県総合博物館で中村学芸員から、博物館内のミュージアムパートナーのシステムやその中にユニバーサルミュージアムという取り組みがあること、地域の視覚支援学校と連携して行われた文化祭での取り組みなどについてのご紹介がありました。

その後、館内の見学を行いました。もともと障がい者向けに作られた施設ではないので、ところどころにある車椅子などへの配慮も控えめに掲示してあるといった印象でした。展示室内は音が混じって聞き取りづらいところがあり、中村学芸員が聴覚過敏の方にはしんどいだろうと話されていたのが印象的でした。

昼食をとり、三重県立美術館へ。鈴村学芸員に館内での取り組みを紹介していただきました。2021年に「美術にアクセス！ー多感覚鑑賞のすすめ」という企画展を行ったこと、その際の展示の詳細なポイント(車椅子ユーザーが触りやすいように展示の下部を開けた空間にしておく、触ってよい展示・触れない展示の区別がつくように色を変えるなど)をお聞きしました。また、受付には聴覚障がい者に対して使われているコミュニケーションボードが設置しており、障がい者に対して友好的な印象でした。

福祉士として思うことは、障がい者に関わったことのない方たちであれば、視覚障がいのように健常者から見れば想像がつきやすい障がいの方の受け入れ態勢を整えるところから始めるのは取り組みやすいだろうということだと思います。特に、博物館関係者の方々は優しく、困っているであろう当事者に何かしてあげたい、と純粋に思ってくれている方が多いように感じます。

障がい者の方はみなさんが思っているより差別を受けています。白杖で地面をたたく音が

うるさいと言われたり、車椅子でエレベーターに乗ろうとして邪魔だと言われたり、電車に乗るなどの当たり前の日常生活でも誰かの手を借りることに罪悪感を感じる当事者もいます。多くの博物館は障がい者手帳があれば無料で利用できることができますが、それを歓迎されていると捉えている当事者はいません。正直、配慮された場所であるとも思えていません。だからこそ、三重県立美術館のように一時的な企画展であっても「障がい者向け」と銘打った取り組みがあることで「ハードルが下がる」とはありがたいし、それをきっかけに障がい者について考えてくれることは支援者としてとてもうれしい、もっとこのような展示を行ったことを発信してほしいと切に思います。

障がい者やその家族は、日々の生活に精一杯で情報が行き届かないことが多いと思います。

特に、自分の身近にない存在の「博物館」「美術館」の情報を自ら取りに行くことは少ないように思いますし、実際、私は博物館からすぐ近くの事業所に勤務していますが、事業所内には博物館の場所すら知らない当事者がたくさんいます。障がい児なら特別支援学校・地域の小学校の特別支援学級・児童デイサー

ビス、障がい者なら基幹相談支援センターに相談して、自立支援協議会などで情報共有してもらおうのも方法の一つであると思います。

また、身体障がいには困りごとが一致しやすいので当事者の視点を多く取り入れるのも良い方法だと思いますが、知的障がいや発達障がいを含む精神障がいなどは個人の困りごとの差が大きく、当事者が困りごとを言語化できなかったり、偏った意見になってしまったりといったこともあるので、支援者が間に入ることも検討していただけたらと思います。学校なら先生、そのほかにも福祉サービスを受けている当事者には相談支援専門員という高齢者でいうところのケアマネージャーのような役割の職業があり、その支援部会や協議会で博物館と共同してくれる団体を募集するなど方法としてはあり得るのではないかと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった福島県立博物館のみなさまに感謝申し上げます。



## アートワークショップ「博物館部」

県外事例調査

# 国立民族学博物館

国立民族学博物館では、2021年9月2日から11月30日まで

特別展「ユニバーサル・ミュージアム」にさわる！「触」の大博覧会」を開催していました。

触って体感できるアートをを用いた展示との触れ込みに

視覚に障がいのある生徒さんも対象に含む

「博物館部」の活動の参考になればと展示を拝見してきました。

「歴史にさわる」「風景にさわる」「音にさわる」などの

テーマごとにわかれた展示はそれぞれに幾人かのアーティストが参加し、

さまざまな素材や手法を用いることで

「見えない」ことを超えて感じることが出来る展示の可能性を提示していました。

「触れる」ことで、身体で「見る」ことができること。

アーティストが関与することでその創造性が想像を引き出し、

身体で「見る」体感度を上げてくれること。

そして、私たちが目で「見る」ことには頼り切っているかを

教えてくれる展示でした。

◎日時：2021年11月2日(火) 11:00～14:00

◎リサーチ先：国立民族学博物館

◎調査者：川延安直(福島県立博物館副館長/LMN 実行委員会事務局)  
小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/LMN 実行委員会事務局)

RESEARCH  
NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY

ラウンドテーブル

# 子どもも大人もいたい場所

こどもアートディレクターの榎田拓哉さんをお招きし、榎田さんが主宰されている放課後の場所「こどものにわ」や、福島県二本松市で運営しているらっしゃる子どもための復興支援プロジェクト「ふくしまグリーンキャンパス」についてお聞きしました。

子どもが安心して通うことのできる場所づくり、五感を通して楽しく学び創造するプロセスについて教えていただきながら、ミュージアムが、そんな子どもたちの居場所になれるよう参加者と対話を行いました。

◎日時：2021年12月15日(水) 14:00～16:00

◎会場：福島県立博物館、オンライン

◎講師：榎田拓哉さん(こどもアートディレクター/こどものにわ主宰/NPO法人ふくしまグリーンキャンパス代表)

◎参加者(オンライン)：

- 我妻泉香さん(柳津町地域おこし協力隊)
- 五十嵐恵太さん(食堂つきとおひさまオーナー)
- 伊藤たまきさん(やないづ町立斎藤清美術館学芸員)
- 佐立るり子さん(美術家)
- 鈴木彦隆さん(柳津町教育課生涯学習係長)
- 谷野しずかさん(柳津町地域おこし協力隊)
- 千葉清藍さん(書道家/福島県立博物館運営協議会委員)
- 土屋美香さん(森のようちえん「こめらっこ」代表)
- 半沢夏実さん(野あそびコンシェルジュ)
- 半沢由子さん(居場所づくり/ざわざわプロジェクト)
- 林あゆ美さん(福島県立博物館サポーター)
- 樋口晴菜さん(南相馬市博物館学芸員)

榎田拓哉  
多摩美術大学卒業。2000年より現在に至るまで、東京鷺宮のアトリエにて「こどものにわ」ワークショップを主宰。2011年東日本大震災を機に、福島県二本松市で、子どものための震災復興支援を行い、2017年NPO法人ふくしまグリーンキャンパスを設立。子どもたちが安心して表現できる居場所づくりに取り組む。2020年長野県御代田町へ移住。鷹匠としても活動。

**事務局・小林めぐみ**  
お時間になったので始めさせていただきます。今日は平日のお忙しい中、お時間をつくってくださってありがとうございます。県立博物館の小林です。

県立博物館ではこの数年ライフミュージアムネットワーク実行委員会という団体で事業をしております。3年間ライフミュージアムネットワークという事業をやったあとに、今年からポリフォニックミュージアムという事業を始めました。震災後、「いのち」と「くらし」の大切さにあらためて気づいて、その二つにミュージアムとしてみなさんと一緒に取り組んでいけたらということをやっている事業です。

ポリフォニックというちょっと聞きなれない言葉なんですけど、2、3年前に京都でありましたICOM京都というミュージアムの国際大会で、ミュージアムのあるべき姿として、社会の課題に向き合っていく、いろんな意見が共存できる、対立しあったり、否定するのではなくていろんな意見が当たり前に共存できる場所、ポリフォニックスペースにミュージアムはなるべきじゃないかというのが意見として出されました。最先端すぎて満場一致で発言するところまではいかなかったと聞いていますが、福島県立博物館は震災からの福島でいろんな意見の中でみなさんが試行錯誤してきたこの10年間を見てきたことあって、ぜひそんなミュージアムになっていきたい、うちもそういった博物館でありたいというところで、ポリフォニックミュージアムという名前の事業を今年スタートしました。その活動の一環で現在「博物館部」という枠組みの事業をしているんですが、いろんな方たちに来ていただきやすい場所にだんだん

りますようにということで、この事業で支援学校や福島県内の適応指導教室のみなさんに気軽に来てもらえる場所づくりをしています。しかしいまだに県立博物館、敷居が高いと言われ続けております。そんなところから脱皮できるようにということで、今日お集りのみなさんにはいろんな形でアドバイスをいただいたり、見守っていただいているんですが、さらに今日は二本松市で様々な活動をしている榎田さんに今私たちが抱えている課題だったり、ぜひ参考になるお話を聞かせていただけたらということをお招きする形にしました。

コロナということもありましてオンラインの形でクロースドのトークとなったんですが、今日はミュージアムの方や、公共の場所での活動、民間の場所での活動、子どもたちの居場所づくり、いろんなことに関心のあるみなさんにお集まりいただけたので、ぜひみなさんと一緒に学んだり考えたりできればと思います。「博物館こうしたらいいんじゃない？」もあとでお聞かせいただけたらなとも思っています。どうぞよろしくお願いたします。

前置きが長くなりました。どうしようかな。榎田さんの紹介もしたいんですが、今いらっしゃる方のご紹介を先に榎田さんにしてもらいますか。私に見えている画面の順番でいきます。左上から林さんです。県博の強力なサポーターになってくださっていて、ライフミュージアムネットワークのイベントもほぼ全部ぐらゐの感じですよと来てくださって、県博をとっても愛してくださっています。お仕事でも最近いろんなご提案いただいたりしています。林さん一言お願いします。

**参加者・林あゆ美**

林と申します。私も子どもの活動にはとても興味を持っています。今日は楽しみにしていました。よろしくお願いたします。

**小林**

ありがとうございます。そして、柳津町の斎藤清美術館のみなさんが聞いてくださっています。最近、放課後学級の子たちと一緒に色々やったりもしていますもんね。今日はよろしくお願いたします。

**参加者・伊藤たまき**

よろしくお願いたします。

**小林**

そしてそのお隣、千葉清藍さんです。書家であり当館の運営協議会の委員もしていただいております。当館の事業で書を使ってみなさんと表現するワークショップも一緒にやってくださっていました。清藍さんです。

**参加者・千葉清藍**

みなさん初めまして、よろしくお願いたします。

**小林**

お願いたします。そして清藍さんの下、土屋美香さん。森のようちえん「こめらっこ」をやったりしゃるんですね。また後半で、どんなことをしているのかも教えてください。

**参加者・土屋美香**

お世話になってます。よろしくお願いたします。

**小林**

そして南相馬市博の樋口さん。

**参加者・樋口晴菜**

南相馬市博物館で教育普及を担当しております樋口と申します。今日はよろしくお願いたします。

**小林**

はい。よろしくお願いたします。そして半沢夫妻です。今日はご参加ありがとうございます。

**参加者・半沢由子**

こんにちは。今日は佐立さんからの紹介で。アトリエサタチに午前中に行ってきた、こういうのがあると聞いて、今帰ってきたばかりです。私たちはちょっと生きづらさを抱えている若者たちと一緒に居場所づくりをやっていたのですが、今はコロナでクロースドになって仕切り直し中です。仙台市内の子ども園の人たちと自然と親しむ入り口と一緒に探すワークショップをやっています。よろしくお願いたします。

**小林**

色々教えてください。ありがとうございます。そしてお隣、五十嵐恵太さんです。喜多方在住で、喜多方で子どもたち向けのワークショップされたり、場づくりをしたり、まち並みを使った大学生との事業もやってらっしゃいます。今日はありがとうございます。

**参加者・五十嵐恵太**

よろしくお願いたします。私も小さいですけどアート教室をやっていて、小さい子と色々やっています。お話し楽しみにしていました。よろしくお願いたします。

# ROUNDTABLE THIRD PLACE

小林  
ありがとうございます。そして佐立さん、お久しぶりです。佐立さん仙台でいいんでしたっけ、お住まい。喜多方で私たちの事業に参加していただいたことがありましたが、ずっと佐立さんがご自分のアトリエで、子どもたちの事業をやっているのを見聞してましたので、ぜひ一緒にいただけたいと思います。今日はありがとうございます。そして柳津町中央公民館さん。よろしくお願います。

では、みなさんとお送りしてまいります。それじゃここで満を持して、榎田さんにマイクを渡したいと思います。二本松市で子どもたち向けの場所をつくってらっしゃいます、県博にそういうみなさんが集まれる場所をつくってほしいという時に、ぜひ榎田さんに色々教えていただけたらなと思って今日の場をつくらせていただきました。自己紹介の内容も用意してくださっています。よろしくお願います。

## 過去20年間子どもたちと

榎田拓哉

みなさん初めまして榎田と言います。よろしくお願います。僕は「こどものにわ」という場所をつくって、二本松出身です。普段は子どもたちと一緒にいる時間が非常に長くて、こうした大人の方に囲まれながら私の今までの活動を紹介する機会がめったにないので、どれだけお伝えできるかわかりませんが、過去20年間子どもたちと一緒に色々な場所を共有してきました。そういう中で培ってきたもので今回のプロジェクトをお手伝いできればと思います、今日は色々お伝えしたいこ

## 「こどものにわ」

私はちょうど2000年に東京で「こどものにわ」という放課後の場をつくりました。アート支援とかクリエイティブな世界に身を置くことよりも、僕は子どもたちの日常の中で自然に表現する喜びとか、今しかできないこと、感性を引き出す、そういう遊びの中で感じる、学ぶ場所をつくりました。そこで今日は「こどものにわ」がどういうふうになんか場所が広がっていったかを写真を交えて紹介します。こういう形で子どもたちと車座になって、色々なことを話しながら進めていきます。子どもたちがほぐれるというか、緊張が解ける、笑つ、自然な状態に早くしてあげる最初の時間を大事にしています。大人も子どももそうですが、すつと表情が柔らかくなる。ここは安心できると思うと自分の気持ちも柔らかくなる。受け入れていることも全部解放するのだと思います。

## 命と子どもたちの結びつき

保育園ですね。子どもと猛禽類といった何かが関係あるのだと言う話で、生き物大好き少年が、虫取り網から大きいものに変わり、僕は今鷹匠、鷹狩りをしています。鷹狩り親父になった。命と子どもたちの結びつきをとて感じています。普段は僕単身で子どもたちの場に向かうことが多いのですが、時にはスタッフとして猛禽類を連れて子どもたちの場所に行っています。猛禽類と子どもたち。冒頭で余談ですけど、獺期の時期になり、僕は11月15日から2月15日、子どもと一緒にいない時は家族の了承を得て、獺に出かけて鷹狩りをしています。鷹を拳に乗せて野生に触れ



榎田拓哉さん

と、お見せしたいものを用意しました。ぜひ一緒に見ていただければと思います。  
**子どもたちが自信を持って安心して自分であり続ける場所**

僕は二本松でNPO法人ふくしまグリーンキャンパスという震災後の活動をしています。今は長野県御代田町という信州の町にいます。小さい時、18歳まで二本松の環境で思いっきり遊んで、とにかく生き物も大好き、つくるともありません。幼稚園、小学校、蹟いたこともありましたけど本当に安心して自分のやりたいことを表現することに救われたという背景もあります。大学が東京だったので自分の故郷を離れると余計に、当たり前前だった景色、暮らし、その中で一番子どもの時の記憶がこれだけ自分を成長させていく上で大事だったということが本当に思い起こされます。これから感受性とか自分の感覚を通して子どもたちが自信を持って安心して自分であり続ける場所は本当に必要だと心から感じています。

## 感じることから始めよう

瞬間、僕は五感や第六感は本当にあると感じます。野生に入ると人間も命の一部だと感じます。そういう命との触れ合いと子どもたちを僕は大事にしています。

じゃあ、僕の自己紹介ということで、先ほど申し上げましたが「こどものにわ」はどんなことを大事にして、どんなところでやっているのかを紹介していきたいと思っています。本題ですけど、「こどものにわ」で僕が大事にしていること。レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」という本はご存知でしょうか。僕も大好きな本の一つです。3年ほど前に都城の図書館に開かせていただいた時に、榎田さんの「こどものにわ」は「センス・オブ・ワンダー」だねと言われたのが非常にうれしくて、もったない言葉だなと思いがら、ありがたく受け取った言葉です。そのレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」の中で、知ることを感じるこの半分も重要ではないという言葉があります。まさに僕が「こどものにわ」で大事にしているスタートは感じることから始めようということ。子どもが感じるって、まさに子どもの心が動くこと。これ何？不思議という気持ち。きれいとか、感動する気持ち。面白いもそうかもしれない。すごいという驚きの気持ちもあります。心が動くことを最初のスタートとして大事にしています。それは複雑ではなくて、一番身近な自然現象が教えてくれる。例えば、コップが倒れて水がこぼれるということだけでも、子どもたちは、こぼしちゃったということじゃなくて、それがなんか面白い、水が動いている



ようだねって言う。身近なものをどう面白く、興味深く捉えるかを僕は「こどものにわ」の出発点にしています。自然の現象はともも奥深く、20年ほどやっています。子どもたちとやっているプログラムは実はすごくしぼられていて、本当に大事なものの五つ六つを繰り返しやっていく。それは成長とともに発展していったり、表出することが変わっていきます。



これはね、水に色をつけてつくった色水をみんなで混ぜ合わせるというだけです。ただこの水が、みんなの大きな器の中に入っていくだけで、水の模様がどんどんマールのように動き出す。どうしてだろう。何だろう。子どもたちの目はジッとその動きを見ている。ものごとと関わることでどう反応していく

のか、変化していくかをみんなと一緒に見て、それぞれが感じることを進めています。水が表面張力によって宝石のようになる。ただの絵具です。絵具で絵を描くというよりも絵具そのもの、色そのものに触れる。物語立てて、赤と青と黄色くんの話をします。絵の具と関わっていくのですけれど手で触れて、ダイレクトな感覚ですかね、子どもと子どもが触れ合って、擦ることで他の色が引っぱられていく。



**思いもよらない世界、思いがけない世界**

そしてこれは、水の上に浮かんだ油絵具を移し取る。一瞬にして移し取られる。自分では思い通りにならない、思いがけないもの、それに会おうことを大事にしています。思い通くとこのことを繰り返しています。

にどんどんつながっていきます。やってみたいという気持ちからできるかもしれないという気持ちになってくる。感じるどころから始まることで、知識、欲求というか、知りたい、自分を表現したい、もってできるという自信を持つ。そう感じるところから始まると、色々なことを子どもたちは吸収していく。子どもたちの感覚がどんどん開いていく。そこに伴ってあげて、傍にいてお手伝いをする。子どもたちそれぞれが、今度もうとしていく、そこでお手伝いをしていく、そういうことを繰り返しながら子どもたちの場所をつくっています。特に、今、自分に自信がないお子さん、自己評価が低いお子さんがいらっしゃるわけで、そういう中でどういうふうに分の中で自信を持つための表現していきけるかを私は最初に丁寧にやりながら子どもたちの場所をつくっています。

**一つの火を起こして**

「ふくしまグリーンキャンパス」は震災後の福島で、僕が生まれ育って、福島の自然の中で培ったものから何か恩返しをしたい、子どもたちのためにやりたいとつくった自分の場所です。それ以外の場所は色々な方から呼ばれて発生して日常の場所になっています。「こどものにわ」として子どもたちと会っている場所はまず放課後の場所でした。今回も博物館を日常的に放課後とどうつなげていくかというところが。常に日常をつくっていく人というのはその場所の人になる。僕のような人はそういう場に行くと、子どもたちに一つの火を起こして、その日常にならなくて、その場の人にその火を置いてい

りにならないということではなく、思いもよらない世界、思いがけない世界にどんどん子どもたちが興味を持つ。そっちに比重が上がるように僕は声をしています。自己評価、他者評価、周りで評価はなくてもいいと言っても、何かと比較してしまうのはどうしても人間にはある。こういう自然のものと触れ合うことは、思いがけないこと、思いもよらないことへ子どもたちを連れていくと僕は思っています。



感覚ですね、粘土でもトゲトゲがあるとやっぱりチクチク痛いかななんて、最初の導入があって、想像する。でも踏むと柔らかい。そうやってどんどん五感を刺激する。本当にシンプルですけど、2キロぐらいの重さの粘土をただ運ぶ。ドーンと渡しちゃうと子どもたちの関係性の中でもっとちゃんと渡してとか、色々なものが出てきます。

今日も本当にすべてをお伝えしたいところですけど、放課後の場所と公共の場所というところで二つをご紹介します。放課後の場所です。2000年からスタートした場所、福蔵院というお寺の施設をお借りしてやっております。最初は、幼稚園の園庭、保育室を借りて始めた場所ですが、その幼稚園が8年ほど前に閉園になりました。そのお寺の敷地内にある三軒長屋のような倉庫のようなアパートをリノベーションして子どもたちの場所を続けています。幼児から小学生、中学生、高校生まで通ってきている放課後の場所です。中学生、高校生になってくるともう自分たちの居場所ですね。学校と家庭ではなく。僕なんかクッシーって呼ばれていて、小さい時からクッシークッシー。3歳4歳の時からずっと見ていた大人が地域の中にもいるといい。そのポジションに僕がなればいいのかと思っています。小さい時から知っているんですけど、中学生、高校生ぐらいになるとお父さん、お母さんとの会話が変わってくる。で、中学校、高校の不満や出来事の聞き役になる。そんな立場になって子どもの場所をつくっています。小さい時はクッシークッシーって言うていたのに、不思議と男の子たちは先生とか言うようになる。何かたぶん気づくのでしょうかね。この人先生かもしれない、みたいな。ちょっとやめてほしいですけどね。そういう子どもの成長の

**放課後の場所と公共の場所**

でもうどこにこのいるのかというぐらいいちこちに行っています。子どもたちと会うと元気がもたえます。そういう活動をしています。

行為を重ねることで変わっていくことをどれだけ繊細に一緒に拾ってあげられるかが大事だと思っています。これは、たまたまありつたもののものをどう運ぶかを自分の体でやる。この表情を見てください。生まれて5年ぐらいしか経っていない子どもたちが、体を確かめながら、一所懸命ものを運ぼうとしている。



**子どもたちの感覚がどんどん開いていく**

この感じることから始まるってどうなるかというと、繰り返しやっていくことで、自分の中でこういうことができるかもと発見と自信にどんどんつながっていきます。やってみたいという気持ちからできるかもしれないという気持ちになってくる。感じるどころから始まることで、知識、欲求というか、知りたい、自分を表現したい、もってできるという自信

変化も見ながら、そういう場をつくっています。そしてもう一つは「ふくしまグリーンキャンパス」の放課後教室。こちらはまた違っていて、学校からランドセルを背負って帰って来られる場所です。東京の「こどものにわ」は一度家に帰って、その時間だけ来るのですが、福島のグリーンキャンパスの場所は下校後ランドセル背負って帰ってくる。そこで「お帰り」って迎え入れて、着替えて宿題をみながら、1時間半あって、終わったらまた遊んで、おやつを食べたりしながらお母さんたちの帰りを待つ、そういう場所。アート教室と生活の場所の二つが組み合わさった場所になっています。先ほどのすべてが含まれる場が二本松でできるといいなということが始まりました。「ふくしまグリーンキャンパス」は子どもたちの成長に色々な形で関わっていきけるいいなど。未就園児の親子ひろば「いっぽくらぶ」、これは福島県の地域で支える子育て推進事業さんから助成をいただいて運営しています。3歳4歳5歳6歳、保育園、未就園児の子たちは年に何回か訪問アートという形で関わっています。こちらはオフアートをいただかない限り行けないんですけど。そして二本松市から委託されて、学童クラブをやっています。30人が定員で1年生だけが来ていますが、私も学童クラブの1年生と関わりますが、スタッフさん中心で子どもたちを支援しています。そして放課後アート教室は来たい子が学校帰りに利用する。学童クラブをやめてもアート教室に来たい子どもたちが2年生から6年生まで通っています。

ROUNDTABLE  
THIRD PLACE

「育ててつくる里山部」

そして来年は誰でも参加できる「育ててつくる里山部」。これはお父さんたち、地主の方の協力で、つくることよりも育てる、色々な材料を育てていく、食べ物を育てていく場をつくっていきこうということで始まります。長野の話になりますが、昨年東京の鷺宮の中学生たちに何か育てたいものがあるか聞いた時に材料になるものを育てたいという提案がありました。東京から長野は2時間で行ける。東京から色々な可能性、選択肢がある中で長野県の御代田町に来て、材料を育てる。僕の頭の中ではつきり野菜とかでしたけど、つくるための材料を育てたいということで、藍と綿を育てることになりました。コロナの緊急事態宣言があって、東京から長野へみんな来られなかったのが、結局僕が育てて最終的には収穫しました。来年は一緒にやろう。今年は来られなかったの。つくる一歩前のものを自分たちでつくるってすごく大事なことだと思ふ。二本松でもそれを始めようとしていきます。

放課後教室の日常

放課後教室の日常です。リノベーションした場所ですので、室内はもうやりたい放題です。壁に落書きの木、毎年ベタベタ塗ってはまた白に、ベタベタ塗っては白に塗りつぶすというのをずっと重ねています。7、8年経っているのが解体される時は、彫刻刀で削り出して色を出して、絵を描こうと話しています。

こうやって感じるからスタートした子どもたちはほとんど身近にある色々なものに関心する。自分の目では感じられない。ですが、ここに何か面白いものがありそうだと、ちょっと導いてあげるのは僕の役目と想っている。この道を歩みなさいじゃなくて、ここは面白いかもしれない、そういうことを話しています。行ってみるのは自分次第。

都城市立図書館の「こどもにわ」を監修した時には「スタンブつみき」という新しい道具をつくりました。ものごとを丸、三角、四角というシンプルなものを使って、それを組み合わせることで色々な形を発見していきます。これは博物館のコレクションとつながっていると面白いと思います。形を構成して発見していくコレクションをみんなでやっています。これは、カラーコレクションというもので6個の点だけ打ってあるのですが、それをつないで部屋をつくって、そこに赤と青と黄と混色してつくった色の中から素敵だと思っただけをどんどんコレクションしていく。これも本当に子どもによって全然、まったく違う。



わって時間をかけて深めていきます。

これは泥だんご。泥だんごをつくったことある方いらっしゃいますか。あれはね、本当にピカピカになる。今は自由研究で泥だんごがあったり、売っていたりもする。でも泥だんごの本当の良さは地面にある土を丸めることなんです。土というのはこんなにピカピカになる。

これはつみこップ。これは「こどものにわ」のもう20年ぐらい続く代表的なプログラムの一つです。コップを積むのですが、その中にデザインしたものを表現していく。これは最後の1個が乗った瞬間。東京スカイツリーですね。28段ぐらいあります。これがなかなか難しい。

これはもう普遍的な遊び、とんとん相撲、これもずっと本気でやっています。紙を折って振動だけで、これだけ盛り上がるのかという。もう十数年やっていて、都城の図書館ではとんとん相撲が開催された時、図書館にお相撲さんの本のコーナーができていました。僕が行ったら軍配と烏帽子が用意してあった。本当に紙をただ折るだけ、折って振動で動かすだけで、これだけ子どもたちの創造性というか、感度が高まる。

これはちょっとデカルコマニーに似ている。合わせ刷りで、デカルコマニー星をつくるうというのを15年ぐらいやっています。頭班、体班、足班にわかれ、最後にせーので組み合わせる。この頭班でできたのがあまりにも面白いので、こうやって歩き回っている。

これは手ぬぐいを想像できないぐらいに折りたたんで、そこに色を染み込ませたらどんなふうになるかを実験している中学生。好きにやってみましょうって実はすごく難しいハードル。例えば、目の前に大きな林と藪、ジャングルがあって、そこに何が潜んでいるか

同じ場所の中で学年が異なる子どもたちがいて、色々なやり方がある。当たり前という状態。答えがない、技術的に良い悪いがない、そういうものから外して、なんかそれ面白いね、いいねって言い合える場所、表現を目指しています。

大人も巻き込んでいく

グリーンキャンパス、日常の子どもたちだけでなく、その地域と親子ということ、お父さんお母さんたちにも参加してもらおう場もすごく大事になってきました。「こどものにわ」のプログラムというか活動は実は大人も子どものような気持ちになれるのがすごく大事。今までお見せしたのも、うわー、やってみたくてお母さん、お父さんたちがキラキラした表情で言ってる、先生たちもそういう気持ちになる。大人たちもなんか、うわー、これいいねっていう回路を少し開いて、一緒になって共有



できるってすごく大事だと思います。最近では

僕も幼稚園、保育園、子どもの場所に行くと、子どもたちがウワツとワンダーな気分になった時に大人の表情を見て、自分たちと同じ表情をしているか、ただ見ているだけか、あ、なるほどと、ちょっと来てくださると大人も巻き込んでいくことがすごく大事だと思ふ。トレーづくりを親子でして、今年はお米づくりもみんなでして、収穫したものを自分の食器で食べる。これはスタンブやつみきですけど、トレーに色々配置してレイアウトも変えたりして。

これは、みんなでマシユマロを焼いています。巨大なマシユマロをこうやって焼いて食べる。炭の下にあるのは実は土器です。福島の土を使って土器づくりをしようというのを親子でやっていました。簡単なドラム缶を切ったようなもので、お父さんお母さんみんなで焼いて、熾火になって700度ぐらいで2時間ぐらいいかけて素焼きをしています。その間の時間があったらいいのでマシユマロを食べてい



ます。

大人も参加というが、大人も楽しくいられる場所、子どもになれる場所はすごく大事。なるべく見ている人は引き込んでいってあげる。グリーンキャンパスの放課後の場所は大人が参加するだけじゃなく、ゲスト、何かご縁がある人も放課後の場所に遊びに来て、いつでもオープンにしています。

日常の中で子どもたちに変化をつくっていくか

可能性という意味では放課後にあらゆる可能性がある。日常って実は退屈でもある場所、非日常よりも日常の中で子どもたちに変化をつくっていくのが重要になります。日常のもの、「これ前やったよ」というようなことは、実は子どもにとって心が動いていなかったと思っています。泥だんごも今年はこの土を使おうね、去年はうまくできなかった



ROUNDTABLE  
THIRD PLACE

たけど磨き良かったねとか、自然のものも接しているよ、その奥深さを子どもたちはどんどん発見していく。子どもって成長していくので、何年経っても同じ内容で深められるというのを僕は大事にしています。長くなりませんが、伝えたいことがたくさんありすぎて、すみません。

触れられない自然の中で

ぜひ伝えたいということが、なぜ福島でグリーンキャンペーンを始めたか。みなさんも震災後に色々活動されてきたと思いますが、私もそのうちの一人です。福島で育てられて、2011年の後、子どもたちの支えになりたいと思って、最初はボランティアのように行き来する日々でした。今はコロナ禍ですけれど、福島は震災があつて外に出られないとか色々な意味で非常日常が日常になるということを世界で最初に経験した場所だと思っています。僕が2011年に活動を始めた時、とにかく物資の支援とかをしたんですけど、二本松の子ども達も不安で外で遊べない、触れられない自然の中でどう子どもたちに自然の豊かさ、人の温かさや伝えられるかを考えました。

「アーティストとしては、悲観的なものをポジティブなものに変えられる活動はないか」ということで始めたのが、ご当地の土をふくしまグリーンキャンペーンに届けてくださいというプロジェクトです。金沢に住んでいる僕の友人の呼びかけによって全国から色々な土地の地面が届けられました。それをお見せしたいと思っています。

こういう形で、地面を送ってもらい、子どもたちへのメッセージとその地域の良いところ

を紹介してもらいました。全国から何十ヶ所も、能登からも長崎からも、色々な地面が届けられました。奄美大島からサンゴが届き、北は北海道から。公民館に巨大なシートを敷いて、日本地図を描いて全国から届けられた地面を置いてみんなで旅をしました。放射能うんぬんじゃなくて、一ヶ所について届けられた土や砂、お手紙や観光案内など、色々な地域を見られるということで、同じ地面でもこれだけ違うのかということに喜びもあるし、人がつながっていくことに対して非常に楽しそうにみんなやっていました。

はじめて触れる火山灰も届いたり、全国の地面を集めて丸めて地球だんごと呼んでいます。中には芽が出始めたり、虫がいたり、なかが出てきたって、命もある。そういうことでワクワクする。すべて大事なことだなと思う。自然、人の豊かさは絶対に子どもたちに伝わってほしいと思いますし、本当に福島にいて全国を知る良い機会になったと思います。

猪苗代湖から始まる

たくさん集められた全国のお届けのもの、これを何とかしたいということで「型抜きTakusime」というのを始めました。たくさん集められた地面を使って福島県を型抜きするという内容です。福島県、みんな描けるかな。なかなか描けない。こんな感じになる。もう一度福島を見直そうとか、住んでいる場所はどこかなとか、福島をもう一度デザインする。全国から集められた自然素材で「型抜きTakusime」が始まりました。最初にどこが自分の住んでいる場所かを聞くとだいたい地域の山、川、湖を指します。安達太良山はこの

辺だね、こっちはいわきたねって話をします。なぜか、どこに行っても猪苗代湖をまず探します。猪苗代湖から始まる。それで自分の行った場所、ばあちゃん家、じいちゃん家と言いなが好きなところに砂や土を置いて最後に型を外していきます。

「型抜きTakusime」福島の色々なところでやりました。いわきの森でもやりました。福島の学童クラブの子たちから募っていわきのこの森で収集した自然物を使って型抜き。この時も猪苗代湖からでした。やっぱり福島は猪苗代湖をまず中心にしてやる。色々な地域に行つて型抜きしたいと思ったので、このプロジェクトは今でも型枠があるので、その枠を持って、どこかに出かけたかと思っっています。



してみんなの前で飛ばしたりしています。こういう体験、自然の中で猛禽類を飛ばすことを幼稚園、保育園でやっています。子どもたちの心が動いた後に描く絵がとても素敵なのです。自然のもの、生き物を含めて自然現象、自然のものを見た時に子どもたちの心、感じる心というのはとても開かれます。そういう中で感じる場所からスタートする。それによってなぜだろう、もつと知りたいという気持ちが出てくる。それが子どもたちの面白さになっていく。それで人とつながる面白さとかそういうものが広まっていきたいと思います。



最初に申し上げたようにアフターコロナで世界中、非日常が日常化している中で、なかなか集まらない。子どもたちの感性をどうやって豊かにしてあげられるだろう、僕はすごく問題、課題だと思っています。子どもたちは色々なものと出会うことで感性の引き出しというか、感性を開くと思う。非日常が日常になった時に子どもたちの場所をつくっていくことは、この博物館の事業でも公共施設がそういう役割を担うのはとても意味があること

色々な命が一緒に形成していく

ふるさと村という二本松にある今はキッズパークが建っているところ。そこで私と鷹匠の先輩を呼びまして、フクロウとタカとハヤブサを間近で見て、人との違いや圧倒的な存在感をみんなでよく見るといことをしました。人と動物の住み分け、溝が本当に大きくなっている。共存、共鳴しながら地球の中で住んでいるんですけど、動物を間近で見ると、例えば猛禽類を手の上に乗せるだけでワーッと感を感じたなと思う。動物を見るだけでゾワゾワする気持ち、野生の気持ち呼び起こす。人間だけが住むのではなく、色々な命と一緒に形成していく、すごく大事なことです。こうして猛禽類を扱える技術も1600年の歴史が日本にはあります。鳥は飛ぶものなので、なかなか外で飛ばせて戻ってくる鳥なんていない、猛禽類ぐらいだと思います。こう



だと思っています。何か子どもたちが安心して自分らしくいられること、チャンネルジミしてみようということに対して応援してあげられる。そういう場所づくりはこれから増々必要になっていくと思います。それと一緒にみなさんと協力をしていける縁がなくなるといなと思っっています。

都城市立図書館

都城市立図書館の話は飛ばしてしまいました。博物館とつながる日常ということで図書館です。2018年から関わっていて、どう子どもたちの場所をつくっていくかのお手伝いをしていきます。都城市立図書館は非常に注目されている図書館です。もとショッピンモールを改修して新しい図書館にしています。図書館の中にはティーンズスタジオというティーンズだけが使えるラボがあり、幼児から児童まで使える「子どものにわ」があり、子どもたちしか利用できない場所、子どもたちの居場所になっている。室内全体が自分を知るといことをテーマにしている、音楽がずっと流れています。静かにしなきゃいけないという図書館ではなく、色々なことができる図書館です。

これは、僕が監修した「子どものにわ」です。図書館という施設で日常的に「子どものにわ」ができる空間です。その中に僕が提案して感性を育てる三つの道具箱を置かせてもらいました。今まで話した水を扱う「色水」、たくさん量の紙コップを使って積んで、崩すのを繰り返して何かつくっていく「つみこップ」、つみきがスタンプになっている「スタンプつみき」その三つを用意しました。「子どものにわ」の



ROUNDTABLE  
THIRD PLACE

# ROUNDTABLE THIRD PLACE

最後の一個ぐらいにしましょうか。時間が延長してしまってもいいですね。これはスタンプつみきを使って組み合わせた形のデザイン集です。子どもたちからも新しいデザインが生まれた時にどんなバージョンアップしている。これはブックバッグ、自分で借りた本を入れるバッグをつくる。本当はバッグづくりから始めるといいかもしれない。あるもの



普段は図書館の場づくりチームのみなさんが、月に一度スタンプの日とか、色水の日という感じで「こどものにわミニ」というイベントを続けています。僕がくる時は「こどものにわスペシャル」として道具を使って発展したワークショップをして子どもたちと関わり、また新たな火をつけていきます。お見せしたかったことは図書館、本と表現のつながり。白い「つみこップ」の中に色付き



部屋の日常です。僕がない時にもこの部屋で道具箱からものを出して、積むとか、並べるのを繰り返します。丸三角四角のスタンプがあったら、色々な形をこで生み出していい。そして、色水。図書館と水が一番相性が悪いように思えますが、ぜひ導入しようとお願ひして、色水の道具箱を設置しました。今では子どもたちに人気の道具箱、イベントのようです。

五十嵐  
そこもむしろ面白がって

小林  
榎田さんありがとございました。お時間オーバーはしてるんですが、もしよろしければご感想とか、ご質問いただけたら。せっかくなのでと思うんですがみなさんいかがですか。どうでしょうか。

に「手間加えるということ」で「スタンプつみき」を使って布に図柄を表現していきます。他に色水とかもあるんですけど、時間がだいぶ過ぎてしまっていますので僕の話は以上になります。長い時間でしたが、退屈していません。大丈夫でしたか。子どもたちの感性をできる限り安心して表現できる場所づくりを、これからもやりたいと思います。また何か博物館でお手伝いできればと思います。



のこップで絵をつくり出す。東京スカイツリー、パンダ、ガウディのサグラダファミリア、エッフェル塔がありますが、図書館ではその関連した本がずらっとその前に置かれていいます。つくったものに興味や関心が生まれた時、その場所が図書館であることで「本」を手にする行為へとつながっていく。そういう意味では、子どもたちのつくったものと博物館をどうつなげていくかにも関わると思ってお見せしたかったです。このようにつくった作品はホールで展示することがあります。実はこの絵は「こどものにわ」の中学生と高校生がイラストレーターでつくったデザインです。成長とともに参加者からつくり手側になっていく。これを採用と言った時、デザインであなたの名前を出しますかと聞くと、インシヤルだけでいいです。その辺がお年頃なのか、みな控えめなのです。図書館のいいところは高校生、中学生が勉強しに来ていて、おーい、ちょっとやってみなという声かけるとやりますよって来る。手を上



幼児、小学校1年からさらに中学校、高校生という幅広い子どもを相手にするのはすごく難しい。僕自身もちょっととした教室をやっている、年齢に差があるとそういうのをすごく感じる。お話を聞いているとそこもむしろ面白がってやっつけように見える。さらに人数の多さに対して一人でやっつけようとするのが驚きです。そこはなんとかなるものですか。

**榎田** そうですね。その時、その時で僕も同じようでも接し方、進め方を変えているというのがあります。大きいところは本当に僕一人では難しいので、その施設の方と一緒に時間をくり上げていくところが多いです。もちろん基本は僕自身がやっているんですけど、その場所でも協力していただいているんですけどさる方はいらっしやいます。一番難しいのは都城の図書館のイベントの時は、どの年代の誰が来るかわからない状態。先月もそうでしたけど、小学生対象のもので未就学児でもいいですとして、蓋開けてみたら4歳児、5歳児ばかりだった。そういう時は方向性を変えて、色々な方向にできるように僕の頭の中で準備しています。一緒にやるスタッフは大変でしょうね。予測できない。答えになっっているかわかりませんが。

**五十嵐** ありがとうございます。

**参加者・佐立るり子** プログラムとしてすごく確立されている。自

でくれている一方で、やっぱり静かに見たいというお客さまがいるのも当然で、そこをどう擦り合わせ、どちらに楽しい場所であるかという課題です。

今日のお話の中でキットが箱の中に入っている、勝手に来て自由に遊ぶのがありました。うちにもアートテラスという、今十分に育っていないけれど、将来的に美術の情報発信地、そういった遊びができる場所に育てたい場所もあります。そこをうまく活用して、子どもたちが自由にそこに遊びに来て何か引っぱり出して、楽しいアート活動をして、そこに今二人いるお姉さんたちが子どもと一緒に遊んだりできるとうちの美術館も町民や子どもたちにとってより楽しい場所になっていくのかな。今日の色々なワークショップの話もとても刺激的でうちでも使いたい、やりたいなあって。

**メリハリつけるのは社会の中でも大事**

**榎田** 呼んでください。行きますよ。美術館に子どもたちの日常的な場をつくりたいけど、静かにしなくちゃいけないって大事な課題だなと思っています。都城の図書館でも図書館全体の中でお話している場所と、静かにしなうというのを、席ごとに穏やかな部屋、弁当が食べられる部屋、そういう空間の中で音量を調節できるように名前を付けている。ひょっとしたら美術館、博物館でもざわさわわしい場所と静かにする場所、子どもの中でここは大声出していい、ここは静かにしなくちゃいけないって、メリハリつけるのは社会の中でも大事。美術館、博物館がこは話しながら

分の手を離れても誰かができるように確立されているように感じました。その中でやりたいくないというところが出た時にどう対応されているのか聞いてみたい。プログラムが確立されているだけに、そこをどう対応されているのか聞いてみたい。

**やりたくないきつかけが必ずある**

**榎田** なるほど、放課後の広場は全部私が直接接しています。都城とか遠く離れているところ以外が私が直接子どもたちと対面していますけど、一番やりたくないが出るのはたぶん不登校と発達支援の場所。それやりたくない、もうできないというお子さんはいますね。その時は休んでいていいよと、させないというかしないでいい。それはよく言ってくれたんですけど、逆にそこを褒めてしまおう。後は小さい子ですね、低学年、幼児さんだと最初から今日は嫌だという子もいるんですけど、その時はいいよ、いいよ、手伝いお願いとか、見ていいよという声かけはします。

いつも関わっていて、今日はやる気ないなみたいなのはよくわかる。今日は適当みたいな。そういう時もありますね。後もう一点、やりたくないきつかけが必ずあるので、そこを見つけておくことに一番注意を払います。ちょっとした言葉の表現、理解、その前のできごとを引きずっている、色々な意味でのやらない、やりたくない要因があるので、逆にそこを拾っていることが多いです。

**公的な場所**

ら展示を見てほしいという場所を一つ一つつてあげるだけで良い役割を果たせるかなと思いましたが、

**伊藤** ありがとうございます。またよろしくお願いたします。

**小林** ありがとうございます。そして、斎藤清美術館のお隣にあります柳津町中央公民館さん。公民館も公的な場所なわけですが、美術館と色々連携もされていますが、ご自分のところも含め、町内の美術館であるお隣も含め、子どもたちにとってどんな場所だかというお思いでしょうか？

**参加者・鈴木彦隆**

ありがとうございます。当館でも放課後子ども教室ということで、本庁地区、支所地区二つの教室を柳津の公民館で実施しています。一人の係員、ボランティアの方に協力いただき色々試みて頑張っているのですが、生徒さん、参加されている方にもっと楽しんでいただく方法をどうすればいいかが課題で、今日もどういふうにしていこうかという話をしていました。どうすればいいのかわかるにはできなかったんですけど、今日のお話を聞いた中で参考にさせていただいたものがかなりあったので、今後の教室に活かせればなと考えています。斎藤清美術館の協力隊の方にも協力していただき、放課後教室を充実させていただいてあります。柳津の公民館管轄の縄文館も道の駅にありますので、そちらの活用という形でこの放課後

**小林** ありがとうございます。みなさんその他いかがですか。じゃあ、私から榎田さんを含めみなさんに質問があるんですがいいでしょうか。県立博物館も子どもさんたちが来てくれる場所になりたいな、なれない私たちどうしようっていうのがトークの出発点としてあるんです。うちも含め、公的なさっきの都城の図書館みたいなタイプも含めてでもいいです。公的な場所に子どもさんがいる場所になってもらえたらいいなという、そういう場所があることに對する期待とか、こうあってほしいみたいな、みなさんの近くのミュージアムとか図書館でもいいですし、福島県博へでもいいです。何かご意見いただけたらいいです。たらないなと思っただけで、忌憚なく、トップバッターとして林さんお願いしていいでしょうか。

**林** 私は子どもたち3人とも成長してしまっているんですけど、小さい時は今の榎田さんほどではないですけど、体を動かして、そういうところによく連れて行って、その時にいっぱい遊んだので、面白がるというのは今もどの子も持っているなと思います。その答え合わせじゃないですけど。さっき見てもハッとするような面白い、紙コップであんなものができるなんて驚きで、県立博物館でそういうのが、ワークショップみたいな特別なものじゃなくて行った時に気軽にできたらいいなと思います。面白かったです、ありがとうございます。

**小林** ありがとうございます。林さん、頑張ります。ありがとうございます。

教室とか今後の色々な方面での使い方をどう考えていけばいいのか、今日の話を活かしていきたいと思いましたが、またアドバイスいただければと思います。本日はありがとうございます。

**小林** ありがとうございます。柳津にもぜひお出かけになっていただいて。

**公民館ほど近い公共施設はない**

**榎田** 公民館は二本松の安達公民館が近くにありまして、学童クラブとして利用させていただいて、公民館事業でも手伝えなないかというお話もしています。公民館ほど近い公共施設はないので、ぜひ連携して頑張っていたらばと思います。お役に立てることがあったらお声かけください。ありがとうございます。

**小林** ありがとうございます。そして、土屋さん。土屋さんのお近くのミュージアムとはじまりの美術館だと思っんですが、はじまりの美術館でもいいですし、お好きなお話、公民館とかも含め公のところどころなことあったらいいなとか、こういうところがあって好きなんですとかありましたらぜひ教えてください。ありがとうございます。

**お母さんたちの心のリミットを外す**

**土屋**

応援よろしくお願います。じゃあ、斎藤清美術館のみなさん、自分のところがこうなりたいんですでもいいので、一言ずついただけますか、お願いします。

**参加者・吾妻泉香**

やっぱり子どもが美術館に抱くイメージが楽しい場所っていうふうになってほしいなあって。

**参加者・谷野しずか**

そうですね。私も子どもの頃、美術が好きだったのに美術を身近でできる場所が全然なくて、都会に暮らしていたんですけど。今の美術系のワークショップをたくさんやってくださるところは恵まれているなと思う。斎藤清美術館も子どもも含めて町民からまだまだ身近な存在ではないところだったので、遊びに来たら何かができるみたいな感じがいいなと思っています。今日は本当に貴重な話ありがとうございます。

**小林** お二人ともありがとうございます。たまきさんお願いします。

**伊藤**

二人に大事なことを言われちゃった。そうですね。子どもたちに美術館に来てもらって楽しい場所だと思ってほしい。一方で子どもたちが展示室でおしゃべりしながら見て、ちょっと嬉しくなって大きな声を出す、他のお客さんの中には、静かにしてほしいとかそういうのがあるのです。美術館、公共の場所は色々な方が来るので、そういう方のお声も無視できないとなると矛盾じゃないですか。楽しんで

普段は赤ちゃんから小学校低学年ぐらいがメインですけど、親子が里山で遊ぶ場をつくっています。はじまりの美術館さんでもアート教室をたまにやらせていただいて、そういう時は野外にテントを張って、子どもたちが思い切り声を出してどろどろ、びちゃびちゃできる状況でやっています。やっぱり子どもたち一人では来られないので、お母さんたちの心のリミットを外すというか、美術館に子どもを連れて行ってほしいと思える状況をつくるのが手取り早いと思っています。それをきっかけに日常的にも連れて行ってほしい、楽しんでいいところだとなっていくといいなと聞いていて思いました、以上です。

**小林** ありがとうございます。本当ですね、うらやましい。

**榎田** 外のフィールドってとてもいいと思います。何もないところでどう遊べるかが一番大事だと思っています。美術館も利用してできるなんてとてもうらやましい。森と美術館最高ですね。むしろこちらも学ばせていただきたいぐらい。

**小林** ありがとうございます。続いて、恵太さんお願いでいいですか。さっきも質問いただきましたが、あらためて喜多方市美術館もありますし、うちのことでもいいですし、はじまりの美術館さんも近いと思いますが、ミュージアムとか、公民館とかそういう公的なところに子どもたち向けの場がきたり、子ども

ROUNDTABLE  
THIRD PLACE

たち向けの事業が展開されることについて、どういうことを期待されたり、こうであったほしいと思ってるなどありましたら教えてください。

## 公の場の担い手

五十嵐

そうですね。お話を聞いていて思ったのが、榎田さんが火付け役になっているという、その火付け役ですごく大事な方だと思おうのが一つ。公の場に担い手が必要になってきて、榎田さんの話だと、そういうことをやっている人が招かれて、担い手がどうその地域にいるかも大事だと思おうのですけど。今日の話を聞いていて、公の場の担い手と考えた時に僕がたまたまこっちで関わった方が、東京都美術館でやっている、一般の人がミュージアムの運営に関わっていくような仕組み、「とびラー」という仕組みをやっているらしい。

もう10年近くやっていらっしやる。単純に美術館のファンクラブとかじゃなく、もう少し一歩入って普通の人たちがミュージアムで何ができるかを考えるようなものを美術館の学芸員がサポートしながら、ある展覧会において絵を切ったようなものをコラージュしてワークショップをやるとか、学芸員さんとかじゃなく関わっている一般の人が考える仕組みがあった。それはもちろん上手く行く企画もあれば、上手く行かない企画もありですけど、そういう担い手の中にいる人だけじゃなく、公共の場に興味のある人が入り込むことでもっと広がってくる気がして、その延長線上に子どもを置く考え方もあるのかな。喜多方市美術館なんかそういう子どもや

どもがいるのですが、そういうプログラムに参加する側の時にどうしても初めてだったりすると、やはり緊張感とか、どのような場所なのだろうという気持ちで常にお母さんたちにあつて、第1回目を越えたと何回も通いやすくなりますけど、その1回目を越えるまでの間に何かしら応援隊ですとか、紹介してくれる人とか、知り合いの人がいないとどうしても気持的に大丈夫かなと心配になってしまふ。一歩踏み出すところで、その間にどんなかがある、それが地域の中の一人、PTA、どういう立場の人がそれを担えるのか、ママ友や色々なタイプがあると思うのですが、この間にあるものがすごく重要で、親たちの心を解きほぐす重要なポイントになってくると最近感じています。

小林

ありがとうございます。土屋さんのお話にも通じますよね。その辺りは私たちもまったくできていないところかなとも思うので、アンテナを高くしないと。江川さんがね、未就学児の事業を色々やってくださったり、あとお母さんたちと連絡取ったりしてくださっていてちょっとずつ良くなっていると思っっているんですが、またできることも探っていきたいと思います。ありがとうございます。

それでは半沢さん、今日はご参加いただいて、本当にありがとうございます。ご自分たちの活動に照らしてのご感想でもいいですし、あと、そちらもたくさんミュージアムとか、公的な場所とかおありだと思おうので、そういうところへの何か期待される場所とかもあれば、私たちも参考になるので教えてください。できれば嬉しいです。よろしくお願ひします。

色々な人が混ざっていく場所になっていったらいいなと見えています。なかなか中の人にそれができるかということできないというか、毎日の業務の中でどうしても限界があつて、そこに火付け役や地域のそういう活動をしたい人たちが入っていく仕組みが必要なのかな。僕もそうですけど、放課後アート教室とかやりたいけど、自分がそれを生業としてやっていけるかといったらすくはできないです。でも、公の場でそういうことに対して場所、必要な予算をつけてくれて、そういうことをやってくれる人に来てくれませんかと言ったら、担い手になってくれると思う。そういう仕組みが上手く公の中でできないかと今日は考えました。

榎田

とてもいい話ですね。おっしゃる通りで、都城の図書館でも場づくりチームというチームが活動しています。本来の業務は司書、蔵書管理をしていると思います。そういう中で子どものスペースも一緒に担当しています。チームが図書館の中で結成されたので、「子どものにわ」には場づくりチームがチームとしてつくられていながらも課題がある。僕がこの前言われたのが、榎田さんのやっていることをやるのはできるのですけど、たまたま、イベントの時に固まって動かない、作業が止まった、そういう子に対して、何がひっかかって止まってしまったのか、何が原因なのかかわらない。僕はやりながら見て、ここが原因だなと思って声をかけて、そこで解決して動き出すのです。チームはずっとそれが気になっていて、何でその子が困っているのかかわらなかつた。そういうのを目の当たりにした時

## そこを壊すようなインテイクの工夫

半沢夏実

シンプルだけどパワーのあるプログラムの話をうかがつて刺激をいただき、ありがとうございます。話のピントがずれるかもしれないですけど、博物館、美術館の利用者拡大とか、利用率を上げるというところについて、日常私を感じているのは、博物館はやっぱり勉強をすることが多いという感覚、美術館は美術が好きの人が行くところという括り、塀ができていく気がしています。そこを壊すようなインテイクの工夫みたいな入り口のデザインを少しいじってみるとか、そういうインテイクの工夫があつたらその塀を少し低くできるのかなと思っています。中の充実はもちろん、中の充実を知らせるインテイクの仕方があつたらもうちょっと利用率が変わってくるかもしれないと思います。

小林

ありがとうございます。

## 多世代をつくっていくステップ

半沢由子

私は関わりをテーマにした居場所づくりをやつてきていますが、中高生世代は特に他の世代との関わりなんていらぬと言ふ。100人インタビューした時もそういうのがいっぱい出てきた。なので、多世代をつくっていくステップを踏んで、色々工夫したいです。確かにこういう公共機関を使えば結構多世代は色々な形で集まりやすいので、切り口として

に、私たちは榎田さんのようにはできないかもしれない。そういう課題もあつて、地域の中で、子どもたちの心に寄り添って活動できる人が担い手となつて、お手伝いができる。そういう仕組みができる場所がより活性化すると思ひました。非常に厳しい現状ではあります。

小林

ありがとうございます。うちもさつき恵太さんがおっしゃつた学芸員だけではやりきれない、やりたいんだけどできない部分があつて、どうしても。今、周りにいる学芸員がうんうんって頷いていました。課題、大きなね。でも、何か方法を探していきたいと思ひっています。ありがとうございます。樋口さん、同じように南相馬市博物館でそういう普及活動をやるうとしてらっしやると思ひうんですけど、今までの話で聞いてみて、うち今こんなこと悩んでますとか、こんなことをやり始めたんですとか、やりますとか含めて何かありましたらお願いします。

樋口

お話を聞いて、単純で誰にでもできる洗練されたワークショップをつくられていて、私も身もいいなと思ひて真似してみたいところもありました。博物館が子どもたちにもアプローチするのも大事なのかと思ひて、子どもたちにも博物館が好きになってもらつて、成長して、また博物館に大人になって来てもらうことで、博物館の存在意義ができるのかなと思ひています。ただその子どもたちに対してのワークショップが本当にこれいいのか悩んでいるところもあつて、今回みなさん

公共機関は面白いと思ひました。実際に学校の図書館を開いて居場所づくりをしているようなところがあつて、そこに地域の人たちが色々な形で関わつて、それが地域全体の拠点になってきている事例も出てきています。何か持っていていきようですごく面白いことができらるだろうと思ひていました。

あと、もう一つ、こういう目的の人もいれば、こういうふうな目的もあると、色々なことを望んでいる人の違いがある中で、うるさいとか、そういうふうに言ひだすおばあちゃんが出てくる。そんな時は子どもたちと若者にどうしたらいいか相談して、ワークショップを開いていったのですが、そうすると根本的な解決ができなくても、結構意識的に歩み寄る姿勢がどんどん変わつてきて、何かかわらないうちに問題が解決していることが何回かありました。そういうこともやつたらもっと面白くなるだろう、もっと自分ごとになってくるだろうと思ひました、以上です。

榎田

中高生世代は他の世代との関わりを持ちたくないという話もあつて、公共施設の中で色々な世代の方が自分の目的のためでもいいので集まれる場所になると、積極的じゃない子もいっぱいいますので、でも、声をかけられたら歩み寄りたい子たちも中には絶対にはありますので、そういう関わりが持てる場所が公共施設にあるのは未来を感じます。

小林

ありがとうございます。お二人ともすごい大事なことを。

のやつている姿を見て、自分自身も参考になるところがあつて、勉強になりました。ありがとうございます。

小林

野馬追いのスゴクつくつたりね、コロナ禍でオンラインのいろんな取り組みもされてました。引き続き、私たちにも教えてください。

榎田

今度行きます。ありがとうございます。

小林

そして、清藍さん。当館も色々できていないがゆえの今日なんですけども。清藍さんから見て、当館についての忌憚ないご意見をください、ざっくりと言ひていただければと。ざっくりきっぱり切り捨てていただいても(笑)。

千葉

そうですね。まず榎田さんから。私も最近書を子どもたちに伝える取り組みを始めていますので、アートは子どもたちの感性を最大に引き出す、書は先人たちの書を真似て上達しなければいけない、二つの中でどちらも大事にしながら進めていければと思ひています。でも、創造ばかりやりたい子もいれば、しっかり字を上達したい子も両方が合わさつてくる感じで、その辺りに子どもたちへの接し方とか、言葉一つかけるのにも責任を感じるところもあつて、今日はお話を聞いて接する中で、気が乗らなかつたりする部分での配慮とか勉強になりました。どうもありがとうございます。博物館に関してですが、私は4歳と6歳の子

半沢夏実

紙コップとか誰でもできるプログラムを持つてくるのは本当に面白く思ひました。

榎田

そうですね。あれも世代を超える。3歳の子でも70歳の方でもみんなやる。みんな同じ顔をしてやります。敬老参観でも一度やったことがあつたけど、おじいちゃん、おばあちゃん、なんだか畑仕事をしているみだつて言ひていました。同じ作業が連続していることで。おじいちゃんおばあちゃんたちもすごいですよ。紙コップは多世代です。

小林

ありがとうございます。お二人ともすごい参考になりました。そして、佐立さん、今日はありがとうございます。ご自分で場をつくらっしやることでもいいですし、宮城県美術館のことを一生懸命やつてこられていて、美術館とか博物館とかミュージアムなどの公的な場所つてこうあつてほしいなつていう佐立さんのお考えもあつたらぜひ教えていただければと思ひます。よろしくお願ひします。

## 過去の人たちが何をを見て何をしてきたか

佐立

美術館とか博物館に期待するのはやはりプロとしての立場だと思ひていて。美術館、博物館は人間の歴史をきちんと保管し伝える場所じゃないですか。私、子どもたちが悩んでいる時に自分が生きてきた経験でしか大丈夫だよと伝えることができない。例えばコロナの

# ROUNDTABLE THIRD PLACE

時に毎日子どもが集まっていたのですけど、子ども同士の暴力が酷くなった時に、美術館に暴力を表現した作品を見せてほしい、プロの人に人間の中に暴力があつて、それが表現されたというのを伝えてほしいと頼みに行きました。公共というのは個人になかなか対応してくれなかったり、コロナ禍だからコロナが終わってから来てくださいと言われたりする。人間個人が悩んだ時に過去の人間がどうそれを乗り越えたか、または乗り越えられないにしても表現してきたか。子どもはとても死を恐れたりする。ある時期になると死ぬことが怖いとか、知っている人が死んでほしいとか、災害に対する恐怖を訴えます。そういう時にワークシヨップとか、そういうものも必要かなと思います。せっかく美術館、博物館があるので、そこに行けば解決しなくても、過去の人たちが何を見て何をしてきたか、そういうことを相談に行ける場所になるといいと思うのです。なかなか難しいのかなと思いつつ、絶対に使えようと思っただけでお願いしたいと思っています。

小林

ありがとうございます。本当に美術館、博物館の役割だと私は思います。今の佐立さんのお話、そのためにあるんだろうととても思います。

事務局・川延安直

佐立さんご無沙汰しています。ありがとうございます。今おっしゃっていただいたこと、確かに博物館、美術館の責務だと思います。なかなか臨機応変な対応ができないのは、美術館、博物館に限らず公的施設の一番難儀な

ところですね。でも、今、うかがったような相談に対応するにしても、常日頃お話にながっていたようなワークシヨップが行われていれば対応がしやすくなるだろうと思うのです。同じ人間が経験してきた辛い絵を見るようなワークシヨップも一連の流れの中で取り組めると思いますし、そういう回路を開くためにもぜひ普段の楽しいみんなの心が開かれるようなものをやっておく。その時だけの問題ではなくて、何かあった時の備えとしてもとても有効なツールだと思います。とても良いご指摘をいただきました。ありがとうございます。

佐立

さつきやりにくい子がいたらどうしますかという質問をしたのですが、ワークシヨップを常にやっている人が子どももそういうサインを見つけて博物館とつながれるのかなと思います。博物館の人がそれを見つけて行くのは不可能なので。

川延

そうですね。博物館は誰の場でもなくてみなさんの場、学芸員のための美術館でも博物館でもありませんから、さつき五十嵐さんも言ったように色々な人が入って、アーティストの方が入って、何とかやっていくという形をこれから取るようになっていくと思います。また色々な意見をください。お待ちしております。

榎田

僕もすごく考えさせられる今のお話でした。僕も子どもたちと一緒にいる日常で、何かの衝動で暴力的になる、子どものすれ違いで揉めごとを起こす、そこを上手く保護者の方に

伝えられなくて違和感がある、そういう日常の中でどう解決していくのか考えます。もちろんその子たちには何か心の乱れになった時、その背景はあるんですけど、そこは子どもたちの場の中で、専門性を持った人たちが何故そうだったのか日常を振り返ることができません。ですが、暴力そのものとか、暴力に關しての歴史を振り返ることその客観性とかかそういうことを経験できるのは美術館、博物館の大事な役割だと思います。

横の情報、立体的、歴史的な情報

例えが違つかもしれないですが、ある学級を見学に行った時、みんなイラストを描いていました。一人一人が自分の絵に夢中で周りを見ていないので、一枚を描くのになんか苦労している子も、どこで終わりにしていいかわからない子もいる。歴史じゃないですけど、周りの情報、難しく描けない人もいる、いたいこのぐらいでみんな終わっているとかあった時、そんなのだという安心感がある。横の情報、立体的、歴史的な情報は一人の人間を客観的に冷静にしてくれるという意味で、美術館、博物館はすごく大きな機能を果たすと僕もあらためて思いました。ありがとうございます。

小林

ありがとうございます。本当にみなさんから色々ご意見をただけて、榎田さんの話から学んで、私たちにとてもすごく濃密な2時間でした。ご一緒くださったことにありがとうございます。みなさんが言ってくれたことはとても大事なことで、私たち一

歩ずつやれることを探したりしながら、今日のトークのタイトルの「子どもも大人もいたい場所」、その場所にもなっていければと思います。今日は本当にみなさんありがとうございました。最後、榎田さんにみなさんで拍手をしたいと思います。榎田さんありがとうございます。

榎田

ありがとうございます。ご縁があればどこかでお会いしたいと思っています。

小林

ありがとうございます。みなさんもうありがとうございました。

# ROUNDTABLE THIRD PLACE



## ラウンドテーブル

# ヤベアベ学級との12月

～支援学校と博物館をアーティストと行ったり来たりした3週間～

福島県立会津支援学校高等部2年4組の3人の生徒さんとお二人の担任の先生と、ミュージアムと学校を行き来した12月。ミュージアムと出会い、その出会いに起因した創造を楽しむ時間を築いてきました。1セット目は、福島県立博物館を空間ごと楽しみ、展示具や展示台、展示空間の面白さを見つけました。生徒それぞれが見つけた博物館の好きな所は学校でのワークショップで「ミュージアムBOX」となりました。2セット目で再び福島県立博物館を楽しんだ生徒たちは、博物館のフリースペースで思い思いに描くスイッチを手に入れたようでした。学校でのワークショップでは、そのスイッチが全開に。本ラウンドテーブルでは、2セットのワークショップを映像で振り返り、支援学校とミュージアムの連携について、アーティストが関わることの意義、障がいについてどのように多くの方に知っていただくかなどをテーマに意見を交わしました。

- ◎2022年2月3日(木) 15:30～17:00
- ◎会場：福島県立博物館ティールーム、オンライン
- ◎講師：大江ようさん(TEXT代表)
- 中津川浩章さん(美術家/アートディレクター)
- ◎参加者：阿部美由紀さん(福島県立会津支援学校講師)  
加藤香洋さん(福島県立会津支援学校校長)  
佐野美里さん(彫刻家)\*メッセージで参加  
杉本雅昭さん(福島県立会津支援学校副校長)  
森内康博さん(映像作家)  
矢部翔太郎さん(福島県立会津支援学校講師)  
岡部兼芳(はじまりの美術館館長/LMN実行委員会委員)  
鈴木晶(福島県立博物館館長/LMN実行委員会委員長)

大江よう  
宮城県出身。現代美術家のアシスタント・アパレルメーカーを経て、テキスト・テキスタイルのデザイン・製造・販売等を行う「TEXT」を主催。メタボップユニット「Frasco」の衣装担当、ファブリックブランド「LAWN」運営などを手掛ける。

中津川浩章  
美術家として制作活動をしつつ、多様な分野で社会とアートの関係性を問い直す活動に取り組む。障がい者のためのアートスタジオディレクション、展覧会企画・プロデュース、キュレーションを数多く手がける。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事、表現活動活動研究所ラスコー代表。

事務局：小林めぐみ

ただいまからポリフォニックミュージアムのラウンドテーブル「ヤベアベ学級との12月」を始めます。会津支援学校の矢部先生、阿部先生が担任をされている高等部2年4組のみなさんに、県立博物館に来ていただき、支援学校では作家さんたちと表現活動をする。それを2セット繰り返す3週間の12月に過ごしました。私たち博物館にとっても発見の多い3週間でした。

大江よう  
大江です。よろしくお願いします。

小林  
そしてワークショップの2セット目の講師であり、ワークショップ全体の枠組み構成を考えていただきました中津川さんです。中津川さん、よろしくお願いします。

中津川浩章  
はい、中津川です。よろしくお願いします。

小林  
そして、この後、みなさんにご覧いただきますが、矢部先生、阿部先生の2年4組のみなさんの3週間を追いかけ映像作品にまとめていただきました森内さんです。よろしくお願いします。

森内康博  
森内です。よろしくお願いします。

小林  
そして会津支援学校から先生にご参加いただいております。校長先生は後で一緒にしてください。今、画面には副校長の杉本先生、2年4組担任の矢部先生、阿部先生がいらっしゃいます。どうぞよろしくお願いします。ライフミュージアムネットワークショップ実行委員会の委員、はじまりの美術館館長の岡部さんです。よろしくお願いします。

委員：岡部兼芳  
よろしくお願いします。

小林  
そして県立博物館側からは、ライフミュージアムネットワークショップ実行委員会の委員長、県立博物館館長鈴木晶です。

委員長：鈴木晶  
鈴木です。大江さんと森内さん、色々ご協力をいただきましてありがとうございます。完成した映像を楽しみにしております。今日はどうぞよろしくお願いします。

小林  
そして川延副館長です。

事務局：川延安直  
よろしくお願いします。短い時間ですけど、貴重なお話を聞きできると楽しみにしております。よろしくお願いします。

小林  
そして学芸員の江川さんです。

事務局：江川トヨ子  
本日はお時間ありがとうございます。よろしくお願いたします。

小林  
進行の小林です。よろしくお願いします。それでは、その3週間のまとめさせていただきます。森内さんの映像を拝見します。

(映像視聴)

江川  
ありがとうございます。事業のエッセンスが伝わる映像にいただいた森内さんに感謝申し上げます。

小林  
今日、残念ながらアメリカにいらっちゃってご参加いただけなかった1回目の講師の佐野さんからメッセージをいただいています。私が代読します。

講師のお話をいただいた時、福島県立会津支援学校の高等部2年4組の3人は、どんな生徒さんたちなのだろうと、とてもワクワクしました。「すごいね」「きれいだね」など、言葉や表情でのコミュニケーションを多くとりながら、一緒に楽しくワークショップを行えたことがうれしかったです。また、彼らの視点で博物館を鑑賞することで、彼らに必要な支援の方法など、新たな気づきも多く得ることができました。素晴らしい機会がありました。

ありがとうございました。佐野美里。

というメッセージを佐野さんからいただいています。

佐野さんのパートナーになって一緒にワークショップをくださった大江さん今回のワークショップをやっていただき、森内さん制作の動画をご覧になった上で、あらためて思われたことなども含めて一言いただけますか。

大江  
自分は普段は仙台で活動していて、アートと絵を描くのをメインにしている仙台の事業所さんにもうかがうのですけど、やはり、違う場所に一緒に行って色々な表情を見るのが初めてだったので、またそれを映像であらためて客観的に見ると、とても楽しんでくれていたなと思って、素敵な気持ちになりました。

小林  
本当ですね。生徒さんたちがあんな表情をしてくれたのを映像で知ることができました。ワークショップの時はその場その場の対応でいっぱいだった。

そして中津川さん。動画の中で「博物館と支援学校を行ったり来たりというスキームはあまりない」とおっしゃってくださったんですが、難しい枠組みになっちゃったと私たち自身も思っていました。博物館という場をヤベアベ学級の3人に知ってもらえたらというのがスタートでした。枠組みを実現するワークショップのコンセプトをしっかりつけてくださったところからようやく事業をスタートできたと思っています。映像をご覧になっていかがでしたか。

うまくいったことより

中津川

森内さんの映像を今日初めて見させてもらったのですが、すごく面白いと思ったのは、うまくいったことより、どっちかというところかなが戸惑っている、そういうところをしっかりと拾ってくれていたのがすごく良かったですね。例えば、僕の回。朝のタクシーに乗って、くねくねと来られない、どうしようみたいな感じ、障がいのある人たちが関わってワークショップをする時は、毎回こういうハプニングが起こるのですよ、予定通りいかない。そこで、どうしようかということも含めて、予定調和じゃないところをうまく拾っていた。急に走り出しちゃったりね。その結果、こういうコミュニケーションが生まれて作品が生まれる。そのプロセスの流れみたいなのも難しい、逆に言ったら面白さをうまく拾って映像作品にしていた。そこが僕はすごく良かったと個人的には感じました。

小林

チヒロさんがダッシュして、ガラスに向かって行っちゃった(笑)。あの時、チヒロさんは中津川さんに光る文字と一緒に見てほしくて光る文字に向かって走って行ったんですよね。一人一人の素敵な個性に引っ張ってもらいながら私たちがバタバタ後ろについて行った感じでした。それも森内さんの映像が伝えてくださった。中津川さんありがとうございました。そして、矢部先生、阿部先生、お忙しいところありがとうございます。行ったり来たり2セットをやっていたのですが、そこに至るまでは、授業を見学させていただいたり、

長い準備がありました。今年の活動、森内さんの映像をご覧になって、あらためてどうでしたか、お一言ずついただけますか。

色々な人たちと関わってほしいという願いが

矢部翔太郎

まず初めに、アーティストの佐野さん、大江さん、中津川さん、学芸員の江川さん、小林さん、生徒3人と関わっていただきありがとうございます。動画を見させていただいて、僕たちの自分の目線ではないカメラの視点で、生徒それぞれがこんな活動、こんな表情をしていたのだというのを楽しく見させていただきました。担任の思いとして、色々な活動を通して、色々な人たちと関わってほしいという願いがあった。今回参加させていただきました。先ほどの小林さんのお話にもあったように、リュウゴ君がこういう場面、コウタロウ君がこういう場面だと、色々な方が語ってくれたことがすごくよかったです。3人はスムーズにコミュニケーションを取れる生徒かというところではないんですけど、こちらからある程度歩み寄り、生徒たちも表現、アートを間に置くことで、両方がコミュニケーションを取れるタイミング、機会を与えていただきありがとうございます。とても楽しく見させていただきました。

小林

ありがとうございます。私たちも楽しかったです。楽しい12月でした(笑)。阿部先生もお願いできますか。

小さなところから  
小さな芽が広がってくれば

阿部美由紀

このたびは、たくさんの方々に関わっていただきありがとうございます。初めは、どんなかたちで、どんなふうに進んでいくのか、また、彼らがどんな行動を起こすのか全く想像できない中で始まったのですが、普段、表情が出ていく子どもたちなので、それを映像でこと細かに撮っていたと、あ、こんなところできっこり笑っていたとか、普段私たちが見逃しがちな表情もすごく捉えていた。また、関わる大人の方たちが、私たちの見えないうちで、なかなか来ないとか、すごく心配されていたのだから、わからない部分もすごく良く見せていただいた。こんなふうに、周りの温かい気持ちの方が増えて、障がいを持った子どもたちや、子どもたちに限らず障がいを持った方が社会で生きやすくなってくれたらいいな。実生活で私の子どもも障がい児なので、そういうふうにならなくて温かい、障がい児に優しい社会になったらいいな、こういう小さなところから小さな芽が広がっていったらいいな。映像を見ながら思いました。本当に今回はありがとうございました。

学校の外という場所だからこそ、  
色々な人が出会う可能性を

小林

ありがとうございます。中津川さんのワークショップの、博物館での回でしたが、その時、常設展の同じフロアにどこかの高校生たちの

団体が入っていました。そうしたら、チヒロさんが「一緒に見よう、一緒に見よう」と話しかけながら常設展を見て歩いていて、声を掛けられた高校生はびっくりしながら、それでもちょっとニコツとして展示を見ていました。学校の外という場所だからこそ、色々な人が出会う可能性をチヒロさんに教えてもらったような感じがしています。岡部さん、準備段階からいろいろアイデアをいただき、私たちがまだ学び途中なので、要所所で大事なアドバイスをいただきながら進めました。ずっと見守っていただいていたのをご覚悟になったコメントをいただければと思います。

全部受容して

岡部

私も立ち会わせていただき、実際にうかがえたのは学校でワークショップをした2回だけでしたが、当初、どんなふうに進んでいくと良いのかを実行委員、県博のみなさんと矢部先生、阿部先生と一緒に話ししながら組み立てた時を思い出しながら拝見しました。あの時イメージしていたことがそうなのではないのが正直なところですが、それが逆に良かったかなと思いつつ拝見しました。

映像の中で中津川さんが、タクシーを待っている時間で、「こうじゃなくちゃいけないことではない」「決まった時間で運ばなきゃいけないということもないし、楽しい」とおっしゃっていたのが、本当にそうだと思う。参加しているお子さんたちが楽しみなから、関わっている実行サイドもはらはらしな



ROUNDTABLE  
YABE&ABE CLASS ROOM

# ROUNDTABLE YABE&ABE CLASS ROOM

がら、でも、そこで耳を澄まして、目を開いてみんなの様子を見る。その状況が今回のワークをととも温かいものにしたとすごく思っております。

佐野さんと大江さんの回でも、こうしたらいいかなと思ったところじゃないところで、みんなが素材を楽しんだり、お気に入りの場所を見つたり、博物館の中で歌を歌っちゃうとか、そういうのを全部受容して、そこにしっかりと重きを置いてワークを組み立てていった。そうした過程を経て、中津川さんの回では自由にみんなが表現した。そこまでの過程であったことが全部表現に出てきたような感じもしました。歌を歌いながら自由に描いているなんて、自分も見ていて色々なことを考えさせられ、勉強させていただきました。

小林

岡部さん、ありがとうございます。岡部さんやみなさんと一緒にお話した時間があつたからこそ、森内さんがこういうかたちにまとめてくださったのだと思います。みなさんからの感想をお聞きして、あらためてどんなことが森内さんの目線で見えていたのか教えていただけたらと思います。

**作品、展示物を第二に  
してしまえばしまうほど、  
ミュージアムは  
閉ざされた空間になっていく**

森内

表現方法であると僕は思っています。もう一つ、映像のエンディングをどうしようかなと思いました。僕も色々なワークショップを映像記録していますけど、わかりやすいストーリーをつくることもあるのですが、いわゆる結果というかたちでエンディングを迎えたくなかったで迷いました。リュウ君が写真を並び替えていましたね。そこを最後にもって行こうと思った。これはリュウ君なりの振り返りをしていたのだと思います。僕らはその振り返りを今やっているのかもしれない。僕は映像をつくっている人間なので、映像を編集する時に振り返りをしています。映像素材を編集する行為自体が、過去の出来事を再構築し直すというか、自分の中で振り返って整理する行為になるんですけど、リュウ君が写真を選んで並び替えていく行為は、たぶん僕と同じことをしていたのではないかなと思っています。それを最後にもっていています。

**お互いが同等の立場であることを  
忘れないで**

もう一つだけ言うと、ここは僕の意見ですけど、ワークショップをつくり込む時に大人がこれだけ関わって、あの3人のためにだけに時間を費やす。それは、その体験を彼らに与える側としてですが、絶対に僕らのほうが楽しんでいるということを意識したほうがいいと思います。例えばものをプレゼントすると、必ずまたプレゼントが返ってきます。ワークショップって、プレゼントを渡したら必ず返されるというお互いが同等の立場であることを忘れないでやりたいと思っています。本当に僕は楽しく4日間過ごせた。彼ら以上に僕は楽しかった

はい、もっと短くしたかったですけど、今回の機会は、まず僕らが振り返って、思い出してディスカッションをするという意味合いもあつてちょっと長め、27分の長めのままに残しました。これから第三者に見せる時には、もしかしたらもっと短くして見せないと伝わらない部分もあるかと思うのですが、今回は内輪的な上映で長めにつくっています。

まず、今回のプログラムの一番の特徴で魅力だと僕が思うのは、博物館本来の展示物、作品、そういったものから1回離れて、特別支援学校の3人が、博物館の什器とか休憩所とか、本来見せようと思っていなかった部分に関心を示したこと。それをきちんと作家とミュージアム側が受け取った、これが一番の特徴だなと僕は思いました。作品、展示物を第一にしてしまえばしまうほど、やっぱりミュージアムは閉ざされた空間になっていくと思っていて、これだけ大人が関わって長い準備期間の上で来てもらったけど、そうじゃない部分に関心を持ったことにも臨機応変に対応して、それでもいいとみんなが言ってくれた、そこが素晴らしいと思っています。

アート、作品にすることの意味ですね。作品がそちらの壁に貼ってありますが、その作品に博物館での体験が直接的に出ていると言ったら乱暴な言い方になると思う。それは言わなくていいと僕は思っている。僕らはここで、これまでの体験を言語化できる言葉を持っていくけれど、彼らはもしかしたら言語を持っていないかもしれない。その時にやっぱりアウトプットする、中津川さんが言っていたようにアウトプットする手法として筆を持って絵を描くことだっと思う。彼らが絵を描くということは、僕らが言葉で表現するような

のではないかという気がしています。

特別支援学校の様子も、僕も映像という手段を用いて現場に入らせてもらって感じるのには、生徒の数に対して大人の数がすごく多い、それは恵まれた空間で特別な場所だと僕は思っている。本来はそれが必要だと思う。他の一般校も、社会の中での教育的現場では、やっぱり大人の数がすごく大切で、教育現場で人手が足りないというのは、僕らが思っている以上に大きな問題を抱えているなと思います。ちょっと長くなりました。終わります。

小林

博物館は展示ももちろん大事で、そこから受け止めてもらえるのもとてもうれしいですけど、加えてこの空気感とか場所、触って気持ちよかったもの、色々な要素があることを3人に教えてもらいました。私たちのかけた熱意の分、みんなが返してくれて互いにイーブンでやれたなどあらためて思っています。そのあたりのことを中津川さんが、やってあげる、してあげる、そういうかたちじゃなく、障がいのある方たちと一緒に色々なことをつくっていったらいいよねとおっしゃっていました。中津川さん、森内さんのお話をお聞きしていかがでしたでしょうか。

**サポートしているつもりが、  
実は逆だった**

中津川

僕はワークショップを結構やっていますけど、障がいのある人たちともう30年ぐらいこういう関わりをしていつも感じるの、障がいがある人たちがこつちのことをフォローしてく



# ROUNDTABLE YABE&ABE CLASS ROOM

れるというか、僕がフォロワーしてサポートしているつもりが、実は逆だったっていうのがすごく多い。実はあの時の彼らの行動は僕を助けてくれたのだな、わざと乗ってくれたのだな、そういうのが多くて、最初の頃は、うまくいくと、自分が頑張ったみたいな感じがあつたけど、今は逆で、やらせてもらったというか、うまく付き合ってもらえたなというこのほうが大きいです。やっぱりそういうやり取りの中で、良いワークシヨップがしっくりいくと、ファシリテーターも消えて、参加者も消えて、作品がどんどん生き生きしてくるみたいなところがあるのです。

言葉のコミュニケーションがうまくできないので、こちらもそうだけとお互いにくよくセインサーの態度を高くして、目に見えないコミュニケーションでやり取りする。その中で生まれてくると思うのです。楽しむ感覚とか感謝とか。一緒にやろうよというところをこちらが持っているのと、たぶん全然乗ってきてくれないです。

上から目線、教育的見地、ジャッジする気持ち、時間を気にして、うまく収めようみたいなことをちょっとでもこちらが思うと、やっぱり乗れない感じがある。みんな、実はすごくセンサーが発達してる。僕らが表に出さなくても感じ取っちゃうので、演技じゃなくて、本当に思わないようにするみたいなことが一番大切です。

今回の森内さんの映像は、僕らよりもそういう戸惑いとか内なる緊張感をうまく拾ってくれていると思った。ひやひやしなから、こんなところで俺こんな言葉をかけていた、結構緊張しているな、そういうのを感じながら見させていただきました。

## 子どもたちに助けられて 成立しているのかなというのは

**阿部** じゃあ、私から。特にどのシーンということではないですが、この子どもたち、初めての方と会った時、もうちょっと反応できないのかなと思っていたんですけど、彼らなりにその場面に順応して、楽しむまではいってないかもしれないけれど、笑顔も見せた。こちらは、お膳立てして楽しく、乗ってもらえたらいいなという想いがあった、このワークシヨップをやっているのですけれど、そういう大人の期待通りじゃないけれど、なんだか乗ってくれているなというところがありました。やっぱり子どもたちに助けられて成立しているのかなというのは、回を重ねて感じています。答えになっているかわからないですけど。では矢部先生に(笑)。

**川延** ありがとうございます。

**矢部** 同じくそう思います(笑)。

**川延** ヤヘアへ学級のコンピネーションが素晴らしいです(笑)。

**小林** 岡部さんいかがですか。

**小林** こんなふうにもうまくできましたじゃないとろがすごくいいですね。

一人一人が多様で違って、そこがまた魅力的だということも博物館のあり方も含めて教えていただきました。学校からはどういうふうに見えたのか、先生からもコメントいただけますか。

**矢部** 生徒たちについて知るため、準備期間からアーティストの方、学芸員の方がどういう生徒なのか教えてくださるとイーブンの状態だったので、こちらとしては、一緒にやりましょと意欲的に関わらせていただきました。

時間ばかり気にしてしまふ、こうしなきゃいけないというところがあると成功しないという中津川さんのお話がありました。自分もそういうところを持ったまま日々の授業をやつてしまっているともちょっと感じました。純粹に楽しんでいる笑顔、大人と一緒に楽しんでいる時間を共有できた映像を見て、自分も振り返られるというか、こういう笑顔を目指して今後、教育活動をやっていく必要があるなど、振り返りの機会としても自分を学び直すタイミングとなりました。ありがとうございます。

**川延** 先生、少しお尋ねしていいですか。中津川さんにご指摘いただいた、子どもたちがフォロワーしてくれているという、そこは僕らも意識的に気を付けていかなきゃいけない部分だなと今日は勉強になりました。先生からご覧になって、具体的にどんなシーンがそういう状況だったか。

## ケアの双方向性

**岡部** ケアの双方向性と言われるものがあります。ケアをしているつもりが、自分が学ばされていく、ケアは一方向じゃない。そのことなのかな。自分もすごく学ばされる。自分がケアをするというのは、自分の価値判断で、これがいいと思って、それをやってあげようみたいなイメージがあるのですけど、そうじゃなく、価値観の転換が起きて、自分ももっと豊かにさせられる、そういうことがすごくあつて、それが今回も起きていたと感じました。

**小林** ケアの双方向性が発生する場があちこちに出てきていけば、お互いに幸せになれることが増えていくのかなと思います。ここで、今回はミュージアムがホームの一つであったこともあつて、ミュージアムの可能性についてお話を聞きたいと思うのですが、どうでしょうか。ミュージアムが舞台になることについてストレートにご意見いただけたいと思います。

## よりあり方が民主主義的に なってきた

**中津川** ミュージアムの役割は時代とともに変わってきていると、最近実感しています。昔は良きものを示し啓蒙する場所、社会制度を反映している場所、体感する場所だったと思います。それが現代は、みんなで価値をつくって表現していく場へと、よりあり方が民主主義的に

なってきたと思う。

僕は、一昨年フィンランドで展覧会をやったんですけど、そのミュージアムは劇場とカフェと図書館、もちろん美術館がまちな中心にあつて、みんなそこに来て楽しむ。そこでは障がいのある人もない人も本場にリアフリーで、小学生なんかみんな寝転がって対話式鑑賞をやっている。上からの知識とかじゃなく、自分の目線で感じて共有して、みんなで価値と意味を育てていく場所、そんなイメージでした。

そういうところからみると、まだ日本のミュージアムは、少し上から目線、いいものがあるから見せてやるぞ、ちょっと失礼な言い方になっちゃうけど、だと思ふ。障がいがある人たちが行きつらいのは、ハードの問題だけじゃなく、ソフト面でプログラム内容であつたり、展示や構造のあらゆる場面で、彼らにまなざしが向いているかということ。リアフリー、最近のインクルーシブ、そういうことを考えると、ミュージアムはやっぱり障がいがある人たちが、あるいは病気の人が、なかなか行きつらい人たちに開かれて初めてその意味と価値が生まれると思うのです。

特に今、障がい者アートが色々なところで取り上げられているけれど、そこに障がいがある人たちが常時いるかということ、大きい企画展で車椅子の人なんて見たことがないです。そういうことを考えて、率先して福島の博物館がこういうことをやりますと、たぶんアクセンシビリティの問題だけではなく、街全体のリアフリー意識が高まっていくと思うのです。その先達として、文化が仕掛けていくことによって、理念とか正しさではなく、どうという社会になったらいいのかというイメージ、

感覚を共有する場所になつていけるのではないかと感じました。

**小林** ミュージアムの可能性のお話ですが、中津川さんのお話を聞いて、どなたかいかがでしょうか。

## 感触みたいなものを 感じる場として

**大江** 最初に3人と佐野さんと一緒に回った時、やっぱり展示されている物よりもその場の雰囲気、学校にはないかっこいいもの、大きいもの、そういうところに彼らが目を向けていた。今回、彼ら3人は音とか雰囲気が好きと言ったけど、普通の人も展示物はそれほど覚えていなくて、すごく大きい藁の何かがあつたみたいな、そういうところでしたか実は認識していないのではと思いました。

その感触みたいなものを感じる場として博物館があつて、その感じたものを分かち合つて、どこが魅力かをまた話して、それが展示に展開される双方向性が生まれると、障がいの方のみじゃなく、ちょっと博物館って敷居高いと思つている方にも、より門戸が開かれると彼らを見て感じました。

**小林** お二人からミュージアムへの応援メッセージをいただきましたが、ミュージアムサイドから、何かご発言、いかがですか。岡部さん、どうでしょう。はじまりの美術館は色々なところにつながって、活動が広がっていて、私



たちも教わることが多い。お二人のお話を聞いて、あらためて美術館の館長としていかがでしょうか。

**ミュージアムが  
そういう想いが通う場に**

**岡部**  
恐れ入ります。私たちこそ見守っていただいている。お二人のお話を聞きながら、博物館って完成された場所ではないのだなとすごく思いました。これからの可能性がいっぱいあって、今回の取り組みだけでも色々な楽しみ方がある場所なのだとわかりましたし、中津川さんがおっしゃったように、みんなできてる場になればいいとすごく思いました。

双方のお話がありました。双方がうまくいくために何が大事かというところ、上から目線や蔑視といった、一方的な教育目線になることなく関係性が構築されていくこと。双方向性とは想いが通うこと、温かいまなざし、一言で言うと「愛」といわれるものかもしれないですが、ミュージアムがそういう想いが通う場になるといい。ミュージアムは展示物だけを大事にするのではなく、展示物や企画が人と人をつなぐきっかけとなり、豊かさがあるから広がっていく可能性がすごくたくさんある場だと思いました。

**鈴木**  
感想ですけれど、みなさんのお話はまとめる必要がないくらい、想い、考え、一つ一つの通りだなと思います。まず率直にこの取り組みは良い。一言でなかなか言えないですけど、本当に色々な想いが詰まった取り組みだ

いなと思っています。この関係を今後も続けていきたいと思しますので、みなさん、これからもよろしくお願いします。

**小林**  
館長、ありがとうございます。支援学校と一緒するこの事業、今年は、私たちも力こぶを入れて、頑張った先生たちとやりとりしながら準備してきましたけど、日常の、当たり前一つの風景として、みなさんが来てくれて、私たちが行くことになるとうれしい。最後に担当の江川さんから一言。

**江川**  
このアートワークショップ博物館のやべアへ学級は、誰もが集えるミュージアムを目標に掲げて取り組んできたわけですが、まだまだうちのミュージアムも勉強している最中で、今回、3人の生徒さん、そして矢部先生、阿部先生のご協力を得ながら、大変大きな学びをさせていただきました。これを活かして、多くの障がいを持っている方たちに、博物館をもっと広く使っていただき、色々な視点からアプローチして、博物館を楽しんで、何となく博物館で遊んでもらえる姿が目に見える、そんなかたちに、時間はかかるかもしれませんが、していきたいと思えます。

**小林**  
今日はお忙しい中、ご一緒くださいましてありがとうございます。こんなかたちの会を今後も機会を設けていければと思っております。今日が最後ではなく、今後に向けての一つの結節点だと思つて、長くおつき合いをいただけたらうれしです。

と思います。

矢部先生から、障がい者から社会に近づく、逆に我々から障がい者のみなさんに近づいていく、そういう話があったと思いますが、博物館、ミュージアムが必要としているのは、そのあたりの感覚だと思えます。

会津に会津支援学校があることを私たちは認識していた。おそらく支援学校さんも会津に県博があるのを認識していた。けれどもお互いに今ほど強く認識していなかった。そこで発想があつて、出会いがあつて、こういう取り組みにつながった。素晴らしいことだと思えます。みなさんおっしゃるように、敷居が高い、一般に博物館はそういうところかもしれないですけど、こういう取り組みを通じて、お互いに歩み寄る、我々はその過程に今まさにいるのだと思えます。

そして、素晴らしい映像ですね。これはぜひ大勢の方にご覧いただきたいと思えます。すべてが印象深いですけど、その中でもホロっとくるところが、チヒロさんが展示室で歌を歌っているのを見て、微笑んで拍手してくれる、あのシーンです。瞬間的にそういう場面がある。そういうところを見逃さず捉える必要があると思えます。県博と支援学校の関係はもちろん大切ですが、一般の方とそういう方々との出会い、その方向性が必要なのだと思います。

森内さんから、博物館が見せたいところではないところにも興味を示してくれたら、そういうところを我々が受容するのだというお話をいただきました。その取り組みは、博物館側のスキルアップ、訓練になる。とにかく我々はわからないので、こういう経験から学んでいく。そんなことで、この取り組みは心底良

最後に一言ずつもらつてもいいですか。最初大江さん、いいでしょうか。

**大江**  
貴重な機会をありがとうございます。次の機会があつたら、また佐野さんと自分でグレードアップしたものを準備しますので、ぜひよろしくをお願いします。

**対話の広がり方を工夫するか**

**中津川**  
やっぱり対話って大切ですよ。体験を自分の中だけで価値化するよりも、話し合うと立体的に見えてきてよくわかる。こういうことを繰り返していくと、もっと輪が広がっていくと思えます。ワークショップも大切ですが、実はその後の振り返りの対話の広がり方をどう工夫するかがすごく大切。それを社会に投げかけると、次はまた違う輪が起きるみたいだね。やっぱり、アーティスト（ファシリテーター）ってワークショップ自体にエネルギーを傾けがちなんですけど、こういう振り返りの広がりが実はすごく大きい。今日は短い時間でしたけど、対話することで多様な見方に触れ、見えることがあり、感じる事ができた。それは素晴らしいことだと思えます。こういうのを続けていけるといいなと思えました。

**ミュージアムは竜巻のように**

**森内**  
映像について温かいご感想ありがとうございます。つくれた甲斐があつた。



# ROUNDTABLE YABE&ABE CLASS ROOM

ミュージアムの役割について、話を聞きながら考えていました。中津川さんは、民主的なたちで人々が集まって、新しい価値観をつくっていく場所であると言う。まさにそうだと思う。もともとは人との出会う場所がミュージアムだった。ところが今は、人と人の出会う場所である。そういう場所にシフトしてきていると思う。

ただ、今は、情報の伝達手段が変わり、コ罗纳が広がり、ミュージアムが扉を開けておけば、人が集まって交流が生まれ、対話が始まるということではなくなっている。そうではなくて、ミュージアムは電巻のように人を巻き込んでいく、巻き込む場所になっていく必要がある。今回のプログラムはまさにそれだと思う。支援学校の3人も巻き込まれたと思う。まさか博物館に行くとは思っていなかったわけですから。で、僕らも巻き込まれている(笑)。巻き込むプログラムをどんどんやっていただきたいと思っています。

**小林**  
本当ですか(笑)。ありがとうございます。では、支援学校の矢部先生、阿部先生からそれぞれお願いいたします。

**矢部**  
アートを通じて色々な人と関わりたいという担任の想いから始めて、みなさまの協力なしではできなかったと思っています。博物館を2回観覧しましたが、やっぱり博物館の良さはスケール感。学校で扱える教材はこのくらいのスケール感でやるしかないところがあるけど、博物館では大きいスケール感で生徒たちが学べた。生徒たちが展示品を見る

**小林**  
みなさんから言っていた、人と人が出会う場所、これからどんなかたちにしていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いたします。それは最後に岡部さん、今日のトークを締めたいだけだと思います。

**岡部**  
私が締めるのはだいぶ無茶ですね(笑)。最後はぜひ川延副館長から感想をいただきました。この巻き込まれたみなさんが本当にとっても想いのあるみなさんだった。この想いが一つのかたちになったと思います。私自身も今までのことを振り返って、今回の出来事だけではなく、自分が経験してきたことも咀嚼できて、次につなげることを考えられた。私自身も美術館の館長という立場で働いているので、できるだけみなさんを巻き込んでいきたいと思いました。そして森内さんの映像がとても良かった。今回のワークショップでどんなことがあったか、たぶん森内さんが編集作業を通して一番細部まで知っていると思う。この取り組みに関わったみなぐつと来た場面が、美しく、丁寧に映像に残されていたことに、鑑賞後の満足感があった。この感覚が関わった人だけで閉じたものにならず、ぜひ公開されて、沢山の方に共有されることを願っています。

ことで、それが教材が変わって、公共施設が学びの場になる瞬間に立ち会えた。とてもいい経験をさせていただきました。ありがとうございます。

**阿部**  
3人をはじめ、私と矢部先生もたくさんの方、場所に触れる機会に恵まれたなと思います。ともすれば障がいを持った子どもたちは、学校の行き来、そこから事業所、とても狭い空間で生きている。色々な方と出会い、たくさんの方に触れ、感じたことが、彼らの成長には、大きかったと思う以上に、私たちも一緒に成長させていただけました。こういう関係がこれからも続けたいなと思っています。ありがとうございます。

**小林**  
本当にありがとうございます。会津支援学校が開かれているからこそ、この場があります。校長先生、一言いただけますでしょうか。

**加藤香洋**  
校長の加藤です。このたびはありがとうございます。本日はコロナでバタバタして、大変申し訳ありませんでした。最後のお時間をいただきました。

映像を見て、それから今日のお話に参加させていただいて、感じたことが二つあります。まずは校長として、美しい映像にまとめいただき、霧の中の学校は初めてでした。

**川延**  
はい、ぜひ川延さんからも一言いただきたいと思っています。

「巻き込まれ」という言葉が何度も出てきます。地球上の一番大きな渦って、たぶん台風だと思えます。そばに寄ると、ぐるぐる巻き込まれて大変だけど、どっぷり渦の真ん中に行くと、上は青空なので、台風の眼だから。今日も、すごく巻き込まれながら、外はどっぷり雪景色も暗くなっていますが、ここの上は本当に青空のような気分、このトークを聞かせていただけて良かったです。なんと続けられるように頑張りたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いたします。またすぐにでもお会いしたい気分ですが、しばらく我慢して、みなさんと晴れ晴れとリアルでお会いできる日を楽しみにしております。ありがとうございます。

**小林**  
今日の続きをまた近いうちかと思っております。では今日のラウンドテーブルは、これにて終了します。どうもありがとうございました。

天空の会津支援学校を、これから売りにしようと思えます。美しく撮っていただけてありがとうございます。

それから教育する者としては、素晴らしいアーティストの方々に、子どもたちの感性を引き出していただき、本当にこれはありがたい。映像の中で「すべすべ」とか「きれい」とか、子どもたちの五感を使った表現が多数出てきました。こういう機会をいただけたことをとてもありがたく思っています。

もう一つは、個人、仕事をする人間として非常に強く感じたのは、今回のこのプロジェクトを通して、熱く仕事をする方々に出会えたこと。

した。これは私個人にとっても非常に大きな収穫でした。森内さんからいただいたお話、それから手前味噌になりますが、矢部先生、阿部先生が語ったこと。良いこと言っただけで、阿部先生はじめ、熱く心に火を灯している方々と一緒に仕事ができたととてもありがたく思っています。

文科省でも障がい者が、生涯を通じてスポーツ、文化などに親しむことができるよう支援活動を推進しています。ぜひ博物館がその生涯学習の場になってくれたらと思っています。映像を見て思いましたが、博物館で子どもたちは豊かな感性、歴史物や様々な発見に出会



# 総括と対話

ラウンドテーブル

# 開く、ミュージアム

みなさんにとってミュージアムとはどんな存在ですか？  
全国各地にあるミュージアム。その在り方は各館の設置目的に応じて多種多様です。  
本ラウンドテーブルは、様々な声に耳を傾けている空間（ポリフォニックスペース）を  
各地に創出することを試みているポリフォニックミュージアムの今年度活動の総まとめとして、  
地域や人々との連携により館の運営を実現している先進的な事例をお聞きし、  
ミュージアムの開き方について、意見を交える場となりました。

- ◎日時：2022年1月23日(日) 13:30～16:00
  - ◎会場：福島県立博物館講堂、オンライン
  - ◎講師：柳沢秀行さん(大原美術館学芸統括)  
楠本智郎さん(つなぎ美術館主幹・学芸員)  
岡村幸宣さん(原爆の図丸木美術館学芸員)
  - ◎ディスカッションモデレーター：川延安直(福島県立博物館副館長/LMN実行委員会事務局)
- ※参加者は来場による参加のほか、オンラインでもご参加いただきました。

**柳沢秀行**  
1991年から岡山県立美術館学芸員。2002年から大原美術館に勤務。現在、学芸統括。  
日本の近現代美術史を研究。またパブリックアートを含め、美術(館)と社会の関係についての調査、実践を行う。

**楠本智郎**  
2001年よりつなぎ美術館に学芸員として勤務。社会教育事業としてのアートプロジェクトを考案し、  
アーティストと住民が年間を通じて地域資源を活用しながら表現活動に取り組む  
「住民参画型アートプロジェクト」を2008年から実施。  
水俣病の被害を受けた過疎地域におけるアートと美術館の可能性を探っている。

**岡村幸宣**  
2001年より原爆の図丸木美術館に学芸員として勤務。  
社会と芸術表現の関わりについての研究、展覧会企画などを行っている。  
著書に「非核芸術案内」(2003)、『原爆の図』全国巡回(2015)、  
『未来へ原爆の図丸木美術館学芸員 作業日誌 2011-2016』(2020)など。

**事務局・小林めぐみ**  
ただいまよりライフミュージアムネットワーク  
実行委員会主催のポリフォニックミュージ  
アムラウンドテーブル「開くミュージアム」  
を開催いたします。

この事業は実行委員会の形で、県立博物館が  
事務局を務めてみなさまと一緒に行っていま  
す。2011年以降、私たちが学んだ「いのち」  
と「くらし」の大切さをミュージアムの現場  
でみなさまと考え、実践していきたいと始め  
た活動です。実行委員会は4年目になります  
が、本年度新たにポリフォニックミュージア  
ムという事業を始めました。ポリフォニック  
とはシンフォニー、ハーモニーではなく同時  
に色々な音が共存していることを意味します。  
そのような場所にミュージアムがなれたら、  
そんなことを目指してみなさんと活動してい  
ます。今日はポリフォニックスペースにミュージ  
アムがどうしたらなるのかについて、この事  
業の本年度の総まとめのつとして三つのミュー  
ジアムの方に来ていただき、開いているミュー  
ジアムの活動をお聞きし、学びながら、後半はみ  
なさんと考える時間になりたいと思っています。  
お越しいただきましたのは、大原美術館から  
柳沢秀行さん。大原美術館は岡山県倉敷市に  
あります。倉敷といえば美観地区です。行か  
れた方も多いと思いますが、美観地区の中核  
を成してまちをつくり上げているのが大原美  
術館です。大原美術館、最近では「みんなマイ  
ミュージアム」という言葉をホームページに  
掲げておられます。どんなふうにもんなの私  
の美術館として活動されているのか、お話を  
お聞きします。テーマは「地域をつくるミュー  
ジアム」です。そして、次にお話しいただき  
ますのは熊本県からお越しいただきましたつ

なぎ美術館の楠本さんです。熊本県津奈木町  
は水俣市の北側に位置します。海沿いのも  
も美しい町ですが、水俣病の患者さんが出て  
いる場所でもあり、そんな地域の歴史をどう  
再生していくのか、文化的にどのようなま  
ちをつくりたいのかを考えた上で、いま中  
で建てられた美術館です。美術館がその使命  
を果たすためにどんなことを地域のみなさん  
とやってこられたのか、テーマは「地域とつ  
くるプロジェクト」です。そして、3番目に  
お話しいただきますのが埼玉県から来ていた  
だきました原爆の図丸木美術館学芸員の岡村  
さんです。丸木美術館は、丸木夫妻が描いた「原  
爆の図」、私も教科書で若かりし頃見て勉強し  
ましたが、その「原爆の図」を核に展示して  
これ、様々な普及活動もしてきた美術館で  
す。丸木夫妻の支援者、絵画が伝えるメッセー  
ジを大切に、共感するみなさんとつくり上げ  
てきた美術館です。2011年以降、さらに  
テーマを広げて社会が直面している課題を作  
家さんたちと取り上げ、考える場をつくって  
おられます。この数年間、どんなふうにも  
美術館を開いてきたのか、地域の方とつくり  
たのか、「人々と育てるミュージアム」とい  
うテーマでお話しいただきます。その後、休憩  
をはさみ、今日のテーマ「開くミュージアム」  
をみなさんと考えていく予定です。

それでは、お一人ずつお話をいただく講演に  
移ります。最初は大原美術館の柳沢さんです。  
よろしくお願いたします。

**地域を創るミュージアム**  
**大原美術館の実践から**

柳沢秀行

大原美術館の柳沢です。「地域をつくるミュー  
ジアム」というお題で、いきなり恐縮ですが  
我が館の惨状からお話しさせていただきます  
と思います。昨年の4月から9月にかけて13  
6日間臨時休館いたしました。我々の美術館  
は1930年にできましたから、先の大戦を  
潜り抜けてきた館です。その時でも表向きは  
閉めていてもお客さまが来ればお迎えする  
という館だったので。建物改修で長期休むこ  
とは何回かありましたが、136日間も閉め  
るということは未曾有のことでした。理由と  
しては、みなさんも同じ体験をされたと思  
いますが、消毒液がないとか様々な物品確保の  
目処が立たないのと、入館者数激減です。去  
年4月頃の美術館前は、ポカインとするぐら  
い誰もいない状態です。開けておいても誰も  
来ないというところは、光熱費、人件費垂れ流  
しの状態ですから、これはかなり厳しい。た  
だ何とか自己努力で頑張るまでは頑張りたい  
のですが、一方で、我々の館の場合開けてお  
くと遠くからお客さまを呼び寄せてしまおう  
というジレンマもあります。岡山県、倉敷市で  
も拠点となる観光施設でもあるのです。実際、  
当館の職員がタクシーに乗ったら、「大原美術  
館が開いとるけえな、東京から人が来るんじや  
あ」と言われてしまったそうです。こうい  
った我々の特殊な要因もあって、これは閉めな  
いといけないと判断しましたし、今のオミク  
ロン株の急拡大の中でも同じような議論が起  
こっております。でも、なんといいっても日々  
100人を切るようなお客さまの数がたえま  
し。お待ちしていてもいらっやらない。いら  
してくださたら、くださったで、職員の感  
染リスクも高いということを見ると、職員のメ  
ンタルもかなり厳しくなってきた。そこで休

館する決断をしました。同時に2022年3  
月まで集客型の事業も原則的に全て休止す  
ることになりました。

このあとご紹介しますが、大原美術館は現代  
の作家と一緒する三つの事業枠を持ってお  
ります。それからチルドレンズ・アート・ミュー  
ジウムという、2日間で1000人を超える  
参加者のある大きな教育普及型のイベントも  
あります。さらに昨年は開館90周年という節  
目の年でしたから、本当に腕によりをかけて  
色々な事業を用意していたところでした。こ  
れらを全て休止する判断をしました。

それから、入館者数の制限をかけるを得な  
いために、休館を決めて直ちに学校団体の受  
け入れの休止も判断しました。2019年の  
実績ですけれど、我々の美術館は年間延べ2  
万人以上の学生団体を迎えています。そ  
れもただ駆けつけるだけでなく、我々の方か  
ら何らかの鑑賞支援の働きかけをさせていた  
だく申し出をして、だいたい7割8割が応じ  
てくださいます。さらに、大原美術館は未就  
学児童、つまり保育園や幼稚園に通う5歳児  
たちを受け入れる活動も積極的にしており、  
2019年の実績で約30園の延べ3000人



柳沢秀行さん

近い子どもたちが来てくれる。こうしたことも感染拡大状況下ではできないという判断で軒並みやめる決断をしました。本当にこういう状況が昨年の4月以来ずっと続いているのですが、実は我々にとってこの経験は初めてではなかったのです。2018年の西日本豪雨の際です。我々の美術館は年間3億円ほどランニングコストがかかります。新しく家を買おう、車を買おうというイメージです。そのうち8割を入館料収入で賄っていましたから、入館者がいらっしやらない、即ランニングコストが出せない状況になってしまいました。前々から収入の多角化は検討していたのですが、西日本豪雨でより切実にそれを考え始めていたところでした。

### 廊下がずらつとメッセージで埋まってしまう

そこから、しばらくの時間考えていたことを昨年の4月から全面的に実際にやるということが始まりました。その一つとして多くの方に協力いただき、クラウドファンディングもさせていただきました。館内のマンパワーが非常に少ないですから、私ともう一人の間で実質ほとんどやる形でしたが、おかげさまで、2348万円のご寄付をいただきました。この時に1700名以上の方からご寄付をいただきましたが、同時に支援のメッセージも寄せられます。そこでそのメッセージを全部プリントアウトして職員たちがいつも通る廊下に貼りだしたら、廊下がずらつとメッセージで埋まってしまう状況が起きました。

それからボランティアな立場で活動して下さるアテンダントスタッフ、延べ人数で言ったらかなりの人間が動かないと2万人に教育的プログラムを提供しながら受け入れることはできません。幼稚園から大学生世代までを迎え入れるためにも、迎え入れる側にもステークホルダーが増えていったわけです。

### チルドレンズ・アート・ミュージアム

それから毎年夏にチルドレンズ・アート・ミュージアムという事業もやらせていただいています。8月末の土日の2日間に美術館の各所で行いたい15個くらい様々なタイプのワークショップを同時実施しています。ここには連日150から200名ほどの外部スタッフがご協力いただいています。この写真は初日の朝の光景です。本館の前に高階秀爾館長が出てきて、集まったスタッフたちとみんな



それから、柳沢さんの現金化と僕はふざけて言っていますが、僕などのレクチャーをどれだけ高く買っていたかという模索もしています。一般の方、後援会、企業、それから多くの旅行団体の方に閉館後貸切状態で私のご案内するのにおいくら万円いただけるだろうかということを一所懸命検討しました。120分コースだと20名様で20万円、お一人1万円の貸し切りで柳沢がついてくるメニューをつくりました。高いようですね。一方でもともと大原美術館をご支援くださった後援会関係の方たちはそこからバツサリ半額になり、そうしたことも会員増強に役立つのではないかとこいつだったことも付け焼き刃ではなくて前々から検討していました。他にも相手先や内容を細かく検討して、全部プログラム内容と料金、実施の運用の方法も確定するということをしました。

クラウドファンディングで2000万円頂戴したのですが、これはもう一つのステップとして後援会組織の拡充と抱き合わせて考えていました。すでに顔が見えていて、大原美術館をご支援くださった方たち、ここから少し、ただお願いするだけではなく、後援会の方たちにより美術館をうまく使っていただけるような形をつくれませんか。この制度設計をもう一回やり直して、こちらからは半年ほどで2500万円頂戴することができました。一方、顔が見えて日頃からつながりのある方たちだけではなく、日本中にいらっしやる大原を思っただけでなく、顔の見えないみなさん方たちからどうやってご支援をいただけるかと考えて、その方策としてクラウドファンディングを対でやらせていただいたわけです。その他ワークショップの通販も始めました。

臨みます。ここに集まった150から200名のスタッフは本当に色々な方たちがいいます。工芸・東洋館の中庭にテントが立ち並び写真ですが、おわかりいただけますか？複数の小学校からお借りしているテントなので、学校名が見えないように配置していますが、上から撮ると色々な学校から借りてきたのがわかっていただけます。こういう学校の方たちにもご協力いただいています。それからこれだけのテントを建てたり、しまったり、移動したり、様々な下準備をやるのが博物館学の実習生です。多い時は50人近い学生を、だいたい私がしきって1週間受け入れています。1週間経って、チルミュの本番の頃にはもう何も言わなくてもテントが立ち上がるくらいまでトレーニングができています。

### 絵の前でちょこんと座って

日頃から禁止しているわけではないですが、



もつとも、開館時間帯以外の受入を行う高単価商品もつくりましたが、実はこれを売りに行くのがなかなか難しい。それにリアルでそれをやるのが厳しいので、今はオンラインでできないかとさらに模索しているところです。そうしたオンラインコンテンツの収益化に関して、大きな壁になるのが課金制度ですね。ワンクリックでお金がポツと入るようになってほしいんですけど、そこまでつくり込むのはものすごくお金と時間と人手がいるので、これがなかなか厳しい。ともかく走り始めてみただけでもという状況です。

### 多様で複層的なステークホルダーを抱えている

なぜこういうお話から始めたかという点、実は我々の美術館は昨年来、本当に多様で複層的なステークホルダーを抱えているミュージアムであるということ、あらためてすごく認識したことをお伝えしたかったのです。閉館する決定をする際にも岡山県行政、倉敷市行政とかなりお話をさせていただきました。具体的に申し上げると副知事さんと当館の副館長がメールでやり取りをして情報交換、意見交換するレベルでの話をして、閉める決断に至りました。そして、いざ閉めようという決めた後にどうやって告知するかの問題も出てきます。例えば、近くにある飲食店や宿泊の方たちがいきなり新聞発表、ホームページで知るのは大変失礼ということで、近くのお店は直接訪ねさせていただきました。それからマスメディアが発表するタイミングとウェブに載せていくタイミング、それぞれの相手にどういう順番、どういうやり方で閉めますと伝

絵の前でちょこんと座ってこややって絵を見て絵を描くなんてなかなかできないですね。こういったことがチルミュだと当たり前に生まれてきます。参加者だけで2日間で約1000人いらっしやるわけです。それから、何人もアーティストがプログラムを実施するために参加して下さっています。みやじけいこさんというアーティストが中心となって企画「運営をするのが、「カラダで感じる美術館」というプログラムですが、このノウハウを伝えるために、高校生、大学生世代の大原美術館でボランティア活動するジュニアアテンダントたちが、毎年5月から8月の本番に向けてずつと研修をします。そして、みやじさんがいなくても本番ができるくらいまでこの高校生、大学生のチームも仕上がってきます。

### ノウハウの伝授

ステークホルダーという言葉を使っていますけれど、ノウハウの伝授ということも行われてきていたわけです。ダンスのワークショップは岡山大学のモダンダンス部の卒業生と在校生にお願いしています。この画像の真ん中で



えるかもかなり重要で、こう考えるだけでも我々には本当に色々なステークホルダーがいらっしやることわかったのです。今日は「地域をつくる」ってちょつとおこがましいタイトルですけど、なぜそういうステークホルダーが多様に生まれてきたかという話にもつながるかと思っています。

ここから先、これまでの当館の活動紹介をさせていただきます。ミュージアムのやるべきことの根幹は作品資料の収集、保存、展示、研究それから教育活動です。そのうえで、大原美術館の場合、最初の最初から現代美術を集め続けてきた館ですから、今も我々はたくさんアーティストたちと一緒にしています。それから年間延べ2万人、5歳児だけで延べ3000人、そうした若い方も含めて、色々なお客さまがいらっしやる。作品、作家、鑑賞者、この三つの方向それぞれ色々なことをやってきた結果が様々なステークホルダーを生んできました。先ほどご紹介した未就学児童受け入れのプログラムももう既に30年前からやっています。1000人規模になってからでももう20年以上経っています。最初の5歳児はもう35歳です。1000人ほどの受け入れを始めてからでも、もう子どもを産む世代に突入しています。ですから、それをやめますよとなれば、今年の子どもの機会を失うだけではなく、これまでの実績や積み上げた関係性にも関わります。ですから、各園にやめますよと連絡一本では済みません。しっかりと意思が伝わる形での我々の休館のお知らせもさせていただきました。それから学校団体の受け入れ、年間延べ2万人がずつと続いている状況です。これを実現するために有給の正規職員、有給のパートタイム職員、

頑張っているのが私の岡山大学での博物館学の教員です。僕はいくつかの大学で教えていて、そこの教員たちが社会人になってからもこういった中に入ってきてくれています。対話型作品鑑賞のギャラリートップも毎年20名以上のスタッフが来てくださるのですが、本番まで10時間ぐらいの研修を行わせていただきます。これまで18歳から75歳までの方が研修を受けてくれました。何しろもう20年近くチルドレンズ・アート・ミュージアムをやっていますから、毎年夏にこの対話型ツアーだけに来るボランティアなスタッフもいます。中にはもう10年以上毎年来ていらっしやる方がいるから、最近ではほといも彼らが研修を始めてくれる状況まで生まれてきました。それから、今、京都芸術大学と名前が変わりましたが、もともとの京都造形芸術大学から5年間、毎年50名近い学生たちが来て色々なプログラムをやってくださいました。一番中核となったのが染織の教授である八幡はみ



さんです。八幡先生も4年間にわたって毎年プログラムを色々考えて、学生と一緒にやってきました。同時に、八幡さんは倉敷の繊維に関する資源を見出し、活用してくださいました。

### 倉敷の企業の地場資源を

倉敷市には児島地区という繊維の町があります。学生服と「ニムの町」です。この児島地区の素材、技術、マンパワーに目を付けた八幡さんがとんとん児島から色々な力を引っ張り出してくださる。児島で調達した帆布を京都に持ち帰り自分たちで染めてくる。参加者たちはそれを自分なりに選んで構成する。その後、日頃は「ニムの裾上げとかをやっている方たちが、子どもがじっと固唾を飲んでいる前で、ガッツと一瞬でバッグを縫い上げてくれる。こうした職人さんたちは、ボランティアな立場で手伝ってくださいました。2年目ではカモ井加工紙さんという、カラー



マスクングテープで知られる地元企業から製品を提供していただきました。京都の大学にいらっしゃるアーティストが、倉敷の企業の地場資源を二つ合わせて大原美術館でワークショップをするなんていうことが実現したわけです。その後、カモ井さんとは我々は色々な形でコラボレーションさせていたお礼を返して、観光バス「スティーションキャンペーン」の中で大原美術館の本館をマスクングテープでラッピングする事業まで行われました。

**露出点であり、それが結びつく結節点である**

いわば「チルドレンズ・アート・ミュージアムは、様々な地域資源の露出点であり、それが結びつく結節点です。ミュージアムがこうしたことができるということをかぎり自覚的に行っていったからステークホルダーも当然増えしていきます。

それから我々はアーティストとの色々なつながりも強い。何しろ、最初に児島虎次郎という人が礎となる作品をヨーロッパで集めた時、モネからモネの作品を譲り受け、マティスからマティスの作品を譲り受け、まさに最初から現代美術を集めてきた館なのです。さらに1960年代には棟方志功さん、河井寛次郎、濱田庄司さんなど、まだ現役で制作を続けていた方たちの展示室をつくった館です。

21世紀になってからはこれからご紹介する三つの事業をずっと継続して行なっています。まず大原家の旧別邸有隣荘を年2回だけ特別公開しますが、そのうち1回はアーティストの展覧会にしています。それから、児島虎次郎が使っていた古いけど広いアトリエでの

# ROUNDTABLE OPEN MUSEUM



した。コンビナートは産業スパイなどの問題もあるようで非常に取材が難しいところなのですが、倉敷市水島にあるコンビナートの中から3社を見学させていただきました。口ケにもご協力いただきました。いわば現代作家の映像作品に倉敷のこういう地場資源が残っているということだったのです。

それから「AM(アーティストミーツ)倉敷」です。小野博さんは倉敷市内の小学校の集合写真を撮るといって作品をつくりました。そうは言っても、今の時世子どもたちの写真を撮らせてくれるところは少ないです。この時も3校にご協力いただき、それぞれ素敵な写真作品ができました。もちろん、この時には全児童から、大原美術館で顔が露出します、作品として収蔵されるかもしれませんということに関して同意書を取り付けました。学校側と日頃からの協力関係があるからこそ、こんなこともできたわけです。

### 「せびろまの夢」

児島虎次郎の使っていたアトリエでアーティストインレジデンスが行われます。

今日はこの「ARKO(アルコ)」のことだけではなくて、会津との関わりのお話もご紹介させていただきます。我々はこのお隣の喜多方市にある喜多方市美術館で4年間にわたって「せびろまの夢」という展覧会でご協力をさせていただきました。セザンヌ、ピカソ、ロダン、マティス。1946年、この名に由来するセビロマ会が戦争で打ちひしがれた世相の中、文化で地域に力を取り戻そうというところで喜多方に出来上がった。そうした郷土の歴史を使わせていただいて、大原美術館からセザンヌ、ピカソ、ロダン、マティスの作品を毎年お持ちして、この会津で見ていただく事業としました。同時に喜多方市では旦那衆たちが今というアーティストインレ

レジデンスをやっていたことから、我々がやっている「ARKO(アルコ)」でのレジデンスの経験者、花澤武夫さん、北城貴子さん、上田曉子さん、津上みゆきさんに喜多方でも制作をしていただきました。最後には全員集合で私も呼んでいただきました。こういった形で倉敷、岡山に閉じない広域の連携をすることで、新たなステークホルダーも生まれてきたわけです。我々にとってはこんなにありがたい縁をいただきました。

アーティストインレジデンス「ARKO(アルコ)」。三つ目の「AM(アーティストミーツ)倉敷」は、映像表現、ダンスとか倉敷に取材して制作発表していただければいいという事業枠です。



今日活動の細かい紹介はさせていただきます。いけど、実はこういう形で我々が20年近く、さらには90年の歴史の中でつくってきたものが、様々なステークホルダーを抱える美術館になっていったということなんです。今、名前を出させていたいただいた相手先でもこのくらいはありますが、実際はもっとお互いに網の目が張られています。我々はこうして近く、遠く



今日活動の細かい紹介はさせていただきます。いけど、実はこういう形で我々が20年近く、さらには90年の歴史の中でつくってきたものが、様々なステークホルダーを抱える美術館になっていったということなんです。今、名前を出させていたいただいた相手先でもこのくらいはありますが、実際はもっとお互いに網の目が張られています。我々はこうして近く、遠く

たちが仕事をしてくださりました。例えばヤノベケンジさん。それから、太田三郎さんの時にはこんな積み藁をつくりました。太田さんは岡山県内にお住まいなので、5組の家族と5回のワークショップを続けながら自分の展示をつくるということをやりました。中でも、藁ぐる(積み藁)をつくるのは下準備が大変でした。今時は機械で刈り取ってそのまま粉砕して田んぼに撒いてしまふことがほとんどですが、稲藁を確保するために地元の小学校の農業体験でみなさんにお声掛けして藁を確保するなんていう形で地元との関係をつくりました。松井智恵さんは動画作品をつくってくださいました。のですが、全編倉敷口ケです。日頃は観光客を乗せる川舟2艘を早朝に借り切って、並行して走らせながらこういうシーンを撮影しま



様々な方たちと関係を持ちながら成立しているわけです。助けていただくこともありますが、けれど、逆に言うとうちの美術館が頑張ることと倉敷というまちに何らかの気品や格、文化の力を提供できるかもしれない。あるいは我々の活動の中から次代を担う子どもたちが成長を遂げるかもしれない。地域をつくると同時に地域にもつくっていただきたいながらこういった網の目の中でミュージアムが活動しているわけです。

### 設置者と館の問題

この福島県立博物館もそうですが、日本の場合、多くが公立のミュージアムです。その時に設置者と館の問題が出てきます。この後、楠本さんから設置者とミュージアムの間に驚異的な素晴らしい関係ができたお話をうかがえるかと思えます。特に税金を投入する館として、それがどのように適切に使われているのか、そのお金を活かして美術館というものがどういった公益を社会へ提供できるのか、この二つはすごく重要なことだと思います。私どもの美術館も公益財団法人ですが、さらに公的な税金を直接に使って運営されるミュージアムは、個々の活動のレベルから、いったい誰が受益者なのか、どういった形で受益が生まれるのか、お客さまに対して、社会に住む方たちにどういった形で利益を提供できるのか、こういったことを考えていくことがすごく大事なんじゃないかと思っております。ここまでで本来話は止めるつもりだったので、実は今年もまた1ヶ月以上休ましたし、今日も今の今までもっと、まん延防止措置が出る際の対応を美術館とメールでやり取

りしていただくところです。恥ずかしいですが、当館の預貯金が後どのくらい残っているかの一覧表です。実は我々は2億5000万円をすでに借金しました。さらに今後のランニングコストが厳しいと云ったら2億円貸していただける目算をつけました。

そんな状況ですが、100年間郷土で愛されてきた銀行、倉敷の景観を形づくってきた銀行を寄贈していただいたのを受けて、これを8億から10億かけてイノベーションすることを進めています。だけど、今そんな金どこにもない。でも昨年4月の時点で、既にもう着手するだけというところまで来ていましたから、建築資材の発注、人足さんの手配、全部終わっていたので、これをキャンセルすると建築会社さんに非常に迷惑をかけてしまう。そこでは我々は1億円借り入れて暫定開館させていただきました。そしてそこにヤノベケンジさんの巨大な《サン・シスター》(リバーズ)、実はかつて喜多方でも展示されたこの



作品をヤノベさんが、作業に係る実費だけで設置していただきました。そして、今は倉敷の新観光名所と呼ばれるくらい、たった3ヶ月、無料ということもありますけど、3万人集めることになりました。

### お金儲けのために存在しているわけでもない

我々はお金儲けのために存在しているわけでもないし、観光のために存在しているわけでもないです。受益の形は何か、受益者は誰なのか、常に考えていますが、ミュージアムにはこういう力ももしかしたらあるし、今日はそういったところに少し偏った話をさせていただきました。ここで私の話を終わりにさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。

小林

ありがとうございます。「地域をつくるミュージアム」というタイトルでお話しいただきましたが、ミュージアムが地域をつくり、そして地域につくられるという言葉もすごく印象的でした。柳沢さんのお話は後半のディスカッションで引き続き色々な点から広げさせていただきます。柳沢さんのお話は後半のディスカッションで引き続き色々な点から広げさせていただきます。

### 地域と創るプロジェクト つなぎ美術館の実践から

楠本智郎

つなぎ美術館の楠本です。よろしくお願

赤崎水曜日郵便局  
2013年度から2015年度にかけては「赤崎水曜日郵便局」という「住民参画型アートプロジェクト」を実施しました。津奈木町には全国的にも有名な海の上の小学校があります。海面から突き出た支柱の上に校舎が建っています。ただ残念ながら児童数の減少で廃校になってしまいました。何とかこの校舎を活用したい。しかし耐震強度の問題で中に入ることができない。人が中に入ることなく、海の上にある小学校という特性を活かしプロジェクトを実施できないかと思い、親交のあった映画監督の遠山昇司さんに相談しました。遠山さんは、映画監督でありながらアートにも興味を持っていました。リサーチを重ねた結果、この海の上の小学校を郵便局に見立てて全国から水曜日の物語を募集し、無作為に個人情報伏せた上で交換していく「赤崎水曜日郵便局」というプロジェクトを考案してくれました。不要になった木造船を解体して出た腐材などでつくった郵便受け《スイスイ箱》には全国から水曜日の物語が集まります。プロジェクトの象徴である《灯台ポスト》は、招聘アーティストの五十嵐靖晃さんと加藤笑平さんが津奈木町にある鉄工所の職人さんと一緒に作りました。この辺りにも深いサイドストーリーがあり面白いのですが、今日は時間が限られているので省かせていただきます。全国から届いた手紙を転送作業します。2年半のプロジェクトでしたが、1万通近い手紙が集まりました。それらを住民の実行委員の方々が内容をチェックした上で転送作業をしています。守秘義務があるので、多くの人が転送作業に関わることができず、招聘



アーティストを含む10名程度のスタッフが交替で行いました。住民が届いた手紙を朗読するラジオ番組も設けてもらい1年間だけ全国で放送されました。先ほどの大原美術館のチルドレンズ・アート・ミュージアムでも開局させていただき、招聘アーティストのひとりでも女優であり声優でもある玉井夕海さんも参加しました。《灯台ポスト》を毎週水曜日に点灯させるために重いバッテリーを持って長い距離を歩いて行くのが大変だという話をしていたら、熊本高等専門学校八代キャンパスの先生が、学生と一緒に色々なアイデアを出してくれました。その新しいアイデアを住民のみなさんと一緒に聞いて、設置しました。



ぜひ一緒に実行委員の住民も  
このような活動がコミュニティデザインの観点から評価され、2014年にグッドデザイン賞を受賞しました。授賞式は東京の六本木で開かれるのですが、館長でもある町長の命で町の代表として私が行くことになりました。私はぜひ一緒に実行委員の住民も津奈木町の公務として一緒に行ってほしいと思いました。ただ、予定外の出来事に対応する予算がない。そこで補正予算で住民3人が津奈木町から東京に行くための旅費を要求したところ、認められたんです。3人の住民の方が一緒に授賞式の会場でもある六本木のリッツカールトンホテルに行きました。一人は漁師さんです。



楠本智郎さん

たします。つなぎ美術館をご存じない方も多いと思いますので、館の概要を説明させていただきます。津奈木町は熊本県の南部、鹿児島県との県境近くの水俣病でも知られる水俣市の北に隣接する人口は約4500人の町です。その町が1984年に水俣病からの地域再生と魅力ある文化的空間の創造を目指して始めたのが「緑と彫刻のあるまちづくり」です。これが、津奈木町の美術によるまちづくりの原点になります。

この美術によるまちづくりの活動拠点としてつなぎ美術館は2001年4月に開館しました。水俣病からの地域再生が目的であれば、もしかしたら美術じゃなくても良かったのかもしれない。それが、なぜ美術だったのか。町出身の著名な作家やコレクターがいたのかと言えそうではない。そもそも観光地ではないので町外から来た人がお金を落とす飲食店や土産物店も数件あるだけ。いわゆる過疎地なわけです。そういう土地で、なぜ美術によるまちづくりが始まったのかと言いますと、六車さんという当時の町長の発案だったわけです。この六車さんは、町の名士で、医師で

### 住民参画型アートプロジェクト

美術館は教育委員会ではなく本庁の政策企画課の所管です。年間の主な展示とアートプロジェクトですが、春夏秋冬それぞれ一本ずつ企画展を開催しています。その他に収蔵品展を春夏冬に開催しています。今回は特に地域との連携を重視する企画展とプロジェクトをご紹介します。ただ、冬の企画展と関連しており大原美術館の柳沢さんにもご協力いただいた「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」は、現在は新型コロナの影響で休止しているの、「住民参画型アートプロジェクト」にボリュームを置いてご紹介していきます。2008年から毎年1人か数名のアーティストを招聘して、住民と一緒に膝を交えお互いにアイデアを出し情報交換を行い、ディスカッションしながら表現活動を行うというのが「住民参画型アートプロジェクト」です。

めつたに着ないスーツを着て、みんなで六本木のリッツカールトンホテルの立食パーティーでワインを傾けながら楽しく過ごしました。このようなケースで補正予算が認められることは一般的にはないと思うのですが、津奈木町は1984年から美術によるまちづくりをやってきているので、本庁でもこのような美術館の取り組みに対する理解が深まっているのではないかと思います。

### 本来の管轄を超えた、役割にありがちな縦割りの組織を超えた

次は、2016年度から2017年度の「住民参画型アートプロジェクト」です。現代アーティスト西野達さんによるプロジェクトです。西野さんはアイデアを紙に描いて、これをつくると決めたなら、どうやって実現するかはキュレーターに任せる方なんです。住民と、リサーチと対話を重ねたうえで、目の前で描いたアイデアスケッチを示しながらこういうホテルを海の上につくりたいと話されました。先ほどの「赤崎水曜日郵便局」の舞台になった旧赤崎小学校の建材を用いて海の上に宿泊可能な作品《ホテル裸島》をつくるというプロジェクトです。この時は実行委員の人数も増えました。西野さんが描いたアイデアスケッチをどうやって実現し、どのように運営していくかを、区長さんをはじめとする住民のみなさんと話し合いました。建築の知識も必要なのですが、残念ながら私にはそのような知識はありません。そこで、本来は美術館業務を管轄しない町の建築の知識のある職員が加わってくれました。いつもより多くの予算が

# ROUNDTABLE OPEN MUSEUM

必要になるので財務に詳しい職員の手援もありました。本来の管轄を超えた、役場にあるがちな縦割りの組織を超えた動きで西野さんのアイデアを作品として実現することができました。

**素晴らしいお弁当が 出来上がりしました**

《ホテル裸島》は約2ヶ月の展示期間が終わったらずべて撤去します。実行委員は《ホテル裸島》の運営方法についてミーティングを重ねました。まず、住民による清掃班をつくり、近隣のホテルで清掃の研修を受けました。お客様に提供する夕食をつくる調理班もつくりました。郷土料のレシビや盛り付けを見直して、ちゃんとホテルの夕食としてお出しできるようにしました。最初に私が郷土料理の提供を相談したときに地元のおばちゃんたちからは「津奈木の郷土料理なんて我が家で食べられるものであって、お客さまには恥ずかしくて



出せない」と言われました。そこで、湯布院で有名な宿を経営していた女将さんに来ていただき、みんなと一緒に郷土料理のレシビと盛り付けを研究したところ、素晴らしい夕食のお弁当が出来上がりました。この成果は美術館とは違う観光事業でも継承され、お弁当として販売されるまでになっています。これが出来上がった《ホテル裸島》です。現場での接客は津奈木町の住民に隣接する市町の住民も加わった受付・監視の方々にやっていただきました。

**「夫婦の事件簿」**

2018年度は現代美術家の柴川敏之さんによる「住民参画型アートプロジェクト」を実施しました。もともとは他人同士であった夫婦間の齟齬を「夫婦の事件簿」として集めて、それを美術展示としてみなさんに見ていただくという試みです。EOD(Education for Sus



tainable Development: 持続可能な開発のための教育)がテーマのプロジェクトです。柴川さんの奥さんの柴川弘子さんは四の口の研究者です。この時は、大原美術館の柳沢さんにもゲストでお越しいただき柴川夫妻と一緒に話を聞いていただきました。2000年後の未来から現在を見るというのが、柴川さんが長年やられている制作のテーマです。

2018年には、つなぎ美術館が2021年に開館20周年を迎えるにあたり、どのような「住民参画型アートプロジェクト」を実施するのが良いのかということを考え始めました。そして、津奈木町の歴史や文化、「緑と彫刻のあるまちづくり」を含めた美術によるまちづくりなどの活動を美術によって顧みることが必要ではないかとの思いに至りました。

**光と陰**

その場合、地域の光と陰、つまり良いところだけではなく課題についても地域におもねることなく作品に反映できる作家を招聘しなければなりません。そして、ユーモアを交えながらも社会問題と正面から向き合う作品の制作を続ける柳幸典さんに依頼することになりました。柳さんには津奈木町と水俣市で1年間にわたるリサーチをお願いし、住民とティスカッションを重ねてもらいながら、3年後の開館20周年に個展の開催を目指していただくことになりました。制作が決まった2点の大型屋外作品のうち1点が《入魂の宿》です。先ほどの旧赤崎小学校のプールをリノベーションして、宿泊可能な作品にしようというものです。作品タイトルは石牟礼道子の詩「入魂」から引用しています。石牟礼道子の生ま

れは天草ですが、幼少期に両親とともに水俣に移り住んでおり、水俣出身の作家と考えると差し支えありません。しかし、実は水俣や津奈木では石牟礼のことはほとんど話題にされません。なぜならば、石牟礼の『苦海浄土』という作品によって、水俣病の存在が世界に広まり、風評被害を招いたと考える人々がこの地域にはたくさんいるからです。ゆえに、石牟礼作品を公的な施設で展示するなど、石牟礼のことを町や市は積極的に発信してきませんでした。柳さんは、このことを非常に残念に思い、せっかく石牟礼道子という世界的に知られている文筆家がいるので、その人の作品を再評価することによって水俣病と向き合う機会をつくり出すことができるのではないかと考え、石牟礼作品を引用した《入魂の宿》のアイデアは生まれたのです。

**まず種まき**

《入魂の宿》を住民と協働で制作しようということになり、色々検討した結果、作品の周囲の植栽の部分を住民と育てることになりました。まずは住民のみなさんと種まきをしました。もちろん美術館でも育てますが、住民の方々に家に持って帰っていただいで、苗ができるまで育ててもらいます。苗が大きくなったら多くの住民が集まってもらって株分けをしてさらに多くの住民に育ててもらい。各家庭で育ててもらった苗はみんな《入魂の宿》に移植しました。夏場は草が生い茂ってきますので、ボランティアの住民と一緒に除草をし、水やりもします。このようにして住民のボランティアが組織され、柳さんの《入魂

の宿》の植栽部分がどんどんつくられていきましたが、今は冬なので植物の多くは枯れています。当初の計画では、昨年9月に《入魂の宿》は完成し公開するはずでしたが、新型コロナで建築資材の調達が難しくなるなどいくつかの要因により公開は今年の5月に延期になりました。プールは中央に通路を設けて、ピオトープになる予定です。

**津奈木の歴史、 封印されていた出来事**

もう1点、《入魂の宿》と並行して制作し、予定していた時期に公開が間に合った《石霊の森》という作品があります。津奈木町役場の近くのあまり人が訪れることのなかった森と、そこに放置され地中に埋まっていた石を活用しました。放置されていた100個を超える石を掘り出し、森の中や周辺に置きました。石の中に籠っていた津奈木の歴史、封印されていた出来事が、石を割ることで言葉や歌として漏れ聞こえてくるという作品です。石の中に入れる音もすべて柳さんが時間をかけて選び収録しました。水俣病の語り部の方々にもお話しいただきました。地域のみなさんに石牟礼作品の素晴らしさを知っていただきたいということで、詩の朗読も住民の方々にいただきました。津奈木町の海浜地区の平国という地区に昔から伝わる踊り歌も収録しました。これが完成した《石霊の森》です。左手前の石に割れ目がありますが、この割れ目から収録した音が聞こえてきます。石は100個以上ありますが、音が出るのは9個です。実際にお越しただくとわかるのですが、とても不思議な空間です。森に近づくと囁くような

声徐徐に聞こえてきて、姿は見えませんが本当に人がいるような感覚になります。《石霊の森》は昨年の成果展で公開しましたが、その後も常設作品として展示を続けています。



**被害地域の公立美術館として**

そして、今回の柳さんの成果展の関連企画として開催したのが、写真展「ユージン・スミスとアイリーン・スミスが見たMINAMATA」です。実はユージンとアイリーンの写真も先ほどの石牟礼道子と同じ理由でこの地域の公的な施設ではほとんど展示されてきませんでした。今回の柳さんのプロジェクトをきっかけに美術館で展示し、最終的には被害地域の公立美術館として初めてこれらの写真を収蔵しました。

次は「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」です。これは、新型コロナで今は休止中ですが、2014年に始まりました。柳沢さんのお話の中で出てきた武内明子さんは2015年の招聘アーティストです。つなぎ美術館の滞在制作プログラムは滞在期間が長く、5ヶ月ぐ



らい津奈木町で制作してもらいながら、それぞれの作家さんの特性に合わせて、町の人たちと交流していただきました。そして、最後は成果展を開催して作品の一部をつなぎ美術館が収蔵するというプログラムです。

**終れば解ける人と 人の結び目づくり**

次はフィールドミュージアム事業です。これは本庁との共同事業です。環境省の補助事業で予算は本庁が持っています。2014年度から2017年度は浅井裕介さんに来ていただきました。2018年から今年度にかけては、五十嵐晴晃さんが《海渡り》という作品を制作しています。これは、100年以上受け継がれてきたけど、今は途絶えそうな民間信仰の弁天祭りを美術で再構築し持続可能な地域の祭りにしていこうという作品です。奥に見えるのが海の上の小学校。手前に弁天島があります。トンボロ現象と言いまして、干潮になるとこの間を歩いて渡れるようになります。岸側に私たちがシエルターと呼んでいる洋風東屋みたいな建造物があり、ここにオレンジ色の102本の糸を結び、町内外の参加者で反対側の弁天島まで引つ張っていく。この日は約50人が参加しました。糸は強いテンションをかけて引つ張り結びつけなければなりません。津奈木町には100年以上の歴史がある競舟があり、夏には地区ごとで舟を漕いで速さを競う大会があります。その競舟の筋肉もりもりの若手の漕ぎ手たちが糸を力いっぱい引つ張って、それを漁師さんが島側にある鉄柱に結んでいきます。潮が引いている時にしかできない作業です。この《海渡り》が終わっ

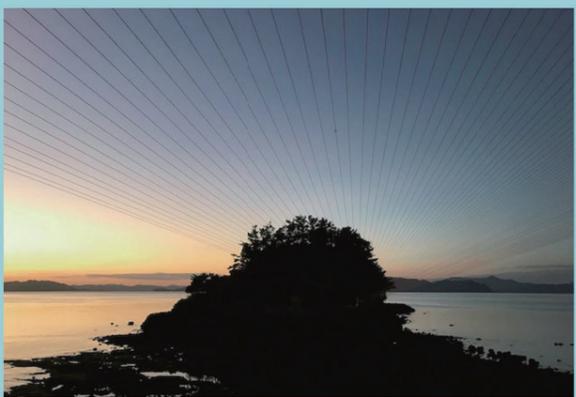
# ROUNDTABLE OPEN MUSEUM

たら、糸と鉄柱を外します。そして、丸太を運んで鉄柱を立ててあった場所に鳥居を建てます。この鳥居は何十年も前に台風でなくなっ  
てしまっていたので、『海渡り』をきっかけに  
再建することができました。鳥居を建てたあと  
は、弁天祭りを継承してきた方々と一緒に五十  
嵐さんがお参りをし、最後に直会をしました。  
つなぎ美術館には学芸員は私一人しかいま  
せん。アートプロジェクトにおける私の役割の  
ひとつは、終れば解ける人と人の結び目づく  
りです。必要に応じて結ばれ協力し合うが、  
終われば解けてゆく。いつまでも結ばれたま  
まではなく解けるといふ点が重要です。そう  
でない、人材に限られた地域では人が集まり  
ませんし、関係が柔軟な方が効率よく動けます。  
これはノットワーキング(Knot working)とい  
うユーリア・エンゲストロームの活動理論を  
参考にしています。



## 予想外の出会い 出来事が起きるように

津奈木町の美術によるまちづくりは予想外の  
積み重ねです。これだけの事業をやっている  
と相当綿密な計画を立てたうえで運営され  
ているのでしょうか？とよく言われるのです  
が、実はそうでもありません。予想外の出  
会いや出来事が起きるように計画的に設計  
しているだけです。あとは地域のみさん  
とアーティストに委ねます。たまに危うく  
なってきたら若干軌道修正をすることもあ  
りますが、軌道修正をせずに様子を見てい  
たらそのまま座礁してしまっただけでもあり  
ます。でも、座礁も良い経験になります。そ  
れが決して無駄にならないのがアートプロ  
ジェクトの面白いところです。必ず地域の  
経験として次に活かされます。



## 大きく開かれた小さな窓

津奈木町にとって美術館とは何ですかとよく  
聞かれます。私は、よく外に向かつて大きく  
開かれた小さな窓ですと答えます。住民のみ  
なさんや私が外の多様な価値観に触れること  
ができる。町の魅力だけじゃなく課題も含め  
て発信する。そうすることで価値観が拡張さ  
れるし、協力も得られる。それが人口450  
0人の小さな町の公立美術館の役割のひと  
つではないかと思っています。どうもありが  
うございました。

小林  
ありがとうございました。地域のみさんと  
つくってきたプロジェクトをご紹介いただき  
ました。美術館があつてプロジェクトが動く  
ことで、色々な人が関わって町の魅力やマイ  
ナスなこと、土地の歴史にしっかりと向き合  
う。そんな場をみなさんとつくってきた美術  
館の話を教えていただきました。続いて丸木  
美術館の岡村さんにお話をいただきます。

## 人々と育てるミュージアム 丸木美術館の実践から

岡村幸宣  
埼玉県東松山市から来ました。原爆の図丸  
木美術館の学芸員の岡村と申します。私の勤  
めている美術館は「原爆の図」という丸木位里、  
丸木俊の画家夫妻が二人、共同制作で描き続  
けた連作を展示するために建てられた美術館  
で、1967年に開館して今年55周年を迎え  
ます。作者の名前、あるいはコレクターの名  
前を冠した美術館というのは世の中によくあ

す。この美術館は天井の高さ、壁の長さが一  
べて「原爆の図」に合わせてつくられている  
のです。先に建物ができてから中にあるもの  
をどうするか考えるのではなく、まず大事に  
したいものがあつて、そのものために器が  
できる。場所が決まってく。そういう軸に  
なるものが明確であることに気がついた。それ  
はとても大事なことでないか。守りたい、  
守るべきものがある限りこの場所はとも重  
要な意味を持つていくのではないかと考えま  
した。ちなみに日本語では原爆の図丸木美術館  
と言いますが、英語の館名は Maruki  
Gallery for the Hiroshima Panels

です。ミュージアムではないのです。今日は「人々  
と育てるミュージアム」というタイトルをつけ  
ていきますけれど、ここが本当の意味でミュー  
ジアンなのかどうかは自分の中でも考えてい  
きたい重要なテーマだと思っています。  
開かれた場所であつた  
丸木位里は1901年に生まれて、丸木俊は  
2000年に亡くなつていたので、二人合わ  
せるとまるまる20世紀、100年ということ  
になります。そして、2000年に二人とも  
いなくなつてからもう20年以上が経つわけ



## 誰が職員で誰がボランティアで 誰が一般のお客さんなのか

す。二人が写っている写真の背景にあるのは  
都幾川という荒川の支流です。この川の風景  
が、丸木位里の生まれ故郷の広島の本田川の  
上流によく似ているという理由で、この場所  
を気に入つて夫婦が移り住んで美術館をつく  
た。これは普段私が働いている2階の部屋の窓  
から外を写した写真です。美術館のように見え  
ないですね。美術館という、ここに来ればいつ  
も誰でも「原爆の図」を見ることが出来る場所  
であると同時に、画家夫妻に会うことができる  
暮らしの場でもあつたわけですね。そして、も  
と二人ともオープンな方たちだったので、  
初対面の方、見ず知らずの人でも受け入れて、  
毎日食事を一緒にして、時には寝泊まりする  
人もいた、という開かれた場所であつた。



と思います。この美術館の特徴を非常に  
よく表しているのは「原爆の図」という絵画  
の作品名が美術館の名前になっているとい  
うことです。それはこの美術館が建てられた意  
味が象徴的に表されているということだと思  
います。画家夫妻が自分たちで建てたとい  
うこともありまして、開館当初から2年目には  
財団法人化され、今は公益財団法人になっていま  
す。特に行政、大きな企業の支援はない。今、  
友の会の会員が約2000人いらっしゃいま  
す。一人一人の個人、この美術館を大事だと  
思つてくださる方たちが支えることによつて  
なんとか半世紀以上維持してきたという美術  
館でもあります。今、改築問題が非常に重要  
になっていきます。建物はかなり老朽化してい  
る。決して、作品鑑賞、作品保存に關して環  
境が整っているわけではないという場所です。

## すべて「原爆の図」に合わせて

私は大学生の時に初めてこの美術館を訪れた  
のですが、この美術館に関わつていく中で、  
ある時ふと非常に感銘を受けたことがありま  
す。そうした気さくな人柄に惹かれるように多  
くの方が美術館の手伝いに来ていました。  
私が初めて美術館を訪れたのは、丸木位里  
が亡くなった翌年1996年でした。誰か  
職員で誰がボランティアで誰が一般のお客  
さんなのかよくわからない。それぞれの立  
場の垣根が非常に低くて、初めて来た者に  
とっては名前も覚えられないし、どうい  
う人もわからないけれど、とにかくこの美  
術館を支えている人たちのだと、そうい  
う渦の中にいきなり放り込まれて、10日間  
ほど学芸員になるための実習をしたのです。  
困り裏を困り裏で食事をして、お酒を飲んで、  
そのまま雑魚寝するような生活がとても面  
白くて。この美術館は生活と美術が切り離  
されているのではなく地続きであつて、こ  
こでしか生まれてこない独特な文化、コミュ  
ニティのようなものが存在していて、長い  
年月、多くの人を経由しながら手渡されて  
きた場なのだと思ふようになりました。そ  
して2001年丸木俊が亡くなった翌年か  
ら、この美術館の最初の学芸員になりました  
。昨年4月から二人目の学芸員がよう  
やく誕生して、今はもう一人ではなくなつた  
のですけれど、20年ほどは最初の学芸員であ  
りただ一人の学芸員であるという状態で、こ  
の美術館がどのような意味を持つのかを考  
えながら、もちろん「原爆の図」という非常に  
重要な作品が軸にあり、丸木位里、丸木俊を  
中心とする人たちが築き上げてきた重要な  
メッセージがあるので、その場所の意  
味を現代にもう一度読み直し、これから先、  
次の世代につなげていくために開き直して  
いく、そういう活動ができないかと思つて  
仕事をしてみました。



岡村幸宣さん

人々とともにあり

この美術館を語るにあたっては歴史性が重要になってくると思います。「大衆が描かせた絵画」とは、1950年代に丸木夫妻が自分たちで語っていた言葉ですが、「原爆の図」という作品自体が人々とともにあり、生まれ育ってきた絵画作品であると言えます。まず、制作自体が一人ではない、二人の夫婦の共同制作。位里は水墨画の画家、俊は油絵の画家なのでジャンルは全く違うのです。その二人が共同して作った絵画ですし、そこには作者の記憶だけではなく、無数の他者の原爆の記憶が注ぎ込まれている。丸木位里、丸木俊は原爆が落ちた時に広島にいたわけではなく知らずを聞いてから家族を心配して急いで広島に駆けつけた。自分たちの体験も反映されているけれども、「原爆の図」を描くために最初は身近な人から、多くの人の記憶に耳を傾け、自分たちの体験を開きながら、他者の記憶を絵の中に描き込んでいかなければ「原爆の図」は成立しなかった。しかも発表したのは1950年と非常に早い時期です。戦後5年しか経っていません。まだアメリカ軍を中心とする連合軍の占領下にあつて、また朝鮮戦争が始まった時期でもある。原爆表現についても厳しい検閲が存在していた時代で、その中に全国各地で巡回展が開かれて、多くの人に支えられながら絵画が記憶を伝えるという役割を果たしていくことになったわけですね。福島県でも「原爆の図」の巡回展は早い時期に行われていて、1951年6月に福島市、そして1956年の12月には会津の若松女子高でも「原爆の図」展が開かれています。やがてそれは日本国内だけでなくとどまらない国際的な役割

を背負いながら世界20ヶ国以上を回っていくことになるわけです。「原爆の図」ほど多くの町や村で展示された芸術作品は他に無いかもしれないと私は思っています。それだけたくさんの方々の世界、色々な場所を旅していたということは、いざ「原爆の図」を見ようと思ったところに行けばいいかわからない、作者も自分たちの絵がどこにあるかわからないという状態が続いてきた。1960年代に入り世界巡回展が終わって日本に戻ってきて、これから先、「原爆の図」をどうしようかと考えた時に、自分たちの手元に置いて誰でもいつでも絵を見られるようにする必要があつた。美術館をつくることを考えていたというより、自分たちのアトリエに絵を置くようにして、来た時に人に見れば良いという言葉も残っています。そういう作者の思いと「原爆の図」を守りたいという多くの支援者の方たちの協働によって丸木美術館という場所ができた。今の言い方をすると、インディペンデントのオルタナティブスペース。単に美術館という役割だけではなくて、多様な用途に使われる場が生まれたのです。それは今でも継承されています。

作品の意図性を継承しながら

この写真は、コロナ前の2018年なので、たくさんの方が集まって、とても懐かしい光景ですけれど、丸木夫妻の描いた大きな壁画の前でコンサートが行われて、寺尾紗穂さんと原田郁子さんが来て下さった。丸木美術館の建つ場所は歴史的に特筆する出来事があった場所ではないのです。ただここに「原爆の図」という絵画があることで、意味が生まれる。さらに、「原爆の図」だけではなく、先ほどつ

なき美術館の楠本さんの発表がありました。丸木夫妻は水俣にも通って「水俣の図」も描いています。アウシュヴィッツ、南京、原爆、色々なテーマで作品を描いていて、20世紀の傷つき苦しんだ人たちの姿が描かれた壁画も、ここにある。その空間の中で作品の意味を継承しながら歌を歌ったり講演活動したりという方たちが続いていくわけです。美術だけでなく音楽や文学にも広がりを持ちながら歴史や哲学を受け継いでいく。そういう場所へとつながっていったわけです。

2011年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故

ただ、そうした形で現在のあり方に開かれていったのも簡単だったというわけでは決まらず、近年一番大きな変化としてあげられるのは2011年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故であつたと私は思います。それは「原爆の図」という人類の核被害に直面した最初の重要な作品を、過去の歴史から現在の問題意識へと読み直すきっかけになった。これは非常に重要な点としてあげられます。もう一つは芸術も社会の問題について考え、社会を構成する一員として現代の課題に向き合っていくことが必要であるということを考え直す。その二つの問題がクリアになった体験であつたと思っています。

一つの大きなきっかけは2011年の暮れにChim↑Pomという芸術家集団の展覧会を開いたことです。これは丸木美術館でも非常に議論を呼んで、開催すべきかどうか意見が紛糾しました。Chim↑Pomはこの少し前に、作品制作の一環として広島の空に飛行機雲で

はないかという思いも生まれてきました。正しく歴史を継承するという「原爆の図」の役割は非常に重要で、学校教育の現場、一定の世代の人たちからは支持を受けるけれど、一方で新しい世代は無関心であるという偏りを生んでいるのではないかと薄々考えていました。

新しい世代がこの美術館を利用したいのであれば

そうした時にまったく今までと違う文脈で新しい世代がこの美術館を利用したいというのであれば、思い切って開いていくというのは一つの選択なのではないか。彼らにとっても良い機会になるだろうし、この美術館にとっても新しい可能性を生むのではないかと考えるようになっていったのです。様々な議論があつたにせよ結果的に展覧会を開催し、たくさんの方が来た。そのことに私は驚いて打ちのめされました。昨日うかがったら大原美術



館の柳沢さんもこの時Chim↑Pomを見に丸木美術館に来てくださったとおっしゃっていて驚いたのですが、そうしたことは今までになかった。核問題、原爆の記憶の継承に関心がある人たちが来る。あるいは一定の世代の人たちが来る。けれども若い世代や美術に関心のある人が、遠い最寄り駅からタクシに乗って美術館の前に列をなすということはあり得ないだろうと私自身が思っていたのです。けれども、決してそうではなくて、そういう人たちが来たいと思つた企画展を今までやってこなかっただけではないかと、と気づいてしまった。そのことに打ちのめされ、Chim↑Pomにやられたと思つた。それが非常に大きな説得力を呼ぶことになって、今の時代に新しい作品をつくりながら社会と向き合っている作家を積極的にこの美術館で紹介していくことにつながりました。それまでは企画展の予算はほとんどなくて、Chim↑Pomは丸木美術館で展覧会をするためにメンバーの一人が原発事故の作業現場に行つてアルバイトをしてお金を稼いでいたのですが、企画展の重要性が理解されたことで、少ないながらも予算がつくようになったのです。それは非常に大きな変化でした。

今を生きている私たち

例えば、福島県のいわき市で被災した彫刻家の安藤栄作さんの原発事故をテーマにした企画展なども開くようになっていきました。安藤さんは被災して関西に移住したのですが、展覧会を開くことで、苦境に陥つた作家さんを支える意味もありました。丸木夫妻は先ほど申し上げたように、色々な社会問題をテ



マに作品を残しています。そのどれもが重要な作品で今の時代につながっていく問題をはらんでいるのですが、しかし2000年に作者は二人とも亡くなってしまった。それ以後、新しい作品をつくることはもうないわけです。2011年の後、度々メディアの方に、もし今の時代に丸木夫妻が生きていたらどんな絵を描くと思いますかと聞かれる機会が増えたのですけれど、私はそれに答えるのはちょっと違うと思いました。それは丸木夫妻の役割ではないからです。丸木夫妻は20世紀を生きて20世紀の社会問題を描いた。じゃあ21世紀に起きている社会的な問題、未来に続いていく課題に向き合つて記憶して表現して伝えていくのは誰の役割かと言ったら、今を生きている私たちであり、今を生きている作家なのです。その人たちにこの美術館を開いていくことが、新しい作家亡き後の丸木美術館の役割なのではないかという思いを次第に強めていくようになりました。

機雲で「ピカッ」とカタカナで書くという事件を起こして、広島での展示が中止となり、謝罪会見をする騒動になって、その時丸木美術館で展示をさせてもらえないかという話をしてきたのです。ある意味、「原爆の図」は原爆美術の王道なので、その正しい場所での「原爆の図」が展示することで、広島の人たちの認識をひっくり返すことができるのではないかと彼らは考えた。当然、丸木美術館が利用されるという警戒を呼び起こすことにもなつた。そうした議論をしている最中に渋谷駅の岡本太郎の壁画に福島原発の絵を付け足すという事件も起きた。「原爆の図」に落書きされたらどうするのだという心配を口にする役員もいました。ただ彼らと話し合いを重ねていく中で、彼らなりに真剣に問題に取り組んでいきたいという気持ちを持っていることはよくわかりましたし、仮に丸木美術館が新たな世代の作家に利用されるとするならば、むしろそれはしてもらった方がいい、歓迎すべきことで



連鎖反応のように

Chim↑Pom展を開いた時、それを見に来て「原爆の図」に非常に関心を寄せてくれた作家の一人に風間サチコさんがいらっしゃいます。風間さんは木版で非常に大きな作品をつくる作家さんで、この場所で展示をしたい、作品を発表したいとおっしゃってくださったので、数年がかりで構想を練り、架空都市の架空の祭典「ディスリンピア」を描いた「ディスリンピック2680」という作品を丸木美術館で発表して下さいました。言うまでもなく、これはオリンピックをテーマにしているのですが、優生思想の歪みがユーモアを交えながら批評的に表現されている作品です。このときはニューヨーク近代美術館の学芸員が丸木美術館に観に来てくださった。丸木美術館のようないろんな小さな美術館では初めてのことで、非常に、この風間サチコさんの展覧会を見に



来たのが、こちらの「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」でもお世話になって、そのおかげでお会いすることになった堀浩哉さんという作家さんです。堀浩哉さんとバーナーの堀エリゼさんは、お二人の東日本大震災をテーマにしたインスタレーション作品を丸木美術館で公開してくださった。今まで現代の作家が丸木美術館で作品を発表する機会は非常に少なかったのですが、連鎖反応のように新しい作家が丸木美術館を発表の場として選んでくれるようになったのです。

### 現代美術を展示する場所だと

山内若菜さんという作家さんは、福島にも何度も通って福島市や伊達市のギャラリーでも発表されていますけれど、丸木美術館で福島の牧場をテーマにした作品を発表し、それが日経日本画大賞にも入選するという新進美術家の活動支援のような役割も果たしていくようになったのです。先ほどつなぎ美術館でも紹介されていた、加茂昂さんも水俣でレジデンスをした後、丸木美術館で作品を発表し、その後、福島の富岡町の小学校で作品をレジデンスでつくる活動もされています。私が20年前に就職した時には考えられないような、新しい現代の作家さんとリンクする活動が今の丸木美術館では継続的に行われるようになっていきます。先日、30歳くらいの作家さんにお話をうかがって驚いたのですが、丸木美術館が現代美術を展示する場所だと最初から思っていたそうなんです。私にとっては現代美術をやるようになったのはつい最近なんだよって言いたくなってしまう。でも、若い世代にとってはそれがフォーマットになってい

小林

岡村さんありがとうございます。2011年、東日本大震災と原発事故を機に美術館の開き方が変わり、そしてコロナを挟むこの数年間で人々の支え方もまた変わってきた、そんな取り組みをお聞きました。ここで前半を終了いたします。ディスクッションに入るまでの間、休憩をとっていたとき、質問等がおりの方は質問シートにご記入いただいでスタッフにお渡しいただければと思います。オンラインの方はぜひチャットで書き込みお願いいたします。

小林

時間となりました。ただ今からディスクッション「開く、ミュージアム」に入ります。ここからは進行、モデレーターとして川延副館長がみなさんのお話をお聞きして進めていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局・川延安直

3人の講師のみなさま、どうもありがとうございます。短時間で素晴らしい凝縮した内容のご報告をいただきました。大変個人的な話で恐縮ですが、私もこの春で現役をリタイアすることになりました。この館への最後の贈り物としてみなさんの声を記録できたことをとてもうれしく思っています。一度お話が戻るような形になるかもしれませんが、講師のみなさんにお話をうかがっていきたくと思います。最初の柳沢さんのお話の中でチルドレンズ・アート・ミュージアムが子どもたちだけのためではなくて、その地域の資源を結びつける大きな結節点になっているというお話がありました。次の楠本さんのご報告の中では、《ホテル標島》あるいは《入魂の宿》の

ると知って、とてもうれしい驚きでした。

### 入館者数を増やすだけでは

丸木美術館では、ここ数年のコロナ禍の入館者減や、その前の豪雨災害なども含めた近年の激しい気候変動が、美術館の運営に大きな影響をもたらしています。そうした災害、疫病が起る前の数年間の丸木美術館の入館者数は、2015、16、17と毎年1000人ぐらいい、約1割近く入館者数が増えていった時期がありました。これは様々な活動の成果のおかげで、うちのような小さな規模の美術館にとっては非常に大きなことでしたが、人数が増えてみてわかった課題もありました。入館者数を増やすと仕事がとても忙しくなるけれど、それでも運営は全く安定しないということです。入館者が増えれば入館料も増えるのですけれど、それだけで美術館を維持していくのはとても難しいです。そして無理に無理を重ねて入館者数が増えても、これが未来永劫、右肩上がりであるということはありえないし、外的要因でいくらでも揺さぶられてしまう。去年、今年と入館者数は1万人を切っています。右肩上がりのグラフはすぐに途絶えてしまった。それは何か方向性を間違えているのではないか。入館者数を増やすだけでは丸木美術館がこれから先、生き延びることは不可能であろうとコロナ前から気づいていました。では何をしたらいいのか。実は大原美術館さんに行って、営業にとっても力を入れて、マンパワーも割いているというお話をうかがって、驚いた経験も活かされています。うちの美術館こそ、それをやらなければいけないと気づかされたのです。

プロジェクトを進める中で実行委員会を組み、現場での会議をやる、さらにボランティアの方々がいる。セクションを越えた様々な結び目をつくり、その結び目も仕事、プロジェクトの達成によって解きほぐして新たな結び目をつくるというお話がありました。岡村さんからは、現在の丸木美術館がいわゆるインディペンデントのオルタナティブスペースになり、多様な用途、多様な眼差しが交錯する場になっているというお話をいただきました。共通するのは、交錯する、あるいは共有、連携する多様性ということだろうと思います。このキーワードからもう一度、柳沢さんから補足、コメントを頂戴できればと思います。

### ミュージアムは時空の結節点

柳沢

ミュージアムには博物館という日本語の訳語が使われます。博物館の中で美術に特化するミュージアムとアートとかアートミュージアムとなる。つまり大きな括りとしてのミュージアム、博物館の一群として美術館はある。博物館法では、ミュージアムは作品資料の収集、保存、展示、研究、そして社会教育活動をせよとある。ですから、博物館、ミュージアムって最初の最初から時空の結節点です。様々なものを収集して、それを未来に伝えて、展示して今の方にお見せしている。歴史を辿る場所でもあるし、それを今生きている方たちに影響する同時代の横軸に広げていく。本来的にミュージアムは時空の結節点です。地学、自然史系の自然のものもありますが、多くのものが人為的に出来上がってきたものだし、今、それを受け止めていく

### 外部の人の力を借りることに

当時は職員が3人しかなくて、職員だけですべてを担うことは不可能でした。そこで業務の一部を外部委託する、丸木美術館に來なくてもいい資金集めと広報専門のチームを結成し、時々オンラインで会議をしながら、システムを構築してもらった。フリーランスといふか考えました。もちろん対価は払いません。しかし常勤職員とは違う、フリーランスという立場で美術館の運営に参加してもらうという方法です。あるいは企画展も全て一人学芸員がやるのではなくて、よその人にキュレーションをしてもらいながら新しい作家を取り入れていくこともできるのではないか。仕事を常勤と非常勤の間で流動化させていく。その場その場の行き当たりばったりですが、それをやってみるという試みを始めました。完全委託ではないです。オンラインでそれが可能という時代の状況もありますが、常に連携しながら、外部の人の力を借りることによって、内部で固定化されてしまった思考や役割を開いて揺さぶっていくことを考えました。それがちょうどコロナ禍の時期と重なったんですね。ある程度やっていけると手ごたえを感じた時点でコロナ禍を迎えた。年間だいたい3000万円くらいで丸木美術館を運営しているのですけれど、臨時休館を2ヶ月ほどしている間に緊急支援を呼びかけたところ、だいたい6900万円のご寄付を国内外からいただきました。これは丸木美術館のファンドでは短期計画として位置づけています。短い期間に大きなアナウンスでたくさんの人に反応していただく。しかしこれを一過性で終わらせるの

のはみなさんですから。僕は時間と空間の結節点で、様々な人やモノを結びつけるのは本来ミュージアムが当たり前にやらなきゃいけないことだと思っています。それぞれの地域特性、館の特徴に応じてつなぎ方が変わってくる。今日もお二人のお話をうかがっていたら、みんな同じようなことを考えてやっているのだなと思いました。

川延

ありがとうございます。当たり前ですがね。では、楠本さんお願いいたします。

### どうやって解きほぐしていくか

楠本

よく美術館は気軽にいきにくいと言われます。つなぎ美術館もそうです。なかなか足を運んでいただけない。ということは、やはりこちら側から積極的に出て行かないといけないのですが、話をしても、そもそも美術館の人だから、美術が好きなのは当たり前で、私とあなたとは違うという頑なな態度を取られることが多かった。それをどうやって解きほぐしていくかをつなぎ美術館は20年間考え続けてきました。一般の住民の方との連携も重要ですが、行政、つなぎ美術館の場合は津奈木町役場との連携が欠かせない。住民と美術館、住民同士を結ぶことも大切ですが、本庁の一般行政職の職員（以下職員）と協働でやっていることも大事だと思います。本庁の職員には美術館や博物館は関わりづらい特殊なものという思いを持っている人も少なくない。その垣根をどう取り払っていくかが、美術館や博物館が今抱えている課題のひとつであり、

ではなくて、美術館建て替えのための数年がかりの資金協力につなげていく。これは中期計画です。目標金額3億円。建物建て替え、「原爆の図」の傷んでいるところを修復する。現在2億2000万円くらい集まってきていて、2025年には新しい美術館を建てるという目標に向かって継続中です。

### 市民支援のネットワークづくり

さらにもう一つ目標があって、この中期計画が実現して終わりではなくて、月々にネット決済で引き落としながら丸木美術館の日常運営を支えてくださる末永いサポーターを育成していく形に結びつきたいと思っています。この制度もすでに立ち上げて徐々に加入者が増えてきています。計算できる年間予算の割合を増やしていくという考え方です。入館者数の変動は大きいので、そのみに依存せず美術館が生き残っていくための土台づくりです。特に丸木美術館の場合、「原爆の図」という作品は海外からも共感を呼びやすいテーマですので、国際的にこの美術館が必要であるという市民支援のネットワークづくりの構築ができれば、今後しばらくは生き延びていくのではないかと。働く人が変わって、建物は新しくなっても、「原爆の図」を見せるということは続いていく。それが丸木美術館の一番重要な役割だと思っていますので、この美術館が必要だと思ってくれる人を育成する。そしてその人たちが支えてくれる限り、美術館の歴史は続いていくと私は思っています。以上で発表を終わります。どうもありがとうございます。

よりスムーズな運営を図るために必要なことではないかと思っています。

川延

ありがとうございます。本庁との垣根が高いですか。それはまた裏話でお聞きしましょう。では、岡村さんお願いします。

### 丸木夫妻を神格化するのではなく

岡村

私の勤めている美術館は、作家のプライベートスペースとして生まれたという性格がとても強いので、そもそもミュージアムなのかという問題は、学芸員の私が入る前にはちゃんと考えられていなかった気もします。良くも悪くも「原爆の図」のための場所だったわけです。私が学芸員として入った頃は、学芸員は必要ないという議論もありました。丸木夫妻を中心とする運動体という考え方は内部的には強かったです。とは言っても、私が入ってしまったので、内部の人たちに学芸員の役割とはどういうものか、大学で学んでいた方法をこの美術館に取り入れた時に何が起るかを根気強く時間をかけて実証していくことが重要だったのかなと今振り返ると思います。そして、内側だけではなく外側に対しても、丸木美術館から来た人だから政治的な発言をするに違いないと期待あるいは警戒されることも多かったのだので、その先入観をどう解きほぐしていくか。丸木夫妻の仕事を神格化するのはなく、客観視しながら可能性を読み直していく作業を重ねてきたのだと思います。でも、それは、ぐるっと一周して考えてみると、柳沢さんがおっしゃったようなこの美術館、

博物館でもやっていることと同じなのです。その場所で扱っている対象の可能性をどう引き出し、今の時代に接続させ、今の人たちとともに新しい歴史をつくっていくか、これは本当にオーソドックスなやり方であって、それを「原爆の図」のためにつくられた美術館で実践したのが新鮮に感じられる部分なのかなという気はします。

**川延** ミュージアムの基盤の確認は今のみなさんのお話からしっかり確認できたと思います。いくつか会場からご質問をいただいております。みなさんに共通するご質問とも取れますので、いくつかお尋ねします。まず、柳沢さんへのお尋ねで、設置者の問題です。「大原家との関係は美術館の運営上どうなのか」というお尋ねがきています。これは大原美術館さんの問題だけに絞らずに、先ほどの楠本さんの話であれば、医学的視点をもちだった町長がイニシアチブを取った。あるいは丸木美術館さんであれば丸木夫妻とそれを取り巻く方たちの存在があったと思います。設置者の問題について一言ずつお願いします。

**柳沢** 福島県立博物館なら設置は福島県ですよね。なぜ、その組織があるかというミッション、使命を明確にした上でヒト・モノ・カネの配置をしますよね。一方、そのミッションを明確にして設置者が提供したヒト・モノ・カネの中で専門的な役割としてミュージアムの運営をしていくのが基本的に館長さんです。

規参入しにくい部分でもある。美術館の話とずれてくるかもしれないですが、ある団体が立ち上がった、みんなで盛り上がりやっていけばいくほど、次の世代に道を譲るのが難しくなる。自分たちが培ってきたものに固執して、新しい人の入り込む余地がなくなってしまう。新しい人たちに開いていくためには、その人たちがいかに動きやすい環境をつくるかが大事なんです。今、丸木美術館はそういう時期にきていると思います。私はそれを口を酸っぱくして上の世代の人たちに言い続けてきたはずなのですが、実際に開かれて新しい人たちが入ってくると、私もまた批判される側に立つということに気がついて、戸惑い、驚いて、まだ慣れていないところなんです。「岡村さんは変わる気があるのですか」と自分が糾弾される日があると思わなかった。今までどれだけ変えようとしてきたと思っただけで、言いたいけど、それを言うわけにもいかない。そして、「急いで変わることがすべて良いとは限らない」と自分の口が言う日があるとも思わなかった。そうした葛藤も開かれたことの副作用で、新しい人が入ってきたことの証なのだと自分に言い聞かせているところです。

**川延** ありがとうございます。岡村さんへのご質問も一つあって、今のお答えに直結しそうですね。ご紹介します。「とても大きな変化を成し遂げられて勇気づけられました。ご苦労はなかったですか」というご質問です。先ほどのお話しに付け加えて、何かあればお願いします。

**設置者である財団理事長の大原謙一郎さんと 専門家としての高階秀爾館長**

大原美術館の場合、大原孫三郎さんがつくり、2代目の大原謙一郎さんが第二次世界大戦後、美術館をものすこし勢いで今の姿につくり上げていきました。謙一郎さんは1968年に亡くなって、その後は大原さんの美術館というイメージがすこし薄らぐ時期がしばらく続いていた。それが、90年代になって大原謙一郎さん、謙一郎さんの息子で企業人ですが、あらためて美術館というものの社会的使命、こんなことができるのだということをしかりとアピールすることに頑張られた。さらに高階秀爾館長をお迎えすることによって、設置者である財団理事長の大原謙一郎さんと専門家としての高階秀爾館長がきれいに住み分けする形で、もう一度、設置者である大原家の人が美術館運営、経営に関わる形ができました。さらに今は謙一郎さんの娘さんの大原あかね理事長が美術館のことを頑張っている状況です。我々の場合、設置者である公益財団法人の理事会と高階館長以下学芸部門の美術館の専門家、さらに美術館は美術館の専門家だけでもしょうがない、広報、営業の方、組織管理、建物管理の方がいてバランスを取っている。いい形が取れたかなと思います。でも楠本さんがさっきおっしゃったけど、本庁との関係性とか難しい問題がいっぱいありますよね。

**川延** ありがとうございます。理事長と高階館長のととても幸福な出会いも大きかったと思います。もちろん、あまり大きな声でしゃべれないこともあります。でも振り返ると変化をしていく過程はとても楽しいことだと思います。人間のやることなので、人間同士の摩擦もあります。丸木美術館は平和が重要なテーマであるにも関わらず、どうしてこう争いが絶えないのだろうと思うのですが、争いの相手を切り捨てるのではなく、異論を受け止め続けていくことはとても大事。だから、とても厄介で大変なんです。時間をかけて少しずつ変わっていく、お互いに変えていこうという意志が重要なかな。まだ大変なことの途中で、建物もこれから変わっていくので、それがひとつのピークかと思うのですが、もしかしら途中で刀折れ、矢尽きて前のめりに倒れる日が来るかもしれない。それはわからないですね。まだ途中で。

それでは、楠本さん、町長が単独、ワンマンで設置したわけではないですが、町という主体も含めていかがでしょうか。 **美術の持っている力を 理解してもらう** **楠本** 設置者は町です。県立クラスになると首長が変わったから館がなくなるといことはないとありますが、町立クラスだと可能性はゼロではありません。首長が変わると活動が縮小されるか館そのものが無くなる可能性もあります。現在、人口は4500人しかいないわけですが、1984年に美術によるまちづくりが始まり、2001年に美術館が開館し、通算で38年間活動を継続できた。最初は設置者のトップである町長の意向が強かったと思いますが、設置者の方針には少なからず住民の意向が反映されるので、住民の理解を得ることも重要だと思います。美術が持っている力をきちんと住民に理解してもらわねばなりません。小さな町の職員も多くは地元出身の住民です。今は町外出身の職員も増えてきていますが、地域とつながりの深い地元出身の職員に美術の持っている力を理解してもらうことも必要です。その結果、小さな町でも設置者が美術館の存続に力を注げる環境が整い、安定した運営が実現します。 つなぎ美術館と本庁の関係を申し上げると、とてもうまくいっています。1984年に「緑と彫刻のあるまちづくり」を始めて、つなぎ美術館ができる2001年に開館するまで、美術によるまちづくりを始めた町長の意向で職員が作家さんとやり取りしながら自分たち

**変化をしていく過程は とても楽しい**

**岡村** もちろん、あまり大きな声でしゃべれないこともあります。でも振り返ると変化をしていく過程はとても楽しいことだと思います。人間のやることなので、人間同士の摩擦もあります。丸木美術館は平和が重要なテーマであるにも関わらず、どうしてこう争いが絶えないのだろうと思うのですが、争いの相手を切り捨てるのではなく、異論を受け止め続けていくことはとても大事。だから、とても厄介で大変なんです。時間をかけて少しずつ変わっていく、お互いに変えていこうという意志が重要なかな。まだ大変なことの途中で、建物もこれから変わっていくので、それがひとつのピークかと思うのですが、もしかしら途中で刀折れ、矢尽きて前のめりに倒れる日が来るかもしれない。それはわからないですね。まだ途中で。

**川延** ありがとうございます。肝に銘じたいと思います。続いては楠本さんへのお尋ねですが、これもみなさんにお答えいただけるご質問です。みなさんにもお願いします。大原美術館について何かのホームページで見た記憶があるのですが、理事長が「美術館は壁じゃない、展示物を展示する壁じゃなくて活動主体です」とお書きになっていたと思います。その言葉に関連すると思いますけれど、「なぜミュージアムでアートプロジェクトに力を入れるようになったのか」というお尋ねです。楠本さんへのお尋ねですけれど、み

なさんからもお聞きしてみたいと思います。まず楠本さんからよろしいでしょうか。 **自分ごととして** **楠本** 2001年に開館し、最初は近代美術の流れを汲む作家の作品を中心に展示していました。開館当時は熊本市にある熊本県立美術館に行けない県南の人たちが親しめるような美術館を目指していました。ところが実際は、都市部の美術ファンは足を運んでくれるけど、津奈木町や近隣で教鞭を執ったことがある中学校の先生の作品展をやる住民がどつと押し寄せる。それはそれで良いですが、それだけでは美術館の機能を十分に果たしているとは言えません。もっと住民に足を運んでもらう方策が必要だということになりました。でも、いくら私が美術の魅力を伝えたところで、「楠本さんはそもそも美術が好きでこういう仕事をしているのだから、私たちとは違うよね」というような返事しか返ってこない。そこで、実際に積極的に社会と向き合いながら創作活動に臨んでいるアーティストを1年間にわたりに招聘することにしました。最初の段階から住民に参画してもらい、地域に潜在する資源を反映させた表現活動を一緒に模索しながら再評価し作品に昇華させるプロセスを共有することで、自分ごととして興味を持ってもらえるのではないかと考えたわけです。これが2008年に始めた「住民参画型アートプロジェクト」です。

**川延** ありがとうございます。一度柳沢さんに戻りますか。 **人が一緒に動くことが重要** **柳沢** プロジェクトは、人が一緒に動くことが重要だと思います。だから僕は、アーティストが何かのパフォーマンスをしていくという方向のアートプロジェクトだけでなく、チルドレンズ・アート・ミュージアムや、世間では教育普及と言われがちですが僕は社会連携という言い方をしている社会連携型のプロジェクトを意識的に推進するようにしています。何人かの人間が連動しながら動いていくことに一番大きな意味があると思っています。その効用は楠本さんが話してくださった通りですが、けれど、やっぱり岡村さんの話を聞いて、同じ組織で同じ方向を向いていると思っただけで絶対には幻想で、みんなこっちを見ていたり、あっちを見ていたり、違う方向を向いている。同じあの星を目指そうよと言っても、みんなそれぞれ見ているつもりだけど全然違うところを見ていたりする。ですから、プロジェクトという形で、ある出来事、現象として何人かの複数の人間が同じことをやって何かをつくり上げるということをやっておくのが継続のための力になると僕は思っています。

**川延** ありがとうございます。外部の方たちとの連携だけではなく、岡村さんからもお願いします。 **手づくりの展示会を町の集会所などで開催してきました。そのようことを繰り返すことで美術の専門家でもない職員の気持ちの中に美術に対する興味や理解が少しずつ育まれてきたのだと思います。** **川延** 今、つなぎ美術館には正職員は学芸員の私人しかいません。その他に常駐するスタッフは事務を担当する会計年度任用職員が一人、映像制作や広報を担当する地域おこし協力隊員が一人います。受付は地元の婦人会の有志に委託しています。当然、私一人ではこれだけの展示会やプロジェクトを実施することはできないので、本庁の美術館所管課である政策企画課の職員が応援に来てくれます。また、所管課以外の職員も協力をお願いします。となりに忙しくても快く応じてくれます。津奈木町役場全体に20代から50代まで、それぞれの世代に美術館に積極的に協力してくれる人材が育っており、職員も住民も美術館の運営に協力的な人が少なくないということが、当館の円滑な運営と実験的あるいは挑戦的な企画の実現につながっているのだと思います。

**新しい人たちに開いていくためには**

**川延** 続いて岡村さんからお願います。 **岡村** 設置者というのがうちの場合はちょっと難しい。丸木位里、丸木俊はすでに世を去っています。二人と関わりを持って一緒に生きてきた方々が財団運営の中心を占めてきた時代があった、それは非常に強い文化や哲学を形成してきたのですが、それは逆に言うところ

ROUNDTABLE  
OPEN MUSEUM

生きている人間は  
生きている人間を  
連れてきてくれます

**岡村**  
そうですね。私が丸木美術館で働いてきた20年のうち、最初の10年は、展覧会で取り扱ったのは、もっぱら丸木夫妻を中心とする物故作家ばかりでした。物故作家はある意味楽な部分があつて、好きなように展示を構成できる。先ほど発表で言ったように2011年をきっかけに、生きている作家が丸木美術館にどんどん入ってくるようになった。これがとても面白くて、とても大変で厄介だということに気がついたのでその後の10年でした。若い作家は生活指導から始めなければいけない。開けたら閉める、そういう話から始めなければいけない。けれども、生きている人間は生きている人間を連れてきてくれます。それがとても重要で、そのことによって新しい人たちとつながっていく。そういう機会が今までは少なかった。設立した作家が亡くなつて、時間が止まってしまつていたことがあつて、いなくなつたという反省はすごくありました。それが、今の時代の人たちに合わせてもう一度時計の針が動き出していくという感覚が生まれました。だから、丸木美術館ではそれほど大きなプロジェクトをやつているという実感はないのですけれど、この場所を利用して何かをしたいという人たちがやりに受け入れていくか、そしてその人たちがやりやすい環境をいかに整えていくかで、一旦止まった時間が動き出すし、もしかしたらそのことによって「原爆の図」にも新しい命が吹き込まれていくのではないかと感じています。

**川延**  
ありがとうございます。力強い、日本中のミュージアムへのエールだと思います。楠本さん、いかがでしょうか。

**楠本**  
先ほどお話ししたように、まだまだ水俣病は被害地域の公的施設にとってはセンシティブなテーマです。被害地域の公立美術館としてつなぎ美術館はこのテーマをダイレクトに扱った展示をなせ今までできなかったのか。この自問が柳幸典さんの招聘につながりました。そして、その結果、今までほとんど触れることがなかったテーマへのアプローチが可能になりました。開館20周年を機に柳さんを招聘したことにより、石牟礼道子、ユージン・スミス、アイリーン・スミスの作品を通じて地域が自身の歴史や文化を顧みようとしていきます。昨年12月にユージン・スミスとアイリーン・スミスの写真を収蔵すると多くの方々から賞賛と労をねぎらう言葉をいただきました。もちろんこれらとは異なる気持ちをお持ちの方がいることも承知しています。だからこそ、

生きている人間は  
生きている人間を  
連れてきてくれます

**柳沢**  
僕から岡村さんにかがっていいですか。今日の最初のご発表だとアーティストがまた次のアーティストを呼んできてくれて、そして丸木美術館への今生きているアーティストの注目が広がっていったというお話でしたけど、今のアーティストたちと出会い始めることによって、内部にいらつしやる方たちが変わった部分がありますか。

**岡村**  
もともと内部の人数が少ないんですけど、どうでしょうね。

**柳沢**  
理事さんとか評議員とかはあまり来られないと思いますけど、現場の職員や今まで本当に丸木美術館を支えて内部で動かしていたみなさんたちに、少ないとは言え何か変化は起こりましたか。

**岡村**  
これはオフィシャルで言いにくいな。言える範囲で言うと、変わりました。

**柳沢**  
楠本さんのところはまさにアウトリーチではなくインリーチで、たくさんアーティストが入ってくることで現場の人たちがすごく変わってきたというのわかるので、僕は逆におうかがいしたかった。でも言いづらいのはわかります。

**岡村**  
私はこれが始まりだと思っています。被害地域にある公立美術館としての役割を果たせるスタートの位置に今やつと立たつたと思っています。

**川延**  
20年尽力されてきて、これから。私たちも青筋の伸びるようなお話をいただきました。ありがとうございます。岡村さんお願いします。

言えることを思いつきました。新しいアーティストに関心を持った人が丸木美術館の新しい役員になるとい変化は生まれています。他人の価値観を変えていくのは難しい、変わっていくけど、少しだつたりする。けれども、内部を担う人材が変化してきたことは近年の特徴かもしれません。そのことで多様化していくということはありました。

**柳沢**  
大原も年間三つの事業をやっているから年間3人のアーティストとお付き合いするようになる。滞在制作しているアーティストは3ヶ月いるから、その3ヶ月間に、色々な他のアーティストとか研究者と知り合う。今では、いつも誰かアーティストが倉敷に来てくれる感じが普通。私が大原に移つてすぐ、1ヶ月ぐらいたったかな、眞板雅文さんというアーティストが、大原美術館の工芸館の中庭に作品をつくつていただくために毎日通つてきた。その中で、職員がすごく変わっていく様子を見ていた。言わば周りの人、外の人が出てきて、クリエイティブなことを始めてくれると、こんなにも今までいた人って変わっていくのだ、スタッフも変わっていくのだというのを間近にしていたので、そこをうかがいたかった。どうもありがとうございます。

**岡村**  
そうですね。基盤、内部から変わつていっているということですね。素晴らしいな。もう一つご質問をいただいています。「今、開く、ミュージアム」というタイトルで、どんな開いていらつしやるミュージアムのお三方にお越しいただいていますが、それでもまだ開き切れていない、もっと開いていきたいという部分がありでしょうか」というご質問です。

**柳沢**  
お二人とも開き続ける努力をものすごくしていらつしやいます。一度開いたら開きつ放し、後は放つておくわけじゃなく、それを維持することがどれほど大変か、それを二人が語られているのが印象的でした。それは、今、僕自身も切実に思っていることで、今日お話しさせていただいたことがまず継続できるかということもすごく大事。その大きな要因はやっぱり設置者とか内部の人間。岡村さんが前に倒れるってことは後ろから刺されたのかなと思つて聞いていたけど、ちょっと一人の人間の動きによってみんながガラツと変わつたりするのをあらためてすごいと思いました。

**岡村**  
開き切れないところ、まだ開けていないところはまだまだあると僕は思っています。大原美術館の中でまだ開けないところもたくさんあるけど、僕は丸木美術館が一人勝ちする気は全然なくて、日本中のミュージアム、日本中のアートに関わるものが社会に向けてもっと開いて欲しい。だから、お二人と一緒

丸木美術館は公的支援を受けていないので、上から、こういうふうにしなさいというような指導や縛りがない。自由に色々な企画をできるというところはあります。実際、丸木美術館で展示するアーティストの人たちは、丸木美術館だからと言って特別な作品をつつてくることもありま。この美術館だからできると思われるのはありがたい反面、私は必ずしもそれがいいことだとは思っていません。丸木美術館が特別な場所であつてほしくないと思つています。先ほどのお二人の話ともつながるかもしれませんが、これが本来の文化のフォーマットであつてほしい。自由にものを表現して社会的な問題提起もできるのが当たり前として、世の中に受け入れられるような社会であつてほしいという気持ちを持っています。だから、丸木美術館が開き続けるかを考えると、この社会の文化活動がどう開き続けるかを考えながら仕事をしているつもりです。それはもちろん簡単にできることではないし、一人の人間、一つの美術館だけでできることではない。こうした現在の課題をいかに開き

**丸木美術館が  
特別な場所であつてほしくない**

**岡村**  
丸木美術館は公的支援を受けていないので、上から、こういうふうにしなさいというような指導や縛りがない。自由に色々な企画をできるというところはあります。実際、丸木美術館で展示するアーティストの人たちは、丸木美術館だからと言って特別な作品をつつてくることもありま。この美術館だからできると思われるのはありがたい反面、私は必ずしもそれがいいことだとは思っていません。丸木美術館が特別な場所であつてほしくないと思つています。先ほどのお二人の話ともつながるかもしれませんが、これが本来の文化のフォーマットであつてほしい。自由にものを表現して社会的な問題提起もできるのが当たり前として、世の中に受け入れられるような社会であつてほしいという気持ちを持っています。だから、丸木美術館が開き続けるかを考えると、この社会の文化活動がどう開き続けるかを考えながら仕事をしているつもりです。それはもちろん簡単にできることではないし、一人の人間、一つの美術館だけでできることではない。こうした現在の課題をいかに開き

開き切れないところ、まだ開けていないところはまだまだあると僕は思っています。大原美術館の中でまだ開けないところもたくさんあるけど、僕は丸木美術館が一人勝ちする気は全然なくて、日本中のミュージアム、日本中のアートに関わるものが社会に向けてもっと開いて欲しい。だから、お二人と一緒

日本中のミュージアム、  
日本中のアートに関わるものが  
開いて欲しい

お二人とも開き続ける努力をものすごくしていらつしやいます。一度開いたら開きつ放し、後は放つておくわけじゃなく、それを維持することがどれほど大変か、それを二人が語られているのが印象的でした。それは、今、僕自身も切実に思っていることで、今日お話しさせていただいたことがまず継続できるかということもすごく大事。その大きな要因はやっぱり設置者とか内部の人間。岡村さんが前に倒れるってことは後ろから刺されたのかなと思つて聞いていたけど、ちょっと一人の人間の動きによってみんながガラツと変わつたりするのをあらためてすごいと思いました。

開き切れないところ、まだ開けていないところはまだまだあると僕は思っています。大原美術館の中でまだ開けないところもたくさんあるけど、僕は丸木美術館が一人勝ちする気は全然なくて、日本中のミュージアム、日本中のアートに関わるものが社会に向けてもっと開いて欲しい。だから、お二人と一緒



続けながら次の人たちにバトンを渡し、継続しながら努力を深めていけるか、そういう流れをつくっていかけるか、そういうことが私の中ではとても重要な問題です。

**川延**  
自分の館だけの問題ではない。当たり前ですが、けれど、社会、文化へ開くのだということですね。今回のラウンドテーブルのテーマを「開く、ミュージアム」としましたが間違っていました。「開き続ける、ミュージアム」にしなければいけない。とても勉強になりました。当初の予定ではここで定刻ですが、私も大変名残惜しい気持ちでおりまして、みなさんから最後にお一言ずついただいて閉会にしたいと思います。

**自分が跳躍するための隙間、バッファー**

**柳沢**  
チャットにも色々なことを書いてくださったと思います。一言でまとめることはできないですけれど、最近、我々も本場に厳しい状況の中、今まで出会わなかった方たちとたくさん出会い、展示場を一緒にすることが多くなった中で、銀行の方とかベンチャーの方から、だいたい同じような言葉を聞きます。銀行とかベンチャーの創業をする方たちっていかに効率良く、いかに最適な答えを見つけるかばかり考えている。美術館に来ると問いがいくつでも立つ。いくつものそれぞれの問いに、また答えがあったり、なかったり。この場所に来ると何も考えなくていいですね。逆に言うともものすごい勢いで様々な問いと様々な問い

所のすべてではないと自分自身に言い聞かせたいし、これから先の美術館を担っていく人たちにも伝えていきたい。この場所と出会うことで、自分が学び、変わっていきける、そして落ち着いて自分らしく生きていける、そういう居心地の良い場所でありたい。それが一番のベースであると考えることを、最後に付け加えたいと思います。

**川延**  
ありがとうございます。この事業はポリフォニックミュージアムという大きなタイトルをつけています。まさにポリフォニックなスペースのお話で会を開けていただきました。

**小林**  
みなさんありがとうございます。ここでチャットにあげていただいたコメントの一部を読ませていただきます。

美術館、博物館は問いの力を鍛える場所ですね、すごく同感です。

閉じようとする力が働いている今、開き続けることの大変さを感じています。でもみなさんの理想的かつしっかりとした一歩を感じました。

美術館って面白いところですね。そして思い続ければ予定調和が起こらない場の価値にファンドレイジングなどの資金面での可能性はないのでしょうか。

なんていう問いかけもいただいております。

オンラインの方も会場の方もご意見ありがとうございます。

に対する回答がうわーって広がってくる。それがホカーンと開く感じで、とても楽しいと言われます。どうしても我々は経済的なお金の観点から、あるいは自分のやりがいの観点から最適解を見つけて、いかに効率良くそこに辿り着くかということに縛られてしまうけれど、実はそこじゃないどこかホカーンと開いている、ただただホカーンとしているだけじゃなく、言わば隙間であり、バッファーである。それがあから自分の時間の中でどこかにボンと跳躍できる。最適解は方程式がきれいにつながってできることが多いけれど、どこか自分が跳躍するための隙間、バッファー、こうしたものがミュージアムとか文化が提供できる一番効率のいいことかなと僕は思っている。開き続けるとは、多くの方たちにそういう隙間、原っぱ、緩衝帯、次にステップするための空白をつくっていくことではないかと僕は今すごく思っています。以上です。

**川延**  
ありがとうございます。窓という言葉もいくつも出てきましたけど、それにも通じることかと思えます。隙間、バッファー、肯定的に考えたいですね。楠本さんお願いします。

**すべての経験を地域が前に進んでより良い未来を開くための糧に**

**楠本**  
つなぎ美術館は地域にとって大きく開かれた小さな窓です。色々なものがその窓を通じて行き来する。地域の魅力も発信しますが、同時に課題もどんどん発信していく。アートプロジェクトを実施すると、これまでとは異なる価値

うございました。長い時間があつという間でした。Youtubeで公開し、記録集に言葉を載せてまいります。その際には多くの方に広めていただけたらうれしいです。

観に地域は翻弄され、予想外の出来事がたくさん起きます。問題が生じたとき、みんなで知恵を出し合って乗り越えることもあるし、乗り越えられずに座礁してしまうこともあり。しかし、このようなすべての経験をより良い未来を開くための糧にしていく必要があると思っています。すべてが予定調和で終わらないように、何か不可解な、時には予測不可能な出来事が定期的にこの地域に生じ、ひとりひとりそれぞれのことについて考える機会が得られるように、アーティストを招聘し、作品を展示してゆきたいと思っています。実際、今年度開催した展覧会も作品の完成が半年以上遅れて、年度をまたいで公開することになりました。アーティスト、財政に詳しい職員、建築に詳しい職員、地元建設会社の人々がこの難局を乗り越えようと努めています。普段は違う畑で仕事をしていても、ひとつの作品を制作する時は、それぞれの役割を果たすべく最大の努力をする。立場や考えは違っても、開かれた作品制作のプロセスを共有することによってお互いの存在をきちんと認め合うことができます。時には生じる不協和音さえも未来に活かしていく。このことがつなぎ美術館が目指す「水俣病からの地域の再生」を実現する足がかりになると思っています。

**川延**  
予定調和をさせないように設計する。不協和音も利用するという楠本さんの手法は学びたいと思っております。今後ともご指導よろしく申し上げます。最後は岡村さんお願いいたします。

**なんとなく集まってきた人たちが居心地良くいられて**

**岡村**  
お二人がとても立派なまとめをおっしゃられたので、何を言ったらいいのか。予定調和を裏切るという意味で言うと、「原爆の図」の性格がとても強い美術館なので、あらかじめ想定される結論を期待してくれる人たちは、いかに良い方向に裏切れるかを考えながら仕事をしてきたという気がします。言い方を変えらると、お説教されると思っている人たちには、お説教ではない場所であると感じてもらうという事です。

私自身が丸木美術館と出会った時、もちろん作品には圧倒されたけれど、非常に印象的だったのは、とてもゆっくり時間の流れる暮らしの場所であったこと。川の風景が好き、丸木夫妻がアトリエに使っていた和室で居眠りをするのが好き、酒盛りするのが好き、そういう動機でも人が集まっていたのです。だから必ずしもみんながこの美術館の思想に共鳴しなくてはいけないわけではないし、それだけが求心力ではないと常に考えています。様々な目的、様々な動機でなんとなく集まってきた人たちが居心地良くいられて、そこでお互いに時間を積み重ねていく。その中で、この美術館が背負ってきた歴史、作品が抱えているテーマ性にそれぞれの内側から自然に気づき、育てていくような場所であってほしいと思っております。

もちろん、メッセージ性のある企画をやり、学校団体が来たら平和についてのお話をすることはあるのですが、それだけがこの場



## ラウンドテーブル 参加者の声

地域の方々が参加されて企画・作品づくりをされているのがとても良いと思いました。作品づくりを通して、地域をより理解し、愛着がわき、外の方ともつながって、

より深い地域理解、自分理解につながる気がしました。美術を通じての地域づくりも可能なのだと勉強になりました。

石牟礼道子さんに対する地域のネガティブな歴史イメージが印象的でした。

どの地域にもこういった側面があると思うし、それを美術・芸術をとって伝えていくことが重要だと思いました。

岡村さんの「生きている人は生きている人を連れてくる」という言葉が印象に残りました。開く楽しさ、大変さを実感します。

色々な声を整理してしまいすぎず、色々な声を聴くことはとても大切だと思います。

美術館は(博物館も)、「問い」のちからを鍛える場所ですね。

「閉じようとする」力が働いてきている今、開き続けることの大変さを感じています。でもみなさんのしっかりとった一歩を感じました。

すごいハイソサエティな人や、自分のような放浪人が一つの空間に一緒になったりして、

それに加えて、アートの飛躍性や全方向性も加わって、

新しいことが生まれる実験場でもあることを再認識させていただきました。私もそんな場所をつくりたいです。

美術館というと汗が見えない施設ですが、

今回登場された美術館さんほど汗を感じる活動を行っていて、感動しました。

作品を見せたいために生まれた美術館、観光地という場所性を加味した美術館、文化を根付かせるための美術館、そういうそれぞれの立ち位置に沿ったコンセプトやプロジェクトの創造という点が非常に参考になりました。

ミュージアムとして「開きつづける」取り組みとその継続の重要性について知ることができました。

特に、いかにミュージアムとアーティスト、市民、ミュージアムの会員の方々といった

あらゆる立場の方々をミュージアムと結びつけることができるのか、

そしてその役割を担う事業をどのように展開していったのか、という点を中心にお話を詳しく聴くことができ良かったです。

新しい人の参入が作る「さざ波」が、すべて必ずしも良いわけではありませんが、変化を恐れてはいけませんね。

中学生の歴史の教科書の表紙に「未来をひらく」と載っています。

過去の歴史を学ぶことが「未来をひらくこと」につながるための学びは学校現場では実現していないと思います。

ミュージアムの役割はそこにあるように思います。各地のミュージアムの課題は地域性を伴うと察しますが、貴重な文物の集積から多様な開き方、つながり方の方法をミュージアムが連携して乗り切って欲しいと願います。

本事業の実施にあたって多くの方のご協力を賜りました。  
趣旨にご賛同くださったみなさま、  
応援してくださったみなさま、  
多くの学びを与えてくださったみなさま、  
足下に目を凝らし、時に迷いながらすすむ旅にご一緒くださったみなさま、  
様々な声に耳を傾け、対話を重ねてくださったみなさまに、  
心より感謝申し上げます。

ライフミュージアムネットワーク実行委員会

令和3年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業

## ポリフォニックミュージアム記録集

◎編集 川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、塚本麻衣子、筑波匡介、山口拓、山本俊

◎デザイン 赤間政昭

◎画像提供

県外事例調査 柴川夫妻：柴川敏之

県外事例調査 三重県立美術館：三重県立美術館（松原豊撮影）

ラウンドテーブル「土地を知るには食から」：森枝卓士、松尾悠亮 出典：写真集「MINAMATA」(クレヴィス刊)

ラウンドテーブル「つくる・つかう・展示する」：柳津町地域おこし協力隊、橋本誠

ラウンドテーブル「放課後博物館を考える」：滝沢達史、中野厚志

ラウンドテーブル「子ども大人もいたい場所」：柳田拓哉

ラウンドテーブル「開く、ミュージアム」：柳沢秀行、楠本智郎、岡村幸宣

◎撮影

岩波友紀

ラウンドテーブル「開く、ミュージアム」「つくる・つかう・展示する」

江畑芳

アートワークショップ「博物館部」

県外事例調査 生活介護事業所めぐるところ、柴川夫妻、大原美術館

ラウンドテーブル「放課後博物館を考える」「子ども大人もいたい場所」「ヤベアベ学級との12月」

西間木大

ワークショップ「白河まち歩きスゴロクを作ろう！」

ラウンドテーブル「白河まち歩きスゴロクを振り返る、考える」

喜多方シティエフエム株式会社

ワークショップ「海幸山幸の道から」

ラウンドテーブル「開く、ミュージアム」「ヤベアベ学級との12月」「土地を知るには食から」「つくる・つかう・展示する」

川延安直、小林めぐみ、塚本麻衣子、筑波匡介、山口拓、山本俊

◎印刷 北斗印刷株式会社

◎発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会

〒965-0807 福島県会津若松市城東町1-25

# Polyphonic Museum



POLYPHONIC  
MUSEUM

